

令和3年度指定スーパーサイエンスハイスクール

研究開発実施報告書

第5年次

令和8年3月

兵庫県立尼崎小田高等学校

はじめに

校長 山根 尚

本校は昭和47年の開校以来、「Plain Living & High Thinking」の教育目標のもと、生徒の探究活動に力を入れてまいりました。平成15年度にサイエンスリサーチ科が発足し、その2年後の平成17年度には文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を初めて受けました。平成24年度には国際探求学科、翌平成25年度には看護医療・健康類型を設置し、普通科とあわせて4つの課程がある兵庫県下でも数少ない学校となりました。SSHの指定は今年度で4期目（1期は5年間の指定期間）の5年目で、指定期間は通算21年目になります。

第4期のSSH研究開発は「探究的学びの深化により学際的課題を解決できるシェアド・リーダーシップをもつ人材育成」を主眼にしています。次世代で持続可能社会を実践していく人材として身につけるべき実践的な4つの力（「多様な視点で見る力」「課題設定する力」「深く洞察し解決する力」「協働で参画する力」）を、課題研究を軸とした全校的な探究活動の展開において、生徒の主体的、協働的な活動を通して育成しています。

平成23年度に他校との連携により開催した「高校生サミット」（高校生フォーラム）は今年度で14回目を迎え、全国の多くの学校が参加し環境問題に関する研究成果の情報共有・発信の場になっています。この取り組みが評価され、平成26～29年度の4年間はSSH科学技術人材育成重点枠による「汎用性ある環境教育プログラム」に指定され、平成30～令和元年度の2年間は重点枠の中でも「社会との共創」枠に指定されました。そして令和3～7年度の5年間は新たな重点枠として「多様な広域連携によるSTEAM教育を通して地域課題解決に取り組める人材育成」をテーマに研究指定を受けています。

そのような中、SSHによる探究の学びを学校全体に広げることを目的に、今年度新たな取組として、SSH台湾研修を実施し、本校の海外姉妹校である国立台南家齊高級中等学校との合同探究発表会を実施し、多様な視点より、多角的な考察をする大切さを経験しました。また、本校で行うSSH生徒研究発表会を、サイエンスリサーチ科・国際探求学科・看護医療・健康類型・普通科が初めて合同に行い、学科を越えた探究の学びも深めているところです。

本校はSSHの中でも「科学技術人材育成重点枠」に長年にわたって指定されていることから、全国から多くの高等学校の先生方が視察に来られます。本校の特色ある取り組みや指導方法のノウハウを県内外に広く発信し、普及していく所存です。そして、他校との連携をさらに強化して今後の教育活動に活かしてまいります。

最後になりましたが、文部科学省、科学技術振興機構、兵庫県教育委員会を始め、ご支援いただいた多くの大学や行政機関、関係機関、連携高等学校の皆様にご感謝申し上げますとともに、今後の本校の教育活動にご支援、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

目 次

① SSH研究開発実施報告(要約)	-----	1
② 実施報告書		
5年間を通じた取組概要	-----	11
第1期～第4期のSSHにおける研究の流れおよび研究成果について・重点的な開発項目	-----	16
表彰・報道記事等	-----	19
[1] 研究開発の課題	-----	20
[2] 研究開発の経緯	-----	21
[3] 研究開発の内容	-----	23
事業項目一覧	-----	33
リサーチサポート	-----	35
事業項目の各論		
探究基礎	-----	36
①1 年理数探究基礎(自然探究の方法) ②地域の環境技術研修 ③兵庫県立人と自然の博物館研修 ④数学特別講義 ⑤大阪公立大学 研修⑥留学生交流会⑦情報科と英語科の連携授業⑧人と防災未来センター研修 ⑨地域の工場見学 ⑩瀬戸臨海実験所での臨海実習 ⑪電子顕微鏡観察会⑫室戸地学研修(地学、天文、環境、防災 ⑬咲いテク事業(DNA鑑定による鳥類性判別と身近な野鳥観察入門講座 ⑭1年生 普通科「探究基礎講座」の取組 ⑮大阪湾・武庫川 地域課題ミニワークショップ		
探究応用	-----	45
①2 年理数探究応用(自然科学研究) ②神戸女学院大学研修 ③神戸市立六甲アイランド高校との合同中間発表会 ④小高連携授業 高校生による算数・理科の授業 ⑤SSH 小田高リサーチ生徒研究発表会 ⑥普通科、国際探求学科の「探究応用」の取組 ⑦ SSH 台湾海外研修		
探究実践	-----	52
①理数探究実践(科学英語) ②普通科、国際探求学科の「探究実践」の取組 ③SSH 生徒研究発表会 ④学校外部(他校 SSH 事業等)での連携・発表⑤科学研究部などへの活動支援⑥SR 科交流会		
[4] 実施の効果とその評価	-----	56
1 実施効果分析とその評価		
2 科学技術人材育成に関する取組状況		
3 生徒のSSHアンケートの調査結果と教員および保護者の学校評価アンケート		
4 探究学習の効果を検証するアンケートとその統計的分析について		
5 課題研究の評価開発の取組		
[5] SSH 中間評価において指摘を受けた事項のこれ間の改善・対応状況	-----	62
[6] 校内におけるSSHの組織推進体制	-----	63
[7] 研究開発実施上の課題及び今後の研究開発の方向性・成果の普及	-----	64
③ 関係資料	-----	66
1 令和7年度探究応用(2年生普通科・国際探求学科)アンケート		
2 理数探究応用・探究応用 発表テーマ一覧		
3 令和7年度SSH生徒アンケート調査結果(SR科生徒対象)		
4 令和7年度SSH事業実施後アンケート		
5 理数探究応用(自然科学研究)のルーブリック		
6 令和7年度実施教育課程		
7 令和7年度SSH運営指導委員会報告		

科学技術人材育成重点枠【広域連携】「多様な広域連携によるSTEAM教育を通して地域課題解決に取り組める人材育成」

(7) 科学技術人材育成重点枠実施報告(要約)	-----	74
(4) 科学技術人材育成重点枠実施報告書(本文)	-----	78
① 研究開発テーマ ② 研究開発の経緯 ③ 研究開発の内容		
1 研究の仮説 2 研究の内容・方法・検証 3 配慮した事項と問題点 4 各プログラムの実施内容		
5 ボードディスカッションについて 6 ポートフォリオによる生徒の認識の変容を検証 7 取組をつなげていくための展開の工夫		
8 発表で使用したホワイトボード・提言		
④ 実施の効果とその評価	-----	89
(1) 生徒アンケートによるプログラムの効果の検証		
(2) 生徒実行委員会の自己評価による効果の検証		
(3) 事前研修参加回数による効果の検証		
(4) 対面形式とオンライン形式による実施の効果の検証		
(5) 一年間の取組の振り返りによる効果の検証		
⑤ 成果の発信・普及	-----	96
⑥ 研究開発実施上の課題及び今後の研究開発の方向性	-----	96
(ウ) 科学技術人材育成重点枠関係資料	-----	97
1 令和7年度高校生サミットの流れ		
2 協力校一覧		
3 高校生サミット生徒アンケート結果		

①SSH研究開発実施報告(要約)

兵庫県立尼崎小田高等学校	基礎枠
指定第Ⅳ期目	指定期間 R3～R7

①令和7年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告（要約）

① 研究開発課題	探究的学びの深化により学際的課題を解決できるシェアド・リーダーシップをもつ人材育成																																		
② 研究開発の概要	<p>課題設定能力育成による課題研究の質向上、各教科の探究活動や教科横断型の授業改善、行政機関等と連携した地域課題解決の取組等の探究的学びの深化を目指す。また探究活動の評価方法を確立し、探究活動が学力向上に結びつくことを科学的に立証する。3期までの成果と課題を踏まえ、探究的学びのさらなる深化により実践的な4つの力「多様な視点で見る力」「課題設定する力」「深く洞察し解決する力」「協働で参画する力」を育成する。また、探究活動が学力向上に結びつくことを科学的に立証する。さらに、これまでの重点枠での取組を県下に普及し、探究活動の指導・評価法、教科への広がり等の成果を探究活動マニュアルにまとめて広く発信する。これらの点に主眼を置き、7つの仮説を立て、検証を行った。</p>																																		
③ 令和7年度実施規模	<p>サイエンス科（SR科）と普通科理系の生徒を中心に、国際探求学科、普通科（看護医療・健康類型生徒を含む）を対象に全校実施する。（国際探求学科：地球規模の国際的な問題について学び、考え、探究的な活動を通じて自分の考えを英語で発表する力や、問題解決能力をさらに高める学科）</p> <p>SSH実施対象生徒数（令和8年2月現在） ※ 理系、看護医療・健康類型を（ ）内に内数で示す。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th colspan="2"></th> <th>1年</th> <th>2年</th> <th>3年</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">普通科</td> <td>普通科総数</td> <td>195</td> <td>197</td> <td>197</td> <td>589</td> </tr> <tr> <td>（理系）</td> <td>(-)</td> <td>(40)</td> <td>(46)</td> <td>(86)</td> </tr> <tr> <td>（看護医療・健康類型）</td> <td>(39)</td> <td>(39)</td> <td>(40)</td> <td>(118)</td> </tr> <tr> <td colspan="2">国際探求学科</td> <td>35</td> <td>39</td> <td>39</td> <td>113</td> </tr> <tr> <td colspan="2">サイエンス科</td> <td>40</td> <td>40</td> <td>38</td> <td>118</td> </tr> </tbody> </table>			1年	2年	3年	合計	普通科	普通科総数	195	197	197	589	（理系）	(-)	(40)	(46)	(86)	（看護医療・健康類型）	(39)	(39)	(40)	(118)	国際探求学科		35	39	39	113	サイエンス科		40	40	38	118
		1年	2年	3年	合計																														
普通科	普通科総数	195	197	197	589																														
	（理系）	(-)	(40)	(46)	(86)																														
	（看護医療・健康類型）	(39)	(39)	(40)	(118)																														
国際探求学科		35	39	39	113																														
サイエンス科		40	40	38	118																														
④ 研究開発の内容																																			
○研究開発計画	<p><研究仮説></p> <p>A：3期16年の実践の成果の発信・周知（4期目のミッション） B：探究活動の質の向上と新学習指導要領における探究科目の実践的モデル化 C：各教科での探究活動を取り入れた授業改善とカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた教科横断型の取組 D：行政機関等と連携した環境や防災・減災等に関する探究活動による地域社会への貢献・参画 E：京都大学大学院との連携による汎用性のある探究活動の評価方法の提示と探究活動が教科の学力向上に結びつくことの科学的な立証 F：グローバルな視点で地球規模の課題に関心を持ち英語で議論できる力の育成 G：オンライン等のICTの活用による特別講義や実習、広域連携等の工夫した取組と対面との効果の比較検証</p> <p><第1～4年次（令和3～6年度）></p> <p>A：尼小田版探究活動マニュアルを発信した。京都大学大学院教育学研究科と連携した、県下高校教員向けの探究活動についての教員研修会を継続した。小高連携授業や、地域へのSR科の探究活動の成果普及も継続した。 B：探究情報（探究基礎・データサイエンス）を全学科1年に設置し、「データサイエンス講義」の実施等、内容の充実を進めた。2年生の課題研究の質の向上に向けて、ミニ発表会の導入等、SR科1年生の「理数探究基礎」の指導内容の改善をした。SR科2年生では中間テーマ発表会を実施した。SR科全学年での交流会を実施し、先輩から後輩への研究助言を通じた探究活動の深化を図った。学年を超えた情報交換を促進した。リサーチポートとして、課題研究にもつながる活動について、実施した。 C：各教科における探究活動の事例集について、本校HPに掲載した。教科横断的な学びやSTEAM教育に繋げるために、1,2年生全学科での発表会を実施し、学科の枠を超えて課題を共有した。各学科の探究活動の効果的な連携を図るために、校内組織として探究推進部を設置した。授業改善の取組として、年2回の公開授業週間を継続実施した。 D：大学、行政機関、公立施設やその他の機関との連携について、とりわけ尼崎市との連携を進めた。また、大学との連携協定も締結した。SR科1年生による地元企業の工場見学を開始し、継続している。地域や地元企業の協力を得ながら進める課題研究も見られた。 E：普通科、国際探求学科の探究科目の数値評価について、実践を重ねた。探究活動が教科の学力に及ぼす影響（京都大学大学院と共同研究）について、その分析の元となるデータの更なる蓄積・集約を行った。新たに、探究学習における持続可能な開発教育についての共同研究を開始し、その成果を発信した。 F：国際機関との連携によるグローバルな視野の育成について、特に国立台南家齊高級中等学校との英語での課題研究発表会等を通して行った。また、同校と姉妹校提携し、その基盤を築いた。 G：オンラインと対面による交流について、両者の効果の比較を行った。オンラインによる外部相談も実施した。Microsoft 365（Microsoft社）を中心として、探究活動におけるICT活用を進めた。</p>																																		

<第5年次（令和7年度）>
 ・全体の事業について、検証し、最終的なまとめを行う。

○教育課程上の特例

必要となる教育課程の特例とその適用範囲

学科・コース	入学年度	開設する教科・科目等		代替される教科・科目等		対 象
		教科・科目名	単位数	教科・科目名	単位数	
全学科	R5年～	探究情報	2	情報Ⅰ	2	全学科1年全員
SR科	R5年～	理数探究応用	2	理数探究／総合的な探究の時間	2 / 2	学科2年全員
普通科	R5年～	探究応用	2	総合的な探究の時間	3	学科2年全員
		探究実践	1			学科3年全員
国際探求学科	R5年～	国際探求基礎	1	総合的な探究の時間	3	学科1年全員
		国際探求応用	1			学科2年全員
		国際探求実践	1			学科3年全員

「情報Ⅰ」の内容に加え、課題設定、データサイエンスも扱う「探究情報」を全学科の1年で新しく開講し、課題研究を行う上での基礎力の育成を充実させる。また、普通科、国際探求学科では、SR科の課題研究の手法を生かした「探究応用」「探究実践」を開講する。SR科は旧課程の「探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を発展させ、1年に「理数探究基礎」、2年では「理数探究」の段階的な発展を目指すため、「理数探究応用」を開講し、さらに3年でその発展として「理数探究実践」を開講する（「理数探究実践」は「総合的な探究の時間」または「理数探究」の代替ではなく、学校設定教科「サイエンスリサーチ」として開講）。国際探求学科は、「国際探求基礎」「国際探求応用」「国際探求実践」を、課題研究とその評価を充実させる新探究科目として開講する。

○令和7年度の教育課程の内容のうち特徴的な事項

開設する科目		対 象		特徴・開設のねらい等
科目名	単位数	学科	学年	
探究情報	2	全学科	1年	・課題設定力の育成やデータサイエンスにも取り組む ・SR科と国際探求学科では情報科と英語科でティームティーチングを行い、教科横断型のより高い情報技術も学習する
理数探究基礎	1	SR科	1年	・「探究情報」と併せて、課題設定力や自然科学の視点を育成する
理数探究応用	2		2年	・課題研究を充実・発展・深化させるカリキュラム開発を行い、「理数探究」のモデルの確立とさらにそこから発展させた新たな次の段階の科目開発を目指す ・「理数探究実践」では、2年生の課題研究の内容を英語で考える、自然科学の問題を英語でディスカッションをする、自然科学と社会科学、科学倫理等について、国際的な視野に立って、英語での講義や実習、英語によるディベートや留学生とのディスカッション等を実施する。
理数探究実践	1		3年	
国際探求基礎	1	国際探求学科	1年	・2年生の「国際探求応用」と結びつけ、課題研究をより充実させる
国際探求応用	1		2年	・課題研究の取組として「ディベートディスカッションⅡ」2単位と連携した授業を行い、深まるよう工夫する。
国際探求実践	1		3年	・論文作成を通して、「国際探求応用」で行った探究活動への理解を深める。 ・社会的な課題への理解を深め、自身の考えを英語で表現する。
探究応用	2	普通科	2年	・2年生の課題研究を1→2単位に増単し、充実させる（令和2年度より）。 ・文系、理系も含めた教科横断型の学際的な探究活動を行い、1年生からの段階的指導を充実させ、数値評価も確立させる。
探究実践	1	普通科	3年	・普通科理系については「理数探究基礎」や「理数探究」の要素を含む。

※ 特に1年生においては、課題設定力を全教科の平常授業でも連携して育成する。
 ※ 課題研究の探究科目と連携して、各学科の課題研究とつながる基礎知識を養う特徴ある学校設定科目（21世紀の国際理解、看護医療基礎など）も引き続き開講し、より深く行えるよう工夫する。

○具体的な研究事項・活動内容

仮説	実施内容
A	・「尼小田版探究活動マニュアル」を「尼崎小田高校探究ネットワーク」へ発信 ・県下高校教員を対象とした探究活動に関する教員研修会を本年度2回実施、探究活動の手法の普及 ・小高連携の推進、中高接続となる取組も引き続き実施
B	・尼崎小田高校の特徴ある探究活動を引き続き実施 ・SR科1年生の「理数探究基礎」・「探究情報」にてデータサイエンスの充実 ・SR科1年生の「理数探究基礎」にて「地域の環境技術研修」を実施 ・実践的な4つ力の育成に向けた、課題研究の各段階に応じたリサーチポートの充実
C	・「探究活動を意識した教科実践事例」をHPで公開 ・年2回の公開授業を他校へ案内 ・科学技術に関する実習を引き続き実施。
D	・行政機関等との連携の下、環境、防災、減災等の社会、地域の課題を学習、解決方法を考察、地域に貢献・参画 ・「あまおだ減災の日」にて、1年生全員が防災・減災に関する発表見学またはワークショップの体験 ・企業との連携を強化
E	・京都大学大学院と共同開発したルーブリックについて、評価の実践 ・国際探求学科及び普通科の「総合的な探究の時間」の数値評価の実践 ・教科学習と探究活動スキルとの関連および、探究活動と境遇活用スキルとの関連についての共同研究成果を教員研修会にて発信 ・京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM の web サイト QTAL の連携機関会員に登録

F	<ul style="list-style-type: none"> 国際交流の活性化（SSH台湾海外研修旅行、トルコ共和国との交流事業、オーストラリア研修） SR科、国際探求学科1年生での情報科と英語科の連携授業 SR科3年生による課題研究の英語発表を継続（「理数探究実践」：クラス内発表、SR交流会：SR科後輩へ発表） SR科および国際探求学科1年生の留学生交流会
G	<ul style="list-style-type: none"> オンラインによる国際交流、研究発表会を実施 ICTを用いた指導の継続

⑤ 研究開発の成果

1. 実施効果分析とその評価

年間を通じたSSH事業の効果を検証するために、SR科各生徒の事業アンケート（表1）について、行事を分析した。併せて、探究活動についての結果分析を行った。

表1 事業アンケートの質問項目 多：多様な視点で見える力、課：課題設定する力、深：深く洞察し解決する力、協：協働で参画する力

* 都合により「講師の先生などの人の話を丁寧に聴き(傾聴)、研修・実習について意図や背景を幅広く理解できる。」という文言の場合もある

	質問項目	4つの力	質問内容
A	表現力	多	研修・実習について、学んだことを伝えることができる。
B	背景の理解	多	研修・実習について意図や背景を幅広く理解できる。*
C	科学的探究の理解、予測	課	研修・実習について、自分なりの仮説を立て、検証方法を考えることができる。
D	科学的知識の理解	深	研修・実習について、内容を理解している。
E	科学的現象の考察、説明	深	研修・実習について、調べた情報を付加して考察、説明できる。
F	協働・チームワーク	協	研修・実習について、ディスカッションをしたり、目的を達成するためのチームでの自分の役割を見つけ果たしたりすることができる。

上記の質問項目による行事アンケート（4件法）について、各事業の事前から事後の変化量および事後の平均値を以下に示す。例年の課題であった「協働で参画する力」の育成の視点から、「コウノトリの郷公園等での研修」の代替として始めた「地域の環境技術研修」に注目する。昨年度は「コウノトリの郷公園等での研修」の平均値は0.55、行事全体の平均は0.50であり、（コウノトリの郷公園等での研修/行事全体の平均）=0.55/0.50=1.10である。一方、（地域の環境技術研修/行事全体の平均）=0.46/0.28=1.64であり、年度による違いを考慮すると、「地域の環境技術研修」の方が「協働で参画する力」の育成の効果が比較的に高い可能性がある。これは、「地域の環境技術研修」では、株式会社タクマ様の社員の方々を交えてグループワークを行ったことを反映していると考えられる。また、同じく「協働で参画する力」について、昨年度と比べて、今年度は「六甲アイランド高校との合同中間発表」での結果が、年度による違いを考慮しても高い（昨年度：0.34/0.39≒0.87、今年度：0.56/0.47≒1.19）。昨年度の感想において「交流」と答えた者の割合は8.0%（3/38）、今年度では15%（6/40）であった。交流の機会が「協働で参画する力」の成長を促す一因かもしれない。

表2 行事分析の結果

	変化量						事後						
	A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	
1年生	数学特別講義	0.58	0.55	0.63	0.80	0.63	0.35	3.15	3.08	3.15	3.35	3.10	3.23
	地域の環境技術研修	0.56	0.54	0.33	0.62	0.41	0.46	3.13	3.21	3.15	3.26	3.03	3.26
	人と防災未来センター研修	0.36	0.82	0.50	0.59	0.64	0.32	2.95	3.32	3.00	3.23	3.18	2.82
	人と自然の博物館研修	0.38	0.25	0.33	0.48	0.53	0.10	2.95	2.83	2.88	3.13	2.90	2.78
	地域の工場見学	0.41	0.46	0.36	0.44	0.51	0.28	3.13	3.23	3.13	3.21	3.21	3.15
	留学生交流会	0.27	0.35	0.24	0.45	0.39	0.25	3.04	3.10	2.97	3.14	3.08	3.04
	大阪公立大研修	0.33	0.43	0.43	0.53	0.38	0.23	3.13	3.18	3.15	3.30	3.20	3.00
	サイエンス7	0.51	0.51	0.51	0.54	0.49	0.38	3.03	3.05	2.92	3.16	3.08	2.81
	小田高1年生徒研究発表会	0.40	0.46	0.51	0.63	0.49	0.23	3.03	3.03	3.17	3.17	3.06	2.74
	平均	0.42	0.49	0.43	0.56	0.49	0.29	3.06	3.11	3.06	3.22	3.09	2.98

2年生	神戸女学院大学研修	0.51	0.41	0.51	0.77	0.49	0.38	3.38	3.28	3.18	3.54	3.36	3.41
	六甲7行博'高校との合同中間発表会	0.62	0.51	0.62	0.59	0.56	0.56	3.33	3.36	3.33	3.44	3.33	3.46
	清和小学校算数理科教室	0.39	0.42	0.37	0.55	0.32	0.37	3.47	3.45	3.34	3.61	3.45	3.55
	サイエンス7	0.53	0.58	0.63	0.47	0.50	0.26	3.34	3.45	3.32	3.45	3.32	3.08
	小田高研一学生徒研究発表会	0.63	0.50	0.47	0.55	0.61	0.47	3.58	3.61	3.42	3.55	3.66	3.53
	平均	0.54	0.48	0.52	0.59	0.49	0.41	3.42	3.43	3.32	3.52	3.42	3.41

探究活動の結果を以下に示す。理数探究応用、理数探究実践ではどの項目についても事後の到達度が 3.5 前後となっている。4 件法であることから、 $2.5/3 \approx 0.83$ 前後の到達度となっており、高い効果を上げていていると考えられる。

理数探究基礎について、昨年度と比較して、変化量が小さかった (p13 参照)。研修内容が高度な場合に、かえって、難しく感じてしまった可能性がある。今年度より内容を変更した事業については来年度に精査する必要がある。

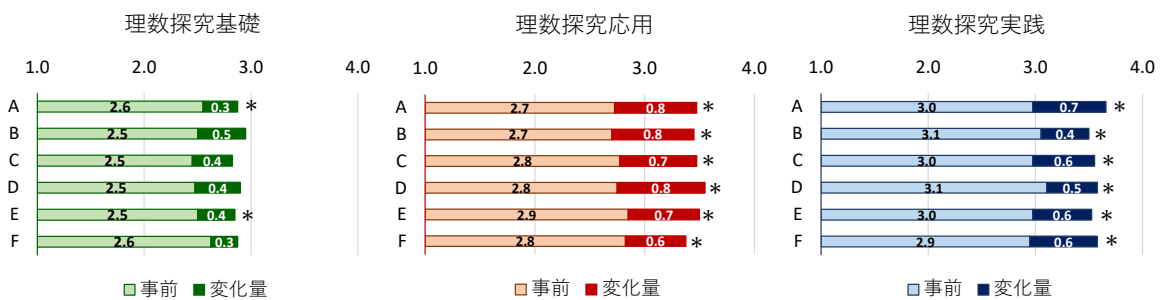


図1 SR 科探究活動について、4つの力に関する4件法アンケートの結果(3学期実施、事前、事後の到達度を回答)。図には、事前到達度の平均と、変化量の平均を示した。図中の*はウィルコクソンの符号順位検定の結果、事前から事後に有意な変化がみられたもの(有意水準:ボンフェローニ補正值 $0.05/18 \approx 2.8 \times 10^{-3}$)

3学期「探究応用」アンケートについて、普通科(看護医療・健康類型を除く)生徒を対象に、この6年間の推移を分析した。図2Aについて、「面白かった」、「将来の役に立つ」と回答した割合は高水準を維持している。IV期当初(R3)と比べて、身についた力の数は大きくなっている。また、探究活動とかかわりのある教科の一人当たりの数は図2Cである。1.5程度で推移しているが、教科横断型の探究活動を目指すのであれば、2.0以上となることが望ましい。

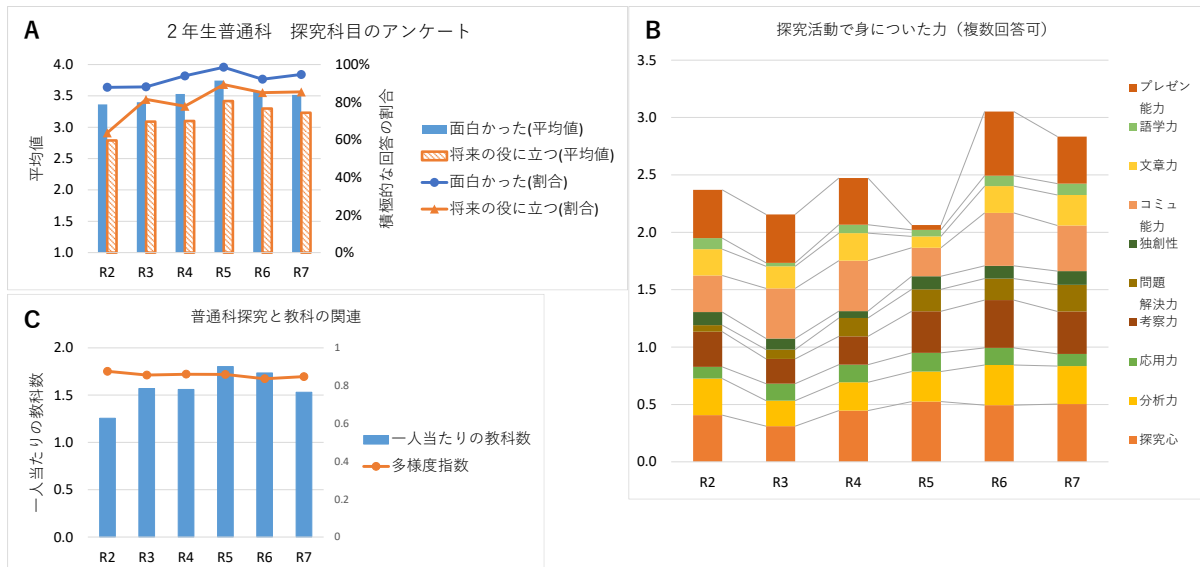


図2 探究応用(看護医療・健康類型を除く普通科)のアンケート結果の3年間の推移。
A: 探究活動についての感想の4段階評価(4:当てはまる、3:どちらかと言えば当てはまる、2:どちらかと言えば当てはまらない、1:当てはまらない)の平均値と積極的な回答(4または3)の割合。
B: 「探究活動で、自分について思う力はどんな力ですか?(複数選択可)」の結果について、各年度のアンケート人数で割った値。
C: 棒グラフ: 探究内容がどの教科とかかわりが深いか、1人当たり回答教科数(9教科から複数選択可)。

折れ線グラフ: シンプルの多様性指数 ($1 - \sum_{i=1}^9 p_i^2$, p_i : 教科 i の回答数の割合)

2. 科学技術人材育成に関する取組状況

SSH 事業全体を通して、科学技術人材育成に取り組んできた。研究開発の経緯については p21 も参照のこと。

SR 科生徒について探究活動で身につけた力は図 3A の通りである。各学年で「探究心」や「考察力」が大きく（探究心:1年:0.83,2年:0.75,3年:0.68、考察力:0.50 1年:.,2年:0.65,3年:0.55）、科学技術人材として必要な素養が養われている。1年生において、「探究心」と答えた生徒は80%以上であった。今後の探究活動のレディネスが形成されている。プレゼン力の育成状況が他学年と比べ小さい。理数探究基礎でさらなる発表の機会を設ける工夫が考えられる。

また、3年生の3年間の身につけた力の推移は図 3B の通りである。コミュニケーション力や文章力などアウトプットする力も身につけており、科学技術人材としての素養を伸ばすことができている。

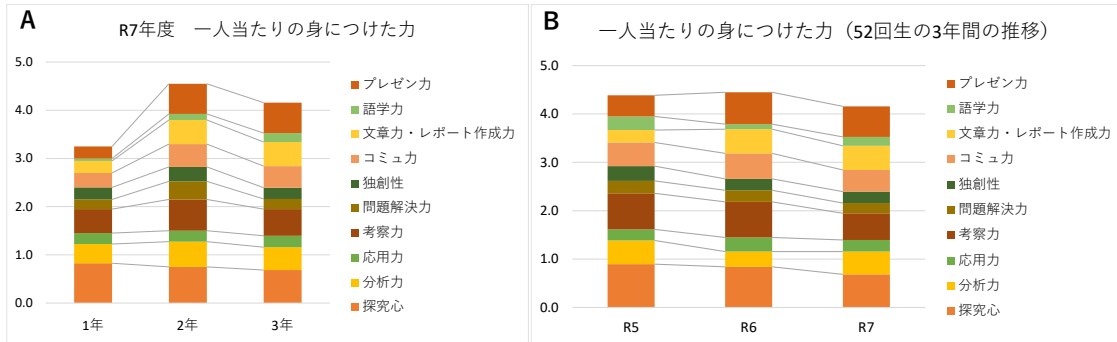


図3 SR科SSH生徒調査アンケート(3学期実施)「探究的な活動によって、身についたと感じる事がら(いくつでも)」の結果について、回答者数で割った値。A: R7年度 B: 52年生(R7年度卒業生)の3年間の推移

3. 生徒のSSHアンケートの調査結果

本校で実施したSR科のSSHアンケートを分析した。次のA~Jの項目について4段階で回答した。図4Aでは項目H(SSH行事は楽しかったか)や項目I(SSH事業は自然科学への関心や知識を高める役に立ったか)について、積極的な回答をした生徒の割合は全学年で80%以上であった。SSH事業について、全体の満足度は高い。1年生では項目C(授業で学んだことが、社会で多く用いられることへの気づき)の結果が他学年より大きく、例年にない傾向である。この傾向が来年度以降もみられるのか、注目し続ける必要がある。

表3 SR科のSSHアンケートの質問項目

学習	
A	昨年と比べて(1年生は中学の時と比べて)、科学全般(理科・数学)の学習に対する興味・関心・意欲はどうなりましたか。(向上度合)
B	昨年と比べて(1年生は中学の時と比べて)、実験・観察等によって、授業内容の理解が深まると感じましたか。(深まり)
C	授業で学んだことが、社会で多く用いられているという気づきはありましたか。(気づきの多さ)
探究的な活動(1年の理数探究基礎(自然探究の方法)、2年の探究II(自然科学研究)、3年の探究III(科学英語)など。3年生は、3年間を振り返って答える。)	
D	探究的な活動への参加状況として、あなたの活動にあてはまるものを選んでください。(積極性・他者との協力)
E	情報機器(PC等)の操作技術について、どのように感じますか。(向上度合)
F	他者へ伝える(プレゼンテーション)技術について、どのように感じますか。(向上度合)
本校のSSH事業の取組	
G	英語の取組(1年:留学生交流会、3年:科学英語表現)を行っています。昨年と比べて、科学分野での英語の必要性をどう思いますか。(大切さ)
H	SSHの行事に参加してみて、楽しかったですか。(全体を通しての満足度) SSHの行事:自然探究の方法、コウノトリの郷公園研修、人と自然の博物館研修、自然科学研究、発表会、科学英語発表会(2,3年)、特別講義、工場見学(1年)、大阪公立大学研修(1年)など
I	SSH事業に参加してみて、自然科学に対する関心や知識を高めるために役立ちましたか。(全体を通しての効果)
J	進路をどのように考えていますか。(理系の大学・自然科学系の就職)

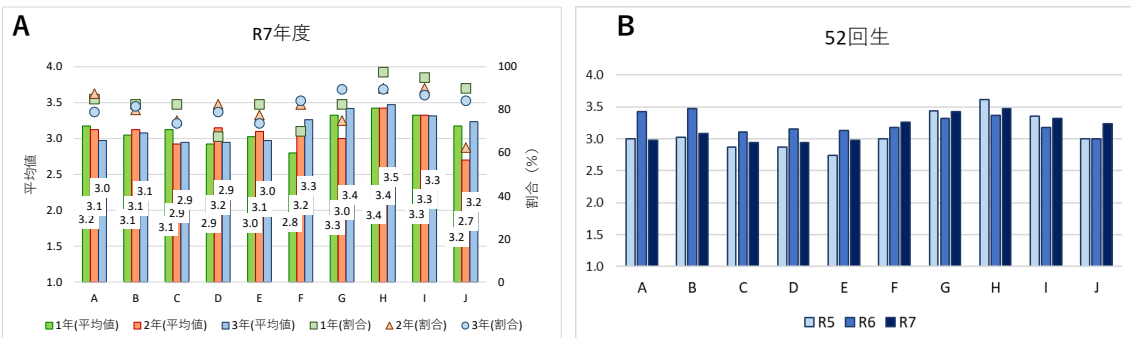


図4 A: SR科SSH生徒調査アンケート(3学期実施)の結果。

棒グラフ: 4件法の平均値。マーカー: 積極的な回答(4段階における3または4の回答)を選んだ者の割合。

B: 52回生のアンケート結果の推移。数値は4件法の平均値。

○事業成果の普及

(ア) 課題研究の取組実践の普及

- ・HP 掲載している「尼小田版探究活動マニュアル」の更新、県内阪神地区の高校に発信。
- ・本年度は熊本県立熊本北高、沖縄県立球陽高、鹿児島県立錦江湾高の視察を受け、本校のSSHの取組や成果を発信。

(イ) 課題研究の地域への還元と科学的リテラシー普及の取組

- ・大阪湾・武庫川 地域課題ミニワークショップを開催し、本校併せて5校共同でワークショップを実施した。
- ・神戸新聞「理科の散歩道」にて、本校教員の記事が掲載された。
- ・「親子理数教室 in 尼崎小田高 2025」を実施し、地域の小学生向けに実験会を実施した。
- ・「尼崎 臨海 来んかい! 体験会～環境学習フェア2025～」 「エコあまフェスタ」、「青少年のための科学の祭典2025 神戸会場大会」等の地域の催しにSR 科研究班や科学研究部が出演。
- ・野鳥観察会を実施し、その内容をInstagramに投稿。

(ウ) 重点枠の取組の効果の普及

- ・本校重点枠高校生サミットにて、参加校へディスカッションの手法等を引き続き普及。
- ・高校生サミットの取組が新聞記事で紹介。

(エ) 評価研究や探究活動に関する研究開発の普及

- ・京都大学大学院教育学研究科西岡教授と連携した教員研修会を実施し、他校教員に参加を募り、理数探究における探究と教科におけるパフォーマンス課題の関係について、本校の事例を交えての講義を受けた。
- ・同大学国際高等教育院楠見孝副教育院長・特定教授との共同研究による探究的学習スキルや批判的思考態度と一般学力の関連性についての研究成果、および同大学教育学研究科梶谷哲史氏との共同研究による探究学習と境遇活用スキルの関連についての研究成果を、研修会の形式で他校教員に普及した。

○令和7年度新聞記事・表彰等

本校 SSH の探究活動等の取組が出版物等に紹介されました。

媒体 記：記事			
生徒 国際探求学科、看護類型（看護医療・健康類型）、高校サ（高校生サミット）			
媒体	出版物	紹介内容	生徒
記	神戸新聞 11/19	高校生サミットの紹介 https://www.kobe-np.co.jp/news/hanshin/202511/0019720874.shtml	高校サ
記	神戸新聞 12/16	ボランティア団体との交流会の紹介 https://www.kobe-np.co.jp/news/hanshin/202512/0019852433.shtml	1 学年
記	神戸新聞 1/17(第2 朝刊)	地域防災 中核は生徒達	看護類型
記	神戸新聞 4/4, 7/4, 9/12, 10/10	理科の散歩道 https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/manabij/202504/0018830099.shtml https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/manabij/202507/0019183844.shtml https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/manabij/202509/0019462282.shtml https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/manabij/202510/0019571227.shtml	教員

今年度は以下の表彰を受けました。

4 月	2025 年度ジュニアメンバー顕微鏡写真コンクール	強そうなプランクトン発見！	特別賞	科学研究部	
6 月	女子高生向け理学探究活動推進事業 COCOUS-R(京都大学理学研究科・理学部)	チチブ類の分化の道筋解明および琵琶湖のヌマチチブの起源解明	共同研究採択決定	科学研究部	
8 月	伊丹市生物多様性交流フェスティバル 2025	口頭発表会部門	大阪湾のプランクトン観察 — 尼崎運河と大阪湾の比較 —	奨励賞	科学研究部
		ポスター発表部門	近畿産チチブ類の遺伝的集団構造	奨励賞	科学研究部
			異なる環境における鳥類相の比較	奨励賞	科学研究部
			セミの抜け殻の形態的特性の解明	奨励賞	科学研究部
9 月	日本動物学会 高校生ポスター発表	近畿産チチブ <i>Tridentiger obscurus</i> およびヌマチチブ <i>T. obscurus</i> の遺伝的集団構造	高校生ポスター賞	科学研究部	
	国際里山里海フォーラム (兵庫県)	尼崎市における COD での水質調査	奨励賞	課題研究班	

		大阪湾武庫川河口付近の魚に含まれる マイクロプラスチック	奨励賞	課題研究班
		近畿産チチブ類の遺伝的集団構造	奨励賞	科学研究部
11 月	第 49 回兵庫県高等学校総合文化祭 自然科学部門発表会	近畿産チチブ類の遺伝的集団構造	口頭発表奨励賞	科学研究部
		大阪湾のプランクトン観察	優秀ポスター一賞	科学研究部
	高校生私の科学研究発表会 2025	大阪湾のプランクトン観察	口頭発表奨励賞	科学研究部
12 月	第 7 回高校生ともしびボランティアアワード（公益財団法人コープともしびボランティア振興財団）			あまおだ 地域応援隊

⑥ 研究開発の課題 (根拠となるデータ等は「⑤関係資料」に掲載。)

1. 研究開発実施上の課題及び今後の研究開発の方向性

A 3期16年の実践の成果の発信・周知（4期目のミッション）

さらなる普及に向けて、本校の探究マニュアルや事例集などプラットフォームのさらなる整備と、京都大学大学院教育学研究科など外部のプラットフォームにも本校の事例を載せていただき、全国的な探究活動、課題研究などの教育活動に貢献する。IV期を通した課題として、発信した成果に対するフィードバックのしくみづくりが挙げられる。改善案として、web資料のダウンロード数の把握等が考えられる。

B 探究活動の質の向上と新学習指導要領における探究科目の実践的モデル化

個に応じた探究活動や主体的な探究活動の支援のため、生成AIの活用方法について、研究開発、実践を行うことが方向性として挙げられる。全校展開の中での課題研究の内容の深化が課題である。SSH事業で研究開発を行ってきた科学技術的な研究と本校他学科で研究開発を行ってきた社会科学的な探究のさらなる総合が求められる。この点については、IV期を通した課題としても挙げられる。改善案として探究活動の途中段階での学科間交流等が考えられる。

C 各教科での探究活動を取り入れた授業改善とカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた教科横断型の取組

「探究活動を意識した教科実践事例」のさらなる集約が求められる。併せて、教科横断型の授業を特定の科目に限らずに行うと良いと考えられ、この仕組みづくりが求められる。この点はIV期を通した課題でもある。探究活動を意識した教科学習は教科横断型の思考と相性が良いと考えられ、「探究的な授業」の全校展開等が改善案として挙げられる。

D 行政機関等と連携した環境や防災・減災等に関する探究活動による地域社会への貢献・参画

本仮説内容は、学校全体としてみた場合に達成できていると考えられる。また、SR科の中でも環境問題についての探究活動や防災につながる探究活動がみられるが、地域課題への取組は他学科と比べると、盛んでない。運営指導委員会での助言にあるように、地域課題へのアプローチがより活発な普通科とSR科が合同でフィールドワークに行く等の取組によって、SR科の地域課題への取組が増える可能性が考えられる。

E 京都大学大学院との連携による汎用性のある探究活動の評価方法の提示と探究活動が教科の学力向上に結び付くことの科学的な立証

SR科の課題研究を評価するルーブリックについて、引き続き新たな担当者間での評価基準の認識のすり合わせや改良を行う必要がある。ルーブリックを用いた数値評価の実践の中で、特に、年度当初と学期末に担当者の打ち合わせが必要であることが見えてきた。これは担当教員が異なる状況で評価の公平性を担保する意味だけでなく、探究活動の目標の共有にもつながるからである。汎用性のある探究活動の評価方法として、成果物としてのルーブリックのみならず、年間での評価計画についても整理し提示する点が今後の課題として挙げられる。また、探究活動と教科の学力向上の関係について、引き続きデータを蓄積することも、今後すべきこととして挙げられる。

F グローバルな視点で地球規模の課題に関心をもち英語で議論できる力の育成

SR科2年生における英語活動の促進が方向性として考えられる。本校国際探求学科との交流をより深めることで、達成される可能性がある。また、本年度は台湾海外研修等の国際交流が盛んにおこなわれた。この取組を継続して行い続ける手立てについて模索できると良い。

G オンライン等のICTの活用による特別講義や実習、広域連携等の工夫した取組と対面との効果の比較検証

オンラインは手軽である一方、対面での事業を通して得られる効果もみられた。特に、対面での発表では、オンラインと比較して、コミュニケーション力やプレゼンテーション力が身についたと回答されている。対面交流の事前事後研修としてのオンラインのさらなる活用が課題である。

兵庫県立尼崎小田高等学校 SSH 事業概念図

1期 (H17~21)	2期 (H22~26)	3期 (H27~R元) 経過措置 (R2)
-------------	-------------	-----------------------

[1期~3期で育成を目指してきたベースとなる4つの力]
 論理的思考力 | 表現力 | コミュニケーション力 | マネジメント力

[1期~3期の主な研究成果]

- 全校的な探究活動の確立
SR科(1期~)「探究Ⅰ」「探究Ⅱ」「探究Ⅲ」
国際探求学科・普通科(2期~)「総合的な学習の時間」の活用
- 大学や行政機関との連携による環境や防災等の課題を重視した探究活動
- 京都大と連携した探究活動の評価方法の研究・実践
ルーブリックの開発及び実際の評価実践

[生徒・教員・卒業生へのアンケートにみる成果]

	1期	→	3期
(生徒) 自然科学に対する関心・知識が高まった	75%	→	91%
本校を希望した理由はSSH校だから	53%	→	71%
(教員) 学ぶ力や考える力を得られるよう授業を工夫	73%	→	81%
(卒業生) SSH校での経験が専攻分野・職業選択に強く影響を与えた	本校 40.9%	>	SSH校全体 21.0%



4期 (R3~R7)

[研究開発課題]
「探究的学びの深化により学際的課題を解決できるシェアド・リーダーシップをもつ人材育成」

[4期で育成を目指す実践的な4つの力]
 <STEP 1> 多様な視点で見る力・課題設定する力 → <STEP 2> 深く洞察し解決する力 → <STEP 3> 協働で参画する力
 予測不可能な社会に対して持続可能性を構築するため、シェアド・リーダーシップをもつ人材育成

[研究開発内容]

- 3期16年及び4期の成果の発信・周知
- 探究活動の質の向上と新学習指導要領における探究科目の実践的モデル化
- 各教科での探究活動を取り入れた授業改善と教科横断型のSTEAM教育
- 大学や行政機関等との連携による地域課題の解決に向けた貢献や参画
- 汎用性ある評価方法の確立と探究活動が学力向上に結びつくことの科学的立証
- 国際機関との連携や留学生の参加等による多様な視点を持った英語での議論
- オンライン等のICTの積極的活用による新しい探究活動の実施と検証

[4期での新たな取組]
 <探究的学びの進化> 探究科目の改編 → 課題研究を軸とした人材育成の向上
 リサーチサポート → 課題研究の質の向上
 国際機関との連携 → 多様な視点と英語で議論できる力
 オンライン活用 → 新しい探究活動や広域連携の発展
 探究活動が教科の学力に及ぼす影響の研究 → 探究活動が教科の学力に結びつくことの科学的立証

<成果の発信・普及>…4期目のミッション
 教科における探究活動事例集
 尼小田版探究活動マニュアル
 → 基幹校となり県下の学校へ普及
 ※県教育委員会とも連携

重点枠 (H26~29、H30~R元) 交流会支援 (R2)

[高校生サミット参加生徒アンケート]

	H26~29	H30	R元	R2
地域課題にさらに取り組みたい	81%	→ 86%(+5)	→ 91%(+5)	→ 98%(+7)

[令和元年度参加生徒及び関係機関の方へのアンケートの比較]

(生徒)・高校生同士の交流は刺激になった	98%
(関係機関の方)・今後もこの取組に協力したい	98%
・この取組で生徒にはどんな力が身についたか(複数回答可)	
コミュニケーション力	79%
プレゼンテーション力	71%
探究心	57%
考察力	50%
問題解決力	29%
分析力	29%

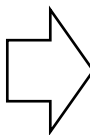
[令和2年度対面・オンライン参加生徒の比較]

差がなかった項目(対面・オンライン)
 地域課題への興味関心向上(97%・96%) ※オンラインは一定の効果あり
 内容は自分なりに理解できた(97%・96%)

差があった項目(対面・オンライン)
 課題発見する方法が学べた(94%・61%) ※考察の深まりはやや少ない
 自分の課題研究の応用できる学びがあった(100%・74%)
 コミュニケーションが難しい(25%・70%)

[連携校のレベルアップと共同での評価の実践研究]

- 協働活動をベースに各校の研究も切磋琢磨してレベルアップ
学会での入賞、国際会議での発表 → 「チーム尼小田」の成果
- 学校の枠をこえた共同での評価の実践研究
→ 信頼性・汎用性ある評価方法の確立



重点枠 [テーマ] 「多様な広域連携によるSTEAM教育を通して地域課題解決に取り組める人材育成」

日本の縮図兵庫から日本を考える

連携校A 瀬戸内海の連携校 海洋問題の取組

連携校B 兵庫県下連携校 様々な校種 (STEAM教育につながる連携)

但馬 丹波 播磨 摂津 淡路

【様々な地域の広域連携】
瀬戸内海・日本海
都市部・山間部
里山・里海

【STEAM教育につながる様々な校種と機関】
普通科・総合学科・職業科
行政・大学・研究機関・企業・地域

多様な視点の育成

出典：「国土数値情報(行政区画データ)」(国土交通省) (https://nftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-N03-2025.html) を加工して作成

出典：国土地理院ウェブサイト (https://maps.gsi.go.jp/#7/34.800272/136.208496/?base=ortls=ort&disp=1&vs=c1j10h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1)

②実施報告書

今年度の重点研究開発

第1期～第4期の流れ

[1]研究開発の課題

[2]研究開発の経緯

[3]研究開発の内容

[4]実施の効果とその評価

[5]校内におけるSSHの組織推進体制

[6]研究開発実施上の課題及び

今後の研究開発の方向性・成果の普及

③関係資料

5年間を通じた取組の概要

<仮説>

A	3期16年の実践の成果の発信・周知（4期目のミッション）
B	探究活動の質の向上と新学習指導要領における探究科目の実践的モデル化
C	各教科での探究活動を取り入れた授業改善とカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた教科横断型の取組
D	行政機関等と連携した環境や防災・減災等に関する探究活動による地域社会への貢献・参画
E	京都大学大学院との連携による汎用性のある探究活動の評価方法の提示と探究活動が教科の学力向上に結び付くことの科学的な立証
F	グローバルな視点で地球規模の課題に関心を持ち英語で議論できる力の育成
G	オンライン等のICTの活用による特別講義や実習、広域連携等の工夫した取組と対面との効果の比較検証

<実践>

A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 尼小田版探究マニュアルの作成、普及（HP掲載、地域の探究ネットワークへの案内） ・ 県内他校に向けた探究活動の教員研修会の実施、本校の取組の普及 ・ 小高連携事業、中高接続の取組の実施 ・ 地域イベント等における、地域環境活動や本校の課題研究の発信
B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全学科で探究科目の改編 ・ 1年サイエンスリサーチ科探究科目（理数探究基礎）の授業内容の改善(R4年度より) ・ 理数探究応用にて、生徒の個々の興味に応じたテーマ設定 大学教員を交えて1学期中間テーマ発表会を実施（神戸女学院大学研修）(R6年度より) ・ リサーチサポート事業の実施
C	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科における探究活動事例集を公開 ・ R6、7年度、「教科における探究の指導」研修会を実施、他校教員へも案内 ・ R7年度、探究的な内容を取り入れた授業をテーマに公開授業を実施、他校教員へも案内 ・ R6年度より、全学科生徒全員で探究活動の成果発表会を実施、文理の枠を超えて課題を共有
D	<ul style="list-style-type: none"> ・ 外部機関との連携の継続 ・ サイエンスリサーチ科1年生にて、地域の企業紹介 (R4年度：地域企業の説明会、R5年度より地域の工場見学) ・ 尼崎市で包括連携協定を締結(R4/3/29) ・ 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科と教育研究交流に関する協定を締結(R6/6/25) ・ 神戸女学院大学と本校で高大連携協定を締結(R6/6/26) ・ 地域に向けた防災普及イベント「あまおだ減災フェス」を「あまおだ減災の日」に発展(R7年度より) ・ 環境活動プログラムを実施し、地域の環境への意識の向上
E	<ul style="list-style-type: none"> ・ 京都大学と連携した教員研修会の実施 ・ R4年度より探究応用（2年普通科）、R5年度より探究実践（3年普通科）の数値評価を実施 ・ 京都大学国際高等教育院特定教授楠見孝氏との探究活動と学力の関係に関する共同研究の継続、同大学教育学研究科梶谷哲史氏との探究学習と境遇活用スキルの関連についての共同研究の実施
F	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語科と情報科の連携授業（探究情報）や英語科と理科の連携授業（理数探究実践）を継続して実施した。 ・ 台湾の国立台南家齊高級中等学校と姉妹校提携（R6/10/29）、同校へ英語による課題研究発表会（R4,6年度）SSH台湾海外研修を実施し、同校と課題研究の合同発表会等を開催。（R7年度） ・ トルコ共和国との文化または防災教育についての交流（R5年度より：現地高校または大学とオンライン交

	<p>流、R7年度：土日基金、兵庫県主催のトルコ共和国への高校生派遣事業への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> サイエンスリサーチ科、国際探求学科1年向けの留学生交流会の継続 オーストラリア研修の継続
G	<ul style="list-style-type: none"> 本校SSH重点枠の取組、高校生サミットにてオンライン発表会を実施 (国立台南家齊高級中等学校との発表会(R7年度)を含む) 高校生サミットに向けて、ワークショップ資料等をHPで共有 オンラインによる探究活動の外部相談 Webサービスを用いた探究活動指導の効率化

<評価>

A 3期16年の実践の成果の発信・周知（4期目のミッション）

以下のように、成果を普及した。

- 高校・機関等から視察や授業見学の受入等を行い、本校の取組を発信した。R7年の研究授業では他校教員12名が来校した。

R3	令和3年度県立高等学校教務部長会（評価について発表）(兵庫県),宮崎県教育庁高校教育課
R4	奈良県立青翔中学校・高等学校
R5	県立西宮北高等学校,西宮市立西宮高等学校,千葉県議会,新潟県立三条高等学校
R6	福岡市立福岡女子高,愛媛県立東温高,奈良県立奈良北高,神奈川県教委,県教育研究会科学部会研究会,県理教教育推進協議会
R7	熊本県立熊本北高、沖縄県立向陽高、鹿児島県立錦江湾高、兵庫県立明石南高、県立豊岡高、県立川西緑台高、県立播磨南高、県立松陽高、県立西宮今津高、県立尼崎北高、県立西宮甲山高、県立明石城西高

- IV期では、以下のように、研修会を実施した。

<京都大学大学院教育学研究科 教授 西岡 加名恵 先生 他による研修会> ※1 本校含む、()内は非SSH校

	年度	研修会	参加校等※1
①	R3	探究活動指導法教員研修会	4校(3校)
②	R4	探究活動指導法教員研修会	4校(3校)
③	R5	探究学習における論文作成指導法研修会	4校(3校)
④	R6	教科における探究の指導・持続可能な開発のための教育の概要	6校(5校)
⑤	R7	探究力を育てるカリキュラムと授業づくり・探究学習と境遇活用スキルの関連—2年間の縦断調査の結果報告—	8校(6校)

<その他の先生による研修会> ※2 現地参加、オンライン参加を含む

	年度	研修会	講師	参加校等※1
⑥	R3	「授業改善・評価」についての研修会	京都大学大学院教育学研究科准教授 石井 英真 先生	100名以上※2
⑦	R7	探究活動で育む資質・能力と学力向上	京都大学国際高等教育院副教育院長・特定教授 楠見 孝 先生	9校(6校)

- 以下のように、地域、小学校との連携を実施した。

実施生徒	内容
サイエンスリサーチ科2年生	市立清和小学校3,4年生の児童が本校に訪問、高校生による実験会
国際探求学科1年生	市立潮小学校に年3または4回訪問し、6年生の英語の授業を補助
普通科看護医療類型2年生	市内の小中学校3校で高校生が「防災・減災」に関する出前授業を実施

- 特にサイエンスリサーチ科における市立清和小学校との取組は平成18年より継続している。
- R4.3.29 尼崎市と包括連携協定を締結、継続し、特に探究活動において地域課題の解決に向けて行政と協働で取り組んでいる。

・以下に地域イベントで本校の環境活動や課題研究の成果を発信した事例を示す。

R3	エコあまフェスタ,伊丹市生物多様性交流フェスティバル, SDGs フェア inODA2021, ユネスコセミナー～学びの交流会～
R4	伊丹市生物多様性交流フェスティバル, SDGs フェア inODA2022, ユネスコセミナー～学びの交流会～. ひょうご版地域循環共生圏 (ローカル SDGs) 活動報告会
R5	伊丹市生物多様性交流フェスティバル
R6	尼崎森と運河の発表会 環境学習フォーラム, 伊丹市生物多様性交流フェスティバル,エコあまフェスタ
R7	尼崎 臨海 来んかい! 体験会～環境学習フェア 2025～, 猪名川水環境交流発表会 (いながわ体験フェスタ), 伊丹市生物多様性交流フェスティバル, エコあまフェスタ

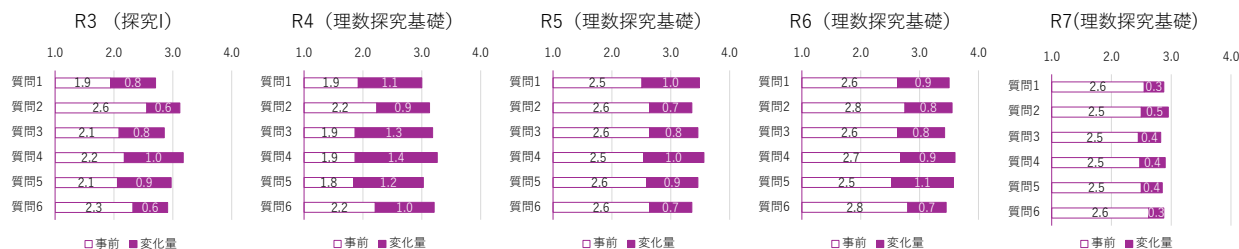
B 探究活動の質の向上と新学習指導要領における探究科目の実践的モデル化

・IV期で探究科目の再編を行い、予定通り教育課程を実施した。

特色ある教育課程 (令和4年度以降の入学)

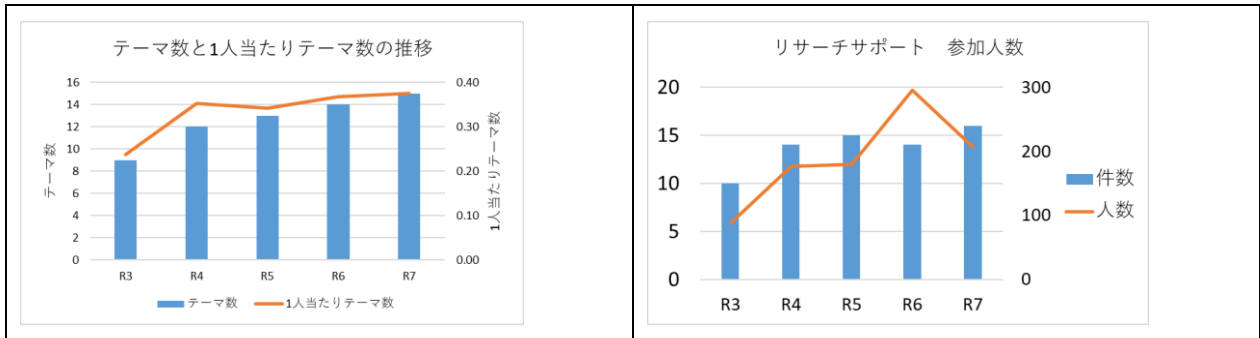
学科	学年	科目	単位数	代替科目	単位数
全学科	1年	探究情報	2	情報I	2
サイエンス科	1年	理数探究基礎	1	総合的な探究の時間	1
	2年	理数探究応用	2	理数探究	2
				総合的な探究の時間	2
3年	理数探究実践	1			
普通科	2年	探究応用	2	総合的な探究の時間	3
	3年	探究実践	1		
国際探求学科	1年	国際探求基礎	1	総合的な探究の時間	3
	2年	国際探求応用	1		
	3年	国際探求実践	1		

・R4年度より、従来の探究Iを理数探究基礎に改め、研究内容の発表を取り入れた。表現力の事後到達度は変更前より高く維持されている。



質問1『表現力』【多様な視点で見る力】、質問2『背景の理解』【多様な視点で見る力】、質問3『科学的探究の理解、予測』【課題設定する力】、質問4『科学的知識の理解』【深く洞察し、解決する力】、質問5『科学的現象の考察、説明』【深く洞察し、解決する力】、質問6『協働・チームワーク』【協働で参画する力】

- ・個に応じたテーマ設定について、1人当たりテーマ数は下の通りである。年々増加している。
- ・リサーチサポート事業についても参加件数は増加傾向にある。



C 各教科での探究活動を取り入れた授業改善とカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた教科横断型の取組

- ・探究マニュアルと事例集を公開。 <https://amagasakiyoda.ed.jp/ssh/>
- ・教員研修会や公開授業を他校教員に案内 (上述)。
- ・実施された研究授業を以下に示す。教科横断や探究的な学習についての内容も含めて、多様な研究授業

が行われた。

年度	科目	研究テーマ	単元名等	年度	科目	研究テーマ	単元名等
R3	古典B	質問と気付き	知音	R6	論国	市民社会化する家族	
	数学A	要点を押さえる	確率		公共	校則の見直しについて	
	世界史B	「なぜ」気付き「問い」を意識した授業	古代ロー文化①		生物	AI型薄層加圧「アライ」の実験原理の説明	
	物理基礎	公式を活動的に暗記する	鉛直投げ上げ		英語ⅡⅢ	Unit4 What items would you place in a time capsule?	
	体育	「リ」よく走り抜ける	陸上競技		英語ⅡⅢ	Unit6 How can art be made accessible to all?	
	英語理解	対話的な学びについて	Lesson2		数学Ⅱ	第5章 指数関数と対数関数 第1節 指数関数 ①指数の拡張	
	現代文B	解釈と考察(作品と作者の関連性を追求する)	森路外「舞姫」		古典探究	「史記」鴻門の会	
	現代文A	ICTを活用して「リ」の理解を深める	関数の増減と極大・極小		歴史総合	「アラスカ」の対外侵略と国際秩序の変化	
	数学Ⅰ	ICTを活用した三角比の導入	三角比		歴史総合	大正7「ウララ」と日本社会の変化	
	現代社会	資料の読み取り	経済分野		文学国語	①・②ともに整理分析・まとめ表現	①フォートローラーの創作課題または評論の枠組み作文課題 ②作文課題
	探究Ⅰ	2乗に比例する物理量の測定 地震について ほうれん草の色素の分析 胃内容物の分析による食性の推測	単振り子の周期 震源地について 吸収スペクトル 食物網		理数Ⅰ	教科横断的事例を扱い、数学的な問題解決を考える	順列(数学A)
	英表Ⅱ	ICTを使って生徒の言語活動を最大限に引き出す			理数実践	各テーマで情報収集・分析したものを発表。	「アライ」の向けての準備と「アライ」作製
現代文	「読むこと」から「書くこと」へ	「無駄」と進化	生物	問い・仮説の設定、検証計画の立案	脳		
理数Ⅰa	ICTの活用	三角比	倫理	まとめ表現	「リ」の思想		
歴史総合	対話を通じた思考の言語化、歴史の本質の獲得	①「革命」と連立	保健	課題の設定・情報の収集	応急手当と心肺蘇生法		
理数生物	進化的しくみを実験で体験する	遺伝的浮動のシミュレーション	論理表現	英語で環境問題を考える	How does overusing energy affect us?		
家庭基礎	学んだ知識を生活に生かす。	和食の良さを考える	論理国語	主張の異なる評論を読み比べ、自分の意見を整理し、共有。	「アライ」は心を持つのか、そもそも心とは何か		
論表Ⅰ	Speakingによる「アライ」を促す。	不定詞	数学Ⅰ	実際に測量し、三角比の役割や有用性を実感し、本質的な理解に繋げる。現実社会との繋がりを意識し、数学を用いた課題解決を行う。	図形と計量「三角比」三角比の応用		
現代文B		梶井基次郎「檸檬」	理数生物	「アライ」課題	第4章 遺伝情報の発現と発生		
国語表現		待選表現	保健	出産をテーマに社会のニーズをもとに探究する。	結婚生活と健康		
基礎数a		2次関数の演習	地理総合	EUの仕組みや、EUを離脱した「リ」の経済状況も簡単に確認し、EUの意義について探究する。	EU統合と人々の生活「ヨーロッパ」の国々が、国境を越えた結びつきを強めるのはなぜか。		
政治経済		憲法	歴史総合	帝国主義は、世界にどのような影響を与えたのか、探究する。	帝国主義の発展		
生物		発酵					
国探基礎		貧困					
現代文		「美しさの発見」について					
数Ⅲ		積分「曲線の長さ」					
公共		SDGsのどの目標を優先して協力・支援すべきか					
世探究		「ローマ」の形成、「西ヨーロッパ」の中心となる「ローマ」					
生物		加齢の発生と遺伝子発現					
体育		「リ」の「リ」					
探究Ⅲ		「科学英語」"Extracting Strawberry DNA"					

D 行政機関等と連携した環境や防災・減災等に関する探究活動による地域社会への貢献・参画

・以下に連携を行った大学、研究機関、行政機関、企業等の例を示す。

R3	<大学・研究機関> 神戸大、京都大、徳島大、兵庫県立大、大阪公立大、関西学院大、近畿大、甲南大、高度情報科学技術研究機構 <公立施設> 兵庫県立コウノトリの郷公園、神戸市立須磨海浜水族園、兵庫県立人と自然の博物館、西はりま天文台 <行政機関> 海上保安庁第五管区、国土交通省近畿地方整備局、気象庁大阪管区気象台、気象庁神戸地方気象台、兵庫県尼崎港管理事務所、兵庫県農政環境部、尼崎市、兵庫県水産技術センター <その他> 須磨里海の会、神戸市漁業協同組合、あまがさき環境オープンカレッジ、日本モデルOCKET協会	R6	<大学> 京都大、徳島大、兵庫県立大※1、大阪公立大、兵庫教育大学、神戸女学院大学※2 <公立施設> 兵庫県立コウノトリの郷公園、兵庫県立人と自然の博物館、西はりま天文台、国立淡路青少年交流の家、北淡震災記念公園、人と防災未来センター <行政機関> 兵庫県環境部、尼崎市、兵庫県水産技術センター、神戸地方気象台、国交省近畿地方整備局 <その他> 須磨里海の会、神戸市漁業協同組合、兵庫県漁業協同組合連合会、公益財団法人ひょうご環境創造協会、株式会社日立ハイテク、尼崎信用金庫、NPO法人尼崎環境オープンカレッジ
R4	<大学> 神戸大、京都大、兵庫県立大、大阪公立大、岐阜大学、徳島大、近畿大 <公立施設> 兵庫県立コウノトリの郷公園、兵庫県立人と自然の博物館、西はりま天文台、国立淡路青少年交流の家 <行政機関> 海上保安庁第五管区、国土交通省近畿地方整備局、気象庁大阪管区気象台、気象庁神戸地方気象台、兵庫県尼崎港管理事務所、兵庫県環境部、尼崎市、兵庫県水産技術センター <その他> 須磨里海の会、神戸市漁業協同組合、兵庫県漁業協同組合連合会、あまがさき環境オープンカレッジ、株式会社ピリカ、株式会社日立ハイテク	R7	<大学> 京都大、兵庫県立大、大阪公立大、徳島大、神戸女学院大学、三重大学 <公立施設> 国立室戸青少年自然の家、兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県立人と防災未来センター <行政機関> 兵庫県環境部、兵庫県南神戸センター、兵庫県水産技術センター、尼崎市 <その他> 須磨里海の会、すまうら水産有責任事業組合、兵庫県漁業協同組合連合会、あまがさき環境オープンカレッジ、武庫川IECO-LABO、NPO法人企業教育研究会、株式会社タクマ、株式会社日立ハイテク、株式会社尼崎開発、株式会社エアグラウンド、環境システム株式会社、尼崎信用金庫、公益財団法人国際エメックスセンター
R5	<大学> 京都大、兵庫県立大、大阪公立大、徳島大、神戸女学院大学、産業技術短期大学 <公立施設> 兵庫県立コウノトリの郷公園、兵庫県立人と自然の博物館、西はりま天文台、国立淡路青少年交流の家 <行政機関> 兵庫県環境部、尼崎市、兵庫県水産技術センター <その他> 須磨里海の会、神戸市漁業協同組合、兵庫県漁業協同組合連合会、公益財団法人ひょうご環境創造協会、株式会社日立ハイテク、大阪油脂工業株式会社、株式会社エアグラウンド、尼崎信用金庫		

E 京都大学大学院との連携による汎用性のある探究活動の評価方法の提示と探究活動が教科の学力向上に結び付くことの科学的な立証

- ・京都大学と連携して、教員研修会を実施した(上述)。
- ・同大学教育学研究科と協同作成したルーブリックも用いて、理数探究応用の数値評価を行った。
- ・京都大学国際高等教育院楠見孝氏と共同研究を継続した。

探究的学習スキルと批判的思考態度の平均評定値(5段階評定) (H29年7月～R7年2月の結果)

- ・SR科、国際探求学科とも学年進行による向上がみられた→探究的学習の成果のあらわれ
- ・SR科、国際探求学科とも年次進行による向上がみられた→実践の蓄積による教育効果のあらわれ

F グローバルな視点で地球規模の課題に関心を持ち英語で議論できる力の育成

以下の取組により、国際性や英語で議論する力を育成した。

- ・また、留学生を招いて、グループに分かれて交流を行う「留学生交流会」を国際探求学科およびSR科1年生を対象に継続して実施した。
- ・国立台南家齊高級中等学校と関係を築き、課題研究の英語発表による交流等の機会を創出した。

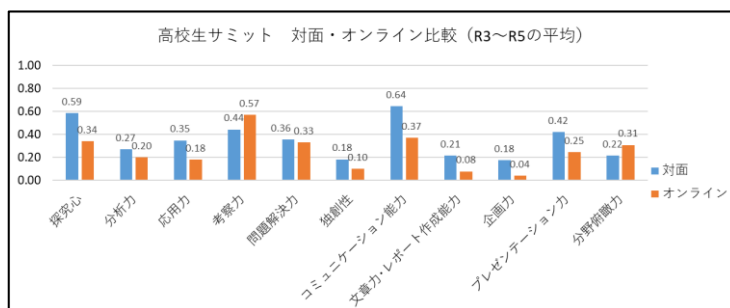
R3	国探,SR1,2年	3/4	交流会	台南家齊校とオンライン上で交流を実施。
R4	SR3年	10/24,10/31	研究発表会	台南家齊校と課題研究英語プレゼン交流会を実施。
	国探1年	1/20	オンライン交流	オンラインプラットフォーム、Flipgrid を用いた自己紹介動画の交換
R5	国探, SR1,2年	12/14	交流会	台南家齊校の生徒が来校し、国際探求学科およびSR科の1,2年生が交流。
R6	国探1,2年, SR3年	10/29	交流会・発表会	台南家齊校と本校で姉妹校提携を締結。家齊校の生徒が来校し、国際探求学科1,2年生およびSR科3年生が交流。SR科3年生から家齊校生徒へ課題研究の英語発表を実施。
R7	各学科 2年希望者	11/26	講義	台南家齊校生徒とオンライン交流。また、本校生徒が家齊校訪問、共同でのワークショップや研究発表会を実施。
		9/4,11/15,27,28	オンライン交流、	
		12/17~20	台湾海外研修旅行	

- ・トルコ共和国との交流についても取組を進めた。(土日基金、JICAトルコ事務所による開催)

R4	国探、看療	3/17	オンライン	アランヤ・ヤシャム・タサルム学校の生徒と文化や防災についての交流
R5	国探、看療	3/19	交流	
R6	国探、看療	3/19		チャンクルTOBB科学高校の生徒と文化や防災についての交流
R7	国探、SR科	9/23~9/30	研修旅行	令和7年度トルコ共和国への高校生派遣事業
		11/11	来校	チャンクルTOBB科学高校生徒来校、交流
		10/29,11/21	オンライン交流	Haci Bektas Veli Nevsehir University やチャンクルTOBB科学高校の方と交流
		2/2		

G オンライン等のICTの活用による特別講義や実習、広域連携等の工夫した取組と対面との効果の比較検証

- ・Fに記載した通り、海外研修の前後でオンラインを活用した。
- ・高校生サミットで身についた力について、他校とのオンライン発表やディスカッションを行ったR3~R5年の対面とオンラインの効果の比較を以下に示す。身についた力についてのアンケート回答数(複数回答可)を各回答者数(対面の平均:75.7、オンラインの平均:13.7)で割った値を用いた。対面では探究心やコミュニケーション能力の向上が0.5を超え、オンラインの結果より大きかった。一方、オンラインでは考察力や分野俯瞰力において、オンラインが対面の結果を上回った。ただし、オンラインについては考察力ではR3:0.47、R4:0.35、R5:0.89、分野俯瞰力ではR3:0.13、R4:0.24、R5:0.56とばらつきが大きい。



- ・以上から対面についてはオンラインより効果に育成できる力があり、対面で実施されている事業をオンラインに置き換える場合は、その点を考慮せねばならない。事前研修や事後研修をオンラインで行い、中心となる行事は対面で行うことが効果的な事業の実施方法として考えられる。

第1期～第4期のSSHにおける研究の流れ及び研究成果について

1 本校SSHにおける第1期～第4期の研究の流れ

今年度で第4期5年目（21年目）となる。第1～4期の研究の流れを、以下の表にまとめた。

期	1期					2期					3期					経過措置		
	年度	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	
研究テーマ	「数学・理科に重点をおいたカリキュラム編成」 ・ 国際社会で活躍できる科学技術系人材育成 ・ 大学・小中学校・研究機関・民間企業と連携した先進的な理数系教育の構築					「環境適応型社会創出に向けた国際感覚のある科学技術系人材の育成」 ・ 英語科・情報科と連携した国際感覚を深めるためのプログラム開発					「持続可能社会構築を实践するグローバル人材の育成と評価法の研究」 ・ 生徒の主体的・協働的な活動からの人材育成の方法の構築 ・ 探究活動による生徒の到達度を検証する客観的評価法の確立							
育成する力	論理的思考力					論理的思考力 表現力					論理的思考力 表現力 コミュニケーション(ネットワーク)力 マネジメント力							
探究活動	サイエンスリサーチ科 1年「自然探究の方法」(理科4分野基礎実験) 2年「自然科学研究」(課題研究)					1年「自然探究の方法」(理科4分野基礎実験) 2年「自然科学研究」(課題研究) 3年「科学英語表現」(英語での実験、英文レポート)					1年 探究Ⅰ「自然探究の方法」(≒課題研究) 2年 探究Ⅱ「自然科学研究」(課題研究) 3年 探究Ⅲ「科学英語」(課題研究の英語発表等) 神戸市立六甲アイランド高と合同中間発表会							
	国際探求学科・普通科					<全学的な探究活動> — 小田高リサーチ — 2年「探究応用」 総合的な学習の時間を活用した探究活動 ○ 研究発表会の充実 探究応用発表会(普通科、国際探求学科、看護医療・健康類型の発表会) → SSH生徒研究発表会(全学科発表会)												
各期の新たなSSHの取組	○ 学校設定科目の開発 ①「サイエンス基礎」(普通科1年3単位) 物理・化学・生物の融合科目 ※現行教育課程(理科3分野履修)の先行研究 ②「ヒューマンサイエンス」(SR科2年1単位) 保体・家庭・地歴・国語の連携科目 ○ 大学・研究所・小中学校との連携 地学野外実習、DNA解析実習、県立コノトリの郷公園研修、科学講演会、小学生算数・理科教室等					○ 行政機関等との連携による環境問題を重視した課題研究 県環境農政部・阪神南県民局・国土交通省・海上保安本部等との連携による大阪湾での環境調査 ○ 英語を重視した自然科学教育 「科学英語表現」(3年)において英語での指示による実験や課題研究の英語発表を実施 ○ 情報科と英語科の連携授業 「情報の科学」(1年)において情報機器を活用し英語でのプレゼンテーションを実施					○ 京都大学と連携した探究活動等の評価方法の研究 ①SR科「自然科学研究」(課題研究)におけるルーブリックを作成し、ルーブリックを活用した評価を実施 ②重点枠における生徒実行委員会の共同研究を通じた能力向上を測るルーブリックを作成し、ルーブリックを活用した評価を実施 ③国際探求学科・普通科の探究活動「探究応用」のルーブリックを作成 ④探究学習スキルと学習スキル・論理的思考の伸び、教科と探究の成績の相関に関する研究(H29～)							
重点枠等	◎コアSSH 「DNA解析による縄文人・弥生人の研究」					◎コアSSH		△交流会支援		◎重点枠		◎重点枠 「汎用性のある高校生版環境教育プログラムの実践を通じた人材育成」			◎重点枠		△交流会支援	

◎ コアSSH 「海洋付着生物のDNA解析」

△ 交流会支援「海の世界を考える高校生フォーラム」

◎ 重点枠 「汎用性のある高校生版環境教育プログラムの実践を通じた人材育成」

◎ 重点枠 「地域とともに行動・提言・貢献できる人材育成・環境・防災等学際的課題の解決に向けて」

△ 交流会支援「新たな広域連携の開発」

重点的な開発項目（令和7年度の新たな取組）

情報・成果の発信

- ・公開研究授業（年2回）の他校教員への案内。
- ・尼小田版探究マニュアル、事例集の充実。
- ・「尼崎小田高校探究ネットワーク」（兵庫県阪神地区の高校）に向けて、尼小田版探究マニュアルの発信。

探究活動

1年 理数探究基礎

- ・コウノトリの郷公園等研修 → 地域の環境技術研修（クリーンセンター第2工場、資源リサイクルセンター、株式会社タクマ様）に変更。
- ・SR科交流会にて、ミニ探究の内容を2,3年生へ発表。
- ・3学期に「IBM Skills Buildを活用した高校生向けIT学習教室」（情報科）を実施。

2年 探究活動（理数探究応用、国際探求応用、探究応用）

- ・台湾海外研修旅行への参加、研究内容を英語で発表。
- ・SSH小田高リサーチ生徒研究発表会では、全学科で発表会を実施。1年生全員が見学。また、各学科代表班が1,2年生全員へ口頭発表。

その他

- ・普通科「探究基礎講座」の充実（p43参照）。

授業改善

- ・「探究的な授業」をテーマに研究授業を実施。教員研修会「探究力を育てるカリキュラムと授業づくり」にて京都大学大学院教育学研究科教授西岡加名恵先生を招き、授業教材についてフィードバックしていただいた。

地域連携・環境・防災

- ・11/9「あまおだ減災フェス」を「あまおだ減災の日」に改め、1年生全員が登校、防災に関する発表を見学。
- ・1年生全員を対象に「ボランティアについて知ろう?!」を実施。地域課題を共有。
- ・「大阪湾・武庫川 地域課題ミニワークショップ」を実施。
- ・小学生向けの親子理数教室を実施。

京都大学大学院との連携

- ・教員研修会「探究活動で育む資質・能力と学力向上」にて、京都大学国際高等教育院副教育院長、特定教授楠見孝先生を招き、学力と探究スキルの関連について、本校と講師の楠見先生との共同研究結果を参加教員へ発信。
- ・京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM の web サイト QTAL の連携機関会員に登録。

国際性の取組

- ・SSH台湾海外研修旅行の実施（p49参照）。

重点枠の取組・オンライン活用

- ・高校生サミットにて、国立台南家齊高級中等学校とのオンライン発表会を実施。

令和7年度表彰・新聞記事等

本校 SSH の探究活動等の取組が出版物等に紹介されました。

下表において、媒体 記：記事

生徒 国際探求学科、看護類型（看護医療・健康類型）、高校サ（高校生サミット）

媒体	出版物、番組名、Web サイト名	紹介内容	生徒
記	神戸新聞 11/19	高校生サミットの紹介 https://www.kobe-np.co.jp/news/hanshin/202511/0019720874.shtml	高校サ
記	神戸新聞 12/16	ボランティア団体との交流会の紹介 https://www.kobe-np.co.jp/news/hanshin/202512/0019852433.shtml	1 学年
記	神戸新聞 1/17(第2朝刊)	地域防災 中核は生徒達	看護類型
記	神戸新聞 4/4, 7,4, 9/12, 10/10	理科の散歩道 https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/manabij/202504/0018830099.shtml https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/manabij/202507/0019183844.shtml https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/manabij/202509/0019462282.shtml https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/manabij/202510/0019571227.shtml	教員

今年度は以下の表彰を受けました。

4月	2025年度ジュニアメンバー顕微鏡写真コンクール	強そうなプランクトン発見！	特別賞	科学研究部	
6月	女子高生向け理学探究活動推進事業 COCOUS-R (京都大学理学研究科・理学部)	チチブ類の分化の道筋解明および琵琶湖の ヌマチチブの起源解明	共同研究 採択決定	科学研究部	
8月	伊丹市生物多様性 交流フェスティバル 2025	口頭発表会 部門	大阪湾のプランクトン観察 —尼崎運河と大阪湾の比較—	奨励賞	科学研究部
		ポスター発表 部門	近畿産チチブ類の遺伝的集団構造	奨励賞	科学研究部
			異なる環境における鳥類相の比較	奨励賞	科学研究部
		セミの抜け殻の形態的特性の解明	奨励賞	科学研究部	
9月	日本動物学会 高校生ポスター発表	近畿産チチブ <i>Tridentiger obscurus</i> およびヌマ チチブ <i>T. obscurus</i> の遺伝的集団構造	高校生 ポスター賞	科学研究部	
	国際里山里海フォーラム（兵庫県）	尼崎市における COD での水質調査	奨励賞	課題研究班	
		大阪湾武庫川河口付近の魚に含まれる マイクロプラスチック	奨励賞	課題研究班	
		近畿産チチブ類の遺伝的集団構造	奨励賞	科学研究部	
11月	第49回兵庫県高等学校総合文化祭 自然科学部門発表会	近畿産チチブ類の遺伝的集団構造	口頭発表奨励賞	科学研究部	
		大阪湾のプランクトン観察	優秀ポスター賞	科学研究部	
	高校生私の科学研究発表会 2025	大阪湾のプランクトン観察	口頭発表奨励賞	科学研究部	
12月	第7回高校生ともしびボランティアアワード（公益財団法人コープともしびボランティア振興財団）			あまおだ地域 応援隊	

[1] 研究開発の課題

令和7年度研究開発実施計画と実践 (令和3年度指定, 第5年次)

1 学校の概要

- ひょうごけんりつあまがさきおだこうとうがっこう
- (1) 学校名 兵庫県立尼崎小田高等学校
校長名 山根 尚
- (2) 所在地 〒660-0802 兵庫県尼崎市長洲中通2丁目17番46号
電話番号 06-6488-5335 FAX番号 06-6488-5337
- (3) 課程・学科・学年別、生徒数、学級数及び教職員数
- ① 課程・学科・学年別、生徒数、学級数 (令和7年1月現在) ※ 理系、看護医療・健康類型を()内に内数で示す。

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		生徒数	学級数
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数		
全日制	普通科	195	5	197	5	197	5	589	15
	(理系)	—	—	(40)	(1)	(46)	(2(文理混合))	(86)	(3(内2学級は文理混合))
	(看護医療・健康類型)	(39)	(1)	(39)	(1)	(40)	(1)	(118)	(3)
	国際探求学科	35	1	39	1	39	1	113	3
	サイエンスリサーチ科	40	1	40	1	38	1	118	3
	計	270	7	276	7	274	7	820	21

- ② 教職員数 (令和8年2月現在) ※教諭・養護教諭には、臨時講師を含む

校長	教頭	教諭等	養護教諭	非常勤講師	実習助手	ALT	事務職員	校務員	計
1	2	50	2	12	3	3	4	2	79

2 研究開発課題名

探究的学びの深化により学際的課題を解決できるシェアド・リーダーシップをもつ人材育成

3 研究開発の概略

3期までの成果と課題を踏まえ、探究的学びのさらなる深化により実践的な4つの力「多様な視点で見る力」「課題設定する力」「深く洞察し解決する力」「協働で参画する力」を育成する。また、探究活動が学力向上に結びつくことを科学的に立証する。さらに、探究活動の指導・評価法、教科への広がり等の成果をマニュアルにまとめて広く発信する。そのために、以下の7つの仮説について検証する。

<p>A 3期16年の実践の成果の発信・周知(4期目のミッション)</p> <p>探究活動については新学習指導要領における「総合的な探究の時間」が先行実施される中、本校が行ってきた課題研究等の取組は全国的な高校の汎用性モデルとなると考える。そこで、本校の成果を他校へ発信し普及させる。また、これまで行ってきた小高連携授業や小中学校との連携の取組をさらに推進するために、小学生にはサイエンスへの興味関心を高める取組、中学生には中学生対象のサイエンスラボや課題研究相談会でのアドバイス等を行い、中学生に対して一つ上のレベルへつなげる中高接続となる取組を行う。</p>
<p>B 探究活動の質の向上と新学習指導要領における探究科目の実践的モデル化</p> <p>課題研究や探究活動のさらなる質の向上を目指すとともに、新学習指導要領における「理数探究」や「総合的な探究の時間」で活用できる実践的モデルを発信する。SR科では1期～3期までの実績を、新学習指導要領の「理数探究基礎」「理数探究」に生かし、3年間の段階的指導を通して、テーマ決めから、調査・研究、発表、評価に至る「理数探究基礎」「理数探究」の実践モデルを示す。また、「理数探究」を発展させていくことを明示する学校設定科目「理数探究応用」、「理数探究実践」を設置する。国際探求学科や普通科においても、3年間の段階的指導を通して、探究活動の質の向上を目指す。また、課題研究の時間が探究力の伸びや教科学力との相関にも関係することが検証されたため、2年生ではより充実した課題研究をできるようにする。実践的な4つ力の育成に向けて、課題研究の各段階に応じたサポートを設置し、学科や学年の垣根を越えて希望生徒が学際的な問題について学習、ディスカッションし、刺激し合う経験をさせる。段階に応じて基礎から高度なレベルまで用意し、視野を広げ、トップ人材育成までサポートする。</p>
<p>C 各教科での探究活動を取り入れた授業改善とカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた教科横断型の取組</p> <p>1期～3期の探究活動の取組が、各教科での主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善の実施や研究授業の実施、教科横断型の取組に結び付いている。4期目では、各教科における探究活動の事例集の作成や学際的課題の解決に向けたSTEAM教育等こ取り組み、「主体的・対話的で深い学び」に向けた教科横断型の授業改善を推進する。</p>
<p>D 行政機関等と連携した環境や防災・減災等に関する探究活動による地域社会への貢献・参画</p> <p>1期～3期では大学や行政機関等連携を築いてきた。課題研究や探究活動における行政機関等との関わることで、生徒達は地域の課題に関心を持つようになり、持続可能社会構築のための地球規模の取組(SDGs)にもつながる。4期目においても、生徒の主体的な取組を保証する中で、行政機関等と連携して地域の課題解決や社会への貢献、持続可能社会構築への実践につながる取組を推進し、実践的な4つの力を育成する。</p>
<p>E 京都大学大学院との連携による汎用性のある探究活動の評価方法の提示と探究活動が教科の学力向上に結び付くことの科学的な立証</p> <p>評価を指導に活かすために、SR科の課題研究の評価については、3期目までに京都大学大学院と共同開発したルーブリックについて、評価の実践や改良を積み重ねる。国際探求学科及び普通科の「総合的な探究の時間」の評価については、普通科の探究活動の増単に応じた探究の質の深まりも考慮に入れた評価方法を確立する。4期目においても、京都大学大学院の西岡教授との連携を含め、研修会等を通して、探究活動の進め方や評価についての教員全体のレベルを向上や研究成果の発信を目指す。また、重点枠では、信頼性・汎用性のある評価方法の確立、「グローバルに物事を見る力」等の新たな力を評価するルーブリックの開発も併せて行う。さらに、探究学習が教科の学力に及ぼす影響についての新たな研究については、4期目の中でデータをさらに積み重ね、探究活動に積極的に取り組むことが教科学力の向上に結び付くことを科学的に立証する。</p>

<p>F グローバルな視点で地球規模の課題に関心を持ち英語で議論できる力の育成</p> <p>国際探求学科では英語によるディベートを授業に取り入れており、生徒が論理的思考力と科学的根拠に基づいて議論できる力を身に付けることにつながっている。4期目でも引き続き、SR科と国際探求学科の1年生での情報科と英語科の連携授業や、SR科の3年生での課題研究の英語発表等を実施し、表題の力の育成を目指す。また、関西圏に滞在する留学生との交流や、オンラインを含めた海外研修の工夫によって国内で行う国際性を育む取組のモデルを示す。取組を通じてグローバルな視点で物事を見るとともに、地球規模の課題について英語で議論できる力を育成する。</p>
<p>G オンライン等のICTの活用による特別講義や実習、広域連携等の工夫した取組と対面との効果の比較検証</p> <p>3期目の経過措置における、対面とオンラインの比較検証により、オンラインでの活動でも一定の効果が得られることが分かった。探究活動において、対面と併せてオンラインを積極的に活用していくことで事業を発展させる。発表やディスカッションの深まりについては3期の結果ではおおよそ深まりを難しく感じていたことから、オンラインについては事前学習の充実や実施方法の工夫が必要であり、その点を考慮しながら積極的にうまく活用し、効果を上げていく。特に、今まで時間的、経済的に難しかった遠隔地との連携については効果が発揮されるため、積極的に活用していく。</p>

[2] 研究開発の経緯

1 研究計画と実践結果・評価計画

(1) 研究計画 5年目(令和7年度) : 5年間の研究計画については、p2を参照

下表において、◎:昨年度から引き続き参加または実施、★:今年度新たに参加または実施 国探:国際探求学科、看健:看護医療・健康類型、高校サ:高校生サミット、科学部:科学研究部、A~G:各仮説、多:多様な視点で見る力、課:課題設定する力、深:深く洞察し解決する力、協:協働で参画する力 ※ 五国SSH連携プログラム

時期	事業名	対象者	A	B	C	D	E	F	G	多	課	深	協
通年	探究情報	全学科1年		○	○			○	○	○	○	○	○
通年	理数探究基礎	SR1年		○	○					○	○	○	○
通年	理数探究応用	SR2年	○	○	○	○	○			○	○	○	○
通年	理数探究実践	SR3年		○	○					○	○	○	○
通年	探究応用(総合的な探究の時間、国際探求応用)	国探、普通科2年		○	○	○				○	○	○	○
通年	探究実践(総合的な探究の時間)	普通科3年	○	○				○		○	○	○	
通年	魚類、プランクトン調査・採集	科学部、希望者		○							○	○	
4月~	尼崎重河オープンアカデミー(定期参加)	SR科研究班		○	○					○	○	○	○
4.9月	甲子園浜生物調査	希望者		○						○	○	○	
5月	SSH先進校視察(倉敷天城中高・岡山一宮高)	教員		○	○								
5月	数学特別講義	SR1年		○		○				○	○	○	
5月	神戸女学院大学研修	SR2年		○						○	○	○	
6月	日本食品化学学会高校生発表	SR科研究班	○	○						○	○	○	
7月	高校生サミット連携校生徒実行委員会	希望者		○	○	○	○		○	○			○
7月	地域の環境技術研修	SR1年		○		○				○	○	○	
7月	Science Conference in Hyogo	SR科研究班	○	○				○		○	○	○	
7月	SR交流会	SR科全員		○				○	○	○	○	○	○
7-10月	高校生サミット地域課題ワークショップ(全3回)	希望者		○	○	○	○			○	○	○	○
7月	Q-1 U18 審査委員(万博)	SR2年希望者		○						○	○	○	
7月	親子理数教室 in 尼崎小田高2025	SR科希望者	○			○				○	○		○
7月	サエンス・ギャラリー(奈良青翔高校)	SR科研究班	○	○						○	○	○	
7月	大阪湾水質一斉調査	SR科希望者	○	○	○					○	○	○	○
7月	課題研究指導相談(兵庫県立大学)	SR科研究班		○		○				○	○	○	
7月	瀬戸臨海実験所での臨海実習	希望者		○						○	○	○	○
7月	尼崎 臨海 来んかん! 体験会~環境学習フェア2025~	SR科研究班	○	○						○	○	○	
7月	人と防災未来センター研修	SR1年、普通科、看健研究班		○	○	○			○	○	○	○	
7.8月	五国※「ブラチカ角観体験~星空の感動をつたえよう~」	科学部	○	○	○	○			○	○	○	○	○
8月	猪名川水環境交流発表会(いながわ体験フェスタ)	科学部	○	○	○	○				○	○	○	○
8月	教員研修会「探究活動で育む資質・能力と学力向上」	教員	○	○			○						
8月	「六甲山SSH特別講義」六甲から夜空を眺めよう天体観望会	科学部		○						○	○		
8月	SSH生徒研究発表会	SR1,2年,3年代表者	○	○				○		○	○		
8月	伊丹市生物多様性交流フェスティバル	科学部	○	○						○	○	○	
8月	地学(地層・天文・防災等)研修(室戸)	希望者		○	○					○	○	○	
8月	マズエタ	SR科研究班	○	○						○	○	○	
8月	五国※ DNA鑑定による鳥類性別別と身近な野鳥観察入門講座	科学部	○	○						○	○	○	○
8-1月	高校生海洋環境保全研究発表会(研究レポート、指導会、研究発表会)	SR科研究班	○	○		○				○	○	○	
8月	類編会「探究活動で育む資質・能力と学力向上」	教員	○	○			○						
8月	坊っちゃん科学賞 研究論文コンテスト	SR科研究班、科学部	○	○						○	○		
8.2月	COCOUS-R 中間報告会・発表会	SR1年希望者	○	○			○			○	○	○	○
9月	日本動物学会 高校生ポスター発表	科学部	○	○						○	○	○	
9月	鳥類識別講座入門	SR1年		○						○	○		

時期	事業名	対象者	A	B	C	D	E	F	G	多	課	深	協
9月	五国※「DNA情報を探究活動に利用する」	SR科希望者		○							○	○	
9月	大阪湾・武庫川 地域課題ニワカジョブ	SR1年希望者		○	○	○	○			○	○	○	○
9月	ひょうご里山・里海国際フォーラム(兵庫県主催)の高校生ボクサーセッション	SR科、普通科研究班	○	○		○				○	○	○	
9月	兵庫県立人と自然の博物館研修	SR1年		○		○				○	○		
9月	日本学生科学賞 兵庫県コンクール	SR科研究班、科学部	○	○						○	○	○	
9-3月	潮小学校遠征プログラム(3回)	国探1年	○			○				○			○
9-1月	課題研究活動(環覚システム(株)訪問(4回))	SR科研究班		○		○					○	○	
9-2月	令和7年度日中共和国との交流事業	代表者、希望者	○			○		○	○	○	○	○	○
9月	青少年のための科学の祭典2025 神戸会場大会	科学部	○	○						○	○		○
9-12月	SSH 台湾海外研修(事前研修、研修旅行)	希望者	○	○		○		○	○	○	○	○	○
10月	地域の工場見学	SR1年		○		○				○		○	
10月	次世代防災エネルギーによる「震災をつなぐ・伝える」フォーラム	看健2年代表者	○	○		○				○	○	○	
10月	数学理科甲子園	SR1,2年希望者		○	○	○				○	○	○	○
11月	令和7年度高大連携課題研究合同発表会 at 京都大学	科学部	○	○						○	○	○	
11月	五国※「高校生のための減災復興フォーラム」	看健2年希望者	○	○		○				○	○	○	○
11月	こあまフェスタ	SR科研究班	○	○						○	○	○	
11月	あまおた減災の日	1年、2年希望者	○	○	○	○				○	○	○	○
11月	地域課題解決に取り組む高校生サミット	希望者	○	○		○	○		○	○	○	○	○
11月	数学リビック予選	SR科希望者		○						○	○	○	
11月	高校生・私の科学研究発表会	科学部	○	○						○	○		
11月	六甲アイランド 高校との合同中間発表会	SR2年	○	○						○	○	○	○
11月	小高連携事業 高校生による算数・理科の授業	SR2年	○	○	○	○				○	○	○	○
11月	アルコール分解酵素遺伝子解析実験会	希望者		○							○	○	
11月	第48回県総文自然科学部門発表	科学部	○	○						○	○		
12月	デーザインズ講義	SR1年		○	○					○	○	○	○
12月	高大連携フォーラム in 京都大学	希望者	○	○		○	○		○	○	○	○	○
12月	ひょうごユースecoフォーラム(ボクサー出展)	SR科研究班	○	○									
12月	リサーチフェスタ(甲南大学)	SR科、国探研究班	○	○						○	○		
12月	ボクサーについて知ろう?!	1年		○		○				○	○	○	○
12月	大阪公立大学研修	SR1年		○	○	○				○	○	○	
12月	令和7年度走査型電子顕微鏡校内観察会	希望者		○							○	○	
12月	尼崎市内小学校防災・減災出前授業(3校)	看健2年	○	○		○				○	○	○	○
12,1月	プラント採集(3回)	科学部、希望者		○							○	○	
1月	南港野鳥観察	希望者		○							○	○	
1月	看護医療・健康類型「探究応用」生徒研究発表会	看健2年	○	○		○				○	○	○	○
1月	神戸市外国語大学訪問	国探2年		○				○		○	○	○	○
1月	サイエンスフェア in 兵庫	SR科1,2年	○	○					○	○	○		
1月	尼崎のミライ会議	普通科研究班	○	○		○				○	○	○	○
1月	SSH 小田高リサーチ生徒研究発表会	全学科1,2年全員	○	○	○	○		○		○	○	○	○
2月	尼崎でつながる地域の活動報告会	全学科	○	○						○	○	○	○
2月	共生のひろば	科学部	○	○		○				○	○	○	○
3月	IBM SkillsBuild を活用した高校生向けIT学習教室	SR1年		○					○	○		○	○
3月	SDGsフェア in AMA 2026	看健2年探究班	○	○		○				○	○	○	○
3月	尼崎重可の環境体験学習会	SR科1年希望者		○		○				○	○	○	
3月	日本藻類学会 高校生ボクサー発表	科学部	○	○						○	○		
3月	日本水産学会 春季大会高校生発表	科学部、SR科研究班	○	○						○	○		

(2) 検証評価

P(計画)→D(実施)→C(自己評価)→A(改善)サイクルに位置づけ、多くの立場の教員を委員とするSSH研究推進委員会を中心に評価・検証する。これまでの内部および関係者評価だけでなく、第三者評価も検討する。内部評価は生徒と教職員で、関係者評価は保護者・学校評議員、運営指導委員が実施する。第三者評価として客観的に検証するために、運営指導委員会とは別に外部評価委員会による評価を検討する。アンケート結果については、数値化し、単年度だけでなく、これまでの結果とも比較評価する。

検証評価

(ア) 生徒・教員・保護者による内部評価

〔生徒による評価〕	○ 取組ごとのアンケート → 年度内での生徒の1年間の変容をみる。 ○ 年度末のアンケート → 学年や年度の比較を行い3年間の生徒の変容を見る。
〔教員による評価〕	○ ルーブリックを活用した探究活動の評価 → 指導法の改善につなげる。 ○ 年度末のアンケート → 教員の意識変化をみるとともに年度比較を行う。
〔保護者による評価〕	○ 年度末のアンケート → 指導法の改善につなげる。

(イ) 卒業生調査による評価

○ JSTにより実施されるSSH意識調査（卒業生対象） → 全指定校平均との比較により、本校の成果と課題を分析する。 → できるだけ多々の卒業生の現状を把握し、SSH事業でどんな人材が育成されたか（人材育成の成果）をまとめる。

(ウ) 運営指導委員会及び関係機関等による外部評価

○ 運営指導委員会（年2回）での評価 → SSH事業全体の評価を行うとともに、今後の方向性につなげる。 （できるだけSSHの取組をみてもらう） ○ JSTにより実施されるSSH意識調査 → 全指定校平均との比較により、本校の成果と課題を分析する。 ○ 各取組における関係機関へのアンケート → 各取組の改善につなげる。
--

(エ) 評価の研究者（京都大学教授）による第三者評価

京都大学大学院の楠見教授との共同研究として行っている探究学習スキルと教科学力との関連の研究は、本校のデータを科学的に分析することにより、「探究活動に積極的に取り組むことが教科学力の向上に結びつくことが立証できるか」について、評価の専門家によるSSHの事業評価（第三者評価）とも位置づける。
--

(オ) 評価の観点

下表において、多：多様な視点で見える力、課：課題設定する力、深：深く洞察し解決する力、協：協働で参画する力

	多	課	深	協
	・自然科学への関心 ・意欲・態度・表現力	・研究の検討 ・研究計画	・論理的思考・創造力 ・研究発表	・ディスカッション ・活動企画・運営
課題を自ら見つけ、問題解決に向けて探究活動に取り組む姿勢	○	○	○	
研究結果の分析を行い、考察すること	○	○	○	
実験・観察の過程についての記録ノートやレポート			○	
研究におけるグループでの意見交流・ディスカッション	○			○
研究発表や質疑応答および、研究論文	○	○	○	○
学習内容のプレゼンテーション	○		○	
ルーブリックを基にした評価	○	○	○	
各SSH事業の生徒アンケート	○	○	○	○

(3) 事業全体についての評価

評価の観点	教育課程の効果的な運用、学習意欲を高める授業、各SSH事業の有効性、生徒の主体性、意欲、独創性、教員の変容、学校の活性化、地域の活性化、大学等との連携の有効性
評価の方法	① 内部評価：・生徒、保護者、教員へのアンケート実施（事業ごと及び1月）。 ・生徒による授業評価（7月、12月）。・研究授業等による教員間での相互の授業評価（5月、11月）。 ② 関係者評価：・研究発表会等での参加者アンケート実施（事業ごと）。 ・学校評議員会で意見を求める（7月、3月）。・SSH運営指導委員会で意見を求める（7月、2月）。 ・評価については、統計的な分析も含め運営指導委員の中の教育評価の専門家により実施する（7月、3月）。 ・SSH事業で連携している小中学校や大学、行政、企業、地域等から意見を求める（事業ごと）。 ③ 第三者評価：・SSH運営指導委員会とは別に、事業の効果を客観的に検証することを目的に、外部評価委員会の設置を検討する。

[3] 研究開発の内容

1 研究開発の実施規模

SR科と普通科理系の生徒を中心に、国際探求学科、普通科看護医療・健康類型及び普通科を対象に全校実施する。

2 仮説・現状分析・内容・方法・検証等

A：3期16年の実践の成果の発信・周知（4期目のミッション）

(ア) 仮説内容：3期16年の実践をSSH校以外に発信・周知し、さらに一歩先を見据えた研究に取り組むことにより、SSH4期目に相応しい役割を果たすことができる。

(イ) 現状分析・実施内容・方法・検証：現状分析・取組計画の要約・実施内容・検証は次の通りである。

現状分析：

- ・昨年度、本校の探究活動の内容や実践事例をまとめた「あまおだ版探究マニュアル」を作成し、本校HPに掲載している。
- ・SR科や国際探求学科・普通科の探究活動の内容を活動報告集として冊子にまとめ、SR科の活動報告集を全国のSSH指定校に例年配布している。
- ・県下への探究活動の方法の普及については、京都大学と連携し、夏に1回、県下教員向けに探究活動に関する教員研修会を例年実施している。

・小高連携事業として「高校生による算数・理科の授業」を例年実施している。また、尼崎市内の小学校への防災教育の普及や英語教育のサポートも行った。

計画：

- ・本校の成果を「尼小田版探究活動マニュアル」としてまとめ、発信し普及させる
- ・県下で探究活動を担当する全ての高校の教員を対象とした「総合的な探究の時間研修会」等を企画・実施する。
- ・小高連携授業や中高接続となる取組を引き続き行う。

実施内容・方法：

- ・同マニュアルを更新し、内容を充実させた。
https://docs.google.com/document/d/10MZyZtECSEUJH_boFBthEWaZpPRRmma0_941SRNvIY/edit?tab=t.0#heading=h.26r2b1i0xu6x
- 阪神地区中心に、探究活動の手法を他校へ普及する「尼崎小田高校探究ネットワーク」の構築を図った。
 - ・探究活動や探究学習に関する教員研修会を、県下教員対象に実施した。
 - 8/5 「探究活動で育む資質・能力と学力向上」 (p60参照)
 講師：京都大学国際高等教育院副教育院長・特定教授楠見孝先生
 - 8/29 「探究力を育てるカリキュラムと授業づくり・探究学習と境遇活用スキルの関連 —2年間の縦断調査の結果報告—」 (p60, 61参照)
 講師：京都大学大学院教育学研究科教授西岡加名恵先生、同研究科山崎貴仁先生、梶谷哲史先生
 - ・年間2回の研究授業を県内他校に案内（春：5/28～6/11、秋：10/29～11/11）。
 - ・9/27 「大阪湾・武庫川 地域課題ミニワークショップ」を主催した。<https://amagasakioda.ed.jp/7461/>
 - ・2/2 市内4校や企業が参加する「尼崎でつながる地域の活動報告会」に全学科が参加し、探究活動の内容等を発表。
 - ・3/7 尼崎運河の環境の体験学習会の案内を他校に呼びかけ、参加。
- 小高連携、中高連携
 - ・11/27 SR科2年「理数探究応用」にて、市立清和小学校3、4年生対象の「高校生による算数・理科の授業」を実施。
<https://amagasakioda.ed.jp/7705/>
 - ・7/24 市立長洲小学校学童クラブ児童向けに顕微鏡観察体験を実施。
 - ・7/26 「親子理数教室 in 尼崎小田高 2025」小学生向け実験会を実施。
<https://amagasakioda.ed.jp/wp-content/uploads/2025/07/e325a68c42db4819dc99f988d35acace.pdf>
 - ・5/31, 7/26 オープンハイスクールにて、中学生向け体験授業（実験）を実施。
 5/31：<https://amagasakioda.ed.jp/7040/>、7/26：<https://amagasakioda.ed.jp/7219/>
 - ・12/18, 19, 23 看護医療・健康類型2年生が市立難波の梅小学校6年生、市立浜小学校4年生、市立杭瀬小学校4年生へ、防災出前授業を実施。
 - ・国際探求学科1年生が併せて3回、市立潮小学校を訪問し、小学生の授業で英語の学びをサポート。
 - ・株式会社日立ハイテック様より卓上走査型電子顕微鏡（卓上顕微鏡「Miniscope® TM4000PlusII」）をお借りし、観察像を小、中学生、高校生へ紹介。
 - ・1/31 「SSH小田高リサーチ生徒研究発表会」にて中学生が見学参加。

検証：

○「尼崎小田高校探究ネットワーク」の枠組みで普及を行った。範囲は広がりつつある。他校の参加状況を以下に示す。

内容	参加数	他校数	高校
教員研修会「探究活動で育む資質・能力と学力向上」	9 (教員)	8	県立神戸北高、県立西宮香風高、県立西脇北高、県立神戸高、県立山崎高、県立星陵高、県立神崎工業高、大阪府立豊中高
教員研修会「探究力を育てるカリキュラムと授業づくり・探究学習と境遇活用スキルの関連 —2年間の縦断調査の結果報告—」	9 (教員)	7	県立神崎工業高、県立西宮甲山高、県立西宮香風高、県立青雲高等学、県立東灘高、県立姫路西高、県立浜坂高
春の公開授業	7 (教員)	6	県立明石南高、県立豊岡高、県立川西緑台高、県立播磨南高、県立松陽高、県立西宮香風高
秋の公開授業	6 (教員)	5	県立西宮今津高、県立尼崎北高、県立西宮甲山高、県立明石城西高、県立西宮今津高、県立尼崎稲園高
大阪湾・武庫川 地域課題ミニワークショップ	10 (生徒)	4	県立尼崎高等学校、県立尼崎西高、県立西宮南高、西宮市立西宮東高

・「尼崎小田高校探究ネットワーク」（兵庫県阪神地区の高校）に向けて、尼小田版探究マニュアルの発信。

○小高連携、中高連携

- ・7/26 「親子理数教室 in 尼崎小田高 2025」：小学生向け実験会12名参加。
- ・7/26 オープンハイスクール：中学生向け体験授業79名参加。
- ・電子顕微鏡観察について、小学生や7中学生も含めて、高校生以下の児童・生徒延べ2379名がその観察像を見学。

B：探究活動の質の向上と新学習指導要領における探究科目の実践的モデル化

(ア) 仮説内容：課題研究や探究活動については、探究の質の向上を図ることにより、新学習指導要領の趣旨を生かした探究科目の実践的なモデルとなる。

(イ) 現状分析・実施内容・方法・検証：

現状分析：3年間の学校設定の探究科目「理数探究基礎」、「探究情報」、「理数探究応用」、「理数探究実践」の流れや教育内容が確立している。教科の授業についてもSR科1年生で「理数物理」「理数化学」「理数生物」を設置し、課題研究の基礎となる資質を育成している。1年生実施「理数探究基礎」では、理科4分野の実習や調べ学習、校外学習や特別講義を経験し、また、発表会を実施した。「理数探究応用」では生徒が主体的に決めたテーマでの探究活動を実施している。国際探求学科「国際探究応用」および普通科「探究応用」では、2年生で2単位の課題研究を通年実施し、3年生の「国際探求実践」、「探究実践」では、1学期にそのまとめとして各生徒が論文作成を行っている。リサーチサポートを実施し、課題研究や課題研究に繋がり得る活動をサポートしている。昨年度の取組から、普段の授業においてグループ内での議論を促進するしくみづくりが課題として挙げられた。

計画：課題研究を軸とした3年間を見通した段階的な探究活動〔1年：探究基礎、2年：探究応用、3年：探究実践〕の方法を充実・発展させるため、以下のようなカリキュラムを設置している。
(代替される教科・科目等についてはp32を参照)。

開設する科目		対象		特徴・開設のねらい等
科目名	単位数	学科	学年	
探究情報	2	全学科	1年	・課題設定力の育成やデータサイエンスにも取り組む ・SR科と国際探求学科では情報科と英語科でチームティーチングを行い、教科横断型のより高い情報技術も学習する
理数探究基礎	1	SR科	1年	・「探究情報」と併せて、課題設定力や自然科学の視点を育成する
理数探究応用	2		2年	・課題研究を充実・発展・深化させるカリキュラム開発を行い、「理数探究」のモデルの確立とさらにそこから発展させた新たな次の段階の科目開発を目指す ・「理数探究実践」では、2年生の課題研究の内容を英語で考える、自然科学の問題を英語でディスカッションをする、自然科学と社会科学、科学倫理等について、国際的な視野に立って、英語での講義や実習、英語によるディベートや留学生とのディスカッション等を実施する
理数探究実践	1		3年	
国際探求基礎	1	国際探求学科	1年	・2年生の「国際探求応用」と結びつけ、課題研究をより充実させる
国際探求応用	1		2年	・課題研究の取組として「ディベートディスカッションII」2単位と連携した授業を行い、深まるよう工夫する
国際探求実践	1		3年	・論文作成を通して、「国際探求応用」で行った探究活動への理解を深める ・社会的な課題への理解を深め、自身の考えを英語で表現する
探究応用	2	普通科	2年	・2年生の課題研究を2単位で行い、課題研究を充実させる(令和2年度より) ・文系、理系も含めた教科横断型の学際的な探究活動を行い、1年生からの段階的指導を充実させ、数値評価も確立させる
探究実践	1		3年	・普通科理系については「理数探究基礎」や「理数探究」の要素を含む

※ 特に1年生においては、課題設定力を全教科の平常授業でも連携して育成する。
※ 課題研究の探究科目と連携して、各学科の課題研究とつながる基礎知識を養う特徴ある学校設定科目(21世紀の国際理解、看護医療基礎など)も引き続き開講し、より深く行えるよう工夫する。

実施内容・方法：

- 探究科目：各科目を予定通り実施した。以下には特筆すべき内容を記述。
「探究情報」：・特にSR科と国際探求学科では、授業内で行うプレゼンテーションの内容に、統計データの活用を取り入れた(p39参照)。
・3/4 SR科1年生へNPO法人企業教育研究会およびIBM社より講師をお招きし、「IBM SkillsBuildを活用した高校生向けIT学習教室」を実施した。
- 「理数探究基礎」：・7/11 「地域の環境技術研修」を実施し、地域への意識の向上を図った。
・7/14 SR交流会にて、1年生から2,3年生へ、第2クールの実験内容の発表を行った。
<https://amagasakioda.ed.jp/7170/>
・12/19 データサイエンス講義「平均の比較」を行った。
- 「理数探究応用」：・4/24 令和6年度SSH生徒研究発表会口頭発表動画を用いて探究活動の進め方の講義を実施。
・5/30 神戸女学院大学研修(中間テーマ発表会)では、3名の大学の先生による発表聴講、助言。
<https://amagasakioda.ed.jp/7069/>
- 「理数探究応用」「国際探求応用」「探究応用」：1/31 小田高リサーチ生研究発表会にて、各学科代表班が全校生徒に向けて発表。
- 「理数探究実践」：クラス内での英語研究発表会を再開。
- 普通科1年生にて「探究基礎講座」の充実を図った(p43参照)。
- リサーチサポート：実践的な4つの力の育成に向けて、探究科目と併せて授業外からのサポートを引き続き実施した。

検証：

○探究科目

・「理数探究基礎」、「理数探究応用」、「理数探究実践」の分析結果はp57、授業内容はp36、45、52を参照。

○リサーチサポートについてはp35を参照。

・昨年度の課題として挙げた、普段の授業においてグループ内での議論を促進するしくみづくりについて、「探究的な授業」をテーマに研究授業を実施した（p26を参照）。

C：各教科での探究活動を取り入れた授業改善とカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた教科横断型の取組

(ア) 仮説内容：探究活動の積極的な取組が、各教科での「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業改善にさらにつな
がるとともに、カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた教科横断型の取組に発展する。

(イ) 現状分析・実施内容・方法・検証：

現状分析：本校では多くの教員が探究活動の時間を担当し、その経験が各教科の「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業の実施に結びついている。また、年2回、約2週間の公開授業週間を設けている。教科横断型の学びについては、SR科3年生の「理数探究実践」における、理科と英語科（ALT含む）教員による連携授業や1年生のSR科及び国際探求学科の「探究情報」における、情報科と英語科（ALT含む）の連携授業等を実施している。単元毎の目標を明示したシラバスを作成・共有することで、授業改善や科目間の連携を図っている。スクールミッションでは「自ら学ぶ力」や「将来にわたって学び続ける力」の育成を掲げ、また、コンピテンシーベースの学力向上の方法を例示することで、教科横断型の授業改善を図っている。

計画：STEAM教育を念頭に置いた授業改善や教科横断型の学びのさらなる推進のために次の取組を進める。

授業改善	各教科の授業の探究活動の例を「教科の授業における探究活動事例集」としてまとめ、発信を目指す
	学力向上委員会を中心に、「主体的・対話的で深い学び」の実現等に向けて、全教員の授業改善を推進
	従来のシラバスを改訂し、各授業で生徒に付けさせたい学力を明示
	教科の枠を越えて、小グループでの日常的な授業研究を実施
教科横断型の学び推進	文章、情報を読み解き対話する力や科学的思考力などを養う、STEAM教育を念頭に置いた授業改善
	新学習指導要領の3観点を意識した考査問題の工夫をする
	・統計やデータの取り扱いなど、データサイエンスを教科学習や探究活動に生かす工夫をする ・環境や防災・減災等の学際的課題を取り入れた教科学習を行う

実施内容・方法：

○本校HPで「探究活動を意識した教科実践事例」を公開。

https://docs.google.com/document/d/10MZyZtECSEUJH_boFBthEWaZpPReRmma0_941SRNvIY/edit?tab=t.zzzdxmnpqsvj#heading=h.9281kmdlycl0

○年間2回の公開授業週間において、「探究的な授業」をテーマに研究授業を実施し、県内他校教員に見学案内を発信。

また、春の公開授業週間の授業実践をもとに、8/29 教員研修会「探究力を育てるカリキュラムと授業づくり」を実施。

テーマ：「探究的な授業」

科目	授業日、クラス	授業の内容	テーマとの関連
文学国語	①5/28 1限 2年選択者 ②6/11 1限 2年選択者	①生徒がショートストーリーの創作課題または評論の枠組み作文課題のどちらかを選択して書く ②生徒が作文課題に取り組む	①・②ともに整理分析・まとめ表現
理数数学 I	6/3 2限 1年2組	順列（数学A）	教科横断的事例を扱い、数学的な問題解決を考える
生物	5/28 2限 3年6,7組	脳	問い・仮説の設定、検証計画の立案
倫理	6/5 5限 3年1組選択者	ギリシャの思想	まとめ表現
保健	5/28 2限 2年4組	応急手当と心肺蘇生法	課題の設定・情報の収集
論理表現	10/27 4限 2年2組	How does overusing energy affect us?	英語で環境問題を考える。
論理国語	11/6 3限 2年4組	ロボットは心を持つのか そもそも心とは何か	主張の異なる評論の読み比べをしたうえで自分の意見を整理して共有する。
数学 I	11/6 5限 1年4組	図形と計量 「三角比」 三角比の応用	測量を実際に行うことにより三角比の役割や有用性を実感し、三角比の本質的な理解につなげる。現実社会とのつながりを意識し、数学を用いた課題解決を行う。

理数生物	11/6 5限 2年2組 生物選択者	第4章 遺伝情報の発現と発生	パフォーマンス課題
保健	11/6 5限 2年1組	結婚生活と健康	出産をテーマに社会のニュースをもとに探究する。
地理総合	11/7 3限 2年2組	EU統合と人々の生活、ヨーロッパの国々が、国境を越えた結びつきを強めるのはなぜか。	EUの仕組みや、EUを離脱したイギリスの経済状況も簡単に確認し、EUの意義について探究する。
歴史総合	11/7 3限 1年6組	帝国主義の発展	帝国主義は、世界にどのような影響を与えたのか、探究する。

○シラバスでは、評価の3観点（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）に合わせた評価方法を引き続き、明示している。

○全学科2年生での探究発表会を行い、各学科代表班が全校生徒へ口頭発表（STEAM教育につながる取組）。

○「理数探究基礎」にて地域企業を訪問し、工学分野への意識の向上を図った。

7/11 尼崎市のクリーンセンター第2工場および資源リサイクルセンターを見学し、環境・エネルギープラント事業者の株式会社タクマ様を訪問。 <https://amagasakioda.ed.jp/7170/>

10/7 SR科1年生が市内の企業4社（王子イメージングメディア株式会社様、株式会社 住友ベークライト様、株式会社 ダイセル様、三菱電機株式会社様）の工場を見学。

・12/19「理数探究基礎」 データサイエンス講義（2群の比較）を実施（再掲）。

・3/4 SR1年生へ「IBM Skills Buildを活用した高校生向けIT学習教室」実施（再掲）。

・教科授業においても、尼崎運河の話題を取り入れるなど、地域環境に目を向けさせる工夫をした。

検証

○探究活動を意識した教科実践事例：7つの授業実践事例をWeb掲載（R8/2/18時点）。

○公開授業

・今年度初めて「探究的な授業」をテーマに研究授業を行ったが、各教科で工夫された授業がみられた。実践事例は上記、本校HP「探究科目の事例と探究活動を意識した教科実践事例」を参照。

・8/29 教員研修会「探究力を育てるカリキュラムと授業づくり」はp61を参照。

・教員自己評価アンケート結果はp59を参照。授業改善の教員意識の向上がみられた。

・地域の工場見学はp40を参照。

本事業はR4年より実施している。4企業への工場見学による工学への意識向上に向けた取組が定着しつつある。

年度	形態	企業
R4	説明会	株式会社特発三協製作所、日鉄鋼板株式会社 西日本製鉄所、株式会社ニブロン、ヤンマーパワーテクノロジー株式会社
R5	工場 見学	ヤンマーパワーテクノロジー株式会社 特機事業部尼崎工場、日本製鉄株式会社 関西製鉄所尼崎地区
R6		大阪ソーダ株式会社 尼崎工場、音羽電機工業株式会社、高田香料株式会社、日鉄鋼板株式会社 西日本製鉄所
R7		王子イメージングメディア株式会社、株式会社住友ベークライト、株式会社ダイセル、三菱電機株式会社

・探究活動と教科学習の関連について、2年生の「探究応用」のアンケートおよび分析はp57図2Cを参照。

D：行政機関等と連携した環境や防災・減災等に関する探究活動による地域社会への貢献・参画

(ア) 仮説内容：行政機関等と連携した環境問題に関する課題研究や防災・減災等に関する探究活動の取組が、社会や地域への貢献や参画、地域の課題解決、持続可能な社会の構築に向けたSDGsへの取組等につながる。

(イ) 現状分析・実施内容・方法・検証：

現状分析：SR科の課題研究においては、大学との連携を継続実施している。国際探求学科や普通科では、地域の課題に関わる探究活動に取り組んでおり、各学科の特色に応じて特に尼崎市との連携している。小学生への防災出前授業等、地域への普及活動も行われている。

計画：生徒の主体的な取組を保証する中で、行政機関等と連携して地域の課題解決や社会への貢献、持続可能社会構築への実践につながる取組を推進し、実践的な4つの力を育成する。

行政機関等との連携を深め、環境や防災・減災等の社会や地域の課題を知り、そのことを「自分事」と捉える。

行政機関等の方と議論したり、連携して探究活動を行う中で、社会や地域の課題解決方法を考える。

様々な機会に積極的に参加し、課題解決に向けた方策の提言や、地域に貢献・参画できる行動、取組を行う。

実施内容・方法：

○本年度連携を行った、または協力頂いた外部機関の例

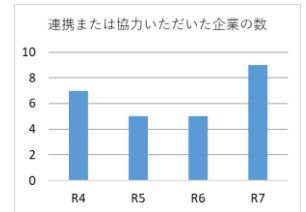
- <大学>京都大、兵庫県立大、大阪公立大、徳島大、神戸女学院大学、三重大学
 <公立施設>国立室戸青少年自然の家、兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県立人と防災未来センター
 <行政機関>兵庫県環境部、兵庫県阪神南県民センター、兵庫県水産技術センター、尼崎市
 <その他>須磨里海の会、すまうら水産有限責任事業組合、兵庫県漁業協同組合連合会、あまがさき環境オープンカレッジ、武庫川ECO-LABO、NPO法人企業教育研究会、株式会社タクマ、株式会社日立ハイテク、株式会社尼漁開発、株式会社エアグラウンド、環境システム株式会社、尼崎信用金庫、公益財団法人国際エメックスセンター
- 主催・共催した地域との取組事業の例
- ・本校重点枠の事業
 (高校生サミット第1～3回地域課題ワークショップ、武庫川渡船 地域課題ワークショップ、地域課題解決に取り組む高校生サミット、高校生サミット高大連携フォーラムin京都大学)
 - ・あまおだ減災の日 詳細：<https://amagasakioda.ed.jp/wp-content/uploads/2026/01/2025110902.pdf>
 - ・「大阪湾・武庫川 地域課題ミニワークショップ」(再掲)
- 発表やディスカッションによって環境や防災、地域課題への知識を深める外部事業の例
 環境学習フェア(尼崎臨海来んかい!体験会)、ひょうご里山・里海国際フォーラム、エコあまフェスタ
- SR科1年生の希望生徒および普通科2年課題研究班を対象に、兵庫県立大学と連携して人と防災未来センターにて研修会を実施(p40参照)。
- 地域の防災意識の向上や啓発を図った。
- ・12/18, 19, 23 看護医療・健康類型2年生が市立難波の梅小6年生、市立浜小4年生、市立杭瀬小4年生へ、防災出前授業(再掲)。
 - ・11/9「あまおだ減災の日」を実施。1年生全員が防災・減災に関する発表見学またはワークショップの体験等。
- 尼崎市との包括連携協定を継続。探究活動班や部活動主体の「あまおだ地域応援隊」等が実施。
- ・12/22 1年生全員を対象に「ボランティアについて知ろう?!」を実施。地域課題を共有。
- 環境分野の取組「地域の環境技術研修」(p37参照)、防災分野の取組「人と防災未来センター研修」、「地学(地層・天文・防災等)研修(室戸)」(p42参照)。
- 台湾海外研修では、環境、防災に関する研修を実施(p49参照)。

検証：

IV期の中で連携した、または協力いただいた各機関の例をまとめたものを以下に示す。

大学・研究機関	京都大、神戸大、徳島大、岐阜大、三重大、兵庫教育大学、高度情報科学技術研究機構、兵庫県立大、大阪公立大(大阪府立大)、神戸女学院大学、関西学院大、近畿大、甲南大、産業技術短期大学
行政機関・公立施設	海上保安庁第五管区、国土交通省近畿地方整備局、気象庁神戸地方気象台、気象庁大阪管区気象台、兵庫県環境部、兵庫県尼崎港管理事務所、兵庫県水産技術センター、兵庫県農政環境部、尼崎市、国立淡路青少年交流の家、国立室戸青少年自然の家、兵庫県立大学西はりま天文台、県立コウノトリの郷公園、県立人と防災未来センター、県立人と自然の博物館、神戸市立須磨浜水旗園
企業・その他	尼崎信用金庫、環境システム株式会社、株式会社日立ハイテク、株式会社タクマ、北淡震災記念公園、株式会社エアグラウンド、株式会社ピリカ、大阪油脂工業株式会社、NPO法人尼崎環境オープンカレッジ、日本モデルロケット協会、武庫川ECO-LABO、NPO法人企業教育研究会、須磨里海の会、神戸市漁業協同組合、兵庫県漁業協同組合連合会、すまうら水産有限責任事業組合、公益財団法人 ひょうご環境創造協会、公益財団法人国際エメックスセンター

- ・IV期の中で、連携または協力いただいた企業の数の変化を右に示す。
 (※ 各年度のSSH研究開発実施報告書の記載より。R3年度については記載なし)。
 本年度は、該当企業の数が大きく増えている。これは、地域の企業とのかかわりが増えたためである。



- 環境、防災に関する探究活動テーマ(抜粋)を以下に示す。

SR科	「イオンゾンデ観測データでみる地震の前兆」、「『ごみじゃない、燃料だ!』～落ち葉を支える未来～」、「尼崎重可と蓬川」に発生する浮遊ごみの発生源
国際探求学科	「なぜ日本は外国の海洋プラスチック政策を取り入れないのか。」、「災害時の多言語対応」
看護医療・健康類型	「防災を自分ごとにするためにー高校生が考える『伝える防災』」、「今の防災を知ろう!ー高校生が考える未来の防災」
普通科	「もし、小田高が避難所になったら・・・」、「食べる防災、考えてみた」

また、2年普通科探究活動として実施された「あまおだ地域応援隊」のテーマを以下に示す。

「グローバルな社会を目指して、マーケティングを生かして、どのように商品を売り上げるか」、「小学生のいばしょ」、「フードドライブ」、「フードドライブにおける社会貢献」、「食べる防災、考えてみた」、「2025こーば未来会議 by nuts」、「2025こーば未来会議 by 大和肥料」、「これからの尼崎はどのような業種が増えていくのか」

- 以上のように、環境、防災、地域貢献活動に関する多様なテーマの探究活動がみられ、本校に根付いていると考えられる。
- ・「あまおだ地域応援隊」の活動に対して「第7回高校生ともしびボランティアアワード(公益財団法人コープともしびボランティア振興財団)」が贈られた。
 - ・台湾海外研修における、環境、防災に関する研修での生徒の学びについてはp51を参照。

E：京都大学大学院との連携による汎用性のある探究活動の評価方法の提示と探究活動が教科の学力向上に結び付くことの科学的な立証

(ア) 仮説内容：京都大学大学院と連携した探究活動の評価方法の実践的な研究により、汎用性ある評価方法を提示するとともに、探究活動が教科活動や学力向上につながることを科学的に立証することにつながる。

(イ) 現状分析・実施内容・方法：

<p>現状分析：3期目から京都大学大学院の助言を受け、課題研究や探究活動の評価方法や、コミュニケーション力やマネジメント力等の評価方法を研究してきた。また、同大学院教育学研究科の西岡加名恵教授を講師とするワークショップ型の教員研修も毎年実施し、教員全体のレベルの向上も図っている。また、同研究科の楠見教授と連携して、探究学習が教科の学力に及ぼす影響についての研究に取り組んでいる。平成29年～令和元年度のデータを同大学院で分析した結果、探究学習スキルと教科の成績には正の相関があることがわかり、日本教育心理学会でも発表されている。</p>	
<p>計画：本年度は探究活動が教科の学力に及ぼす影響についての分析、まとめに当たる。</p>	
<p>評価手法の確立の取組</p>	<p><SR科の課題研究> 開発したルーブリックによる評価の実践や改良による評価手法の確立、「理数探究」での汎用性のある評価のモデルの提示。 <国際探求学科、普通科の探究活動> 普通科の探究活動を増単することから、単位数に応じた探究の質の深まりも考慮に入れた評価方法の確立。 <重点枠> 同じ評価方法での連携校の生徒の評価を続けることによる、信頼性・汎用性ある評価方法の確立と「グローバルに物事を見る力」等の新たな力を評価するルーブリックの開発。</p>
<p>探究学習が教科の学力に及ぼす影響</p>	<p>探究学習と教科の学力について、複数の学年における3年間のデータの学科間での比較等、様々な角度からの科学的分析、研究成果のまとめ（本校のSSH事業の成果を客観的に数値で分析する外部評価の役割も担う）。</p>
<p>成果の発信</p>	<p>評価も含めた探究活動の進め方についての他校も含めた合同教員研修会を実施。</p>
<p>実施内容・方法：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SR科「理数探究応用」課題研究を令和2年度より使用しているルーブリックも用いての評価を継続実施（ルーブリックはp69）。また、年度当初に授業内でルーブリックの評価基準を説明。 ・2、3年生普通科および国際探求学科の「探究応用」、「国際探求応用」、「探究実践」「国際探求実践」について数値評価を継続（ルーブリックはp61）。 ・京都大学大学院教育学研究科E.FORUMのwebサイトQTALの連携機関会員に登録。 https://qtal.educ.kyoto-u.ac.jp/members/ ・重点枠では、コミュニケーション力およびディスカッションのマネジメントについてのルーブリックを用いて年間の取組を評価し、評価方法の開発を引き続き実施。 ・探究活動や探究学習に関する教員研修会を、県下教員対象に実施（再掲）。 8/5「探究活動で育む資質・能力と学力向上」（p60参照） 講師：京都大学国際高等教育院副教育院長・特定教授楠見孝先生 → 学力と探究スキルの関連について、本校と講師の楠見先生との共同研究結果（p14参照）を参加教員へ発信した。 8/29「探究力を育てるカリキュラムと授業づくり・探究学習と境遇活用スキルの関連 —2年間の縦断調査の結果報告—」（p60, 61参照） 講師：京都大学大学院教育学研究科教授西岡加名恵先生、同研究科山崎貴仁先生、梶谷哲史先生 → 「探究力を育てるカリキュラムと授業づくり」では、本校のパフォーマンス課題の事例の紹介とその改善方法を考えた。「探究学習と境遇活用スキルの関連 —2年間の縦断調査の結果報告—」では、本校と講師の梶谷先生との共同研究結果を参加教員へ発信した。 ・上記楠見特定教授との共同研究を継続実施。 	
<p>検証：</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 探究活動の数値評価 <ul style="list-style-type: none"> ・全学科において探究活動の数値評価を、ルーブリックを用いて実施している。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p><主な効果の例> 数値評価のために、評価基準が洗練される/生徒にとって、探究活動への動機づけになる/担当者間の基準のすり合わせを質的・量的の両面から行うことで多面的に評価ができる</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・研修会を通じた探究指導技術の向上や本校の取組の発信は着実に進められている（p12参照）。また、QTALとの連携によってこれらは補強されると考えられる。 ・探究的学習スキルや批判的思考態度の調査結果の概略はp14を参照。 ・重点枠での評価方法開発についてはp91を参照。 	

F：グローバルな視点で地球規模の課題に関心を持ち英語で議論できる力の育成

(ア) 仮説内容：国際性を育む取組のさらなる推進が、グローバルな視点で地球規模の課題に関心を持つとともに、英語で議論でき、国際的に活躍できる人材を育成する。

(イ) 現状分析・実施内容・方法：

現状分析：SR科、国際探求学科1年生「探究情報」における情報科と英語科の連携授業や、SR科3年生「理数探究実践（科学英語）」やSR交流会における課題研究の英語発表等を実施している。国際探求学科及びSR科1年生全員を対象に留学生交流会を実施し、近隣の大学から留学生を招き、質問や意見交換を行っている。R6年度より台湾の国立台南家齊高級中等学校と姉妹校提携している。全学科対象のオーストラリア研修も継続実施されている。トルコ共和国との防災についてのオンライン交流も根付きつつある。

計画：国内で行う国際性を育む取組のモデルを示す。グローバルな視点で物事を見るとともに、地球規模の課題について英語で議論できる力を育成する。

実施内容・方法：

- ・「理数探究実践」における課題研究の英語発表や、「探究情報」における情報科と英語科の連携授業等を引き続き実施。論理的思考力と科学的根拠に基づいて議論できる力を育成した。
- ・SR科3年希望班がScience Conference in Hyogo（主催：兵庫「咲いテク」運営指導委員会）に参加し、英語でのポスターセッションを行い、英語による講演を聴講。
- ・11/18 SR科、国際探求学科1年生を対象に留学生交流会を実施。海外10か国（ミャンマー、バングラデシュ、キプロス、パキスタン、中国、ギニア、東ティモール、ベトナム、ケニア、ラオス）の留学生を招いた（p39参照）。
- ・7月、SR科交流会にて3年生から1、2年生への英語ポスター発表。
- ・今年度、オーストラリア、台湾、トルコ共和国の海外研修について、実施または参加した。

開催日	国	事業種別	内容
9/4	台湾	オンライン	国立台南家齊高級中等学校との研究オンライン発表会
11/15			高校生サミットにて、国立台南家齊高級中等学校とのオンライン発表会
11/26		講義	台湾についての事前勉強会
11/27		オンライン	国立台湾大学生とのオンライン交流会兼SSH台湾海外研修事前研修会
11/28		講義	県立舞子高校による防災に関する英語プレゼンテーションから学ぶ
12/17～12/20		研修旅行	令和7年度 SSH台湾海外研修旅行
5/30	オーストラリア	講義	オーストラリアについての事前勉強会(文化・歴史)
7/4			オーストラリアについての事前勉強会(現地での交流会用意)
7/23			オーストラリアについての事前勉強会(ホームステイに関して)
8/1～8/10		研修旅行	令和7年度 オーストラリア研修
9/23～9/30	トルコ共和国	研修旅行	令和7年度 トルコ共和国への高校生派遣事業
10/29		オンライン	Haci Bektas Veli Nevsehir University と交流
11/11		来校	チャンクルTOBB科学高校生徒来校、交流
11/21		オンライン	11月11日(火)に来校されたトルコ共和国の高校生(チャンクルTOBB科学高校)の皆さんと、オンラインでの交流
2/2			Haci Bektas Veli Nevsehir University と交流

検証：

- 「理数探究実践」についてはp52, 57、留学生交流会アンケートについては、p39を参照。
- 海外研修旅行について、以下にまとめて示す。

海外研修	人数	成果
令和7年度 SSH台湾海外研修旅行	11	台湾の環境・防災や最先端研究を学び、姉妹校との共同研究を通して課題研究を深化させ、課題解決力を高めた。
令和7年度 オーストラリア研修	33	異文化交流や英語でのコミュニケーションを通して、多文化理解を深め、自己理解と主体性を育成した。
令和7年度 トルコ共和国への高校生派遣事業	4	防災学習や異文化理解を深めるとともに、兵庫県とトルコ共和国との友好関係をさらに推進した。

昨年度はトルコ共和国との交流：オンライン交流1回、国立台南家齊高級中等学校との交流：来校生との交流1回であった。今年度より、特にこの2か国との国際交流が本格化しており、国際性の育成が進んだ。

G：オンライン等のICTの活用による特別講義や実習、広域連携等の工夫した取組と対面との効果の比較検証

(ア) 仮説内容：オンライン等のICTを活用した特別講義や実習、広域連携等の工夫した取組を行い、対面との効果の比較検証を行うことで、新しい探究活動へつなげる。

(イ) 現状分析・実施内容・方法：

現状分析：兵庫県立高等学校ではMicrosoft365（Microsoft社）が導入されており、教育活動の様々な場面で活用されている。また、BYODの1人1台端末所持が行われているため、生徒のICT利用は活発である。本校では、普段の連絡だけでなく、探究活動におけるデータ集約や指導等でも使用されている。

計画：・探究活動でも対面と併せてオンラインを積極的に活用する。
・オンラインの事前学習の充実や実施方法の工夫を考慮しながら積極的に活用し、効果を上げる。

実施内容・方法：

- ・本年度オンラインを用いた主な本校主催・共催行事の例：高校生サミット生徒実行委員会、高校生サミット
- ・9/4,11/15, 11/27 国立台南家齊高級中等学校とオンライン交流。
- ・10/29,11/21,2/2 トルコ共和国の高校生や大学生とオンライン交流。
- ・SR科1年生が大学からのオンライン指導（COCOUS-R（京都大学主催）（今年度12回実施））。
- ・高校生サミット実行委員会では連携校に対し、サミットの趣旨をオンラインで説明。
- ・探究活動において、生徒タブレットPCを積極的に活用。
- ・3月 SR1年生へ「IBM Skills Buildを活用した高校生向けIT学習教室」実施。

検証

- オンライン交流
 - ・国際交流の手段としてのオンライン活用が活発化している（昨年度1回→今年度5回）。
 - ・他校との交流でもオンライン活用がみられた（高校生サミット生徒実行委員会、県立舞子高校との交流）。
→ 対面の方が得られやすい効果として探究心、コミュニケーション力が挙げられる（p15参照）。対面での交流も交えつつ、事前、事後交流の手段としてオンラインは有効だと考えられる。
- ICT活用
 - ・普段の授業や学校生活においてICTの利用は活発である。生成AIの活用スキルについて、育成する必要がある。

3 科学技術人材育成に関する取組内容・実施方法

- ① 科学部など理数系の教育課程外の活動の充実
科学研究部には物理班、化学班、生物班、天文班の4つの班が設置され、SR科だけでなく、国際探求学科や普通科の生徒が各部活で3学年合わせて延べ100名以上が所属している。科学研究部の活動についてはp55を参照。
- ② 理数系コンテスト、数学・理科甲子園参加
現在の「科学の甲子園」全国大会の予選である兵庫県教育委員会が実施している「数学・理科甲子園」に20年間連続で出場している。1年生が会場ボランティアで参加、2年生が選手として参加した。今年度は数学オリンピック予選にSR科2年生が参加した。
- ③ 主な校外での発表会・ポスター展示会や学会での研究成果発表：活動実績についてはp65を参照。
- ④ 理系を志す女子の育成
京都大学理学部の理系女子募集プログラムCOCOUS-RにSR科1年生2名が参加し、定期的な研究相談を行った。SR科では、中間テーマ発表会として神戸女学院大学研修を行った。

4 必要となる教育課程の特例等

① 必要となる教育課程の特例とその適用範囲

学科・コース	入学年度	開設する教科・科目等		代替される教科・科目等		対 象
		教科・科目名	単位数	教科・科目名	単位数	
全学科	R5年～	探究情報	2	情報Ⅰ	2	全学科1年全員
		理数探究応用	2	理数探究／総合的な探究の時間	2/2	学科2年全員
普通科		探究応用	2	総合的な探究の時間	3	学科2年全員
		探究実践	1			学科3年全員
国際探求学科		探究応用	1	総合的な探究の時間	2	学科2年全員
		探究実践	1			学科3年全員
		国際探求基礎	1	総合的な探究の時間	3	学科1年全員
		国際探求応用	1			学科2年全員
	国際探求実践	1	学科3年全員			

「情報Ⅰ」の内容に加え、課題設定、データサイエンスも扱う「探究情報」を全学科の1年で開講し、課題研究を行う上での基礎力の育成を充実させる。また、普通科、国際探求学科では、SR科の課題研究の手法を生かした「探究応用」「探究実践」を開講する。SR科は旧課程の「探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を発展させ、1年に「理数探究基礎」、2年では「理数探究」の段階的な発展を目指すため、「理数探究応用」を開講し、さらに3年でその発展として「理数探究実践」を開講する（「理数探究実践」は「総合的な探究の時間」または「理数探究」の代替ではなく、学校設定教科「サイエンスリサーチ」として開講）。国際探求学科は、「国際探求基礎」「国際探求応用」「国際探求実践」を、課題研究とその評価を充実させる新探究科目として開講する。

② 教育課程の特例に該当しない教育課程の変更 特になし

事業項目一覧

下表において、国探：国際探求学科、看健：看護医療・健康類型、科学部：科学研究部

	時期	事業名	対象者
探究基礎	通年	探究情報	全学科1年
	通年	理数探究基礎	SR1年
	4,9月	甲子園浜生物調査	希望者
	5月	数学特別講義	SR1年
	7月	地域の環境技術研修	SR1年
	7月	瀬戸臨海実験所での臨海実習	希望者
	7月	人と防災未来センター研修	SR1年、看健、普通科研究班
	7,8月	五国※ 「プラネタリウム解説体験～星空の感動をつたえよう～」	科学部
	8月	「六甲アイランド SSH 特別講義」六アイ から 夜空を眺めよう 天体観望会 2025	科学部
	8月	地学（地層・天文・防災等）研修（室戸）	希望者
	8月	五国※ DNA 鑑定による鳥類性判別と身近な野鳥観察入門講座	科学部
	9月	鳥類識別講座入門	SR1年
	9月	五国※ 「DNA 情報を探究活動に利用する」	SR科希望者
	9月	兵庫県立人と自然の博物館研修	SR1年
	9-3月	潮小学校訪問プログラム（3回）	国探1年
	9-2月	令和7年度トルコ共和国との交流事業	代表者、希望者
	10月	地域の工場見学	SR1年
	11月	あまおだ減災の日	1年、2年希望者
	11月	アルコール分解酵素遺伝子解析実験会	希望者
	12月	データサイエンス講義	SR1年
	12月	ボランティアについて知ろう？！	1年
	12月	大阪公立大学研修	SR1年
	12月	令和7年度走査型電子顕微鏡校内観察会	希望者
	1月	南港野鳥観察	希望者
	3月	IBM SkillsBuild を活用した高校生向け IT 学習教室	SR1年
	3月	尼崎運河の環境体験学習会	SR科1年希望者
探究応用	通年	理数探究応用	SR2年
	通年	探究応用（総合的な探究の時間）、国際探求応用	国探、普通科2年
	通年	魚類、プランクトン調査・採集	科学部、希望者
	4月～	尼崎運河オープンチャンネルデイ（定期参加）	SR科研究班
	5月	神戸女学院大学研修	SR2年
	7月	高校生サミット連携校生徒実行委員会	希望者
	7,9,10月	高校生サミット地域課題ワークショップ（全3回）	希望者
	7月	Q-1 U18 審査委員（万博）	SR2年希望者
	7月	親子理数教室 in 尼崎小田高 2025	SR科希望者
	7月	大阪湾水質一斉調査	SR科希望者
	7月	課題研究指導相談（兵庫県立大学平井先生）	SR科研究班
	8,10,1月	高校生海洋環境保全研究発表会（研究サポート、指導会、研究発表会）	SR科研究班
	8,2月	COCOUS-R 中間報告会・発表会	SR1年希望者
	9月	大阪湾・武庫川 地域課題ミニワークショップ	SR1年希望者
	9-1月	課題研究活動（環境システム（株））訪問(4回)	SR科研究班
	10月	数学理科甲子園	SR1,2年希望者

	時期	事業名	対象者
探究応用	11月	数学オリンピック予選	SR科希望者
	11月	六甲アイランド高校との合同中間発表会	SR2年
	11月	小高連携事業 高校生による算数・理科の授業	SR2年
	12月	尼崎市内小学校防災・減災出前授業(3校)	看健2年
	12,1月	プランクトン採集(3回)	科学部、希望者
	1月	看護医療・健康類型「探究応用」生徒研究発表会	看健2年
	1月	SSH小田高リサーチ生徒研究発表会	全学科1,2年全員
	1月	神戸市外国語大学訪問	国探2年
	1月	尼崎のミライ会議	普通科研究班
探究実践	通年	理数探究実践	SR3年
	通年	探究実践(総合的な探究の時間)	普通科3年
	6月	日本食品化学学会高校生発表	SR科研究班
	7月	Science Conference in Hyogo	SR科研究班
	7月	SR交流会	SR科全員
	7月	サイエンス・ギャラリー(奈良青翔高校)	SR科研究班
	7月	尼崎臨海 来んかい! 体験会～環境学習フェア2025～	SR科研究班
	8月	猪名川水環境交流発表会(いながわ体験フェスタ)	科学部
	8月	SSH生徒研究発表会	SR1,2年,3年代表者
	8月	伊丹市生物多様性交流フェスティバル	科学部
	8月	マスフェスタ	SR科研究班
	8月	坊っちゃん科学賞 研究論文コンテスト	SR科研究班、科学部
	9月	日本動物学会 高校生ポスター発表	科学部
	9月	ひょうご里山・里海国際フォーラム(兵庫県主催)の高校生ポスターセッション	SR科、普通科研究班
	9月	日本学生科学賞 兵庫県コンクール	SR科研究班、科学部
	9月	青少年のための科学の祭典2025 神戸会場大会	科学部
	9-12月	SSH台湾海外研修(事前研修、研修旅行)	希望者
	10月	次世代防災ジュニアリーダーによる「震災をつなぐ・伝える」フォーラム	看健2年代表者
	11月	令和7年度高大連携課題研究合同発表会 at 京都大学	科学部
	11月	五国※ 「高校生のための減災復興学フォーラム」	看健2年希望者
	11月	エコあまフェスタ	SR科研究班
	11月	地域課題解決に取り組む高校生サミット	希望者
	11月	高校生・私の科学研究発表会	科学部
	11月	第48回県総文自然科学部門発表	科学部
	12月	高大連携フォーラム in 京都大学	希望者
	12月	ひょうごユース eco フォーラム(ポスター出展)	SR科研究班
	12月	リサーチフェスタ(甲南大学)	SR科、国探研究班
	1月	サイエンスフェア in 兵庫	SR科1,2年
	2月	尼崎でつながる地域の活動報告会	全学科2年より5班
	2月	共生のひろば	科学部
	3月	SDGsフェア in AMA 2026	看健2年探究班
	3月	尼崎運河の環境体験学習会	SR科1年希望者
	3月	日本藻類学会 高校生ポスター発表	科学部
	3月	日本水産学会 春季大会高校生発表	科学部、SR科研究班

※ 五国SSH連携プログラム

リサーチサポート

1. 概要

課題研究を通じた実践的な4つの力の育成に向けて、探究科目と併せて授業外からもサポートする。普通科理系をはじめ対象を広くし、課題研究の各段階に応じたサポートを設置することで、学科や学年の垣根を越えて希望生徒が学際的な問題について学習し、ディスカッションを行う。段階に応じて、基礎から高度なレベルまで用意し、裾野を広げることでトップ人材育成までサポートする。

事業	リサーチオープンカフェ	リサーチセミナー	リサーチアドバンスセミナー
主な対象	1年	2年	3年
主にサポートする力	多様な視点で見る力 課題設定する力	深く洞察し解決する力	協働で参画する力
理念	<ul style="list-style-type: none"> 自然科学や学際的な地域課題を発見する等、大学や研究機関、地元企業、地域、卒業生等から講師を招き、基礎講義・実習やテーマを基にしたディスカッションを行う。 特に、地元尼崎の特別な技術をもつ企業を通して、科学に興味関心を持ち、技術から社会を考える上で必要な視野を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学や研究機関、企業等による課題研究に関する専門的知識、背景的知識の講義・実習、それに関するディスカッションを行う。 課題研究の進捗状況に合わせた専門家による課題研究質問会も行い、課題研究の質（レベル）の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題研究をより深く発展させ、自然科学や社会との関係を高度な知識を身につけ広い視野で考え、課題研究から学んだことが将来高度な研究者や実務者としてシェアリーダーとして活躍していく土台となるようにサポートする。 大学や研究機関、企業等による先端技術を学び、高度な講義や実習、それに関するディスカッションを行い、より高いリーダー素質を養う。 英語での講義やディスカッションにも取り組む。

2. 該当する仮説

探究活動の質の向上と新学習指導要領における探究科目の実践的モデル化（仮説B）

仮説内容：課題研究や探究活動については、探究の質の向上を図ることにより、新学習指導要領の趣旨を生かした探究科目の実践的なモデルとなる。

3. 経緯と状況

リサーチオープンカフェ		リサーチセミナー		リサーチアドバンスセミナー	
事業	参加	事業	参加	事業	参加
・南港野鳥観察	3名	・魚類調査・採集 ※2	55名	・R7 春季水産学会発表指導(R7.3月)	2名
・人と防災未来センター研修	33名	・プランクトン調査・採集 ※3	13名	・課題研究英語発表指導	5名
・地学（地層・天文・防災等）研修（室戸）	33名	・課題研究（環境班）研究室訪問	2名	・エメックス指導会発表指導	1名
・瀬戸臨海実験所での臨海実習	23名	・課題研究（環境班）蓬川調査 ※1	7名	・SSH 生徒研究発表会事前指導	3名
・尼崎運河の取組 ※1	14名			・マスフェスタ事前指導	3名
・電子顕微鏡観察会	5名				
・アルコール分解酵素遺伝子解析実験会	5名				
計	116名	計	77名	計	14名

※1 各回参加延べ人数 ※2 計11回（男里川,夙川,千種川（内1回3/17時点で実施予定）,東川,瀬沼湖,武庫川,藻川）の延べ人数
 ※3 計4回（尼崎運河、須磨、昆陽池（3/17時点で実施予定））の延べ人数

4. 事業の効果とその評価

本年度を通して合計16件実施し、207名が参加した。今年度新たに南港野鳥観察やアルコール分解酵素遺伝子解析実験会が行われた。また、昨年度まで国立淡路青少年交流の家で行われていた地学研修を国立室戸青少年自然の家で実施した。IV期を通して、各年度の必要に応じて、柔軟にリサーチサポートを実施することができた。

人と防災未来センター研修、瀬戸臨海実験所での臨海実習についてはp40、41を参照。

事業項目各論

1年 理数探究基礎（自然探究の方法）

1. 概要

課題研究を中心とした段階的な探究学習の基礎として、1年次に「理数探究基礎（自然探究の方法）」が設置されている。探究サイクル（実験や調べ学習→発表）を基にした探究スキルの育成を図る。この授業では、「探究情報」と連携して、2年での課題研究の基礎としての実験・調べ学習を中心とした理科4分野（物理、化学、生物、地学）、数学分野、グローバル視野、探究スキルの育成を実施した。各分野とも、基本的な実験操作・発想方法を重視し、高校での自然科学探究の導入となり、さらに2年次における「理数探究応用（自然科学研究）」での課題研究へつなげるようにした。

2. 仮説

- ① 理科(物理・化学・生物・地学)、数学の基礎から発展的な考え方の実習、またグローバル視点を育成する取組を通して、2年次の「自然科学研究」につながる科学的リテラシーを養成することができる。
- ② 探究サイクルを基にした取組を行うことで、探究スキルを身につけることができる。
- ③ 自然科学への興味・関心を高めることで、自然現象に対して自発的にアプローチする姿勢が育成される。

3. 経緯と状況

- ① 対象 第1学年SR科40名
- ② 教育課程上の位置づけ 理数「理数探究基礎」1単位 火曜7時間目
- ③ 授業形態 年間の5クールと特別講座からなる。クラスを4班に分けた形と全体授業形式の両方で実施。
 - ・第1～4クール：理科4分野のローテーションとプレゼンテーションを組み込んで実施した。
 - ・第2、4クルールの後に、各実験についての発表会を実施した。
 - ・第5クール：「理数探究応用」に向けてのテーマ研究やデータサイエンス講義を実施した。
 - ・特別研修：数学、環境技術、生物学、グローバル視野育成、ものづくりの各分野について実施した。

4. 事業の内容

- a. 理科分野 クラスを4班に分けてローテーションして実施した。
 - 物理：データをまとめる上でのグラフの正しい書き方やレポートの書き方を習得させた。
 - 化学：共通のテーマで実験を行い、光についての現象を考察し、理解を深めた。
 - 生物：ミニ課題研究を企画させることから、研究デザインを学習させた。
 - 地学：地学の基礎知識を学習し、また、自主的な調べ学習を通して地球科学を深めた。
- b. 数学分野 数学特別講義および大学研修等を活用して集中的に実施した。
- c. 地球科学 兵庫県立人と自然の博物館研修で博物館の役割を学び、博物館の展示による学習を実施した。
- d. フィールド実習 兵庫県立人と自然の博物館研修で昆虫採集実習を実施した。
- e. グローバル視野育成 11月留学生交流会をSR科・国際探求学科の合同研修で実施した。
- f. ものづくり視点育成 地域の環境技術研修では、市内のごみ処理施設および、その設備のメーカーを訪問し、ものづくりについての理解を深めた。
地域の工場を見学し、科学の応用からものづくりへつなげる視点を学んだ。
- g. 研究入門 5クール目に、「理数探究応用」へ向けて、テーマ設定等、課題研究へ向けての説明を実施した。

5. 事業の効果とその評価

【多様な視点で見る力】研修・実習についての意図や背景を幅広く理解できる。前：2.5 → 後：3.0

【課題設定する力】実験・実習について自分なりにさらに深く考え、仮説や検証方法を考えられ
前：2.5 → 後：2.8

【深く洞察し、解決する力】研修・実習について、内容を理解している。前：2.5 → 後：2.9

【協働で参画する力】研修・実習について、ディスカッションをしたり、目的を達成するためのチームでの自分の役割を見つけ果たしたりすることができる。前：2.6 → 後：2.9

地域の環境技術研修

1. 概要

SR科1年生の、「理数探究基礎」の一環で、地域のごみ処理とごみ処理にかかわる科学技術についての学習する地域の環境技術研修を実施した。本研修を通して、地域の環境に目を向け、環境負荷低減のための科学技術が身の回りで使われていること、メーカーでの仕事の流れを学ぶことで、自然科学を研究する意義への理解を深め、将来、科学技術人材として働くキャリアイメージを養った。

2. 仮説

- ① 環境問題を考える際に判断の元となる知識を、体験を通じて身につけることができる。
- ② 製造業にかかわる仕事についての理解を通して、科学技術人材として働くキャリアイメージが養われる。

3. 経緯と状況 4～6月 計画 7月 実施 7月 評価

4. 事業の内容

実施日時 令和7年7月11日(金)
 実施場所 尼崎市立クリーンセンター第2工場、尼崎市立資源リサイクルセンター、株式会社タクマ
 参加人数 SR科1年 39名
 内 容 クリーンセンターおよび資源リサイクルセンターの見学、株式会社タクマ様にてごみ処理技術についての講義および製造業にかかわる仕事についてのワークショップ
 指 導 クリーンセンター第2工場：吉井 崇晃 様
 リサイクルセンター：屋田 純喜 様、四本 大輔 様
 株式会社タクマ：技術企画部 技術企画課 印藤 信哉 様



5. 事業の効果とその評価

以下、4件法によるアンケートの結果

【深く洞察し、解決する力】研修内容について、理解している 前2.6→後3.3

【多様な視点で見る力】内容について説明したり、図や表を活用して分かりやすくレポートをまとめられる。
 前2.6→後3.1

【課題設定する力】研修内容について問いを見出すことができる。前2.8→後3.2

兵庫県立人と自然の博物館研修

1. 概要

博物館の研究員の方々から専門分野の講義や実習を受け、博物館を見学し、研究について質問をする。

2. 仮説

専門的な講義や実習、博物館見学、研究員の方との質疑応答によって視野が広がる。

3. 経緯と状況 4～6月 計画 9月 実施 10月 評価

4. 事業の内容

実施日時：令和7年9月30日(火)
 実施場所：兵庫県立人と自然の博物館
 参加人数：SR科1年 40名
 内 容 (1) 講義「鳥類の求愛コミュニケーション研究：飼育個体から野生個体まで」
 (2) 講義・実習「野外での昆虫調査方法」
 (3) 講義「博物学と人と自然の博物館について」
 指 導 兵庫県立人と自然の博物館研究員 太田 菜央先生、同館研究員 坂本 貴海先生
 同館特任研究員 竹中 敏浩先生



5. 事業の効果とその評価

以下、4件法によるアンケートの結果

【深く洞察し、解決する力】内容について自分なりに考え、レポートにまとめられる。前2.4→後2.9

【多様な視点で見る力】内容について説明したり、図や表を活用して分かりやすくレポートをまとめられる。
 前2.6→後3.0

【課題設定する力】今回の内容について問いを見出すことができる 前2.6→後2.9

数学特別講義

1. 概要

高校での数学の授業では触れられない内容の数学特別講義を受講する。

2. 仮説

高校での数学の授業の中では触れられない内容の講義を受けることで、数学への興味関心が更に高められ、学習意欲が向上する。

3. 経緯と状況

4月 計画・打ち合わせ 5月 実施

4. 事業の内容

実施日時 令和7年5月23日(金)
 実施場所 兵庫県立尼崎小田高等学校(尼崎市長洲中通2丁目17-46)
 参加人数 SR科1年40名
 内容 数学特別講義「折り紙から生まれる新しい数学」
 指導 大阪公立大学 会沢 成彦 教授

5. 事業の効果とその評価

数学特別講義後のアンケートで「非常にそうである」「そうである」と答えた生徒は次のとおりである。「今回の内容に興味関心が高まった」80%、「面白かった」82.5%、「自分の知識を高めるのに役立った」82.5%。学習意欲向上に効果的な事業であったと考える。



大阪公立大学研修

1. 概要

大阪公立大学にて、大学施設や研究室への訪問や講義、大学生や大学院生と交流を行う。

2. 仮説

大学施設や研究室を訪問見学し、大学の教員から研究の講義を受けることで、研究への意欲、関心が高まり、進路についての視野が広がる。大学での実際の研究を知り、課題研究のテーマ設定にいかす。

3. 経緯と状況

11月 打合せ 12月 実施 1月 評価

4. 事業の内容

実施日時 令和7年12月23日(火)
 実施場所 大阪公立大学杉本キャンパス(大阪市住吉区杉本3-3-138)
 内容 大阪公立大学研修
 理学部研究室への訪問・講義
 人工光合成研究センター研修
 大学見学、大学生や大学院生との交流
 指導 大阪公立大学 会沢 成彦 教授

5. 事業の効果とその評価

大阪公立大学研修後のアンケートで「非常にそうである」「そうである」と答えた生徒は次のとおりである。「面白かった」85%、「今回の内容に関心が高まった」75%、「自分の視野を広げたり将来を考えたりするのに役立った」85%、「自然科学への興味関心が高まった」75%。将来の進路を考えるきっかけになり、様々な研究への興味関心が高まったと考える。



令和7年度 留学生交流会

1 目的

- ①日本の大学・大学院で学ぶ留学生から、出身国についてのプレゼンテーションを聞き、日本との関係について考えることで、グローバルな視野を身につけ、課題研究に対する考えを深める機会とする。
- ②学科合同で交流会に参加することでお互いに学び合う機会とし、学校の国際教育推進の機会とする。

2 日時・場所

令和7年11月18日(火) 6,7限 本校 LL教室、会議室、視聴覚教室

3 参加生徒

1年1組(国際探求学科) 35名 1年2組(サイエンスリサーチ科) 40名

4 内容

14:20~16:10 交流会①~④(各教室) ※各回 約20分

・留学生プレゼンテーション(各国の現状、文化等について) ・質疑応答など

5 講師

大学等に在籍する海外からの留学生10名(兵庫国際交流会館から派遣)
(ミャンマー、バングラデシュ、キプロス、パキスタン、中国、ギニア
東ティモール、ベトナム、ケニア、ラオス)

6 事業の効果とその評価

【深く洞察し、解決する力】

研修・実習について、内容を理解している。前:2.7→後:3.1

【多様な視点で見る力】

研修・実習についての意図や背景を幅広く理解できる。前:2.7→後:3.1
<生徒感想>

- ①今まで知らなかった文化や行事を知ることができ、とても良い機会になりました。日本にもあったらいいなと思う文化もあり、もっといろいろな国について学びたいと思いました。
- ②留学生の方の話はとてもおもしろく、インターネットで調べるだけでは分からない現地の様子を知ることができました。特に言語の話が印象に残り、探究でも深めたいです。
- ③外国の方と直接話すのは初めてでとても緊張しましたが、実際に

話してまた参加して、もっと上手に話せるようになりたいです。

④発表を聞いて、日本と他国がさまざまな面でつながっていることを実感しました。ニュースでは分からない課題や思いを知り、これからの探究活動に生かしたいと思いました。

⑤進学や将来の考え方が国によって違うことが印象に残りましたが、同じ若者として共通する悩みもありました。次の機会には、もっと積極的に質問したいです。



情報科と英語科の連携授業

1. 概要

週2時間、英語科と情報科による協同授業である。情報科単元「情報デザイン」「データの収集・活用・分析」の学習をふまえ、獲得したスキルを用いグループ発表を英語で行った。

2. 仮説

他学科と合同で発表の機会を持つことで、様々なトピックに関して、限られた時間の中で効果的に伝える方法を考え、プレゼンテーション能力及び論理的思考能力を同時に身に付けることができる。さらに、英語で発表を行うことで語学力を磨くことができ、併せて質疑応答を通してコミュニケーション能力の向上も図ることができる。

3. 経緯と状況

2学期	“Data analysis and presentation of social issues”	身近な社会テーマに関連する複数の統計データを活用し、分析結果をプレゼンテーションする。
3学期	“Suggestions for Science Research courses and the Global Studies”	所属する学科(サイエンスリサーチ科/国際探求科)の特長を踏まえ、新たな取り組み提案をプレゼンテーションする

4. 事業の内容

実施時間:週2時間(通年) 参加人数:国際探求学科1年35名、SR科1年40名

5. 事業の効果とその評価

【多様な視点で見る力】テーマについて、多角的な視点から見るができる。

【課題設定する力】与えられたテーマから問題点を検討し、課題を設定することができる。

【深く洞察し解決する力】設定した課題を深く洞察し、解決策を検討することができる。

【協働で参画する力】グループで協働して一つのプロジェクトを完成させることができる。

人と防災未来センター研修

1. 概要

阪神淡路大震災や東日本大震災を経験し、事前に災害に備えることの必要性を強く思い知らされた。その経験をもとに、地震の仕組みを学び、災害に対して、どのようなことを準備すべきかを兵庫県立大学大学院減災復興政策科の取り組みから学ぶ。

2. 仮説

講義などを通して、災害時の備えを学び、減災のための取り組みを考えることができるようになる。

3. 経緯と状況 4月 計画 6月 打合せ 7月 実施

4. 事業の内容

実施日時	令和7年7月30日(水)
実施場所	人と防災未来センター 兵庫県立大学大学院減災復興政策科研究室
参加人数	SR科1年40名 普通科2年4名
内 容	人と防災未来センター研究員による防災セミナー、館内見学 講義「阪神・淡路大震災、東日本大震災から学ぶ防災教育」 兵庫県立大学大学院減災復興政策科 浦川 豪 教授



5. 事業の効果とその評価

仮説について、以下の問いに「当てはまる」または「やや当てはまる」と答えた生徒は以下のとおりである；「自分の新しい発見があった」：97%、「内容が面白かった」：95%。生徒は、阪神・淡路大震災を知らない世代であるが、展示や体験を通して災害を自分事として捉え、何ができるか減災防災の取り組みを考えていた。

地域の工場見学 ～尼崎にある企業の魅力を知る～

1. 概要

SR科1年生の「理数探究基礎」の一環で、尼崎市しごと支援課の協力の下、企業4社の工場見学を実施し、科学技術と産業（製造業）のつながりについて体験的に学習した。

2. 仮説

- ① 製造現場を実地見学することにより、ものづくりの大切さや科学技術とのつながりへの理解を深める。
- ② 実際の企業の方から話を聴くことによって、地域活性化を身近に感じることができる体験となる。

3. 経緯と状況 6～8月 計画 10月 実施 11月 評価

4. 事業の内容

日時・場所	令和7年 10月7日(火) 株式会社住友ベークライト 尼崎工場 三菱電機株式会社 伊丹総務センター 株式会社ダイセル 神崎工場 王子イメージングメディア株式会社 神崎工場
-------	--

参加人数	SR科1年40名
内 容	企業からの会社概要説明と工場の見学

5. 事業の効果とその評価

ものづくりの大切さを知ることにより、今後の探究活動に役立つ。また、新たな問いを立てるときに大きなヒントになる。

【深く洞察し、解決する力】今回の内容について理解している 前2.7→後3.6

【多様な視点で見る力】今回の内容について説明したり、図や表を活用して分かり易くレポートをまとめることができる 前2.8→後3.5

【課題設定する力】今回の内容について問いを見出すことができる 前2.7→後3.4

瀬戸臨海実験所での臨海実習

1. 概要

京都大学 瀬戸臨海実験所において、磯採集、生物の分類実習などを行い、生物多様性の実際に触れた。

2. 仮説

臨海実習を通して、生物多様性に触れることができる。

3. 経緯と状況

4～6月 計画 7月 実施 9月 評価

4. 事業の内容

実施日時 令和7年7月29日(火)～30日(水)(1泊2日)

実施場所 京都大学フィールド科学研究センター瀬戸臨海実験所(和歌山県西牟婁郡白浜町459)

参加人数 普通科1年1名, SR科1年17名, 普通科2年1名, SR科2年3名 SR科3年1名 合計23名

内 容 磯採集と分類

指 導 京都大学 後藤 龍太郎 助教



5. 事業の効果とその評価

豊かな生物多様性を有するフィールドのもと、本物を通じて学力や環境への意識を高めることができた。「海岸研修はとても有意義な時間になりました。また、このような研修があれば行ってみたいです。」などの感想が聞かれ、生物分類に対する理解の向上につながったと考えられた。2日目は津波警報が発令されたため、実習ができず、「解剖が楽しみだったので2日目は津波が来て悲しかったです。」との感想も見られた。

電子顕微鏡観察会

1. 概要

最新の走査型電子顕微鏡の原理を理解し、微細構造を観察する。

2. 仮説

- ① 最新の走査型電子顕微鏡の原理を理解・実習することで、科学技術に対する理解が向上する。
- ② 微細構造を観察することで、種間変異を理解し、海洋プランクトン分類に対する理解を向上させる。

3. 経緯と状況

4月 計画 6月 打合せ 11～1月 実施 1～3月 評価

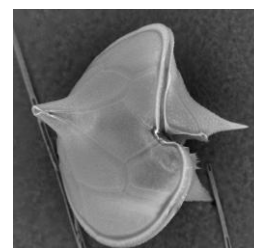
4. 事業の内容

実施日時 令和7年10月28日(火)～令和7年12月16日(火)

実施場所 兵庫県立尼崎小田高等学校

参加人数 高校生・中学生・小学生・中学生保護者

- 内 容
- ・11月1日(土)本校オープンハイスクールにて観察会
身の回りの物(プランクトン・髪の毛など)
 - ・11月27日(木)小学生理科教室にて海洋プランクトン観察会
 - ・授業・放課後での観察会
 - ・各種学会などで発表し、令和7年度伊丹市生物多様性交流フェスティバル(奨励賞)、第17回東京理科大学 坊っちゃん科学賞 研究論文コンテスト高校部門(佳作)、第49回兵庫県高等学校総合文化祭自然科学部門発表会(奨励賞・高校生ポスター賞)などの受賞歴を残した。



スケオビムシの仲間



ツノモの仲間

5. 事業の効果とその評価

仮説①: 「電子顕微鏡観察をはじめて観察した」、「プランクトンに興味をわいた」などの感想がみられた。また、仮説②: 「プランクトン相が局所的な環境を反映している可能性がある」、「微細な立体的構造がはっきり観察できた」などの感想が聞かれ、生物分類に対する理解の向上につながったと考えられた。

室戸地学研修（地学、天文、環境、防災）

1. 概要

室戸ユネスコ世界ジオパーク（室戸市全域）内の各施設を訪問し、室戸の地質の成り立ちと、そこで暮らす人々の生活について、地球科学の視点で考察する。光害のない室戸での天体観測も行う。室戸ならではの豊かな自然の恵みや、一方で向き合わなければいけない環境問題や自然災害についても水族館や津波シェルターを見学し、環境や防災の観点から考察する。

2. 仮説

- ① 地質を実際に観察することで地学について理解を深められる。
- ② 天体観測を行い、天体への理解を深められる。
- ③ 地学について理解を深め、防災シェルター研修などにより、防災意識が高まる。

3. 経緯と状況

9月計画 12月実施 1月評価

4. 事業の内容

実施日時	令和7年8月20日（水）～22日（木）（2泊3日）
実施場所	国立室戸青少年自然の家、むろと廃校水族館、室戸世界ジオパークセンター、佐喜浜町都呂津波避難シェルター、室戸市周辺
参加人数	本校生徒33名（1年生14名、2年生16名、3年生3名）、教員4名
内 容	<ol style="list-style-type: none"> (1) むろと廃校水族館（室戸のウミガメや魚類等の生態について考察） 指導：むろと廃校水族館 館長 若月 元樹 氏 (2) 国立室戸青少年自然の家（夏の星座や宇宙の成り立ち、銀河について考察） 指導：国立室戸青少年自然の家 所長 西岡 敬三 氏 (3) 室戸岬・室戸世界ジオパークセンター （室戸岬の地層の成り立ちや自然環境について考察） 指導：国立室戸青少年自然の家 所長 西岡 敬三 氏 (4) 佐喜浜町都呂津波避難シェルター（自然災害や防災について考察） 指導：国立室戸青少年自然の家 所長 西岡 敬三 氏 ジオパーク推進協議会 課長 大西 亨 氏

5. 事業の効果とその評価

室戸岬での実地研修や、ジオパークセンターでの講義、天体観測の講義、津波避難シェルター、むろと廃校水族館での講義を通して、地学や天文、防災や環境に関する知識を、実体験とともに経験することができた。



むろと廃校水族館



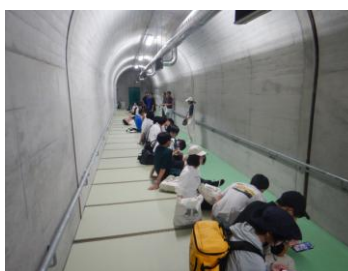
室戸岬



室戸世界ジオパークセンター



国立室戸青少年自然の家



津波避難シェルター



天体観測

咲いテク事業（DNA 鑑定による鳥類性判別と身近な野鳥観察入門講座）

1. 概要

咲いテク事業において「DNA 鑑定による鳥類性判別と身近な野鳥観察入門講座」の実習・実験を行った。兵庫県 SSH 咲いテク委員会、五国 SSH 連携プログラム事業として実施。

2. 仮説

- ① 遺伝子解析実験を通して、高度な観察手法を身につけることができる。
- ② 手動 PCR 法に付随する体験を通して、科学技術の核心に触れることができる。

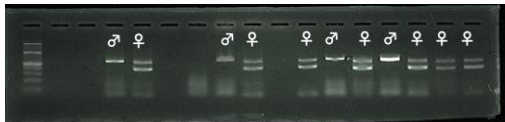
3. 経緯と状況 4～7月 計画 7月 実施 1月 評価

4. 事業の内容

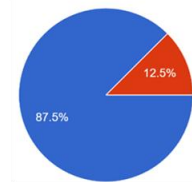
実施日時・場所 令和7年8月25日（月）10時から16時 本校 生物実験室
 参加人数 本校生徒3名，他校生徒24名，他校教員5名（他校5校参加）
 内 容 ・昆陽池産カワウの DNA 抽出実験と PCR 法による DNA 増幅実験
 ・講義「カワウについて考える～標識調査から見てきたこと～」
 （講師：龍谷大学里山学研究センター研究員須川恒先生）
 ・講義「身近な野鳥観察入門」（尼崎小田高校生物班）

5. 事業の効果とその評価

実験前後での生徒の変容を、ルーブリックを用いて評価した結果、有効な成果を上げたと考えられた。

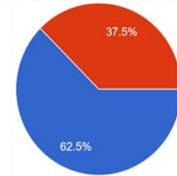


内容は面白かったですか。



●面白かった
 ●どちらかといえば面白かった
 ●どちらかといえば面白くなかった
 ●面白くなかった

今回参加して、自分の視野を広げたり将来を考えたりするのに役立ちましたか。



●役立った
 ●どちらかといえば役立った
 ●どちらかといえば役立たなかった
 ●役立たなかった

1年生 普通科「探究基礎講座」の取組

1. 概要

普通科においても2年次での課題研究に向けて、探究のサイクルを体験する「探究基礎講座」を実施した。「探究基礎」では探究のサイクルを、「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」の4過程に分類し、各過程で必要となる基礎的で汎用的な知識技能を学び、活用する学習に取り組んだ。7月に2時間、12月、3月に3時間ずつ知識技能の習得と活用を伴う学習に取り組み、1・2年生合同授業の中で探究のサイクルに取り組んだ。問題発見・課題設定の思考力を身に付けることを第一の目的とする。

2. 仮説

汎用的な知識技能を身につけ、探究のサイクルを体験することで、探究学習の深化を促すことができるのではないかと

3. 経緯と状況 4月～ 計画 7月、12月、3月 実施 1月～3月 評価

4. 事業の内容

7月14日（月） 「フォトランゲージを用いた抽象的な課題発見プログラム」
 12月19日（金） 「身近な事例のフォトランゲージを用いた具体的な課題発見プログラム」
 1月31日（土） SSH 小田高リサーチ生徒研究発表会（1学年全員で課題研究の発表を見学）
 3月4日（水） 「ラテラルシンキング・問作り・映像教材を用いた協働性育成プログラム」
 3月9日（月） 「PBLを用いた探究のサイクルの体験」
 対象 1年生160名（3月4日は1年生200名で実施、3月9日は2学年合同の340名で実施）

5. 事業の効果とその評価

3月9日の授業後アンケートで、1年生は「探究のサイクルを体験できたと感じますか？」に97%、2年生は「今年の探究応用で身に付けた力を、何らかの場面で活用することができたと感じますか？」に89%の生徒が肯定的に回答した。また感想による質的な評価でも、肯定的な意見が多く得られた。

大阪湾・武庫川 地域課題ミニワークショップ

1. 目的

- (1) 武庫川や大阪湾の環境について考え、地域で活動されている専門家から実践を学ぶことで、地域課題について考える視点の基礎を築く。
- (2) 生徒の自主的な運営やディスカッションを通して、主体的な探究活動による科学人材育成を図る。
- (3) 高校生サミットやワークショップでの手法を用いて、他校が地域課題の探究活動を行う上での幅広い視点を養う。そのための連携の枠を広げる。

2. 実施日時 令和7年9月27日(土) 10:00~14:30(9:30受付)

3. 実施場所 尼崎市立魚釣り公園(〒660-0087 兵庫県尼崎市平左衛門町66)

4. 参加者・人数 ◆参加校 5校
 (兵庫県立尼崎小田高等学校、兵庫県立尼崎高等学校、
 兵庫県立尼崎西高等学校、兵庫県立西宮南高等学校、西宮市立西宮東高等学校)
 ◆参加者 24名(生徒名18名、教員6名、来賓1名)

5. 実施内容

時間	内容	生徒実行委員会プログラム
9:30	受付・集合 移動	阪神武庫川駅で集合・受付 ※武庫川渡船の専用車で尼崎市立魚釣り公園まで移動
10:00	開会挨拶・趣旨説明	本日の学びのポイントの説明
12:00	実習1	・実習1 魚釣り体験(大阪湾の魚について)
12:00 ~	実習2 / 実習3	2班に分かれる(両方を実施) ・実習2 クルーズ体験(大阪湾・尼崎運河について) ・実習3 肥料作り体験 ※昼食
14:00		(不可食部の利用、未利用魚のフィッシュシェアリングについて)
14:00 ~	ディスカッション・発表 まとめ・アンケート記入	テーマ:本日の学びについて 4班に分かれて行う。
14:30	閉会	

◆講師 全体実習:宮本 悦男氏(株式会社尼漁開発 代表取締役、NPO 法人武庫川 ECO-LABO 理事長)

◆実習1 魚釣り体験(大阪湾の魚について)

武庫川一文字まで武庫川渡船で渡り、魚釣り体験を行った。大阪湾(尼崎周辺)は栄養が豊富であり、サバやアジなど魚が多く釣れること(85種類の魚がいるとのこと)を体感した。水質も非常に改善されていること、そのための活動などを学んだ。

◆実習2 クルーズ体験(大阪湾・尼崎運河について)

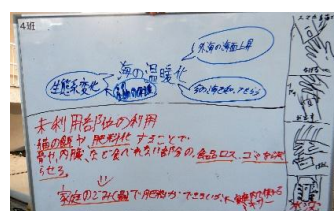
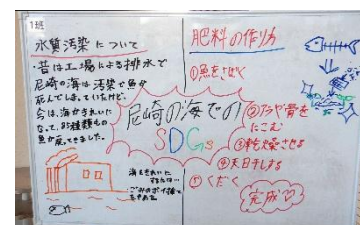
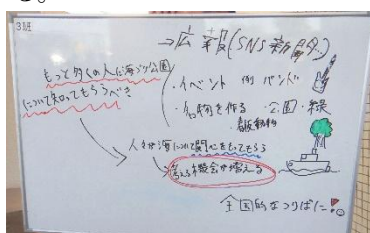
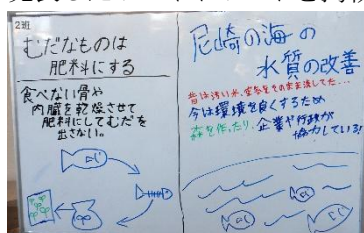
大阪湾から尼ロック(尼崎開門)を通り、尼崎運河のクルーズ体験を行った。高潮被害を防ぐ尼ロックの役割、工場や流通拠点として尼崎港の役割も学ぶことができた。

◆実習3 肥料作り体験(不可食部の利用、未利用魚のフィッシュシェアリングについて)

魚の不可食部を利用した肥料作り体験、釣り過ぎた魚を子ども食堂へ届けるなどの活動を学んだ。

◆ディスカッション・発表

生徒が発表したホワイトボードを掲載する。



2年 理数探究応用(自然科学研究)

1. 概要

SR科2年生では、「理数探究応用(自然科学研究)」を実施しており、本校のSSH事業の探究活動での中心プログラムである。様々な機会を得て成果を発表し、生徒たちは探究力、多様な視点で見る力、課題設定する力、深く洞察し解決する力、協働で参画する力を身につけている。評価については、京都大学大学院教育学研究科と協同で開発したルーブリックも用いている。開発の経緯については p60、ルーブリックについては p69 を参照。

2. 仮説

- ① 生徒主体で探究活動を深めていくことができる。
- ② 多様な視点で見る力、課題設定する力など、様々な力が育成される。
- ③ 発表活動など交流をする中で学習効果を高めることができる。

3. 経緯と状況

4月ガイダンス・班分け・プレゼン講義、5～7月課題の設定、5月中間テーマ発表会(神戸女学院大学研修)、7月テーマ発表会(SR科交流会)、9・10月基礎研究、11月中間発表会、12月発展研究、1月研究のまとめ、発表練習、1月発表、2～3月論文作成

4. 事業の内容

時間：木曜日6、7限

対象生徒：SR科2年 38名

発表会：5/30(金)神戸女学院大学研修、7/14(月)SR科交流会、11/18(火)六甲アイランド高等学校との合同中間発表会(神戸市立六甲アイランド高等学校)、1/25(日)サイエンスフェア in 兵庫、1/31(土)SSH「小田高リサーチ」生徒研究発表会(本校)

4月のガイダンスでは、ルーブリックを配布し、ルーブリックの基準等を参考にしながら、課題研究で目指す方向性について説明した。班分け・プレゼン講義(SSH生徒研究発表会DVD受賞発表動画視聴)の後、各班で本格的に課題研究に取り組んだ。

課題研究班：数学班、物理班、生物班(2班)、化学班、環境班

まずは、課題設定を進め、5月中間テーマ発表会(神戸女学院大学研修、p46参照)の後、7月の全学年向けのテーマ発表会に臨んだ。その後、課題研究を進め、11月の六甲アイランド高等学校との合同中間発表会に臨んだ(p46参照)。ここでの質疑応答も基に、その後さらに研究を進めた。1月には公式練習会を実施し、本校教員より発表に対する助言を受けた。1月の発表会では、SR科2年生のすべての課題研究班(15班)による口頭発表だけでなく、全学科、基本的にすべての探究班によるポスター発表、全学科代表班による1,2年生全員への研究発表も実施した。発表テーマはp48を参照。本発表会では、1,2年生全員や保護者、卒業生、運営指導委員、探究アドバイザー等、幅広い範囲の方々に聴衆として参加して頂いた。3月の論文指導では、各班が1年間の課題研究の成果を、課題研究担当者の指導の下、論文の形にまとめた。

5. 事業の効果とその評価

1年間を通して、ポスター、口頭発表、校内論文の3つの形態でまとめ発表をした。文章作成能力や語彙力、論理的思考力、情報機器のリテラシー、表現力、理解力などを育成した。また、聴き手の立場に立つことに気づかせるために、さまざまな聴衆に向けて発表を行った。本事業では、様々な力を伸ばす効果があることが、アンケート分析より確かめられた。

【課題設定する力】自分なりの仮説を立て、検証方法を考えることができる 前2.8→後3.5

【多様な視点で見る力】研修・実習について、学んだことを伝えることができる。前2.7→後3.5

【深く洞察し、解決する力】研修・実習について、内容を理解している。前2.8→後3.6

【協働で参画する力】研修・実習について、ディスカッションをしたり、目的を達成するためのチームでの自分の役割を見つけ果たしたりすることができる。前2.8→後3.4

神戸女学院大学研修

1. 概要

SR科2年生「理数探究応用」において、神戸女学院大学で中間テーマ発表会および大学の施設見学を行った。発表会では、クラスメイトや本校教員だけでなく、同大学より3名の先生に見学していただき、探究活動の方向性について助言をいただいた。また、施設見学では、同大学の研究生物の飼育について、説明いただいた。

2. 仮説

- ① 他者からの質問や助言を通して、多様な視点で見る力が育成される。
- ② 班のメンバーとの協力やクラスメイトとの交流を通して、協働で参画する力が育成される。

3. 経緯と状況 4月テーマ検討、5月実施、6月評価

4. 事業の内容

実施日時 令和7年5月30日（金）
 実施場所 神戸女学院大学
 参加人数 SR科2年39名



5. 事業の効果とその評価

「理数探究応用」では初めての発表会であり、さまざまな意見をもらうことが刺激になったようである。

【深く洞察し、解決する力】 自分・相手のプレゼンの内容を理解している。 前 2.8→後 3.5

【多様な視点で見る力】 自分のプレゼンの内容をまとめることができる。 前 2.9→後 3.4

【協働で参画する力】 グループで内容について話し合うことができる。 前 3.0→後 3.4

神戸市立六甲アイランド高等学校との合同中間発表会

1. 概要

SR科2年生「理数探究応用」において、神戸市立六甲アイランド高等学校と合同で中間発表会を行った。同学年の他校生徒の発表を見て質疑応答などの交流を図る中で校内での発表会以上に、探究力、多様な視点で見る力、課題設定する力などの様々な力を養った。



2. 仮説

- ① 多様な視点で見る力、課題設定する力など、様々な力が育成される。
- ② 交流をすることで学習効果を高めることができる。

3. 経緯と状況 7月テーマ発表会（SR交流会）、9～10月計画、11月実施、1月評価

4. 事業の内容

実施日時 令和7年11月18日（火）
 実施場所 兵庫県立尼崎小田高等学校
 参加人数 SR科2年39名、六甲アイランド高等学校2年 58名

5. 事業の効果とその評価

本事業は2年生にとっては他校生徒の発表を聴き、他校生徒や教員の意見を聴く場として、気づきや今後の改善点を得る良い機会となった。

【深く洞察し、解決する力】 自分・相手のプレゼンの内容を理解している。 前 2.8→後 3.4

【多様な視点で見る力】 自分のプレゼンの内容をまとめることができる。 前 2.7→後 3.3

【課題設定する力】 相手のプレゼンについて質問できる。 前 2.7→後 3.3

小高連携授業 高校生による算数・理科の授業

1. 概要

高校生が小学校の児童に算数や理科の内容をわかりやすく教えることで、教える楽しさや苦勞を体験し、知識や原理を伝えることの意義を学ぶ。地域に開かれた学校づくりを心がける。

2. 仮説

- ① 学んだことについて責任をもって教え、知識を確実なものにするとともに、自信をつける。
- ② 自然科学の普及において、地域の中核的な役割を果たす。

3. 経緯と状況 9～10月 計画 11月 実施 12月 評価

4. 事業の内容

実施日時 令和7年11月27日(木)

実施場所 兵庫県立尼崎小田高等学校

参加人数 SR科2年38名

内 容 清和小学校の児童(3、4年生53名)を対象に、算数、理科の授業を実施した。児童が興味を抱くようなテーマを設定し、分かりやすい授業ができるように工夫した。



5. 事業の効果とその評価

【深く洞察し、解決する力】 今回の実験を小学生に対して進めるポイントを理解している 前3.1→後3.6

【協働で参画する力】 自分の担当したグループを把握し、進行できるように取り組むことができる
前3.2→後3.6

【多様な視点で見る力】 小学生からの質問に耳を傾け、的確な指示を出せる 前3.0→後3.4

SSH 小田高リサーチ生徒研究発表会

1. 概要

例年SR科2年生全探究班および他学科代表班による発表会を実施し、SSH運営指導委員や探究アドバイザーの先生方、卒業生、保護者に見学していただいた。今年度は発表会の規模を拡大し、全学科全探究班による、発表会を実施した。また、各学科代表班が全校生に向けて発表した。この事業を通して、学科間の交流や情報交換を図った。

2. 仮説

- ① 他学科の生徒との交流を通して、多様な視点で見る力が育成される。
- ② 1年生にとっては、来年度の探究活動の課題設定の足掛かりとなる。

3. 経緯と状況 9～1月計画、1月実施、2月評価

4. 事業の内容

実施日時 令和8年1月31日(土)

実施場所 兵庫県立尼崎小田高等学校

参加者 1年生全員(見学)、2年生全員(発表)、本校教員、SSH運営指導委員、探究アドバイザー、卒業生、保護者等の見学者



5. 事業の効果とその評価

SR科1年生：来年の研究について考える良い機会となったようであった。

SR科2年生：大学の先生からの意見や他学科の発表に刺激を受けたようであった。

【多様な視点で見る力】 研修・実習について、学んだことを伝えることができる。 前2.9→後3.6

【深く洞察し、解決する力】 研修・実習について、調べた情報を付加して考察、説明できる。 前3.1→後3.7

【課題設定する力】 研修・実習について、自分なりの仮説を立て、検証方法を考えることができる。

前2.9→後3.4

2年 普通科、国際探求学科の「探究応用」「国際探求応用」の取組

1. 概要

SR科は学校設定科目「理数探究応用」において探究活動を行い、生徒研究発表会に取り組んできた。この活動を普通科、国際探求学科にも広め、全校的に探究活動を行うため、平成23年度から「総合的な学習（探究）の時間」において課題研究を実施してきた。その一環として令和4年度より学校設定教科「小田高リサーチ」の学校設定科目「探究応用」、「国際探求」の「国際探求応用」として取り組んでいる。その中で、自ら設定した課題について調査研究することで、課題発見能力、情報収集能力、問題解決能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力の育成を目指している。ここで培った能力や態度は、将来大きな課題に立ち向かう場面に役立つと考えられる。

2. 仮説

本校が設定する「現代の諸問題に主体的に関わることができる人材の育成を目指す」という課題に対して、普通科、国際探求学科の生徒にも「探究応用」の時間を設けて探究学習に取り組ませ、課題発見、調査、まとめ、発表の一連のサイクルに挑戦させることで、課題についての成果を得ることができると推測する。

3. 経緯と状況

本年度は2年生の普通科に11名、普通科看護医療・健康類型に2名、国際探求学科に3名とALT3名の、合計19名の教員が担当した。どの学科・類型も、昨年度の反省も踏まえながら指導することで、より深く探究活動を行うことができ、発表も内容も全体的により良いものとなった。評価については、学校設定教科として取り組んでいるので評価は文章表記ではなく、数値での評価を行っている。ルーブリックは昨年度のものを一部改訂しながら使用した。評価に用いたルーブリックは別紙を参照。

年間計画	普通科文系・理系	国際探求学科	普通科特色類型
1学期前半	探究	探究テーマ設定	探究の方法・基礎
1学期後半	講座に分かれ個人の探究活動・班編成	文献検討&小テーマ設定	班をつくり話し合い
2学期前半	班活動	ワークショップ、アンケート、インタビュー実施	班での探究活動
2学期後半	班活動と発表用ポスター作成と発表	調査内容の整理&考察	
3学期	班活動とポスター作成	発表会に向けて	発表会に向けて
成果発表会 (抜粋)			1/24(土) 探究応用報告会(口頭発表)
	1/31(土) SSH 小田高リサーチ生徒研究発表会(SR科15班・普通科43班・国探7班・類型12班 全班ポスター発表・代表5班口頭発表)		
	2/2(月) 尼崎でつながる地域の活動報告会 (SR科1班・普通科1班・国探1班・類型2班 口頭発表・ブースセッション)		
		12/21(日) 甲南大学リサーチフェスタ 2025 1班ポスター発表 1/24(土) 神戸市外国語大学の学生とポスター発表交流会	1/31(土)・3/1(日) 在宅療養ワークショップにて発表 3/18(水) 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科「研究交流会」にて発表、 3/20(木) 兵庫医科大学「HMU High School Awards 2025」にて発表

4. 事業の内容

普通科は水曜日3,4時間目の2単位、国際探求学科は水曜日7時間目の1単位で実施した。普通科看護医療・健康類型は月曜日2時間目と木曜日の1限目の2単位で実施した。普通科(158人・43テーマ)について、ポスター発表の際に、関連するSDGsのアイコンを掲示した。

令和7年度「探究応用」のSDGsによるテーマ分類(延べ件数)

[1 貧困] 0件	[2 飢餓] 8件	[3 保健] 18件	[4 教育] 6件	[5 ジェンダー] 4件	[6 水・衛生] 0件	[7 エネルギー] 0件	[8 経済成長と雇用] 6件	[9 産業・産業化・イノベーション] 2件
[10 不平等] 3件	[11 持続可能な都市] 8件	[12 持続可能な消費と生産] 4件	[13 気候変動] 1件	[14 海洋資源] 0件	[15 陸上資源] 0件	[16 平和] 2件	[17 パートナリシップ] 0件	

5. 事業の効果とその評価

生徒達への事後アンケートでは、発表をしてよかったと答える生徒が90%、他の人の発表を聞いてよかったと答えた生徒が96%、聞いてもらってよかったと答えた生徒が92%、質問に答えられたと答えた生徒が84%であった。昨年度に引き続き、生徒の満足度が高い発表会を行うことができた。発表会後の生徒の自由記述にも「色んな方が見に来てくださっていたので、色んな視点の感想を聞くことができたし、質問もこんな考え方があったのか!など新たな発見もできました。」等のコメントがあり、他の科や類型の同級生と共に発表しあい、一般の方や下級生、学校外部の方に向けても発表をしたことで、よい刺激を得ることができた。

令和7年度 SSH 台湾海外研修

1. 目的

本校がこれまで実施してきた課題研究の深化・学際的な課題研究の次の段階として海外研修の実施を行った。日本と台湾との比較、台湾での科学的な解決方法や実践方法を学び課題研究の深化につなげる。また、社会課題を広く多面的、国際的にみる視点を養うことで、イノベーションを生み出す科学者として必要な資質を身に付ける。さらに、英語での発表や交流を通じて、英語による発信力の強化を行い、プレゼンテーション力、質問力などの能力を養うことができる。

- (1) 台湾の環境や防災について学ぶ。また、現地の大学や研究機関での最先端技術に触れて、日本と台湾との違いを学び、その学びを通して自ら取組んでいる課題研究の深化につなげていく。
- (2) 姉妹校である国立台南家齊高級中等学校と、事前研修として課題研究の情報交換やリモートでの発表会等、共同して課題研究を行っていく。そのまとめとして相互課題研究発表会を実施する。また、合同での研修や協働してのワークショップをすることで課題解決する視点や方法論を身に付ける。
- (3) リモートでの事前学習・中間発表会、現地での課題研究発表会、ワークショップを通して、英語での発信力を強化し、双方の課題研究の深化を図る。

2. 実施日時 令和7年12月17日(水)～12月20日(土)

3. 実施場所 台湾 国立台南家齊高級中等学校 及び 台南市周辺、高雄市周辺

4. 参加者・人数 生徒11名(国際探求学科4名、SR科3名、普通科看護医療健康4名)、教員2名

5. 行程

現地時刻	内容
12/17 9:00 11:40 14:25 / 15:30 17:00	関西国際空港 集合 出国・搭乗手続き 出発 高雄国際空港 到着 / 移動 国立台南家齊高級中等学校 ホームステイ家族と対面 ホームステイ先(台南)へ
12/18 8:00 8:00～10:00 10:30～12:30 14:30～17:00 17:00	国立台南家齊高級中等学校 集合 合同探究発表会、移動 国家地震工程研究中心台南実験室 研修 講義 成功大学 劉光晏 (Kuang-Yen, Liu) 准教授 移動、昼食 台江国家公園 研修、移動 国立台南家齊高級中等学校、移動 ホームステイ先(台南)へ
12/19 8:00 9:30～11:30 13:30～16:00 16:00	国立台南家齊高級中等学校 集合 長栄大学国際珍古徳根與芽生態教育中心、移動 昼食 国立台南家齊高級中等学校 合同発表会、研修の振り返り、まとめ 移動、夕食、ホテル(高雄)へ
12/20 8:30 9:00～11:00 13:00 / 15:25 19:10 / 20:10	ホテル発 国立科学工芸博物館 研修 昼食 高雄国際空港着 / 出発 関西国際空港到着 / 解散

6. 研修先及び内容

(1) 国立台南家齊高級中等学校 (12/17～12/19)

国立台南家齊高級中等学校とは、令和4年度より交流を行っており、令和6年度姉妹校締結を行った。事前研修として、合同でのテーマ発表会や合同中間発表会、情報交換をリモートで実施してきた。現地では、共同テーマで行ってきた課題研究の成果発表会を行い、双方の学校での課題研究の深まりと国を越えた視野の育成を行う。また、国家地震工程研究中心台南実験室、台江国家公園、長栄大学国際珍古徳根與芽生態教育中心の研修は、共同で行い、協働でのワークショップの実施等も行った。

(2) 国家地震工程研究中心台南実験室 (12/18)

事前研修として、人と防災未来センター研修(神戸)を行い、地元神戸での防災・減災について専門家からの科学的な視点での講義を受けて学びを深めている。台南の国家地震工程研究中心台南実験室で、成功大学の劉光晏 (Kuang-Yen Liu) 准教授による、地震に関する講義を受け、台湾での最先端の取組について触れることができた。

(3) 台江国家公園 (12/18)

事前研修として、高校生サミット地域課題ワークショップ（須磨海岸）で、地元の海洋保全活動やそれに取り組む専門家の考えに触れ、内容知や方法知についての学びを深めてきた。本研修では台南の、マングローブ林、湿地など多様な地形や生態系を持つ国立公園でボートトリップを行い、クロツラヘラサギの保護について、日本人技術者八田與一によるダムや治水について、伝統的な漁法について、学ぶことができた。専門家の活動や漁師など地元の人たちがどのように関わってきたかを知り、治水や防災を視点とした講義も受けることができ、台湾での環境保全活動・環境教育の考え方を学ぶことができた。

(4) 長栄大学国際珍古徳根與芽生態教育中心 (12/19)

これまで地域課題解決に取り組む高校生サミットにおいて、高校生が自分事として地域の課題解決の手法を考えてきた。長栄大学ではジェーン・グドール（珍古徳）博士が提唱する「ルーツ&シューツ（根與芽）の精神」（自らの力で環境を変えていく精神）を学び、持続可能な環境リーダーとしての若者育成に取り組んでおり、そこから学ぶ。台南での治水・環境対策や、発展途上国への循環型農業の技術開発について講義を受け、水質調査等を国立台南家齊高級中等学校の生徒と協働でワークショップを行った。台湾のみならず世界の多様な背景や価値観、そこで求められる科学技術や解決手法が異なることを知る事ができ、これまでの考えに国際的な、地球規模の視点を入れることができた。

(5) 国立科学工芸博物館 (12/20)

事前研修として、人と防災未来センター研修（神戸）で神戸の防災・減災について専門家から講義を受けて学びを深めている。また、台湾の災害についても事前学習を実施している。さらに2日目には、国家地震工程研究中心台南実験室で災害に対する研修を行った。国立科学工芸博物館では、台湾の中南部・南東部で大きな被害を出した2009年8月のモーラコット台風災害、八八水害についての理解を深める。そして、台湾での防災対策、その後の支援体制や復興の事例から、これまでの事前学習で得た神戸の防災対策と比較考察をし、生徒の地元での防災分野における課題解決の多視点化につなげることができた。

7. 事前事後の研修について

本研修のために、次のような事前学習、事後学習を行った。（高校生サミットの取組も利用）

- ・7月上旬までに、台湾研修への参加者を募り、台湾との共同研究のための課題研究班を結成した。
- ・7月21日（月・祝）第一回地域課題ワークショップ（須磨海岸）
- ・7月30日（水）人と防災未来センター研修
- ・9月4日（木）台湾との課題研究テーマ発表会（本校より11名発表）
- ・9月14日（日）第二回地域課題ワークショップ（須磨海岸）
- ・10月26日（日）第三回地域課題ワークショップ（人と自然の博物館）
- ・11月15日（土）地域課題解決に取り組む高校生サミット
（台湾との課題研究中間発表会として、参加生徒のうち9名が発表、台湾側から4名が発表）
- ・11月26日（水）直前研修① 本校地歴科教諭による台湾の歴史に関する講義
- ・11月27日（木）直前研修② 国立台湾大学の学生とのオンライン交流
- ・11月28日（金）直前研修③ 兵庫県立舞子高等学校の防災に関する発表動画の視聴
- ・12月1日（火）結団式
（12月17日～20日 本研修）
- ・1月31日（土）SSH小田高リサーチ生徒研修発表においてSSH台湾研修の報告会の実施

8. 事業の効果

台湾という普段とは異なる環境での研修を行うことができ、異なる文化や価値観、新たな視点を獲得することができた。実地での研修で、実際活動されている専門家に直接きくことができ、日本と台湾の共通点や相違点を感じることができた。例えば、国家公園でのクロツラヘラサギなどの自然保護の視点と治水、伝統漁法の体験や牡蠣の養殖などが両立していることを知る事ができた。また、台湾では断層型地震が多いことや、台風の風水害による被害も大きいことなど、防災ではその場所その場所での実情に合わせた対策の重要性も学んだ。英語でのコミュニケーション・発表・質疑も行い伝えることの難しさと大切さを実感することができた。

9. 現地での様子



現地校での歓迎会



課題研究合同発表会



国家地震工程研究中心



台江国家公園



クロツラヘラサギの観察



マングローブ林



伝統漁法体験



国際珍古徳根與芽生態教育中心



現地ワークショップ



水質調査



集合写真



国立科学工芸博物館

10. 生徒報告書抜粋

- ◇ 地震の研究施設を訪問し、耐震構造や防災に関する研究について学びました。日本と同じく地震が多い台湾の取り組みを知ることで、防災意識が高まったと思います。さらに台江国家公園では、生態系について学び、船に乗って川や生物の観察を行いました。これらの活動をすべて英語で体験したことで、研究内容への理解だけでなく、英語で考え伝える力も身につけることができました。探究・防災・環境を総合的に学べる貴重な研修でした。
- ◇ 私は海洋環境について探究を行っています。テーマは日本に海外のような海洋環境に対する法律や政策を取り入れないのはなぜかということです。私たちは環境的に近い台湾を対象に、どんな環境政策や法律を行っているのかについて調べました。すると、台湾では、生分解性プラスチックの使用の禁止を法律としていました。水環境では分解されず、環境に悪い影響を与えてしまう可能性があるからという理由がありました。このような研究を踏まえ、合同発表会でプレゼンを行いました。
- ◇ 研究所に足を運び、講師の方から英語での施設紹介および研究内容の説明をしていただきました。長栄大学の研究所に行きグループワークを行い、ホスト以外の現地生徒とも交流することができました。台湾で行われている研究だけでなく、異文化を受け入れる姿勢や言語の壁を越えてのコミュニケーションについて学ぶことができました。
- ◇ 台江国家公園では、船に乗りながら自然の地形や生態系を活かした治水の考え方を学びました。特に、現地で実際の水の流れや周囲の景観を見ながら説明を受けたことで、地域の自然や暮らしと密接に結びついていることを実感しました。また、国立科学工芸博物館を訪問し、堤防の位置や海岸災害に関する展示を通して、治水が川だけではなく、山の地形や海の環境とも深く関わっていることを学びました。これらの経験から、他国の政策をそのまま良いものとして受け取るのではなく、日本の自然条件や社会状況を踏まえる視点を新たに獲得することが出来ました。
- ◇ それぞれの国にあった防災対策が行われていることを知りました。自助・共助・公助の考え方について学び、災害時には、まず自分の命を守る行動が重要であり、周囲と助け合うことが被害の軽減に繋がると感じました。
- ◇ 日本と台湾の地震に対する考え方はかなり似ているように感じました。例えば1999年9月21日に台湾で発生した“921地震”では2415人の死者及び11305人の負傷者と甚大な被害をもたらしました。このような被害からもうこれ以上の被害が生まれないうように、研究施設では今までの地震被害の経験を生かして耐震構造の研究や今後の地震の被害想定の研究などを行っています。日本での耐震構造の研究についてや、日本と台湾の地震の相違点について、さらに調べていきたいと思いました。また、世界中の地震についても学びたいと思いました。

3年 理数探究実践（科学英語）

1. 概要

「英語を使って科学を学ぶ」態度や意欲を育成するために、英語科教員1名、理科科教員1名、自然科学を専門とするALT3名の計5名で授業を行う。特に、コミュニケーションを図る機会を多く持たせ、英語を用いて科学探究に取り組む。

2. 仮説

- ① 2年次から取り組んできた課題研究の内容を英語で発表する過程の中で、考察・議論・再考を重ね、研究をより深めることができる。
- ② 英語で発表し、互いに質問しあうことで、表現力、コミュニケーション能力を身につけることができる。
- ③ 英語で説明される講義や科学実験に主体的に参加することで、科学を英語で理解する機会を多く持つ。授業内容が理解できることで、英語や科学に対する学習意欲をさらに高めることができる。
- ④ グループで行う実験を通じて、仲間と議論を重ね、論理的思考力と実践力を養うことができる。

3. 経緯と状況

学期	課題	活動内容
1 学期	課題研究の Abstract 作成	14 のテーマに分かれ、それぞれのグループが協同して英語による課題研究の要約を作成した。
	ポスター作成と発表	校内発表に向けて英語版ポスター作成し、発表原稿（英文）の推敲やまとめを行った。
2 学期 3 学期	Science Lecture Lab Activity	ALT の協力を得て、英語を使ってさまざまな講義や実験を行った。講義や実験の後に英語による小テストを実施し、講義内容や実験結果を英語でまとめる機会を多く持つことで実践力を養った。
	Experiment	Egg Drop 実験をグループで行い、仮説・実験・検証を行った。

4. 事業の内容

- (1) 2年次に1年間かけて取り組んできた課題研究の内容を、英語で深め、発表する。14グループのそれぞれが、研究内容のAbstractを作成した。ALTの助言をもとに、Abstractをさらに推敲し、関連する英単語リストを作成し、さらに英語でプレゼンテーションする際に必要となる表現を学び、口頭・筆記テストを行った。また、英語での課題研究発表、質疑応答の練習を行った。理数探究実践の授業内で全てのグループが発表を行い、選抜された3グループが神戸大学で開催された11th Science Conference in Hyogoに参加し、その発表は好評を得た。
- (2) 英語で様々なLab Activityに取り組んだ。内容はExploring Chemistry, Climate Change, Extracting Strawberry DNA, The World of pHなどである。講義内容を英語でメモしたり、実験結果を予測し、実験したりする活動を通して、その結果を英語でまとめ、考察した。ALTによる英語での説明を通して科学的な内容を学ぶ絶好の機会となった。毎回の実験を振り返る記述テストが英語で行われた。

5. 事業の効果とその評価

【協働で参画する力】研修・実習において、議論を通してチームと協同することがすこしできる・できると回答した生徒は、授業を受ける前が91.2%で、授業を受けた後が94.1%と微増した。

【課題設定する力】自分なりの仮説を立て検証方法を考えることができるかという質問に、すこしできる・できると回答した生徒は、授業を受ける前が79.4%で、授業を受けた後は91.2%に増加した。

【深く洞察し、解決する力】英語で行われる研修・実習について、理解できる・すこし理解できると回答した生徒は、授業を受ける前は94.1%だったが、授業を受けた後は、100%となった。このことから、英語で行われる授業に対する理解が全生徒にできたことが確認できた。

【多様な視点で見る力】研修・実習についての意図や背景を幅広く理解できる・すこしできると回答した生徒は、授業を受ける前が91.2%、授業を受けた後が94.1%と微増した。



3年 普通科、国際探求学科の「探究実践」の取組

1. 概要

2年生までに行ってきた探究活動を振り返り文章化することで、これまでの活動を整理し文章で表現できる力を身につけることを目指す。また、自身がどのようなことを学んできたのか、どのような力が身についたのかを改めて確認させることを目指す。

2. 仮説

- ① 自身の活動を文章化することで、探究のサイクルを整理する力を身につけることができるのではないかと。
- ② 探究学習で得た能力を異なる場面に転用する経験を通して、どのような力を自分が身につけることができたのか自覚することができるのではないかと。

3. 経緯と状況

3年生の特色類型を含む普通科5クラスと国際探求学科1クラスの合計6クラスを14名の教員と3名のALTが担当した。1学期・2学期共に1クラスに教員2人か3人ずつで担当するT.T.で授業を行った。1学期には探究活動の文章化の指導を行い、2学期には探究学習で得た能力を転用する場面を設定した。2学期にはクラス単位で取り組むディスカッションやプログラムを3時間と、未来に関する探究学習と発表を8時間設定した。3学期は今までの探究活動の振り返りを行った。

4. 事業の内容

2年生までは普通科の特色類型と国際探求学科の「総合的な探究の時間」は単位数の違いや活動の違いがあるが、3年生の「総合的な探究の時間」を共通して学校設定教科「小田高リサーチ」の学校設定科目「探究実践」と設定し、金曜日4時間目の1単位で実施した。

5. 事業の効果とその評価

1学期の文章化については、自身の力になったと答えた生徒が95%、将来の役に立つと思った生徒が92%であり、文章としてまとめる難しさはあるものの、取り組む意義はあったと考えられる。1学期に文章化した全生徒の内容については、「52回生探究活動報告集」として冊子にまとめた。

2学期前半のディスカッション等については、昨年度に引き続き「累進課税を考える」教材について、「面白かったと思うもの」のアンケート結果では最下位だが、「学んで良かったと思うもの」では首位になっていた。難しい教材ではあったとしても、実社会を題材にしたものに学ぶ意義を感じる生徒が多いことがうかがえた。2学期後半の「未来探究」については、「積極的に取り組むことができましたか」に94%、「個人ではなく班で学んだのは良かったと思いますか」に97%の生徒が肯定的に答えており、探究学習で培った主体性や協働性を発揮できていることが分かると言えるのではないかと考えられた。

SSH 生徒研究発表会

日時：令和7年8月6日（水）、7日（木）

場所：神戸国際展示場

発表生徒：SR科3年3名

内容：SR科3年が「マメ科植物の接ぎ木の条件検討」について発表した。発表会に向けて、「サイエンスギャラリー」などの外部発表会で研鑽を積んだ。発表会では他校生や大学教授の方々との質疑応答を通して、多様な視点で見る力等を育成した。



学校外部（他校 SSH 事業等）での連携・発表

1. 概要

本校は科学に強い興味のある生徒が集まり、毎日活動している。科学技術系人材の育成を目指し、科学研究部の自主性を尊重しつつ、支援を行うため、積極的に学校外部（他校 SSH 事業等など）との連携・発表する機会を設けた。その結果、科学技術系人材育成目標を達成することができた。

2. 仮説

自らの国際感覚を深め、かつ創造的な感性を育てるために効果的な人材を開発するためには学校外部との連携・発表活動が有効である、という仮説の下に本研究を実施した。

3. 経緯と状況

4～5月 計画 6～2月 実施 3月 評価

4. 事業の内容

京都大学理学部 理学探究活動推進事業 COCOUS-R2025

日時：2025年6月12日（木） から 2026年2月21日（土）

活動形態：オンラインディスカッション（隔週木曜日 16:40–17:10）京大生と研究テーマについて

：口頭発表会 2025年8月4日（月）・実験実習5日（火）京都大学 理学研究科セミナーハウス

：オンライン成果発表会 2026年2月21日（土）

参加人数：SR科1年2名

内容：本事業は京都大学理学部が主催する理系女子育成事業で、年間通して担当京大生と共同で研究を続けるプログラムである。本校からはSR科の女子2名が採択され、『チチブ *Tridentiger obscurus* とヌマチチブ *T. brevispinis* の雑種形成』と題して、両種の雑種形成機構の解明について研究を行った。飼育実験と標本の胃の内容物の比較により、採食傾向の違いの解明について取り組んだ。本校における研究活動と連動して、京都大学の院生や全国から集まった採択校の生徒を交えてディスカッション・研究発表を経験することができた。



リサーチフェスタ 2025

日時：2025年12月21日（日）

発表形態：対面発表（ポスターセッション）

参加人数：SR科2年2名、国際探求学科2年4名

内容：本事業は甲南大学が主催する課題研究発表会で、甲南大学キャンパスで行われた。本校からはSR科の課題研究環境班「潮汐による地震の発生について」、および国際探求学科の課題研究班「英語教育」が参加した。本事業を通して研究発表を経験しただけでなく、他者の研究発表を審査する経験や他校の高校生のみならず大学生や教授からの質疑に答える経験を積むことができた。

第16回 サイエンスフェア in 兵庫

日時：2026年1月25日（日）

発表形態：対面発表（ポスターセッション、口頭発表）

参加人数：SR科：1年37名（見学）、2年：38名（発表・見学）

内容：対面発表で実施された。SR科2年理数探究応用における8つの探究班が発表した。発表と質疑応答を通して、研究内容への理解を深めた。1年生及び2年生の見学参加生徒についても、他校、大学、研究機関等の発表を聴き、今後の研究の参考とした。

5. 事業の効果とその評価

上記活動を支援した結果、COCOUS-R2025では、研究で評価できる、と高評をいただいた。

科学研究部などへの活動支援

1. 概要

科学研究部は科学に強い興味のある生徒が集まり、毎日活動している。科学研究部の自主性を尊重しつつ、科学技術系人材の育成を目指し、活動支援を行った。その結果科学技術系人材育成を達成することができた。

2. 仮説

自らの観察力を高め、思考力を養い、かつ仲間と協調して創造的な感性を育てるために効果的なプログラムを開発するためには科学研究部の活動が有効である、という仮説の下に本研究を実施した。

3. 経緯と状況 4～5月 計画 6～2月 実施 3月 評価

4. 事業の内容

天文班 ・夏合宿は国立室戸青少年自然の家で地層観察と天体観測をした。さらにむろと廃校水族館を見学した。

・明石市立天文科学館でプラネタリウムを学び、四季の星空を一般客に解説した。

・六甲アイランド高校と天体観測をした。

・本校の望遠鏡を用いて、土星や木星の観察・撮影を行った。



化学班

・文化祭にてサイエンスショーを行い、テルミット反応を参加者に紹介した。

・科学の祭典にて、参加者に向かってピンホールカメラの製作を一緒に行った。

・エコアマフェスタにて、環境対策の一環として、アメンボを模した針金を水に浮かばせ、洗剤を入れると沈んでしまう実験を参加者に体験してもらった。その際、ゼロカーボンベースボールパーク公式様がお越しになり、Instagramに上げてもらった。



生物班

・毎週3・4回、本校周辺にて野鳥観察や、近畿各地で魚類・プランクトン採集・植生調査などを行った。

・電子顕微鏡を用いて身の回りのものなどを観察・紹介した。

・坊ちゃん科学賞(佳作1・奨励賞3)、伊丹市生物多様性交流フェスティバル(奨励賞4)、県総合文化祭(奨励賞・優秀ポスター賞) 日本動物学会(ポスター賞)などに参加した。

・文化祭で薬脈標本作成ワークショップを開催した。



5. 事業の効果とその評価

上記活動を支援した結果、生徒からは「様々な活動に参加して、他校生との交流や大学生・大学の先生などと有意義なディスカッションができた。」など高い評価を得た。

SR科交流会

1. 日時・参加 令和7年7月14日(月) 2, 3限、SR科1～3年生

2. 内容 探究活動について、SR科3学年が交流することで、上級生からの知識の伝達や下級生の意識向上を図るため、本年度より設定した。交流グループの顔合わせ、1年生による理数探究基礎の実験発表、2年生による全体テーマ発表、3年生による英語ポスターセッション、3学年交流を実施した。

3. 事業の評価 「内容は面白かったか」という質問に対して「非常にそうである」「そうである」と答えた割合は84.6%であった。

[4] 実施の効果とその評価

1. 実施効果分析とその評価

年間を通じたSSH事業の効果を検証するために、SR科各生徒の事業アンケート（表1）について、行事を分析した。併せて、探究活動についての結果分析を行った。

表1 事業アンケートの質問項目 多：多様な視点で見る力 課：課題設定する力 深：深く洞察し解決する力 協：協働で参画する力
* 都合により「講師の先生などの人の話を丁寧に聴き(傾聴)、研修・実習について意図や背景を幅広く理解できる。」という文言の場合もある

	質問項目	4つの力	質問内容
A	表現力	多	研修・実習について、学んだことを伝えることができる。
B	背景の理解	多	研修・実習について意図や背景を幅広く理解できる。*
C	科学的探究の理解、予測	課	研修・実習について、自分なりの仮説を立て、検証方法を考えることができる。
D	科学的知識の理解	深	研修・実習について、内容を理解している。
E	科学的現象の考察、説明	深	研修・実習について、調べた情報を付加して考察、説明できる。
F	協働・チームワーク	協	研修・実習について、ディスカッションをしたり、目的を達成するためのチームでの自分の役割を見つけ果たしたりすることができる。

上記の質問項目による行事アンケート（4件法）について、各事業の事前から事後の変化量および事後の平均値を以下に示す。例年の課題であった「協働で参画する力」の育成の観点から、「コウノトリの郷公園等での研修」の代替として始めた「地域の環境技術研修」に注目する。昨年度は「コウノトリの郷公園等での研修」の平均値は0.55、行事全体の平均は0.50であり、 $(\text{コウノトリの郷公園等での研修}/\text{行事全体の平均}) = 0.55/0.50 = 1.10$ である。一方、 $(\text{地域の環境技術研修}/\text{行事全体の平均}) = 0.46/0.28 = 1.64$ であり、年度による違いを考慮すると、「地域の環境技術研修」の方が「協働で参画する力」の育成の効果が比較的に高い可能性がある。これは、「地域の環境技術研修」では、株式会社タクマ様の社員の方々と交えてグループワークを行ったことを反映していると考えられる。また、同じく「協働で参画する力」について、昨年度と比べて、今年度は「六甲アイランド高校との合同中間発表会」での結果が、年度による違いを考慮しても高い（昨年度： $0.34/0.39 \approx 0.87$ 、今年度： $0.56/0.47 \approx 1.19$ ）。昨年度の感想において「交流」と答えた者の割合は8.0%（3/38）、今年度では15%（6/40）であった。交流の機会が「協働で参画する力」の成長を促す一因かもしれない。

表2 行事分析の結果

		変化量						事後					
		A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F
1年生	数学特別講義	0.58	0.55	0.63	0.80	0.63	0.35	3.15	3.08	3.15	3.35	3.10	3.23
	地域の環境技術研修	0.56	0.54	0.33	0.62	0.41	0.46	3.13	3.21	3.15	3.26	3.03	3.26
	人と防災未来センター研修	0.36	0.82	0.50	0.59	0.64	0.32	2.95	3.32	3.00	3.23	3.18	2.82
	人と自然の博物館研修	0.38	0.25	0.33	0.48	0.53	0.10	2.95	2.83	2.88	3.13	2.90	2.78
	地域の工場見学	0.41	0.46	0.36	0.44	0.51	0.28	3.13	3.23	3.13	3.21	3.21	3.15
	留学生交流会	0.27	0.35	0.24	0.45	0.39	0.25	3.04	3.10	2.97	3.14	3.08	3.04
	大阪公立大研修	0.33	0.43	0.43	0.53	0.38	0.23	3.13	3.18	3.15	3.30	3.20	3.00
	サイエニア7	0.51	0.51	0.51	0.54	0.49	0.38	3.03	3.05	2.92	3.16	3.08	2.81
	小田高併子生徒研究発表会	0.40	0.46	0.51	0.63	0.49	0.23	3.03	3.03	3.17	3.17	3.06	2.74
	平均	0.42	0.49	0.43	0.56	0.49	0.29	3.06	3.11	3.06	3.22	3.09	2.98
2年生	神戸女学院大学研修	0.51	0.41	0.51	0.77	0.49	0.38	3.38	3.28	3.18	3.54	3.36	3.41
	六甲アイランド高校との合同中間発表会	0.62	0.51	0.62	0.59	0.56	0.56	3.33	3.36	3.33	3.44	3.33	3.46
	清和小学校算数理科教室	0.39	0.42	0.37	0.55	0.32	0.37	3.47	3.45	3.34	3.61	3.45	3.55
	サイエニア7	0.53	0.58	0.63	0.47	0.50	0.26	3.34	3.45	3.32	3.45	3.32	3.08
	小田高併子生徒研究発表会	0.63	0.50	0.47	0.55	0.61	0.47	3.58	3.61	3.42	3.55	3.66	3.53
	平均	0.54	0.48	0.52	0.59	0.49	0.41	3.42	3.43	3.32	3.52	3.42	3.41

探究活動の結果を以下に示す。理数探究応用、理数探究実践ではどの項目についても事後の到達度が3.5前後となっている。4件法であることから、 $2.5/3 \approx 0.83$ 前後の到達度となっており、高い効果を上げていると考えられる。

理数探究基礎について、昨年度と比較して、変化量が小さかった (p13参照)。研修内容が高度な場合に、かえって、難しく感じてしまった可能性がある。今年度より内容を変更した事業については来年度に精査する必要がある。

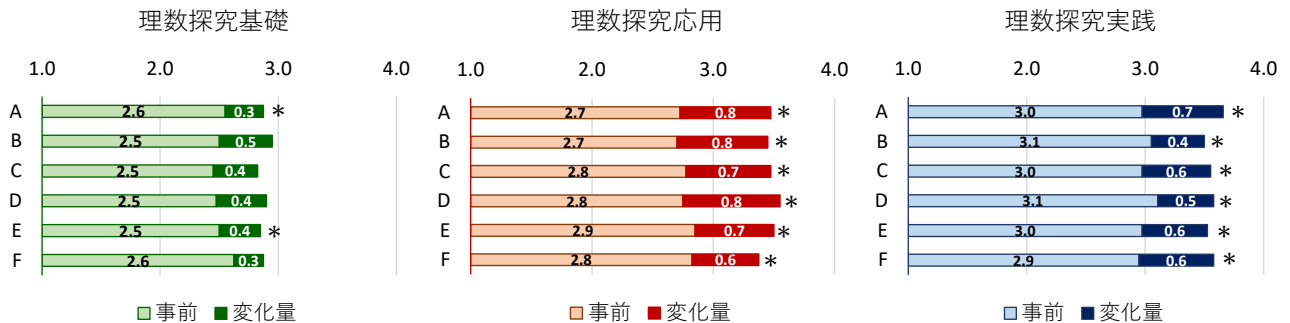


図1 SR科探究活動について、4つの力に関する4件法アンケートの結果（3学期実施、事前、事後の到達度を回答）。図には、事前到達度の平均と、変化量の平均を示した。図中の*はウィルコクソンの符号順位検定の結果、事前から事後に有意な変化がみられたもの（有意水準：ボンフェローニ補正値 $0.05/18 \approx 2.8 \times 10^{-3}$ ）

3学期「探究応用」アンケートについて、普通科（看護医療・健康類型を除く）生徒を対象に、この6年間の推移を分析した。図2Aについて、「面白かった」、「将来の役に立つ」と回答した割合は高水準を維持している。IV期当初（R3）と比べて、身についた力の数は大きくなっている。また、探究活動とかわりのある教科の一人当たりの数は図2Cである。1.5程度で推移しているが、教科横断型の探究活動を目指すのであれば、2.0以上となることが望ましい。

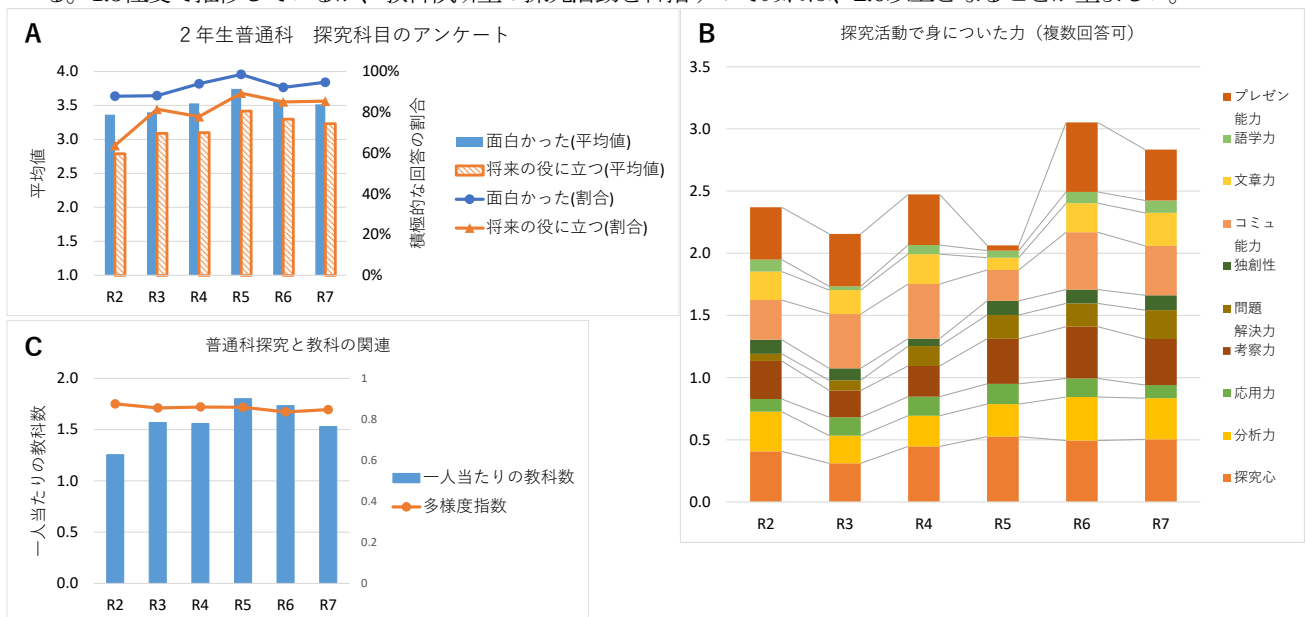


図2 探究応用（看護医療・健康類型を除く普通科）のアンケート結果の3年間の推移。
A: 探究活動についての感想の4段階評価（4：当てはまる、3：どちらかと言えば当てはまる、2：どちらかと言えば当てはまらない、1：当てはまらない）の平均値と積極的な回答（4または3）の割合。
B: 「探究活動で、自分についてと思う力はどんな力ですか？（複数選択可）」の結果について、各年度のアンケート人数で割った値。
C: 棒グラフ：探究内容がどの教科とかわりが深いのか、1人当たり回答教科数（9教科から複数選択可）。折れ線グラフ：シン普森の多様性指数（ $1 - \sum_{i=1}^9 p_i^2$ ， p_i ：教科iの回答数の割合）

2. 科学技術人材育成に関する取組状況

SSH事業全体を通して、科学技術人材育成に取り組んできた。研究開発の経緯はp21も参照。

SR科生徒について探究活動で身についた力は図3Aの通りである。各学年で「探究心」や「考察力」が大きく（探究心:1年:0.83,2年:0.75,3年:0.68、考察力:0.50 1年:,2年:0.65,3年:0.55）、科学技術人材として必要な素養が養われている。1年生において、「探究心」と答えた生徒は80%以上であった。今後の探究活動の

レディネスが形成されている。プレゼンカの育成状況が他学年と比べ小さい。理数探究基礎でさらなる発表の機会を設ける工夫が考えられる。

また、3年生の3年間の身につけた力の推移は図3Bの通りである。コミュニケーション力や文章力などアウトプットする力も身につけており、科学技術人材としての素養を伸ばすことができている。

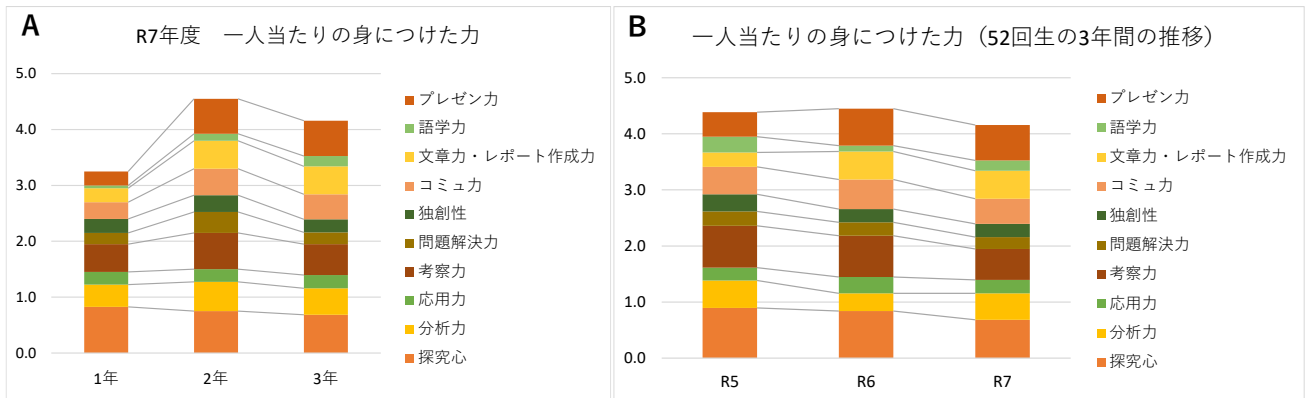


図3 SR科SSH生徒調査アンケート（3学期実施）「探究的な活動によって、身についたと感じる事がら（いくつでも）」の結果について、回答者数で割った値。A：R7年度 B：52年生（R7年度卒業生）の3年間の推移

3. 生徒のSSHアンケートの調査結果と教員および保護者の学校評価アンケート

本校で実施したSR科のSSHアンケートを分析した。次のA～Jの項目について4段階で回答した。図4Aでは項目H（SSH行事は楽しかったか）や項目I（SSH事業は自然科学への関心や知識を高める役に立ったか）について、積極的な回答をした生徒の割合は全学年で80%以上であった。SSH事業について、全体の満足度は高い。1年生では項目C（授業で学んだことが、社会で多く用いられていることへの気づき）の結果が他学年より大きく、例年にない傾向である。この傾向が来年度以降もみられるのか、注目し続ける必要がある。

表3 SR科のSSHアンケートの質問項目

学習	
A	昨年と比べて（1年生は中学の時と比べて）、科学全般（理科・数学）の学習に対する興味・関心・意欲はどうなりましたか。（向上度合）
B	昨年と比べて（1年生は中学の時と比べて）、実験・観察等によって、授業内容の理解が深まると感じましたか。（深まり）
C	授業で学んだことが、社会で多く用いられているという気づきはありましたか。（気づきの多さ）
探究的な活動（1年の理数探究基礎(自然探究の方法)、2年の探究II(自然科学研究)、3年の探究III(科学英語)など。3年生は、3年間で振り返って答える。）	
D	探究的な活動への参加状況として、あなたの活動にあてはまるものを選んでください。（積極性・他者との協力）
E	情報機器（PC等）の操作技術について、どのように感じますか。（向上度合）
F	他者へ伝える（プレゼンテーション）技術について、どのように感じますか。（向上度合）
本校のSSH事業の取組	
G	英語の取組（1年：留学生交流会、3年：科学英語表現）を行っていますが、昨年と比べて、科学分野での英語の必要性をどう思いますか。（大切さ）
H	SSHの行事に参加してみて、楽しかったですか。（全体を通しての満足度） SSHの行事：自然探究の方法、コウノトリの郷公園研修、人と自然の博物館研修、自然科学研究、発表会、科学英語発表会（2、3年）、特別講義、工場見学(1年)、大阪公立大学研修(1年)など
I	SSH事業に参加してみて、自然科学に対する関心や知識を高めるために役立ちましたか。（全体を通しての効果）
J	進路をどのように考えていますか。（理系の大学・自然科学系の就職）

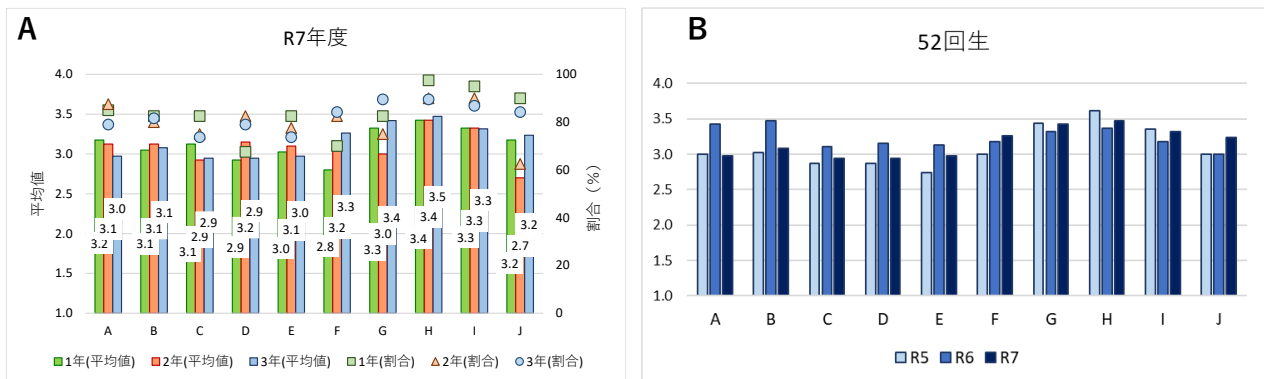


図4 A：SR科SSH生徒調査アンケート（3学期実施）の結果。

棒グラフ：4件法の平均値。マーカー：積極的な回答（4段階における3または4の回答）を選んだ者の割合。

B：52回生のアンケート結果の推移。数値は4件法の平均値。

教員自己評価アンケートの結果、SSH事業は本校の特色化に役立っていると答えた教員は98%であった（表3）。全校的な探究活動の取組によって、高水準が維持されていると考えられる。生徒が学ぶ力や考える力を得られるように工夫していると答えた教員は96%であり、IV期を通して、90%以上の高水準が維持されている。

表4 教員自己評価アンケートの結果（抜粋）

質問項目	よくできている・概ねできている					
	1期 初年度 (H17)	4期 1年目	4期 2年目	4期 3年目	4期 4年目	4期 5年目
SSH事業は本校の特色化に役立っている	63 %	94 %	89 %	98%	100%	98%
生徒が学ぶ力や考える力を得られるように工夫している	73 %	93 %	92 %	96%	93%	96%

保護者による学校評価アンケートの結果を図5に示す。図5Aについて、「生徒にとってわかりやすい授業が行われている」の結果について、R4年以降、表4の教員の意識の変化（生徒が学ぶ力や考える力を得られるように工夫している）と数値の変化の傾向が対応している。教員への意識付けが効果的であると考えられる。ただし、「あまり当てはまらない」、または「当てはまらない」と答えた割合は37%に上ることから、さらなる改善の余地がある。また、保護者から見た生徒の学校生活への満足度もR3年度より上昇傾向にあるが、今年度は80%程度の保護者が満足しており、頭打ちとなっている。今後も高水準を維持することが求められる。

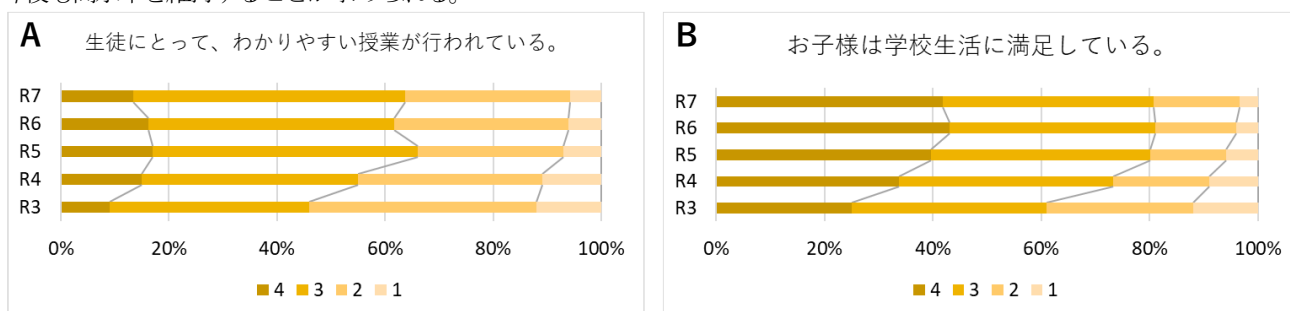


図5 保護者による学校評価アンケートの結果（抜粋）。4件法。数値が高いほど当てはまっていることを表す。

4. 探究学習の効果を検証するアンケートとその統計的分析について

(1) 概要

本校では探究活動は全校における実施となっており、探究をすすめる力と一般学力との関連について、京都大学国際高等教育院の楠見孝教授協力の下、探究活動の統計的なアンケートを実施し、その分析を行っている。分析結果の概要は次の通りである（p14を再掲）。

探究的学習スキルと批判的思考態度の平均評定値(5段階評定) (H29年7月～R7年2月の結果)

- ・SR科、国際探求学科とも学年進行による向上がみられた→探究的学習の成果のあらわれ
- ・SR科、国際探求学科とも年次進行による向上がみられた→実践の蓄積による教育効果のあらわれ

また、京都大学教育学研究科梶谷哲史氏で、探究活動と境遇活用スキルの関連についての共同研究を引き続き行っている。同氏による報告会「探究学習と境遇活用スキルの関連—2年間の縦断調査の結果報告—」を今年度実施した（後述）。

(2) 教員研修会

以下の研修会で共同研究の成果を他校に発信した。

- | |
|--|
| ①「探究活動で育む資質・能力と学力向上 —兵庫県立尼崎小田高等学校の実践から—」
日時：令和7年8月5日（火）13:30～15:30
場所：兵庫県立尼崎小田高等学校 視聴覚室
講師：京都大学 国際高等教育院 副教育院長・特定教授 楠見 孝 先生
目的：
・探究活動や教科学習において必要とされる基礎的資質を整理し、掘り下げる。
・本校対象に行われてきた探究的学習スキルや批判的思考態度と学力の関係についての研究成果を校内外に普及する。
参加：本校教員30名、他校（8校）教員9名 |
| ②「探究学習と境遇活用スキルの関連—2年間の縦断調査の結果報告—」
日時：令和7年8月29日（金）13:30～15:30
場所：兵庫県立尼崎小田高等学校 視聴覚室
講師：京都大学大学院教育学研究科 大学院生 梶谷哲史 先生
目的：本校における、探究活動と境遇活用スキルとの関連について、アンケート分析結果を報告し、今後の探究活動の指導の一助とする。
参加：本校教員38名、他校（7校）教員9名 |

5. 課題研究の評価開発の取組

(1) 概要

京都大学教育学部教育評価学の西岡加名恵教授の指導のもと、ルーブリックを用いた探究活動の評価を開発してきた。現在、理数探究応用の評価で用いているルーブリック（p69）は、平成27年度に本校教員および当時、同研究科大学院生であった大貫守氏の協力の下で作成されたものを、令和元年7/28に京都市立堀川高校で行われた「探究型学力 高大接続シンポジウム」で紹介された「標準ルーブリック」を参考にしつつ、同研究科の西岡教授および大学院生の鎌田祥輝氏の協力・指導の下で3期目に作成したものである。「問い」「方法」「結果」「考察」「表現」の5観点であり、そのルーブリックも用いて、SR科2年「理数探究応用」において、個人の評価を作成している。

(2) SR科の課題研究の成績作成

SR科の課題研究の「理数探究応用」の生徒の評価については、生徒にルーブリックを示しながら検討会を持ち、学期末には2つの資料（A：課題研究を評価するルーブリック（問い、方法、結果、考察、表現）、B：実験ノートレポート等の生徒の成果物、授業や取り組みへの自主的な参加度合い、授業中の対話等を評価するルーブリック）を用いて数値評価を作成している。

(3) SR科の課題研究を評価するルーブリック

現在、本校の自然科学研究の評価で用いているルーブリックは、京都大学大学院教育学研究科の大学院生だった大貫守氏の協力の下で作成されたものを改変したもので、同研究科の西岡教授および大学院生の鎌田祥輝氏の協力・指導の下で3期目に作成された（ルーブリックはp69を参照）。

本ルーブリックは令和2年度より使用し始め、本年度は6年目となる。年度当初に生徒および教員向けにルーブリ

ックの見方についてのガイダンスを実施した。各学期末には担当教員の打ち合わせを行い、課題研究の途中段階でのルーブリックの基準の認識の共有を図った。今年度担当教員の要望があり、ルーブリックの説明資料を作成し直した。

生徒にルーブリックを配布し、各学期末に自分が今どの段階に位置しているのか、次の段階に進むためには何が必要か考えさせた。そして、自己評価とその根拠をルーブリックの記述欄に記述させ、担当者と生徒が面談した。面談での話し合いを通して、生徒と教員との間での評価基準の認識や生徒の段階について共有し、次の段階に向けて何をすべきかを確認した。

(4) 教員研修会

以下の研修会では、前年度の教員研修会および研究授業での本校の事例研究をもとに、「本質的な問い」を問うパフォーマンス課題の作成方法を研修した。

「探究力を育てるカリキュラムと授業づくり」
日時：令和7年8月29日（金）13:30～15:30
場所：兵庫県立尼崎小田高等学校 視聴覚室
講師：京都大学大学院教育学研究科 西岡 加名恵 教授，同大学院生 山崎貴仁 先生
目的：・「総合的な探究の時間」や理数探究における探究と教科におけるパフォーマンス課題の関係を整理し、本校の事例の意義などについて考える。 ・教科における効果的な授業づくりについて検討する。
参加：本校教員38名、他校（7校）教員9名

(5) 普通科・国際探求学科「探究応用」、「国際探求応用」のルーブリック

普通科と国際探求学科の総合的な探究の時間「探究応用」は2単位、「国際探求応用」は1単位で実施している（詳細はp48を参照）。両科目において数値評価を実施しており、普段の取組、発表の様子、成果物を対象に、ルーブリックおよびチェックリストを用いて評価を行った。

探究応用ルーブリック(教員用)					
項目 評価	思考・判断・表現		思考・判断・表現		主体的に学習に 取り組む態度
	情報収集・分析	論理的思考力	課題設定	まとめ・発表	
5	複数の収集方法で情報が集められており、集めた情報が整理されて、自身の探究に必要な情報のみ残すことができている、多角的な視点で信用性のある分析が行われている	先行研究と自身の収集した情報をもとに、想定される反証を含む他者の視点を取り入れ、論理的な分析・考察が行われている	自身の進路にもつながる、社会問題に関連した理想の問いを設定することができる	自身の探究をよりよくするために試行錯誤し、分かりやすい言葉や身振り内容で伝えようとする気持ちが伝わる発表をすることができる	班内でリーダーシップを取り、各班員に仕事を割り当てながら、作業を取りまとめることができる、また、自らも率先して探究学習を進め、深めることができる。
4	複数の収集方法で情報が集められており、集めた情報が整理されて、自身の探究に必要な情報のみ残すことができている、ある程度信用性のある分析が行われている	先行研究と自身の収集した情報をもとに、論理的な分析・考察が行われている	自身で社会問題に関連した、理想の問いを設定することができる	自身の探究をよりよくしようとする努力が見られ、分かりやすい言葉や身振り内容で伝えようとする気持ちが伝わる発表をすることができる	状況を把握し、できることを自分で見つけ、作業を行うことができる。また、他者と意見を交換し合い、より良い考えを導き出せる。
3	複数の収集方法で情報が集められており、集めた情報が整理されているが、情報発信者の意見に流されてしまっており、自分の意見に活用することができない	自身の収集した情報をもとに、論理的な分析・考察が行われている	自身で具体的な問いを設定することができるが、探究の計画がある程度みえるものである	自身の探究をよくしようとする努力が見られ、聴衆を見ながら発表をすることができる	他者とも意見を交換したり行動する。一方で、他者の意見を取り入れないか、または、自分の作業だけにしか取り組むことができない。
2	情報収集はできているが、一通りの収集方法であったり、集めた情報が整理できていない	自身の収集した情報をもとに、分析・考察が行われているが、論理的に説明されていない	自身で問いが設定できているが、漠然としていて探究の計画ができていない	自身の探究をよくしようとする努力が見られず、原稿を眺むだけで内容を伝えようとする気持ちが感じられない	他者とも意見を交換したり行動するが、他者の意見を取り入れず自分の作業しかしていない。または、班員で分担した学習活動を、自ら責任をもって果たすことができず、他人に任せてしまう。
1	情報が十分に集められていない	自身の収集した情報をもとにした分析・考察ができていない	自身で問いが設定できていない	自身の探究をよくしようとする努力が見られず、発表することができない	自分の考えのみであり、他者の意見を聞かない。班で取り組む学習活動に対して、消極的な影響を与えてしまう。

探究応用[知識・技能]チェックリスト(教員用)	
<input type="checkbox"/> 分かりやすく工夫されたプレゼン資料やポスターを作ることができる	<input type="checkbox"/> 指示した書式で提出することができる
<input type="checkbox"/> 探究のテーマ・設定理由・方法・結果・考察・今後の展望の要素がすべて満たされている	<input type="checkbox"/> 資料（図表など）や収集した情報を適切に使うことができる
<input type="checkbox"/> 先行研究・参考にした探究・引用文献・参考文献・資料（図表など）の典拠を明らかにしている	<input type="checkbox"/> 誤字、脱字がない

(6) まとめ

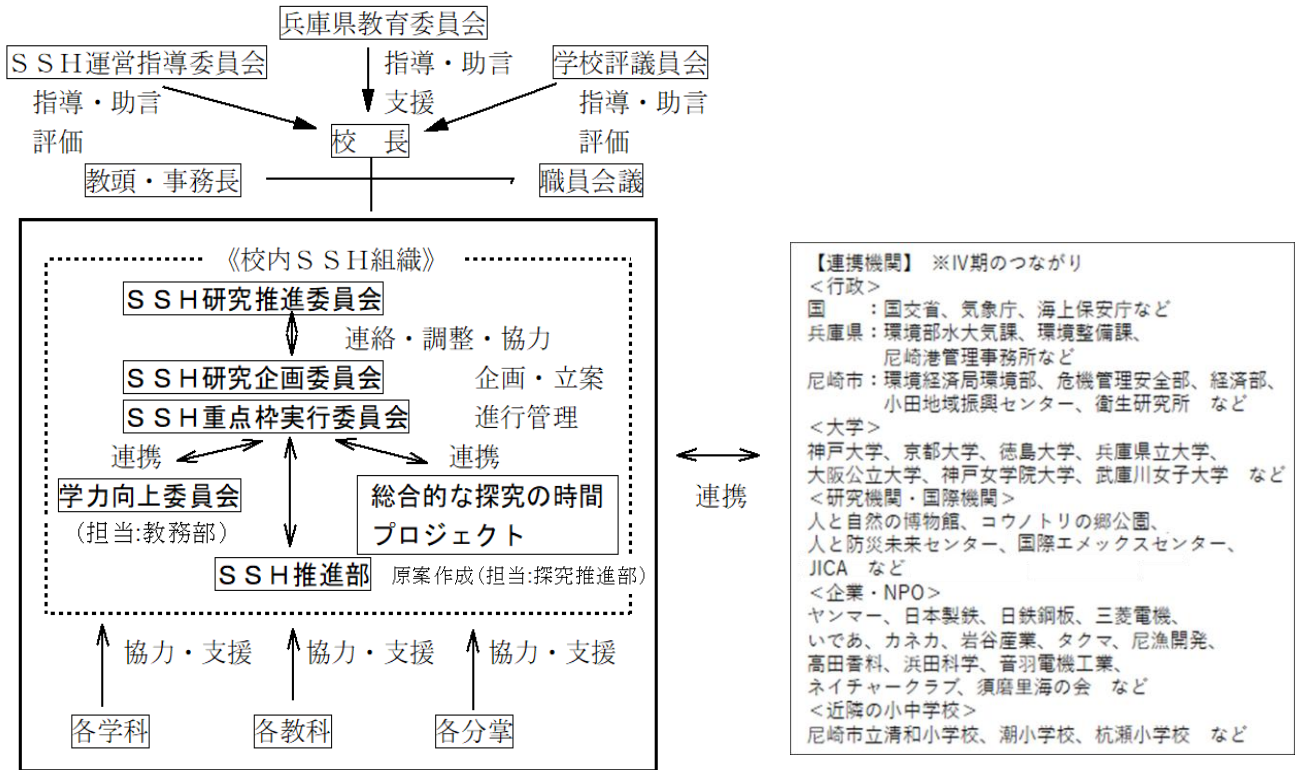
SR科におけるルーブリックの運用については、ガイダンスでの説明をかみ砕いて行う必要がある。普通科や国際探求学科について、探究活動を数値評価することの影響を、意見集約の後、分析する必要がある。

[5] S S H中間評価において指摘を受けた事項のこれまでの改善・対応状況

	中間評価（改善の指摘があった箇所を抜粋）	改善の取組
① 管理体制、 成果の分析	<p>a. 成果の分析について、課題として挙げられている、長期的な変容を測ることができよう改善することを期待したい。</p> <p>b. 基礎枠の実施計画書に書かれている「尼崎小田版のマニュアル」について、今後の成果物を公開することを期待したい。</p>	<p>a. 2017年より開始された、京都大学国際高等教育院副教育院長授楠見孝氏による、探究活動を通じた批判的思考態度スキルや探究学習スキルの変容やそれらのスキルと教科学力との関連調査によって長期的な変容を測ることができている。</p> <p>b. 「尼崎小田版探究マニュアル」を Web 上に公開した。 https://docs.google.com/document/d/10MZYtECSEUJH_boFBthEWaZpPreRmma0_941SRNvIY/edit?tab=t.0#heading=h.26r2b1i0xu6x</p>
② 教育内容等	<p>a. 普通科・国際探求科における探究科目の数値評価の開発を試みており評価できる。今後はその成果を他校に公開し、活用されることを期待したい。</p> <p>b. 各教科に探究活動を取り入れ、教科横断型の授業を実施する計画になっているが自己評価票等の提出資料からは積極的に実施している取組が見られなかったため、着実に実施する必要がある。</p>	<p>a. 本校への視察や探究の公開授業の際に、本校の数値評価の取組、そのための本校の評価手法の紹介を行い、情報交換を行った。理数探究基礎や探究をこれから本格的に行う高校の参考となる情報発信を今後も行う。</p> <p>b. 令和6、7年度、教科における探究活動について教員研修会を実施した。また、令和7年度、教科における探究活動をテーマに研究授業週間を設けた。</p>
③ 指導体制等	<p>a. 探究活動に関する指導力向上のために、他校の教師を含めた教員研修会を実施している点は評価できる。今後、研修会の成果の分析を行い、その成果を公開することを期待したい。</p> <p>b. 統計・データサイエンス分野における数学科との連携や、外国語科と数学科との連携指導が行われている。今後は理科と他教科の連携にも期待したい。</p>	<p>a. 令和7年度の探究活動に関する教員研修会では、令和6年度の教員研修会で扱われたパフォーマンス課題の本校での事例紹介および改善を行った。他校より9名の教員が参加した。</p> <p>b. サイエンスリサーチ科3年生「理数探究実践」（英語教員、ALT3名、理科教員によるTT授業）では、探究活動の内容の英語翻訳や、英語による科学講義、実験を行っている。</p>
④ 外部連携・国際性・ 部活動等の取組	<p>a. 科学部に所属する生徒は延べ80名であるが、天文学部に偏っているため、今後は他の分野の部員数も増えることを期待したい。</p>	<p>a. R7年9月時点で生物班17名、化学班28名、天文班60名である。</p>
⑤ 成果の普及等	<p>a. 防災教育の普及活動に尽力している点が評価できるため、今後はこの取組がより組織的な取組になることを期待したい。</p> <p>b. 従来からの評価に関する京都大学との連携によって、多くの資料が蓄積されているため、それらのノウハウの普及が望まれる。</p> <p>c. 防災や環境に取り組んだ成果が蓄積されていると考えられるため、地域の小中学校への発信を今後期待したい。</p>	<p>a. 本校が地域防災活動の「HUB」となり、地域の防災力向上を目指す「防災フェス」がこれまで看護医療・健康類型を中心に行われてきたが、R7年度より1年生全員参加行事とした。</p> <p>b. ホームページにて、探究活動の評価に用いるルーブリックを公開している。 https://amagasakioda.ed.jp/wp-content/uploads/2025/04/fb0ab3f703b09c1397cc6b1b8d77a8f3.pdf</p> <p>c. R6年度、看護医療・健康類型2年生が、「探究応用」の授業の一環で、尼崎市市内小学校3校に「防災出前授業」を実施した。また、環境学習フォーラム（尼崎）やエコあまフェスタなどで地域の小中学生にむけて、本校の環境の取組の紹介やワークショップを行った。</p>

[6] 校内におけるSSHの組織推進体制

① 校務分掌



② 組織運営の方法

a 校内のSSH組織の縦の連携

SSH推進部（専門部）がSSH事業を企画・立案し、各事業担当者からなるSSH研究企画委員会とSSH重点枠実行委員会が事業を実施し、管理職及び関係部・教科主任からなるSSH研究推進委員会で学校全体の連絡や協力体制の調整を行うよう、効率的に縦の連携を行う組織としている。

b 校内の委員会との横の連携

SSH事業推進の中心となる研究企画委員会と重点枠実行委員会がリードする形で、授業研究会やシラバス作成等を所管する学力向上委員会と連携して授業改善や教科の枠を超えた授業の実施等の取組、探究活動の推進や教科の授業での探究活動の実施等の取組を行う。また、探究活動を進路実現に生かす意味で進路指導部との連携も行っていくなど、有機的に横の連携を行う組織としている。

[6] 研究開発実施上の課題及び今後の研究開発の方向性・成果の普及

1. 研究開発実施上の課題及び今後の研究開発の方向性

A 3期16年の実践の成果の発信・周知（4期目のミッション）

さらなる普及に向けて、本校の探究マニュアルや事例集などプラットフォームのさらなる整備と、京都大学大学院教育学研究科など外部のプラットフォームにも本校の事例を載せていただき、全国的な探究活動、課題研究などの教育活動に貢献する。IV期を通した課題として、発信した成果に対するフィードバックのしくみづくりが挙げられる。改善案として、web資料のダウンロード数の把握等が考えられる。

B 探究活動の質の向上と新学習指導要領における探究科目の実践的モデル化

個に応じた探究活動や主体的な探究活動の支援のため、生成AIの活用方法について、研究開発、実践を行うことが方向性として挙げられる。全校展開の中での課題研究の内容の深化が課題である。SSH事業で研究開発を行ってきた科学技術的な研究と本校他学科で研究開発を行ってきた社会科学的な探究のさらなる総合が求められる。この点については、IV期を通した課題としても挙げられる。改善案として探究活動の途中段階での学科間交流等が考えられる。

C 各教科での探究活動を取り入れた授業改善とカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた教科横断型の取組

「探究活動を意識した教科実践事例」のさらなる集約が求められる。併せて、教科横断型の授業を特定の科目に限らずに行うと良いと考えられ、この仕組みづくりが求められる。この点はIV期を通した課題でもある。探究活動を意識した教科学習は教科横断型の思考と相性が良いと考えられ、「探究的な授業」の全校展開等が改善案として挙げられる。

D 行政機関等と連携した環境や防災・減災等に関する探究活動による地域社会への貢献・参画

本仮説内容は、学校全体としてみた場合に達成できていると考えられる。また、SR科の中でも環境問題についての探究活動や防災につながる探究活動がみられるが、地域課題への取組は他学科と比べると、盛んでない。運営指導委員会での助言にあるように、地域課題へのアプローチがより活発な普通科とSR科が合同でフィールドワークに行く等の取組によって、SR科の地域課題への取組が増える可能性が考えられる。

E 京都大学大学院との連携による汎用性のある探究活動の評価方法の提示と探究活動が教科の学力向上に結び付くことの科学的な立証

SR科の課題研究を評価するルーブリックについて、引き続き新たな担当者間での評価基準の認識のすり合わせや改良を行う必要がある。ルーブリックを用いた数値評価の実践の中で、特に、年度当初と学期末に担当者の打ち合わせが必要であることが見えてきた。これは担当教員が異なる状況で評価の公平性を担保する意味だけでなく、探究活動の目標の共有にもつながるからである。汎用性のある探究活動の評価方法として、成果物としてのルーブリックのみならず、年間での評価計画についても整理し提示する点が今後の課題として挙げられる。また、探究活動と教科の学力向上の関係について、引き続きデータを蓄積することも、今後すべきこととして挙げられる。

F グローバルな視点で地球規模の課題に関心を持ち英語で議論できる力の育成

SR科2年生における英語活動の促進が方向性として考えられる。本校国際探求学科との交流をより深めることで、達成される可能性がある。また、本年度は台湾海外研修等の国際交流が盛んにおこなわれた。この取組を継続して行い続ける手立てについて模索できると良い。

G オンライン等のICTの活用による特別講義や実習、広域連携等の工夫した取組と対面との効果の比較検証

オンラインは手軽である一方、対面での事業を通して得られる効果もみられた。特に、対面での発表では、オンラインと比較して、コミュニケーション力やプレゼンテーション力が身についたと回答されている。対面による交流の事前事後研修としてのオンラインのさらなる活用が課題である。

2. 成果の普及

(1) 事業成果の普及

(ア) 課題研究の取組実践の普及

- ・HP掲載している「尼小田版探究活動マニュアル」の更新、県内阪神地区の高校に発信。
- ・本年度は熊本県立熊本北高、沖縄県立球陽高、鹿児島県立錦江湾高の視察を受け、本校のSSHの取組や成果を発信。

(イ) 課題研究の地域への還元と科学的リテラシー普及の取組

- ・大阪湾・武庫川 地域課題ミニワークショップを開催し、本校併せて5校共同でワークショップを実施した。
- ・神戸新聞「理科の散歩道」にて、本校教員の記事が掲載された。
- ・「親子理数教室 in 尼崎小田高 2025」を実施し、地域の小学生向けに実験会を実施した。
- ・「尼崎 臨海 来んかい! 体験会～環境学習フェア 2025～」 「エコあまフェスタ」、「青少年のための科学

の祭典 2025 神戸会場大会」等の地域の催しに SR 科研究班や科学研究部が出席。

- ・野鳥観察会を実施し、その内容を Instagram に投稿。

(ウ) 重点枠の取組の効果の普及

- ・本校重点枠高校生サミットにて、参加校へディスカッションの手法等を引き続き普及。
→ 高校生サミットの取組が新聞記事で紹介 (p19 参照)。

(エ) 評価研究や探究活動に関する研究開発の普及

- ・京都大学大学院教育学研究科西岡教授と連携した教員研修会を実施 (p61参照) し、他校教員に参加を募り、理数探究における探究と教科におけるパフォーマンス課題の関係について、本校の事例を交えての講義を受けた。
- ・同大学国際高等教育院楠見副教育院長・特定教授との共同研究による探究的学習スキルや批判的思考態度と一般学力の関連性についての研究成果、および同大学教育学研究科梶谷哲史氏との共同研究による探究学習と境遇活用スキルの関連についての研究成果を、研修会の形式で他校教員に普及した (p60参照)。

(2) 研究成果の普及

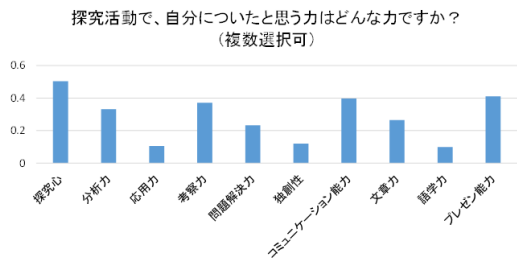
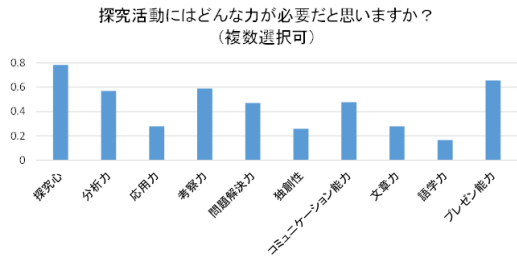
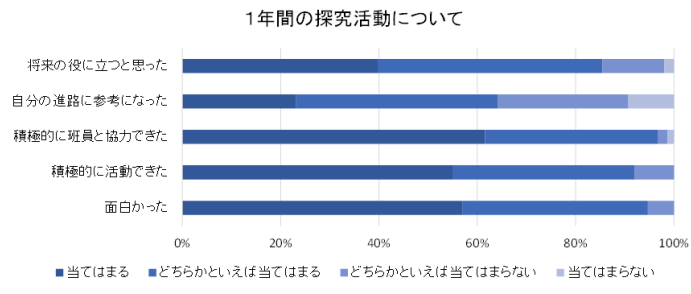
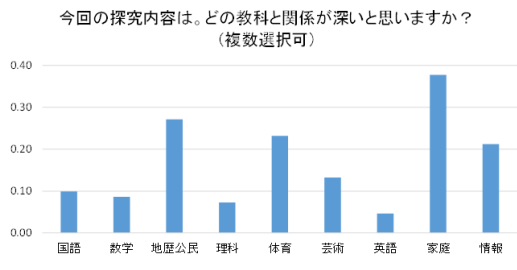
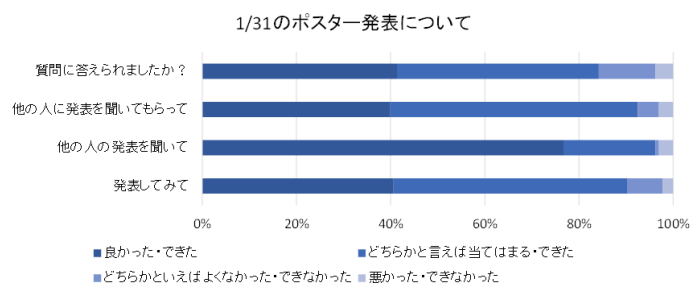
課題研究や探究活動の成果については、学会や高校生の外部向け発表会等で発表し、その成果を発信した。

時期	事業	参加者
6月	日本食品化学学会高校生発表	SR科研究班
7月	Science Conference in Hyogo	SR科研究班
7月	サイエンス・ギャラリー (奈良青翔高校)	SR科研究班
7月	尼崎 臨海 来んかい! 体験会～環境学習フェア2025～	SR科研究班
8月	猪名川水環境交流発表会 (いながわ体験フェスタ)	科学部
8月	SSH生徒研究発表会	SR1,2年,3年代表者
8月	伊丹市生物多様性交流フェスティバル	科学部
8月	マスフェスタ	SR科研究班
8月	坊っちゃん科学賞 研究論文コンテスト	SR科研究班、科学部
9月	日本動物学会 高校生ポスター発表	科学部
9月	ひょうご里山・里海国際フォーラム(兵庫県主催)の高校生ポスターセッション	SR科、普通科研究班
9月	日本学生科学賞 兵庫県コンクール	SR科研究班、科学部
9月	青少年のための科学の祭典2025 神戸会場大会	科学部
9-12月	SSH台湾海外研修 (事前研修、研修旅行)	希望者
10月	次世代防災ジュニアリーダーによる「震災をつなぐ・伝える」フォーラム	看護2年代表者
11月	令和7年度高大連携課題研究合同発表会 at 京都大学	科学部
11月	五国※ 「高校生のための減災復興学フォーラム」	看護2年希望者
11月	エコあまフェスタ	SR科研究班
11月	地域課題解決に取り組む高校生サミット	希望者
11月	高校生・私の科学研究発表会	科学部
11月	第48回県総文自然科学部門発表	科学部
12月	高大連携フォーラムin京都大学	希望者
12月	ひょうごユースecoフォーラム (ポスター出展)	SR科研究班
12月	リサーチフェスタ (甲南大学)	SR科、国探研究班
1月	サイエンスフェア in 兵庫	SR科1,2年
2月	尼崎でつながる地域の活動報告会	全学科2年より5班
2月	共生のひろば	科学部
3月	SDGsフェア in AMA 2026	看護2年探究班
3月	日本藻類学会 高校生ポスター発表	科学部
3月	日本水産学会 春季大会高校生発表	科学部、SR科研究班

五国※ : 五国SSH連携プログラム

発表者について: 国探: 国際探求学科、看護: 看護医療・健康類型、科学部: 科学研究部

1 R7 普通科の「探究応用」の生徒アンケート



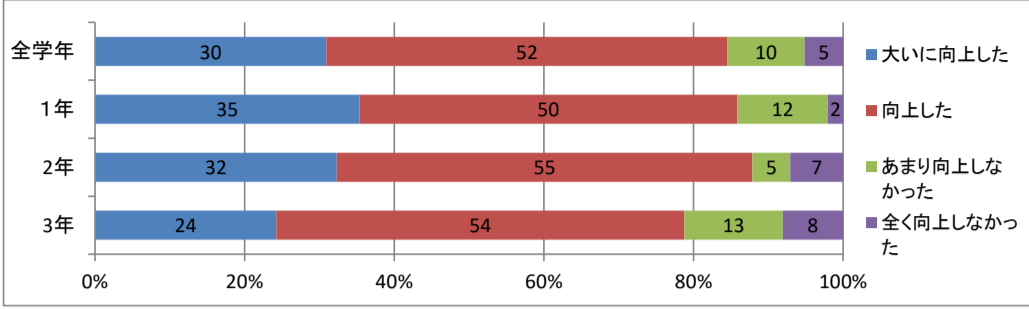
2 R7 「理数探究応用 (自然科学研究)」「国際探求応用」「探究応用」テーマ一覧

● : SSH「小田高リサーチ」生徒研究発表会における代表発表班 (※ 国際探求学科の代表班は合同班)

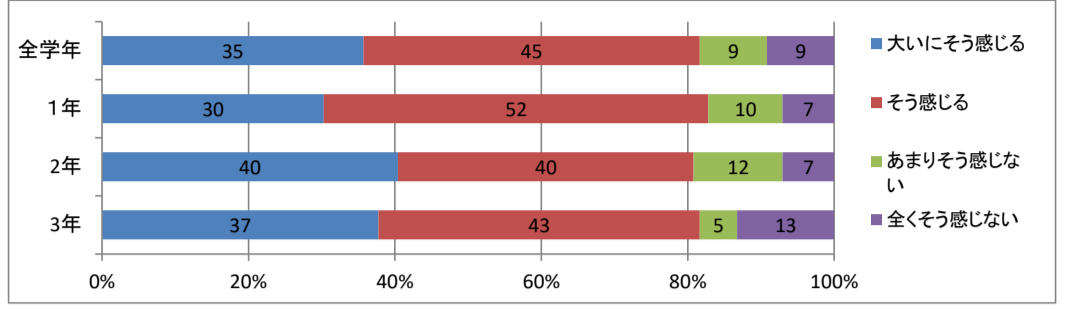
<p><SR科:15テーマ>●革から作る再生繊維/学習に適した英単語アプリの開発/イテの素数生成多項式を超える/ホボ コス型風車のプレート の形による発電量の差/イリダ観測データでみる地震の前兆/『ごみじゃない、燃料だ!』～落ち葉を支える未来～/尼崎運河と蓬川に発生する浮遊ごみの発生源/近畿産卵 Tridenter obscurus およびスズメ T.brevispinis の遺伝的集団構造/ゴムの交替制御反応は光で阻害できるのか/クスとコマの接ぎ木による成分移行について/焼肉の匂いを作る/微生物燃料電池の発電の効率化/メモリ効果の温度変化での違いについて/電気を使わないレコードプレーヤー/物理量や落とす時の紙の向きによって、落ち方や床に落ちるまでの時間が違う!? 紙の落ち方</p>
<p><国際探求学科:7テーマ>●日本食・日本文化を通して外国人を支援する。/●食を通して外国人を支援する/日本政府は16歳未満の子どものSNS使用を禁止すべきか。/なぜ日本は外国の海洋プラスチック政策を取り入れないのか。/災害時の多言語対応/難民のために私たち高校生ができること/英語に対する苦手意識をどのようにすれば減らせるのか</p>
<p><普通科:43テーマ>街灯～暗い道から明るい道～/フィールドワーク・商店街使いやすい公園を増やすには?/バックギャン/将棋/枕コネクト/ニュースポーツ・障害の有無をなくす/スポーツ・技術差なくしてみた/男女で競い合えて楽しめるスポーツを作ってみた/睡眠時間が身体能力と思考能力に与える影響/最高の睡眠をかなえる道具たち/こころとおやすみ～睡眠と心理の関係について～/最高に質の良い睡眠/あなたと好きの相性、知りたくない?/絵本やEテレ、子どもの興味を惹く理由って?～学びを活かしたかるたづくり～/廃棄率と飢餓の問題とは/食品ロス削減/子どものおやつ/小麦と米粉で/の子どもの平等に～/今の交通公園に足りないものは何か?/先生のお子さんたちの嫌いな食べ物をなくせるかな/下敷きを使って、防災の意識を高められるのではないかな/お菓子は非常時の心の充電/もし、小田高が避難所になったら・・・/音楽で長距離走タイムが速くなるかも!/目覚ましの音によって寝起きの状態は変わるのか/音が勉強に与える影響/スポーツと柔軟/の重要性(バスケットボール)/Soccer×MBTT ～With Love For Soccer～ Get over it!/グローバルな社会を目指して/マーケティングを生かして、どのように商品を売り上げるか/小学生のいばしょ/カードドライブ/カードドライブにおける社会貢献/食べる防災、考えてみた/2025 ーば未来会議 by nuts/2025 ーば未来会議 by 大和肥料/これからの尼崎はどのような業種が増えていくのか/トリック/青い食べ物と食欲/と音の関係性/色・味・香りの相互作用-人は食をどう感じるか-/勉強中に音楽聴いてる人集合</p>
<p><普通科(看護医療・健康類型):12テーマ>トランスジェンダーのトイレ問題/性暴力と心的外傷後ストレス障害(PTSD)の関係-被害後の心と、支援のあり方を考える/『好き』が怖くなる社会 -LGBTQ+の視点から見る好意の前提と沈黙の理由- /男性への性暴力とジェンダー固定観念- 声をあげられない被害者が生まれる社会の背景を探る -情報通信技術(ICT)を利用することでどのような条件があれば高齢者の孤独を和らげることができるのか/マルレ(動物介在活動)は、在宅療養者や高齢者の孤独をどのようにやわらげるのか/する側-される側-にならないための虐待防止教育/防災を自分ごとにするために - 高校生が考える『伝える防災』/今の防災を知ろう!-高校生が考える未来の防災/公立高校の部活動の行方/高校生アートの栄養-お弁当に着目して-子どもの運動能力向上のために</p>

令和7年度 SSH 生徒アンケート調査結果 (SR科生徒対象)

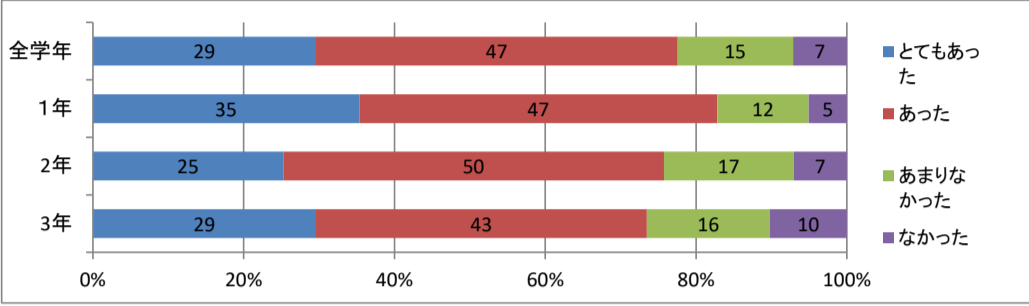
① 昨年と比べて(1年は中学の時と比べて)、科学全般(理科・数学)の学習に対する興味・関心・意欲はどうになりましたか。



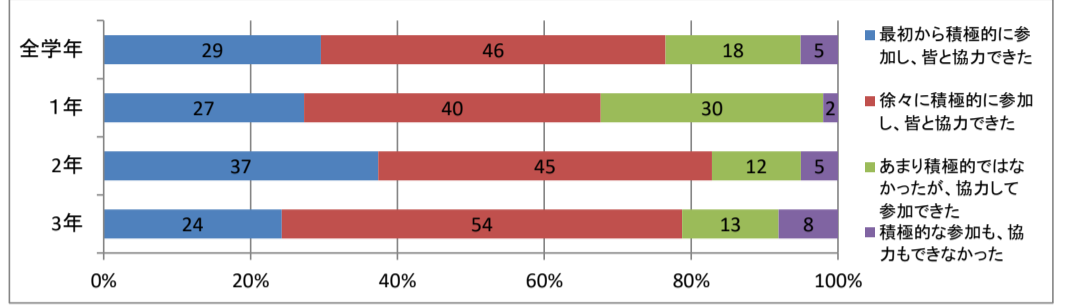
② 昨年と比べて、実験・観察等によって、授業内容の理解が深まると感じましたか。



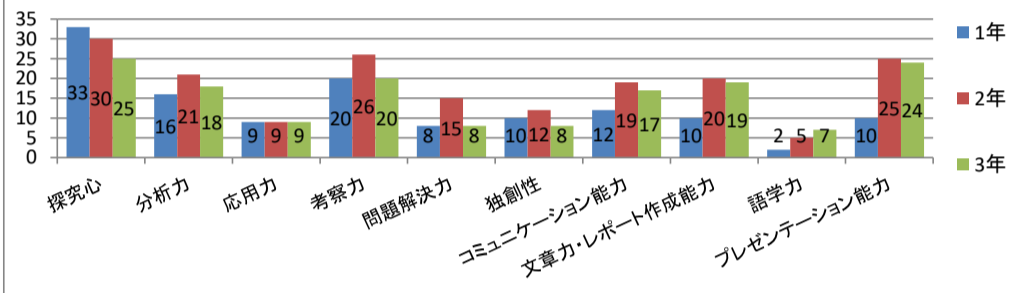
③ 授業で学んだことが、社会で多く用いられているという気づきがありましたか。



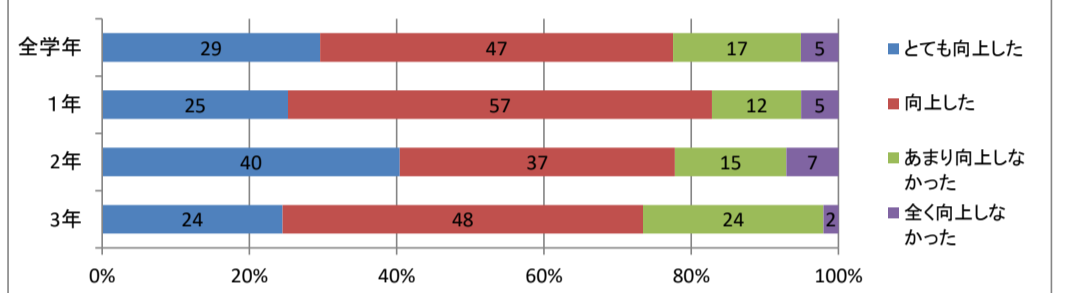
④ 探究的な活動への参加状況として、あなたの活動にあてはまるものを選んでください。



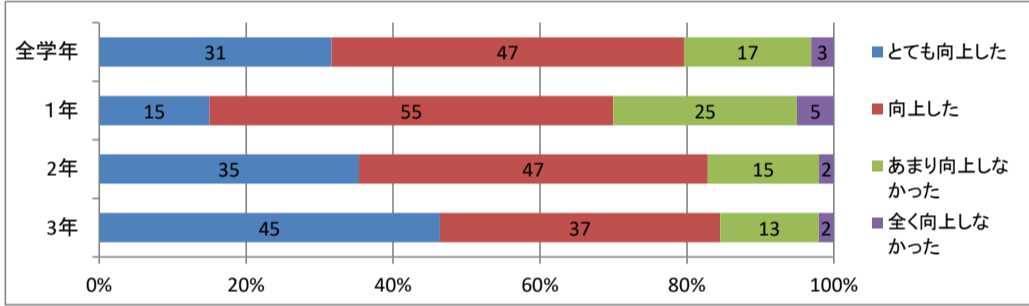
⑤ 探究的な活動によって、あなたが身についたと感じる事について、当てはまるものを選んでください(複数選択可)。



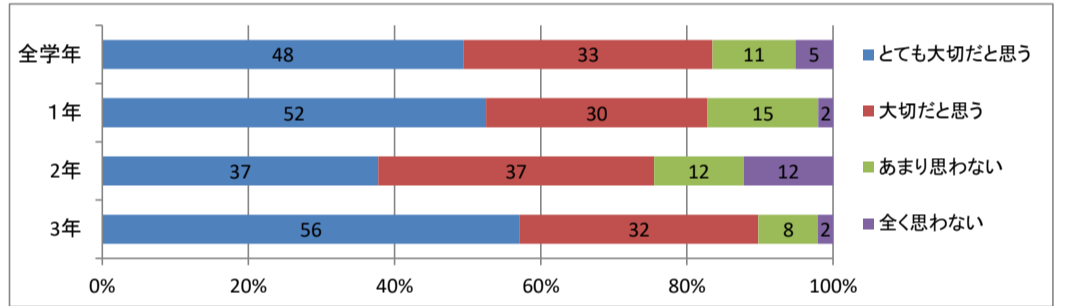
⑥ 情報機器(PC等)の操作技術について、どのように感じますか。



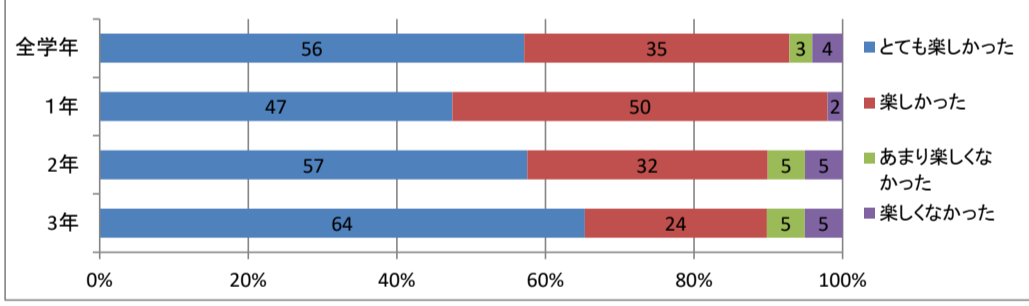
⑦ 他者へ伝える(プレゼンテーション)の技術について、どのように感じますか。



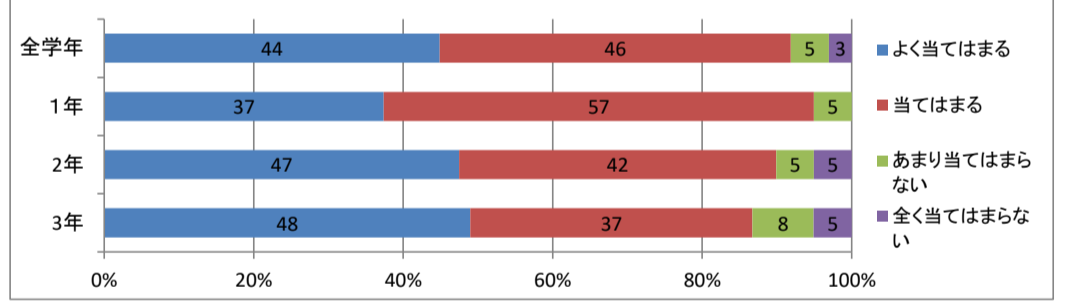
⑧ 本校の英語の取り組みとして、1年では留学生交流会、3年では科学英語表現を行っています。あなたは、昨年と比べて、科学分野における英語の必要性をどう思いますか。



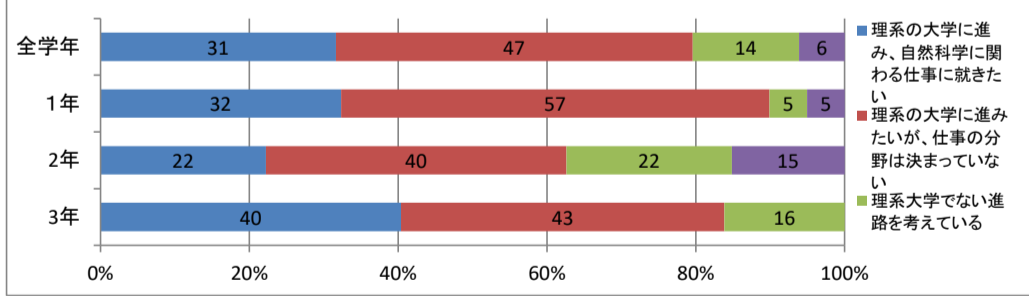
⑨ SSHの行事に参加してみて、楽しかったですか。



⑩ SSH事業に参加してみて、自然科学に対する関心や知識を高めるために役立ちましたか。



⑪ 進路をどのように考えていますか。

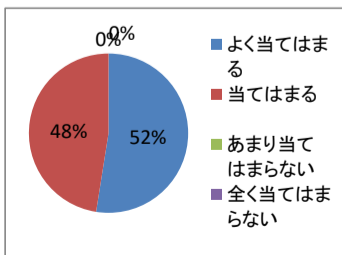


(1年生のみに質問)

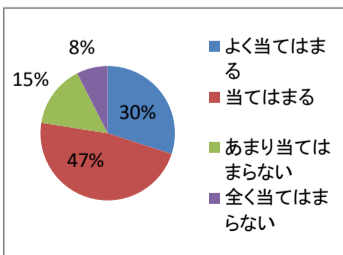
あなたが本校のSR科を志望した理由は何ですか。すべて下の①～④から1つを選んでください。

①よく当てはまる ②当てはまる ③あまり当てはまらない ④全く当てはまらない

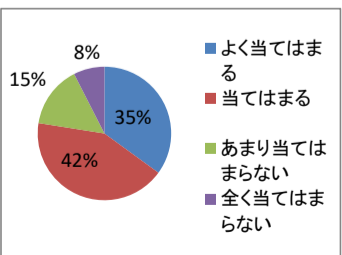
⑫ 理数系分野に興味・関心があるから



⑬ 本校の学校説明会や「学校案内」、ホームページ等を見て、SR科に興味を持ったから。



⑭ SSH事業の指定を受けているから



令和7年度 SSH事業実施後アンケート

事業名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
数学特別講義	神戸女学院大学研修	地域の環境技術研修	瀬戸臨海実験所実習	人と防災未来センター研修	人と自然の博物館研修	地域の工場見学	留学生交流会	自然科学研究合同中間発表会	小学生理科算数教室	大阪公立大学研修	サイエンスフェアin兵庫	SSH生徒研究発表会(1年)	SSH生徒研究発表会(2年)	理数探究基礎	理数探究応用	理数探究実践	
回答人数(人)	40	39	39	23	33	40	39	71	39	38	40	75	31	35	40	38	38
質問・回答																	
問1 内容は面白かったですか。(%)																	
5 面白かった	57.5	51.3	48.7	78.3	30.3	52.5	48.7	45.1	53.8	63.2	47.5	46.7	42.9	63.2	42.5	60.0	57.9
4 どちらかといえば面白かった	25.0	41.0	35.9	21.7	57.6	22.5	30.8	43.7	41.0	26.3	37.5	44.0	34.3	31.6	42.5	35.0	31.6
3 どちらとも言えない	12.5	7.7	12.8	0.0	9.1	12.5	15.4	8.5	5.1	10.5	10.0	8.0	17.1	5.3	7.5	5.0	10.5
2 どちらかといえば面白くなかった	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	0.0	2.8	0.0	0.0	2.5	1.3	2.9	0.0	5.0	0.0	0.0
1 面白くなかった	2.5	0.0	2.6	0.0	3.0	10.0	5.1	0.0	0.0	0.0	2.5	0.0	2.9	0.0	2.5	0.0	0.0
問2 今回の内容は、自分の新しい発見がありましたか。(%)																	
5 あった	35.0	69.2	35.9	65.2	21.2	40.0	43.6	36.6	59.0	39.5	45.0	53.3	28.6	63.2	35.0	62.5	52.6
4 どちらかといえばあった	42.5	30.8	53.8	26.1	57.6	37.5	30.8	43.7	38.5	42.1	35.0	34.7	45.7	28.9	45.0	35.0	39.5
3 どちらとも言えない	17.5	0.0	7.7	4.3	18.2	10.0	20.5	14.1	2.6	18.4	10.0	12.0	14.3	5.3	7.5	2.5	7.9
2 どちらかといえばなかった	2.5	0.0	2.6	0.0	0.0	2.5	0.0	5.6	0.0	0.0	5.0	0.0	8.6	0.0	7.5	0.0	0.0
1 なかった	2.5	0.0	0.0	4.3	3.0	10.0	5.1	0.0	0.0	0.0	5.0	0.0	2.9	2.6	5.0	0.0	0.0
問3 今回の内容は、自分の知識を高めるのに役に立ちましたか。(%)																	
5 役立った	47.5	69.2	38.5	60.9	39.4	47.5	33.3	47.9	61.5	42.1	52.5	48.0	34.3	76.3	40.0	77.5	50.0
4 どちらかといえば役立った	35.0	30.8	51.3	26.1	45.5	27.5	43.6	42.3	30.8	23.7	27.5	41.3	42.9	18.4	42.5	22.5	44.7
3 どちらとも言えない	15.0	0.0	7.7	8.7	12.1	12.5	17.9	7.0	7.7	34.2	10.0	10.7	14.3	2.6	10.0	0.0	5.3
2 どちらかといえば役立っていない	2.5	0.0	2.6	0.0	0.0	5.0	0.0	1.4	0.0	0.0	7.5	0.0	5.7	2.6	2.5	0.0	0.0
1 役立っていない	0.0	0.0	0.0	4.3	3.0	7.5	5.1	1.4	0.0	0.0	2.5	0.0	2.9	0.0	5.0	0.0	0.0
問4 内容は、自分なりに理解できましたか。(%)																	
5 理解できた	40.0	56.4	38.5	52.2	24.2	40.0	38.5	31.0	46.2	68.4	32.5	38.7	17.1	52.6	30.0	62.5	52.6
4 どちらかといえば理解できた	30.0	38.5	51.3	34.8	60.6	40.0	33.3	47.9	48.7	28.9	37.5	48.0	57.1	31.6	47.5	30.0	47.4
3 どちらとも言えない	22.5	5.1	7.7	4.3	12.1	10.0	23.1	16.9	5.1	2.6	15.0	12.0	20.0	15.8	15.0	7.5	0.0
2 どちらかといえば理解できなかった	7.5	0.0	0.0	4.3	0.0	2.5	2.6	2.8	0.0	0.0	12.5	1.3	2.9	0.0	2.5	0.0	0.0
1 理解できなかった	0.0	0.0	2.6	4.3	3.0	7.5	2.6	1.4	0.0	0.0	2.5	0.0	2.9	0.0	5.0	0.0	0.0
問5 また、このような事業に参加したいと思いませんか。(%)																	
5 参加したい	55.0	71.8	53.8	73.9	33.3	42.5	43.6	43.7	56.4	57.9	52.5	45.3	22.9	63.2	52.5	55.0	47.4
4 どちらかといえば参加したい	17.5	23.1	28.2	26.1	30.3	30.0	33.3	39.4	38.5	28.9	25.0	36.0	54.3	18.4	22.5	32.5	36.8
3 どちらとも言えない	20.0	5.1	15.4	0.0	33.3	15.0	12.8	9.9	5.1	10.5	15.0	18.7	14.3	15.8	15.0	10.0	15.8
2 どちらかといえば参加したくない	7.5	0.0	2.6	0.0	0.0	2.5	7.7	5.6	0.0	2.6	5.0	0.0	5.7	2.6	5.0	2.5	0.0
1 参加したくない	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	10.0	2.6	1.4	0.0	0.0	2.5	0.0	2.9	0.0	5.0	0.0	0.0
問6 参加したことで、今回の内容に興味関心が高まりましたか。(%)																	
5 高まった	52.5	61.5	48.7	73.9	24.2	37.5	35.9	33.8	46.2	42.1	42.5	48.0	22.9	63.2	37.5	60.0	52.6
4 どちらかといえば高まった	27.5	33.3	38.5	21.7	63.6	37.5	35.9	50.7	46.2	39.5	35.0	37.3	48.6	28.9	45.0	32.5	34.2
3 どちらとも言えない	12.5	5.1	10.3	4.3	9.1	12.5	23.1	12.7	7.7	18.4	10.0	13.3	22.9	7.9	10.0	7.5	13.2
2 どちらかといえば低くなってしまった	7.5	0.0	2.6	0.0	0.0	7.5	2.6	2.8	0.0	0.0	10.0	1.3	2.9	0.0	2.5	0.0	0.0
1 低くなってしまった	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	5.0	2.6	0.0	0.0	0.0	2.5	0.0	2.9	0.0	5.0	0.0	0.0
問7 参加したことで、今回の内容についてもう少し知りたいと思うようになりましたか。(%)																	
5 なった	45.0	53.8	38.5	65.2	21.2	40.0	38.5	38.0	48.7	39.5	42.5	45.3	22.9	55.3	30.0	55.0	47.4
4 どちらかといえばなった	27.5	41.0	38.5	26.1	57.6	30.0	28.2	45.1	35.9	36.8	35.0	42.7	48.6	28.9	52.5	35.0	44.7
3 どちらとも言えない	20.0	5.1	20.5	8.7	18.2	17.5	23.1	15.5	15.4	23.7	12.5	9.3	20.0	15.8	7.5	10.0	7.9
2 どちらかといえばならなかった	7.5	0.0	2.6	0.0	0.0	5.0	5.1	1.4	0.0	0.0	7.5	2.7	5.7	0.0	5.0	0.0	0.0
1 ならなかった	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	7.5	5.1	0.0	0.0	0.0	2.5	0.0	2.9	0.0	5.0	0.0	0.0
問8 参加したことで、自然科学への興味関心が高まりましたか。(%)																	
5 高まった	40.0	43.6	35.9	60.9	24.2	40.0	33.3	31.0	43.6	28.9	37.5	42.7	14.3	44.7	35.0	55.0	50.0
4 どちらかといえば高まった	15.0	46.2	38.5	34.8	60.6	37.5	35.9	28.2	41.0	34.2	37.5	44.0	51.4	36.8	37.5	27.5	28.9
3 どちらとも言えない	37.5	10.3	20.5	4.3	12.1	10.0	17.9	32.4	15.4	31.6	15.0	13.3	28.6	15.8	17.5	15.0	18.4
2 どちらかといえば低くなってしまった	5.0	0.0	5.1	0.0	0.0	2.5	7.7	8.5	0.0	2.6	5.0	0.0	5.7	2.6	7.5	2.5	2.6
1 低くなってしまった	2.5	0.0	0.0	0.0	3.0	10.0	5.1	0.0	0.0	2.6	5.0	0.0	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0
問9 今回の事業に参加して、関連した教科(理、数、英など)の授業を積極的に参加しようと思うようになりましたか。(%)																	
5 なった	35.0	41.0	23.1	52.2	21.2	25.0	35.9	33.8	38.5	36.8	35.0	40.0	25.7	34.2	32.5	50.0	47.4
4 どちらかといえばなった	37.5	38.5	56.4	34.8	42.4	35.0	33.3	39.4	43.6	23.7	40.0	34.7	42.9	34.2	40.0	35.0	31.6
3 どちらとも言えない	25.0	17.9	15.4	13.0	30.3	22.5	23.1	21.1	15.4	36.8	22.5	22.7	25.7	26.3	20.0	12.5	18.4
2 どちらかといえばならなかった	2.5	0.0	5.1	0.0	3.0	10.0	2.6	5.6	0.0	0.0	0.0	1.3	5.7	2.6	2.5	0.0	2.6
1 ならなかった	0.0	2.6	0.0	0.0	3.0	7.5	5.1	0.0	2.6	2.6	2.5	1.3	0.0	2.6	5.0	2.5	0.0
問10 今回の事業に参加して、自分の視野を広げたり将来を考えたりするのに役立ちましたか。(%)																	
5 役立った	42.5	59.0	43.6	56.5	24.2	27.5	38.5	36.6	43.6	36.8	47.5	37.3	20.0	57.9	45.0	55.0	36.8
4 どちらかといえば役立った	35.0	30.8	41.0	39.1	51.5	42.5	38.5	42.3	43.6	42.1	37.5	45.3	48.6	31.6	37.5	35.0	57.9
3 どちらとも言えない	15.0	10.3	10.3	0.0	21.2	20.0	17.9	16.9	12.8	21.1	5.0	16.0	28.6	5.3	10.0	5.0	2.6
2 どちらかといえば役立っていない	2.5	0.0	2.6	0.0	0.0	2.5	2.6	4.2	0.0	0.0	7.5	1.3	2.9	2.6	5.0	2.5	2.6
1 役立っていない	5.0	0.0	2.6	4.3	3.0	7.5	2.6	0.0	0.0	0.0	2.5	0.0	0.0	2.6	2.5	2.5	0.0

令和7年度 高校生の課題研究を評価するためのルーブリック

2年 2組 番 氏名:

段階	基準	問い		方法		結果		考察		表現			
		(製作型の探究では「問いや仮説」を「作りたいもの」と置き換える)											
		問いと仮説の設定		調査計画の立案		データの処理や解釈		説明の構成		研究内容の発表や交流			
5	非常に優れた研究に	基準	深めてきた問いや仮説について、その学問的・社会的価値を調べた上でその意義を説明している	調査計画が研究を深めるものであり、かつデータの信頼性を考慮している	調査結果を合理的にまとめ、解釈した上で緻密に分析できる	考察が論理的で問いや仮説が適切に検証されており、より広い分野の研究と比較した上で、新たな問いを生み出す内容である	理論的に、発表し、かつ議論をすることで研究をさらに深めようとする	徴候	・深めてきた問いや仮説について、社会や学問においてどのような位置づけにあるか、参考文献等を調べた上で当該分野の話題を取り上げている。 ・数多くの実験をした上で、それを踏まえた仮説を立てている。	・実験の信頼性や精度、誤差の評価を考慮して複数試行することやより精度の高い検証の方法などを考えている。 ・実施の都度、自分で振り返りをし、目的に応じて、計画を修正する。 ・先行研究、先行事例や既存の理論を参考にしつつ、調査方法の妥当性を評価しつつ、選択できる。	・統計処理や数学的な思考をすることで証拠として使える形へ変換する。 ・実験と理論式を結びつけている。 ・実験の可否や可能性を探るなかで、データの検証や有効性の確認ができる。 ・必要に応じて、考察に必要な実験条件を提示している。	・得られたデータと先行研究や先行事例とを比較・関連づけて、考察で不足な点や今後研究が必要な点を明らかにしている。 ・進めてきた研究が、先行研究、先行事例や既存の理論の中でどう位置づけられるか、述べている。 ・事象のモデル化を意識することができている。	・他者の意見や見解から学び、自分の意見を修正したり、論拠をもとに反論する。 ・議論を通して、新たな問いを生み出そうとしている。
	次の段階へ向けて	徴候	・幅広い範囲の先行研究や先行事例を調べ、理解して、自分たちの研究の意義を説明する。 ・オリジナルな研究を行うための要件を考える。	・データの信頼性を検討する。 ・全体の論旨の流れに無理がないか考え、必要な実験内容をディスカッションする。	・統計処理を行い、信頼性を確かめる。 ・理論式などの科学的モデルと結びつける。	・今回の研究を先行研究、先行事例や既存の理論と比較する。	・議論を通して、知りたいことを考える。 ・調査を通して分からない点をまとめておく。						
4	研究を深めている	基準	調べたものを吟味して、問いや仮説を設定し、深められる	研究を深める調査計画を立てられる	調査結果を合理的にまとめ、解釈できる	考察が論理的で、問いや仮説が適切に検証されており、今後の課題と結びついている	理論的に発表し、かつ議論ができる	徴候	・問いをかみ砕き、先行研究や先行事例と照らし合わせて、研究で明らかにする範囲を明確化している。 ・複数の実験をした上で、それを踏まえた仮説を立てている。 ・明らかにしたい事象や目的を持った上で、問いや仮説を立てている。	・問いの段階で設定した仮説について、その成否を検証する上で必要な調査の方法を考えている。 ・調査全体の枠組みと個々の実験と関連を考えて計画している。 ・より適切な形へと、思考実験や個々の実験の後に修正する。 ・より適切な実験条件の下で、実験を行っている。 ・実験の再現性を考慮できている。	・データの提示と解釈が正確に行われている。 ・状況に応じて定量的な解釈と定性的な解釈を結びつけて検証している。 ・既に得られている各種データと、自らの予想に整合性があることを確認している。	・考察で不足な点や今後研究が必要な点を明らかにしている。 ・得られたデータと先行研究や先行事例とを比較・関連づけている。 ・適切な主張・証拠が含まれ、それらが筋の通った(一貫した)論理で構成されている。 ・考察から新たな問題を解決するための気づきがなされている。	・調査全体を通して明らかにしたことを、相手に伝わるように説明している。 ・自分の発表を客観的に見直し、不足している点や想定される批判を考えている。 ・行った調査の中から発表に必要な要素を取捨選択している。
	次の段階へ向けて	徴候	・次に出てくる問いを考える。 ・先輩の研究だけでなく、自分の興味のある文献や論文を調べ、同じグループ内で発表する。	・新たに出てきた問いを調査する方法を考える。	・さらにデータをまとめられないか考える。 ・複数のグラフを結びつける。 ・先行研究や先行事例におけるデータ処理などを理解する。	・今後の課題を考える。 ・データの扱い、導かれる結論について、グループ内でディスカッションを行う。	・どのような批判が予想されるかを考える。 ・自分たちの発表をビデオ撮影し、繰り返し見て、改善点、良くなった点を話し合う。 ・論旨をまとめ、なるべく短く発表してみる。						
3	研究と呼べる水準に	基準	調査を進められるような問いや仮説を設定している	問いや仮説に合った、実行可能な調査計画を立てられる	調査結果をまとめ、一定の解釈をしている	論理的な考察がされている	理論的に発表できている	徴候	・検証可能な問いや仮説を立てている。 ・仮説が明瞭で分かりやすい。 ・研究の動機が明白である。	・問いの段階で設定した仮説と一致する調査の方法を自分で考え、計画、実施をする。 ・実行可能な計画である。	・得られたデータの種類や調査目的に応じて、データを適切なグラフや表などの形で自らで考え表す。 ・データから、一定の合理的考察に結びつけている。 ・データの種類や調査の目的に応じて、グラフや表で表現する。 ・調査結果を整理し、必要な情報を抽出している。 ・データの傾向がつかめている。	・結果と考察を区別し、考察では自分の主張とそれを支援する証拠をおおまか含み、論理を用いて客観的に考察を構成している。 ・結果として出てきた数値について、過不足なく考察している。	・調査全体を通して明らかになったことを発表する。発表においては聞き手を意識し、手順を丁寧に説明したり、実験装置の実物や動画を用いるなどして伝え、質問の応答など双方向のコミュニケーションが成立している。
	次の段階へ向けて	徴候	・先輩の研究を調べ、人のやっていない事をさがす。また、その研究を理解するためのまとめ学習やレポートをする。	・実際に行うことを想定して実験計画を考える。	・グラフの種類を調べる。 ・データの解釈をする。	・データの解釈について討論する。 ・先行研究や先行事例における結果の扱いを学ぶ。	・聞き手の立場を意識する。 ・今回の研究の意義が聞いている人に伝わっているか考える。						
2	調べ始めるが、水準に達していない	基準	漠然とした問いや仮説がある	問いや仮説に合った調査計画を立てているが、内容が漠然としている	調査結果をまとめているが、解釈されていない、または不十分である	論理的な考察が不十分である	発表はしているが論理的でない	徴候	・問いや仮説を立てているが、検証可能性を考慮できていない。 ・研究の動機が分かりにくい。 ・検証する対象の妥当性が考慮されておらず、仮説が不適切である。	・研究手法と手続きを示している。 ・やりたいことはあるが、先行き不透明な計画、実施の状況である。 ・実験等が目的に合っておらず、検証方法が不適切である。	・記録にとどまり、合理的な解釈やまとめをできていない。 ・適切なグラフや表を選択できていない。 ・データの提示をしているが、その傾向をつかめていない。	・おおまか正しい主張や証拠を含んでいるが、それらを論理的に結びつけられていない。教師の支援のもと、適切な証拠にもとづいた主張を形成する。 ・考察が研究目的と一致していない。	・発表では、調査の概要を羅列的に説明し、客観的に自分の発表を捉えたりできず、情報を提示するのみになっている。質問に適切に回答することにも困難が見られる。
	次の段階へ向けて	徴候	・生徒同士で話し合い、共通の興味を引き出す。	・まずはやってみる。	・グラフや表にまとめる。	・結果から言えることは何かを考える。	・何を伝えたいのか明確にする。						
1	調べ始める段階で	基準	問いを出せない	問いや仮説に合った調査計画を立てられない	結果をまとめられない	論理的な考察がされていない	発表をまとめられない	徴候	・教師に与えられた問いを意識することができず、仮説を立てられない。	・調査計画を立てられない。 ・調査を実行することにおいて不備がある。	・得られたデータをどのように処理したら良いのかわからない。	・主張や証拠の結びつきに誤りを含んだり、構成した主張や証拠に誤りがある。その結果、主張が恣意的なものになり、説得したり、信頼を得る主張でなくなる。	・発表を行う際に、必要な要素を抽出することができない。聞き手の質問の意図を掴んだり、適切な答えを返すことに困難が見られる。

日付		問い		方法		結果		考察		表現	
		評価	評価の根拠	評価	評価の根拠	評価	評価の根拠	評価	評価の根拠	評価	評価の根拠
/	現在										
	次に目指すこと										
/	現在										
	次に目指すこと										
/	現在										
	次に目指すこと										
/	現在										
	次に目指すこと										

令和7年度 実施教育課程

兵庫県立尼崎小田高等学校

教育課程表		1学年(令和7年度入学生)										2学年(令和6年度入学生)					3学年(令和5年度入学生)				
		普通科	国際探求 学科	サイエンス I#-1科	普通科 文系	普通科 特色	普通科 理系	国際探求 学科	サイエンス I#-1科	普通科 文系	普通科 特色	普通科 理系	国際探求 学科	サイエンス I#-1科	普通科 文系	普通科 特色	普通科 理系	国際探求 学科	サイエンス I#-1科		
普通教育に関する各教科・科目	国語	現代語文	2	2※	2※	2※															
		論語	2	3※	2※	2※															
		古文	4																		
	地理・歴史	地理	2																		
		歴史	2	2※	2※	2※															
		世界史	2																		
	公民	公倫	2																		
		政治	2																		
	数学	数学I	3	3※	3※																
		数学II	4																		
		数学III	3																		
	理科	物理	2	2※	2※																
		化学	2																		
		生物	2	2※	2※																
	芸術	音楽	2	2※																	
		美術	2	2※																	
		書道	2	2※																	
	外国語	英語I	3	3※																	
		英語II	4																		
		英語III	4																		
家庭	家庭	2	2※	2※	2※																
	探求	1			1※																
専門教育に関する各教科・科目	保健	2																			
	情報	2																			
	理数	1																			
	体育	2																			
	音楽	4																			
	英語	3																			
	国際探求	1																			
	サイエンスI	1																			
	健康	2																			
	小田	2	2※	2※	2※	2※	2※	2※	2※												
ホームルーム活動		1										1									
総合的な探究の時間		32										32									
合計		32										33									

備考 <注>数字の後の※印は、必修科目を示す。

7 令和7年度SSH運営指導委員会

■ 令和7年度 第1回SSH運営指導委員会

1 実施日時 令和7年7月2日(木) 14:00 ~ 16:00

2 実施場所 本校 会議室

3 出席者 【運営指導委員】川井 浩史 神戸大学内海地域環境教育研究センター特命教授 委員長 (リモート)

大野 照文 高田短期大学特任教授 副委員長

西岡 加名恵 京都大学大学院教授 (リモート)

会沢 成彦 大阪公立大学大学院理学研究科教授 欠席

山中 亮一 徳島大学環境防災研究センター 准教授

浦川 豪 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 教授

【管理機関】野間 良重 兵庫県教育委員会事務局高校教育課 主任指導主事

【本校】校長 山根 尚 教頭 藤原 守人 三浦 裕子

主幹教諭 難波 滋 福本 稔 四郎園 千華子

教諭 平島拓真 小山卓也 山本 賢 溝口由輝 福田秀志 谷 良夫 浅井尚輝

西村寅壮 村上一寿 富田優次 北方英二 木村恭子 佐々木智之

実習助手 石崎陽子 瀧口貴久 小川 章

4 協議の概要並びに運営指導委員による指導助言の内容

(1) 本校のSSHの取組(現状)について

校長：5期に向けての助言をもらいたい/探究の核となっている高校生サミットを国際エメックスセンターと一緒にやっていけないかと考えている/5期目への助言と、自走のための連携先について助言をもらいたい

委員ら・指導主事：兵庫県の教育方針にとっても、SSH指定校は中心となることを期待している。

教諭：中間報告の時に指摘された「普及」のためにマニュアルを作った/公開授業週間で探究を軸として実施した/SR科の活動を地域に根差したものにしていきたい/台湾研修を含めて、海外との連携を積極的に推進していきたい/SR科の探究テーマによってはゴールに困っているものもある/看護類型として、災害関連死を解決していきたいと思っているが、難しい部分も多く題材が無い/スポーツ健康類型の生徒は個人探究をしている/重点枠では昨年度科学技術から離れた部分もあるので、今年はつなげたい/3期ではうまくいかない部分もあったが、重点枠は類型の防災とつなげていけないかと考えている

2) 今後のSSH活動について指導助言

教諭：4期までと対比させながら5期の申請に向けて準備をしている/尼小田探究プログラムとして、全科類型で、テーマの近接する領域で共創させたい/国際的な探究もしたい/探究科目の充実だけでなく、各科目の中での探究や各科目を深める探究をしたい/育成した課題研究力をどのように地域に活かすか、人文・社会科学領域の生徒に科学技術をどう入れていくかが課題

委員ら：新規テーマによる探究は、生徒の意欲が高そうでありよい。一方で何年か前から続いているテーマは過去の成果の上に立ってほしい。/探究マニュアルを「使って欲しい」と言われていたはずなので、早く出して、他校なり校内なりで使用してブラッシュアップした方がよい/同じ課題やテーマであっても地域差のある課題をプログラムとして課題研究をしてもらえたら良いのでは/普通科や健康類型であっても客観的な論理力が大切だと思う/シェアドリーダーシップの小田高での定義や、総合知の小田高での具体化が必要/「コンピテンシーベース」という言葉も、小田高での解釈を言えたらよい/非認知能力を育成できた、と言えれば成果と言えるのではないか/探究マニュアルがホームページにあるのはよい/地域課題解決に取り組んでいるのが、小田高の良いところ。高齢化等とその地域課題が、日本の全国で同じ点で、汎用性をアピールできないか/まだ日本では注目されていないが、価値ある探究テーマや教材を提案してはどうか/生徒の内面が成長したかどうかはわかりにくいので、先生から見た客観指標が必要/学科、類型、生徒、先生の個々のことについて学校としての方針があればよい/小田高としての総合知をどう定義していくか/次期の申請に向けてはネイチャーポジティブの観点があってもよいかも/ワンヘルスも防災と関連があるかも

教諭：小田高版の総合知、シェアドリーダーシップの測り方が難しい。どうしたらよいか。

委員ら：目指すコンピテンシーを細分化して尺度を作るのは難しい。大学の力を借りた方がよい/保護者から見た子どもの行動変容を見ていけるとよいのでは

5 兵庫県教育委員会による指導助言内容

尼崎小田の強みをいかして欲しい/本日の会議で出た話を基に、概念図を作って出してほしい。

■ 令和7年度 第2回SSH運営指導委員会

1 実施日時 令和7年1月31日(木) 15:45 ~ 16:35

2 実施場所 本校 会議室

3 出席者 【運営指導委員】川井 浩史 神戸大学内海環境教育研究センター特命教授 委員長
大野 照文 高田短期大学特任教授 副委員長
西岡 加名恵 京都大学大学院教授
会沢 成彦 大阪公立大学大学院理学研究科教授
山中 亮一 徳島大学環境防災研究センター 准教授 欠席
浦川 豪 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 教授 欠席
【管理機関】野間 良重 兵庫県教育委員会事務局高校教育課 主任指導主事
【本校】校長 山根 尚 教頭 藤原 守人 三浦 裕子
主幹教諭 難波 滋 福本 稔 四郎園 千華子
教諭 平島拓真 小山卓也 山本 賢 溝口由輝 福田秀志 谷 良夫
北方英二 木村恭子 佐々木智之
実習助手 石崎陽子 瀧口貴

4 協議の概要並びに運営指導委員による指導助言の内容

(1) 本日の研究発表会について

委員ら：個人の興味のある課題の探究が多いが、まず相手に理解してもらう必要があることをさらに意識してほしい。社会課題と自分の関心をクロスさせる研究課題が多く、純粋な興味に基づくものが減ったようにも思えた。フィールドで気づいたこと等に基づく発表が多く、指導の成果かと思う。SR科も普通科とフィールドに行き、身近な課題発見に繋げても良い。探究の最初の段階で生徒に質問リストを教える、弁証法的な思考法やレポートを組み込み、想定される批判を考えさせる等の指導をしても良い。SR科の発表で、設定した課題と実験が合っていないものがあった。行ったことに対して、ストーリーを後で設定して良い。ただし、最初の実験の設計や最後のまとめ方は教員が指導すべき。他学科の発表で仮説という語句がでてきたが、無理に型にはめなくても良い。台湾海外研修の交流の仕方は？

教員、校長：環境と防災にテーマを絞り、その探究活動をお互いに行った。事前にオンラインでディスカッションし、研修旅行でワークショップを行った。高校生サミットの生徒実行委員会と同じ手法を海外で取り入れた事例となった。

教員：例年は別日の普通科全体のポスター発表を今年度は本日実施したが、どうであったか。

委員ら：きちんとやる意思が伝わり、コミュニケーションもできていた。会場は声が聞こえにくかった。学科を超えて交流できることは、小田高のユニークな点である。地域課題をいかに吸い上げ、また、国際的にいかにコミュニケーションするかを問うような、課題解決のためのコミュニケーション力の育成につながる。レポート提出など、異分野の発表を聴き、理解するように促す工夫があると良い。次期の流れの中で、高校生サミットの方法論を具体的に書くと良い。地場の中小企業が多い尼崎の地域で役に立つ探究力を持った人材を小田高は育成するという話を以前聞いたが、現在ある意味で実現している。地域に根差しながら社会で問題解決に取り組む人材を育てている点をアピールしてほしい。ポスター発表では、社会科学的な研究的な知見を位置づけ、この本を読むと面白いなど勧められると良い。また、探究の中で学校だから理想を掲げるのではなく、現実的な意見を伝えても良いと思う。申請書では、具体的な生徒の姿を語ると説得力が増す。SR科の生徒が「社会的な変化を科学的に検証したのか」という趣旨の質問を他学科にしていた。違う発想からの質問がある点が、小田高のシェアードリーダースHIPの事例である。

(2) 次期申請について指導助言

委員ら：あまおだ型探究プログラムについて、あまおだ型とはどのような特徴か具体的に書いたほうがアピールになる。例えば、高校生サミットでやっていること、全部生徒がやって本校で閉じない、「瀬戸内海」のような1つの固有のテーマがある、また、地域課題に取り組む人とグローバルなことに興味を持つ人が1つの高校の中で交流できて、かつ全国の高校とのネットワークの中で交流でき、それを高校生がオーガナイズできる力を育てているなど。その点をわかりやすく示し、他所でも同じモデルになり得るということを示せば良い。総合知やシェアードリーダースHIPもそこにつながると思う。社会課題と自分自身の問いが結びついて、あれだけの生徒の育ちが見えるという点がうまく伝わると良い。

5 兵庫県教育委員会による指導助言内容

今日の発表ではIV期の成果が全校へと普及していることが見えた。探究活動が深まっていると思う。先導I期では探究活動の取組を、あまおだ型探究プログラムと再定義して申請している。

【科学技術人材育成重点枠】

＜広域連携＞

多様な広域連携によるSTEAM教育を通して
地域課題解決に取り組める人材育成

(ア) 科学技術人材育成重点枠実施報告(要約)

(イ) 科学技術人材育成重点枠実施報告書(本文)

(ウ) 科学技術人材育成重点枠関係資料

(ア) 令和7年度科学技術人材育成重点枠実施報告(広域連携)(要約)

① 研究開発のテーマ	
「多様な広域連携によるSTEAM教育を通して地域課題解決に取り組める人材育成」	
② 研究開発の概要	
<p>令和2年度までの7年間の重点枠と交流会支援の実績を踏まえ、瀬戸内海の府県を超えた高校生や専門機関等と共創しながら主体的・科学的な探究活動により、地域の学際的課題の解決に取り組む効果を踏まえて、兵庫県下の地域課題解決に取り組む探究活動を行う高校へつなげていく。兵庫県の多種多様な地域性は、そのまま日本の縮図であり、兵庫県の環境や防災等の学際的な地域課題を考えることは、全国の問題を考えることに通じるものである。多様な地域の様々な連携校と対面とオンラインを活用しながら学際的に地域課題解決について考えることを通して、全国の地域課題解決を考えていく礎にしていく。また、多様な地域の様々な校種の連携校と探究活動を開発した方法は、汎用性ある探究活動を通じた人材育成の方法として、全国的に通じるものとなる。開発した汎用性を検証することもでき、その手法は今後多くの探究活動を行って人材育成していく学校の先進的なモデルとして示していくことができるものとなる。</p>	
③ 令和7年度実施規模	
<p>サイエンスリサーチ(SR)科の生徒を中心に、普通科、看護医療・健康類型および国際探求学科生徒を対象に実施した(全校実施)。</p> <p>瀬戸内をフィールドとしている高等学校を基に発展させ、兵庫県の環境や防災等地域課題に関する研究を行っている多様な地域および校種の高等学校と連携する(35校のうち兵庫県連携24校)。</p> <p>連携校A:瀬戸内海をフィールドとして環境・防災問題等の地域課題に関する研究を行っている高等学校を中心に、瀬戸内海沿岸の高等学校と他地域の海沿岸の高等学校と連携した。</p> <p>連携校B:兵庫県の環境・防災問題等の地域課題に関する研究を行っている、様々な校種の高等学校と連携した。※連携校A、Bの中で、本校を含めた8校による生徒実行委員会を設置した。</p>	
④ 研究開発の内容	
<p>1. 研究の仮説</p> <p>ア 汎用性のある地域課題解決型の課題研究のモデル化</p> <p>これまで高校生サミットの手法は、研究や人材育成としての取組として普及し、大きな効果を生んできている。瀬戸内海の取組を基に、課題研究を行う多様な校種の学校と多様な地域性をもつ日本の縮図である兵庫県の地域課題を考える探究は、全国の高校の汎用性のモデルとなる。</p> <p>イ 多種多様な校種と専門機関の連携によるSTEAM教育からの人材育成</p> <p>他府県・兵庫県の幅広い様々な校種、多様な専門機関と連携することで、自然科学・社会科学的に学際的課題に取り組むSTEAM教育としての多彩な視点を育む人材育成につながる。</p> <p>ウ 生徒主体の協働的活動による人材育成の高い効果</p> <p>連携校が互いに交流することで相乗効果を生みレベルアップが図られる。生徒実行委員会により、主体的・協働的に中心となって企画・運営することでより高い効果を生む。</p> <p>エ オンラインを活用した幅広い連携校との連携</p> <p>令和2年度に新たに開発したオンラインの取組を継続発展させる。オンラインを活用することで、幅広い地域の連携を行うことが可能になり、取組への視点の共有化を図ることができる。</p> <p>オ 生徒の協働活動による変容に関する評価方法の確立</p> <p>多様な校種の連携を通じた生徒の協働活動からの変容を、ポートフォリオやルーブリックを活用して評価し、その効果を検証し、汎用性ある探究活動による成長を測る評価方法を確立できる。</p> <p>2. 研究の内容・方法・検証</p>	

ア 汎用性のある地域課題解決型の課題研究のモデル化の発信

多様な校種の学校と多様な地域性をもつ日本の縮図である兵庫県の地域課題を事例として取り組む探究の成果は、全国のような高校への汎用性のモデルとなる。基礎枠での「尼小田版探究活動マニュアル」と併せ、地域課題の課題研究のモデルとして成果を整理した。その取組や成果を、連携校へ普及し、発信した。

イ 多種多様な校種と専門機関の連携によるSTEAM教育からの人材育成

瀬戸内海の連携校Aを基に兵庫県の連携校Bと府県を超えた幅広い様々な校種の連携、さらに多様な専門機関からなる多彩な視点の取組との連携を通して、STEAM教育として学際的地域課題解決へ向けた視点を養う人材育成へつなげた。

a. 連携校（24校のうち兵庫県連携24校）：連携校A（瀬戸内海[一部他地域含む]、連携校B（兵庫県）の環境・防災等の地域課題に関する研究を行う様々な校種の高等学校

※本校を含めた8校による生徒実行委員会を設置した。

b. 瀬戸内海の環境、兵庫県の地域課題に取り組む大学や関係機関（行政機関、研究機関、博物館、漁業協同組合、NPO、地域など）と幅広く連携した。

c. 京都大学大学院教育学研究科と評価の研究で連携し、大学院生がTAとして参加した。

ウ 生徒主体の協働的活動による人材育成の高い効果

連携校が互いに交流することで相乗効果を生みレベルアップを図るようにした。

① 生徒実行委員会

研究の推進や高校生サミットに向けて、連携校8校代表生徒（30名）による生徒実行委員会を組織した。本校では3学科・類型の代表生徒（13名）による校内生徒実行委員会を組織した。

② 共同研究テーマの設定

高校生サミットの取組の軸として、生徒実行委員会による共同研究テーマを設定した。これまで、「豊かな瀬戸内海」を目指して「人間と自然の共存を考える」その具体的な課題として、海洋プラスチック（特にマイクロプラスチック）問題に取り組んできた成果を発展させ、「海、川、森のつながり」、里山と里海の「環境のつながりを考える」の共同テーマとして環境、環境と人間社会のつながり、さらに環境とテクノロジーのかかわりなどを考えた。

③ 地域課題ワークショップの実施

生徒実行委員会担当校で、高校生サミットの共同研究テーマで共有すべき内容や背景となる知識を学習するために地域課題ワークショップを実施した。各ワークショップで、講義と実習を通して学び、その学びを深めるために学びの振り返りのディスカッションを行った。

第1回『海と山のつながりに気づく』、第2回『里海を考える』、第3回『里山を考える』

④ 高校生サミットの実施

高校生サミットは生徒実行委員会を中心に生徒主体で運営し実施した。課題研究の発表、地域課題の共同テーマによるグループディスカッション（ボード・ディスカッション）を行い、情報交換、課題の共有を図り、報告会（提言）を行った。

⑤ 高大連携フォーラム in 京都大学の実施

高校生サミットの取組を、大学生・大学院生等へ向けての発表、意見交換、交流を通じて内容を発展させ、考察を深化させた。

エ オンラインを活用した幅広い連携校との連携

令和2年度の交流会支援で新たな広域連携の取組として開発したオンラインでの取組を継続し、オンラインでの生徒実行委員会の開催やオンラインでの情報共有を行い、内容に対してもさらなる深まりが見られた。高校生サミットにおいても、オンラインでの発表（台湾を含む）とディスカッションを行い、課題研究における多角的な視点を得ることができた。

オ 生徒の協働活動による変容に関する評価方法の確立

多種多様な校種の連携を通じた生徒の協働活動からの変容を、ポートフォリオやルーブリックを活用して評価し、その効果を検証した。生徒実行委員会校の参加生徒に対して、ポートフォリオにより学びを記録し、その変容を評価した。検証より、この取組全体の生徒の変容の実感の高さ、生徒実行委員の効果、事前研修の効果が窺えた。また、京都大学の大学院生が各ワークショップや高校生サミットサミット一連の流れに参加しTAとして参加し、その意見を集約した。

⑤ 研究開発の成果

(根拠となるデータ等は「(ウ) 関係資料」に掲載。)

○研究成果の普及について

「令和7年度 地域課題解決に取り組む高校生サミット 報告書」を作成し、参加校や関係機関に広く配布し、高校生サミットの取組の普及に努める。

(1) プログラムの効果について

これまで開発して実践してきた高校生サミットの取組について、その手法や生徒の変容からの教育的効果をインターネットサイトで紹介し、開発したプログラムの普及に努めた。また、重点枠の取組での、他校との連携によるポートフォリオやルーブリックによる共同の評価方法の開発の成果の普及に努めた。兵庫県だけでなく他府県（今年度は、熊本県、鹿児島県、沖縄県）からも視察で、本取組を紹介し、普及を行った。また、高校生サミットでの取組・実施方法をもとに、外部団体の行事の中での高校生による発表やディスカッションの実施の協力も行ってきた。

・尼崎 臨海 来んかい！体験会（環境学習フェア 2025）（2025年7月29日）

（兵庫県阪神南県民センター）

・ひょうご里山・里海国際フォーラム 高校生ポスターセッション（2025年9月28日）

本取組を「TEAM EXPO 2025 共創チャレンジ」に登録し、本校での高校生サミットによる地域課題解決の取り組みの普及にも努めた。

(2) 連携校の成果の共有と普及

高校生サミットでの取組を通して、連携校の生徒の課題研究や探究活動への取組の意識が向上し、各校の課題研究の発展につながった。特に、連携校から、この取り組みを通して、他校生徒と協働で取り組んでいくことから刺激を受け、各校の生徒の成長につながっていることが実感されている。さらに、参加の生徒から、各校の校内へその成果が普及していく効果も出てきている。

○実施による成果とその評価

参加生徒の変容、どのような力が身についたかを、生徒アンケート、ルーブリックによる評価、各取組を記録したポートフォリオを基に、来賓・教員アンケートと併せて効果の検証をした。

(1) プログラムの効果について

これまでの高校生サミットの取組から比較すると、平成25年度から多くの項目において肯定的な回答の割合が9割以上のものが多く、今年度も同様に多くの項目で9割を超える評価の高い結果となった。さらに、今年度も「内容がためになる」「新しい発見があった」「知識が増えた」と感じる生徒が多く、非常に高い評価となり、この取組の効果が示された。「地域課題の課題解決」、「自然科学」へ興味関心が高まった生徒の割合も高く、身近な地域の課題の取組から、自然科学への興味関心につながっていることが示された。また、「高校生同士の交流の刺激」が高く、他校交流によるその効果が裏付けされた。

(2) 生徒にどのような力が身についたのか

高校生サミットの一連の取組を通して、継続して「探究心」「考察力」「コミュニケーション力」「プレゼンテーション力」が高いことから、高校生サミットの取組で育成される重要な力として位置づけられる。また、「特にどのような点が難しかったですか」を見ると、「プレゼンテーションすること」「コミュニケーションをとること」「問題解決すること」を挙げている。次の段階へ進むことをしっかり考え、それを難しく感じていることや、他者の意見と合わせ「提言」することを一つのテーマとしているが、ディスカッションをし、さらにその結果をどう他者へ発信すれば伝わるか、考え模索した様子が伝わり、次のステップへの気づきとなっている。

さらに、生徒実行委員を対象としたループリックでの自己評価の結果では、開始前と終了後でのコミュニケーション力、ディスカッションのマネジメント力の伸びは大きく、生徒実行委員として企画の運営に主体的に関わることの効果が示された。

(3) 事前研修の効果について

高校生サミットに向けて、事前研修として地域課題ワークショップに参加した者と事前研修なしで高校生サミットに参加したものについて、どちらも、多くの項目で9割程度以上の高い効果を示しており、11月高校生サミットのみ参加でも、他校交流による刺激から、高い教育効果があることを示した。事前研修の地域課題ワークショップに参加して学んだ生徒は、多くの項目で「そう思う」と高く感じており、事前研修により、さらに高い効果が得られることが分かった。

また、「理解できた」や「自然科学への興味関心が高まった」、「地域課題に興味を持った」、「地域課題に取り組みたい」という項目に関しては、事前研修に参加した生徒がより高い結果となった。事前研修に参加したことから、より課題についての背景や知識が付き、テーマについて理解が進み、そこから興味関心が高まることにつながったのではないかと考えられる。以上のことから、事前研修を行うことで、深く考察する土台ができ、効果が上がることを確認された。

(4) オンラインの効果について（対面とオンラインの比較）

対面とオンライン、どちらの形式であっても、多くの項目で9割以上の参加者が学びや刺激があり意識が高まったことが示され、オンライン形式でも一定の効果が得られた。この4年間のオンラインと併用しての取組から、「知識向上」「自然科学への興味関心」「課題研究の認識の深まり」「地域課題への取組」に対して、オンラインでも一定の効果が確認された。オンラインでの手法については慣れてきており、発表やディスカッションが難しいと感じている生徒が減ってきている。オンラインの利点を活かし、より効果的にするための工夫を行いたい。

(5) 一年間の振り返りから生徒の変容

共通のテーマを基に年間を通して活動に参加する中で、他校の生徒との意見交流や体験活動を通して、新たな気づきや価値観の転換が起きていることが分かった。一年間を通して活動に参加する過程において、他の生徒との意見交流や体験活動を通して、地域課題について詳しく知ることの大切さ、さらに新たな気づきや多角的な視野の必要性を認識し、当事者意識を強く持って、具体的に何ができるだろうと考えているようになっていくことが窺えた。

⑥ 研究開発の課題

（根拠となるデータ等は「(ウ) 関係資料」に掲載。）

○実施上の課題と今後の取組

(1) 共通テーマの取組のさらなる工夫

これまでの高校生サミットの取組から、共有できるテーマの軸を設けることで効果が上がるようになってきた。共同テーマ「環境のつながりを考える～海と山のつながり～」を考えることから、多様な視点が必要な学際的な地域課題へ向けて取り組むことで高い効果が得られた。昨年度より、生徒の学びを「提言」という形で発信を行った。これにより、生徒はテーマについて当事者意識をもって具体的に考え、また伝え方も工夫して発信を行うことができた。今後は、その「提言」を具体化していくため、次のステップへ発展させていく必要があると考える。

(2) オンラインの取組のさらなる工夫

生徒実行委員会や情報共有のオンライン活用により、ワークショップ・高校生サミットをスムーズに行うことができた。さらに、高校生サミットでの台湾からのオンライン発表やオンラインディスカッションを実施することができた。さらに広域からの多角的な視点を課題研究に得るべく、効果的に実施するための工夫をより行いたい。

(3) 地域課題から視点を広げる

地元地域の課題として取り組んでいることを、他地域にも共通する課題であることを認識し、地域の課題解決が日本や地球規模の課題解決につながるという視点の広がりにつなげていく。

(イ) 科学技術人材育成重点枠実施報告書（本文）

「多様な広域連携によるSTEAM教育を通して地域課題解決に取り組める人材育成」
（重点枠区分「広域連携」）

① 研究開発テーマ

1. 研究開発テーマ

「多様な広域連携によるSTEAM教育を通して地域課題解決に取り組める人材育成」

2. 目的・目標

平成27～29年度の重点枠では、瀬戸内海を囲む府県を超えた連携校の生徒の取組を核に生徒の「コミュニケーション力」や「マネジメント力」の育成を目指した。また、平成30～令和元年度の重点枠では、3年間の重点枠をステップアップさせ「社会との共創」の取組として、瀬戸内海を巡る環境や防災等、持続可能な社会構築のための学際的な課題に対して、「地域の中で行動する力」「地域の課題解決に向け提言する力」「地域に貢献できる力」の育成を目的とした。

これまでの重点枠の成果から、府県を超えた多種多様な校種との連携による交流が、互いの生徒を刺激し合い、校内の取組以上に相乗的な効果が得られることが分かった。連携校では、取組の課題発見から得られた共同研究のマイクロプラスチック研究をそれぞれ課題研究として発展させ、国内外で発表して成果を挙げ、また高校生サミットの手法を活用して独自の交流会を企画する等、現在では開発してきた方法が広く普及し、連携校の学校がそれぞれ中核として発展させる程大きな成果を挙げている。

さらに、令和2年度の交流会支援で行ったオンラインを活用した新たな広域連携の取組では、広域連携でのオンライン活用の効果を検証し、今後の積極的な活用への方向性を見いだすことができた。

4期では、3期までの6年間の重点枠と交流会支援の実績を踏まえ、瀬戸内海の府県を超えた高校生や専門機関等と共創しながら主体的・科学的な探究活動により、地域の学際的な課題の解決に取り組む効果を踏まえて、兵庫県下の地域課題解決に取り組む探究活動を行う高校へつなげていく。兵庫県は、南は瀬戸内海、北は日本海に面した県であり、中央には山々が広がり、都市部、里山・里海、山間部など多様な地域と気候が存在している。このような兵庫県の多種多様な地域性は、そのまま日本の縮図で有り、兵庫県の環境や防災等の学際的な地域課題を考えることは、全国の問題を考えることに通じるものである。兵庫県の多様な地域の様々な連携校と対面とオンラインを活用しながら学際的に地域課題解決について考えることを通して、全国の地域課題解決を考えていく礎にしていきたいと考える。また、多様な地域の様々な校種の連携校と探究活動を開発した方法は、汎用性ある探究活動を通じた人材育成の方法として、全国的に通じるものとなる。瀬戸内海で開発したものを日本の縮図である兵庫県でもステップアップして実施することができれば、開発した汎用性を検証することもでき、その手法は今後多くの探究活動を行って人材育成していく学校の先進的なモデルとして自信をもって示していくことができるものとなる。

3. 研究のねらい

●基礎枠の研究開発との関係

4期目のSSH基礎枠では「探究的学びの深化により学際的な課題を解決できるシェアド・リーダーシップをもつ人材育成」を研究開発テーマとした。

このテーマの中で重点枠では、地域課題解決に貢献・参画できる「シェアド・リーダーシップ」をもつ人材育成を行う。これまでの府県を超えた連携校や関係機関とのネットワークとその成果を最大限活用しながら、日本の縮図である兵庫県の環境や防災等の地域課題に取り組む探究活動を実施していく高校と新たな探究ネットワークをつくり、連携し、学際的な地域課題の解決の取組を通して、それぞれの地域や得意を活かしてリーダーシップを発揮し貢献・参画できる「シェアド・リーダーシップ」を持って活躍できる高度な研究者や実務者を育成していく。

重点枠では、他校連携を通して「高度なディスカッション力」や「地域課題解決に向け提言する力」の育成から、地域で活躍できる「シェアド・リーダーシップ」人材の育成を図り、4期目で育成を目指す実践的な4つの力の育成への相乗効果が期待できる。新学習指導要領において本格的に課題研究に取り組む多様な校種の高校を含んだネットワークを構築することで、本校がこれまで実践してきた成果を広く県内、さらに汎用性を持って全国へと普及できる大きな取組となる。さらに、重点枠においても京都大学大学院と連携した評価の研究に引き続き取り組む。多様な校種の連携校の協力による共通の評価の実践は、基礎枠で目標とする「汎用性ある探究活動の評価方法の確立」にもつながる。

② 研究開発の経緯

本研究開発の一年間の流れの考え方と具体的な取組は、以下のとおりである。

	汎用性のある地域課題解決型の課題研究のモデル化	多種多様な校種と専門機関の連携によるSTEAM教育からの人材育成	生徒主体の協働的活動による人材育成の高い効果	オンラインを活用した幅広い連携校との連携評価開発	生徒の協働活動による変容に関する評価方法の確立
4月	計画確認	計画立案・検討	計画立案・検討		計画立案
5月	連携校教員打ち合わせ	検討	校内生徒実行委員会の設置	オンラインの検討	打ち合わせ
6月	評価方法の検討(京都大学と連携)	連携校・連携機関との打合せ	連携校生徒実行委員会校の開催	オンラインによる連携校教員打合せ	評価方法の検討(京都大学と連携)
7月	第1回生徒実行委員会 第1回地域課題ワークショップ	連携校・連携機関と企画・運営	第1回生徒実行委員会 第1回地域課題ワークショップ	第1回生徒実行委員会(オンライン)	評価
8月	実施内容のまとめ 評価方法の取組について 全県下発信	連携校・連携機関との打合せ	各校課題研究の実践	共同テーマ学習 オンラインによる 情報共有	評価方法中間検証 (京都大学と連携)
9月	第2回地域課題ワークショップ	連携校・連携機関との打合せ	第2回地域課題ワークショップ	共同テーマ学習 オンラインによる 情報共有	評価
10月	第3回地域課題ワークショップ	連携校・連携機関と企画・運営	第3回地域課題ワークショップ	共同テーマ学習 オンラインによる 情報共有・論題の 作成	評価 高校生サミットへ 向けての評価の再 検討
11月	第2回生徒実行委員会 高校生サミット 成果発表	連携校・連携機関との交流	第2回生徒実行委員会 高校生サミット 成果発表	高校生サミット オンライン参加	評価
12月	高大連携フォーラム in 京都大学 成果発表・生徒実行委員会	振り返り	高大連携フォーラム in 京都大学 成果発表・生徒実行委員会	オンラインの 振り返り	評価
1月	事業検証	検証	検証	検証	検証
2月	報告書作成	まとめ	まとめ	まとめ	まとめ
3月	報告書完成・配布				

③ 研究開発の内容

1. 研究の仮説

ア 汎用性のある地域課題解決型の課題研究のモデル化

これまで瀬戸内海の実環境や防災・減災等の課題に取り組んできた連携校が地域課題を解決する中核校として各地域で発展してきた。課題発見で取り組み開発した共同研究や高校生サミットの手法は、現在多くの学校でも採用され、研究や人材育成としての開発、普及として大きな効果を生んできた。中堅校である本校が中核となって、課題研究を行う多様な校種の学校と多様な地域性をもつ日本の縮図である兵庫県の地域課題を事例として取り組む探究の成果は、全国の様々な高校への汎用性のモデルとなると考える。

イ 多種多様な校種と専門機関の連携によるSTEAM教育からの人材育成

連携校Aの成果から府県を超えた幅広い様々な校種の連携により刺激し合い高め合うことで、自然科学・社会科学に見る視点が養われた。その成果を活かして、連携校Bにおいて、兵庫県の多様な地域の様々な校種、また、多様な専門機関からなる多彩な視点の取組とも連携することから、学際的な課題解決への多彩な視点を養うSTEAM教育としての人材育成につながる。

ウ 生徒主体の協働的活動による人材育成の高い効果

連携校Aおよび連携校Bによる高校生サミットの取組において、互いに交流することで相乗効果を生みレベルアップを図る。連携校による生徒実行委員会を設置し、高校生サミットの取組へ向けて、主体的・協働的に中心となって企画・運営し、共同テーマに即したワークショップで共有を図り、考えていくことから、より高い効果を生むようになる。

エ オンラインを活用した幅広い連携校との連携

令和2年度の交流会支援で新たな広域連携の取組で実施したオンラインでの生徒実行委員会や発表・ディスカッションを積極的に活用することで、普段時間的・経済的に交流しにくい遠隔地や多くの連携校と日常的に連携を行い、幅広い地域の連携を行うことが可能になる。そのことから、県内の幅広い各地域の課題の視点を共有し、グローバル（ローカルからグローバル）に課題を考えていくことにつなげることができる。

オ 生徒の協働活動による変容に関する評価方法の確立

多種多様な校種の連携を通じた生徒の協働活動からの変容を、ポートフォリオやルーブリックを活用して評価し、その効果を検証することから、汎用性ある探究活動を通じた成長を測る評価として確立することができる。

2. 研究の内容・方法・検証

(1) 実施体制（連携校、連携機関等）

a. 連携校（35校 うち兵庫県連携24校）

◆連携校A

瀬戸内海をフィールドとして環境・防災問題等の地域課題に関する研究を行っている高等学校を中心に、瀬戸内海沿岸の高等学校と他地域の海沿岸の高等学校と連携した。

◆連携校B

兵庫県の環境・防災問題等の地域課題に関する研究を行っている、様々な校種の高等学校と連携した。

◎連携校A、Bの中で、本校を含めた8校による生徒実行委員会を設置した。

b. 大学や専門機関、行政機関等との連携

取組を進めるにあたっては、瀬戸内海の環境、兵庫県の地域課題に取り組んでいる大学や関係機関（行政機関、研究機関、博物館、漁業協同組合、NPO、地域など）と幅広く連携した。

c. 評価研究の連携 京都大学大学院教育学研究科と連携し、大学院生が定期的にTAとして参加した。

(2) 実施内容

ア 汎用性のある地域課題解決型の課題研究のモデル化の発信

中堅校である本校が中核となって、課題研究を行う多様な校種の学校と多様な地域性をもつ日本の縮図である兵庫県の地域課題を事例として取り組む探究の成果は、全国の様々な高校への汎用性のモデルとなる。基礎枠での「尼小田版探究活動マニュアル」の準備と併せて、地域課題の課題研究のモデルとして成果を整理した。その取組の手法や成果を、全国的発信することに努めた。また、重点枠の取組での、他校との連携によるポートフォリオやルーブリックによる共同の評価方法の開発の成果を普及、兵庫県下だけでなく他県（今年度は、熊本県、鹿児島県、沖縄県）からの視察において取組紹介し、全国への普及に努めた。

イ 多種多様な校種と専門機関の連携によるSTEAM教育からの人材育成

これまでの瀬戸内海のフィールドの連携校Aの成果から府県を超えた幅広い様々な校種の連携により刺激し合い高め合うことで、自然科学・社会的に見る視点が養われた。その成果を活かして、連携校Bにおいて、兵庫県の五国（阪神・神戸、丹波、但馬、播磨、淡路）の多様な地域の様々な校種（普通科、総合学科、職業科 [工業、農業等]）、また、多様な専門機関（行政・大学・研究機関・企業・地域・NPO）からなる多彩な視点の取組連携を通して、学際的な課題解決への多彩な視点を養うためのSTEAM教育としての人材育成へつながるよう工夫した。

a. 連携校（p.43参照）

これまで高校生サミットで連携してきた高校と併せて、新たに兵庫県下の地域課題に取り組む探究ネットワークを作る。兵庫県の五国（阪神・神戸、丹波、但馬、播磨、淡路）の多様な地域の様々な校種（普通科、総合学科、職業科 [工業、農業等]）からなる連携校により構成した。

【連携校A】瀬戸内海の地域課題解決を通して連携してきた高校 瀬戸内海沿岸地域を中心に海の環境の取組の高校
【連携校B】兵庫県下の地域課題に取り組む高校（各地域、各校種）

b 連携機関

〔行政機関〕

国：国土交通省近畿地方整備局、気象庁神戸地方気象台、第五管区海上保安庁
兵庫県：環境部水大気課、環境部環境整備課、阪神南県民センター尼崎港管理事務所
尼崎市：経済環境局環境部、総合政策局小田地域振興センター

〔研究機関・国際機関〕

兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県立農林水産技術総合センター、尼崎市立衛生研究所、
ひょうご環境創造協会、国際エメックスセンター、

〔大学〕

神戸大学、徳島大学、京都大学、大阪公立大学、兵庫県立大学

〔企業・NPO等〕

神戸市漁業協同組合須磨浦漁友会、須磨里海の会、
大阪湾見守りネット、あまがさき環境オープンカレッジ、ネイチャークラブ

よこおみち森もりの会、須磨FRSネット

ウ 生徒主体の協働的活動による人材育成の高い効果

連携校Aおよび連携校Bによる高校生サミットの取組において、互いに交流することで相乗効果を生みレベルアップを図るようにした。

① 生徒実行委員会

研究の推進やサミットの開催に向けて、本校を含む瀬戸内海地域及び兵庫県の連携校の9校の代表生徒による生徒実行委員会（今年度は、本校各学科類型による13名、他校各2または3名の17名、計30名）を組織した。実行委員会は原則として同じ生徒が参加したが、一部については校内で実行委員と内容を共有している者が交代で参加した。サミットの企画・準備・実施・実施後の振り返りを実施した。連携校による生徒実行委員会に向けて、本校内の4つの学科・類型（サイエンスリサーチ科、国際探求学科、普通科、普通科看護医療・健康類型）の代表生徒（13名）による校内生徒実行委員会を組織した。

② 共同研究テーマの設定

高校生サミットの取組の軸として、生徒実行委員会による共同研究テーマを設定した。これまで、「豊かな瀬戸内海」を目指して、共同研究テーマ「人間と自然の共存を考える」（問い：「未来の安全のために何をすべきか」～海におけるゴミや災害の問題から人や環境がどのような影響を受けるのか～）の視点で、その具体的な課題として、海洋プラスチックゴミ問題、特にマイクロプラスチック問題について、環境問題の視点、環境と災害の関係も併せた視点など、幅広い多様な視点で瀬戸内海での地域課題について考えてきた。その下で、連携校による共同研究として、これまで瀬戸内海地域の環境・防災等の学際的課題として、「漂着物調査」「マイクロプラスチック調査」を行ってきた。現在、各校における継続研究としてこれまでの瀬戸内海における「マイクロプラスチック調査」を発展させ、マイクロプラスチックの課題について各校で独自に発展させた課題研究を行い、取組内容を共有している。

これまでの瀬戸内海の取組を発展させた新しい取組として、瀬戸内海の環境等の地域課題に加えて、内陸の様々な環境等も考える、海、川、森のつながり、里山と里海の環境のつながりの視点で様々な地域課題について考えることを共同研究テーマとして設定して取り組んだ。各高等学校の地域課題による研究発表や情報交換を行い、そこから里山と里海のあり方を考え、地域課題を環境のつながりから議論し、考えていく取組を行った。

大テーマ「人間と自然の共存を考える」

テーマ「環境のつながりを考える～海と山のつながり～」

海と山のつながり（海、川、森）→里山と里海について考える

環境のつながりを通して、環境と人間社会のつながり、さらに環境とテクノロジーのかかわりなどを考える。

③ 地域課題ワークショップの実施

高校生サミットへ向けて、生徒実行委員会担当校で、高校生サミットの共同研究テーマで共有すべき内容や背景となる知識を学習するために地域課題ワークショップを実施した。各ワークショップで、講義と実習を通して学び、その学びを深めるために学びの振り返りのディスカッションを行った。

・第1回 『海と山のつながりに気づく』 7月21日(月・祝) 須磨海岸(神戸市)

海と山の環境問題が繋がっているということを知り、高校生サミットで環境等の地域課題について考える視点の基礎を築く。海と山のつながりを考える講義、海に関する実習を通して、栄養

塩や生物の関係等の海の環境の土台となる事柄について考える。学びを通して、各学校が地域課題の探究活動を行う上での幅広い視点を養った。

・第2回 『里海を考える』 9月14日(日) 須磨海岸(神戸市)

第1回の海の栄養塩に関する学習を発展させて、プランクトンを補食する生物について学び、海の環境について考える。小形地曳網の曳網、その採集物の選別、漂着物調査を行った。

・第3回 『里山を考える』 10月26日(日) 兵庫県立人と自然の博物館(三田市)

里山の環境について学ぶことから、山の視点から海と山と川の環境のつながりを考えた。「兵庫県の里山とその保全」について里山実習、「里山やその周辺の河川を知る」ための河川実習を行った。

④ 高校生サミットの実施

高校生サミットは生徒実行委員会を中心に生徒主体で運営し実施した。実施内容は、参加校全校の課題研究の発表による情報交換、各校の課題研究を地域課題解決へつなげるためのグループディスカッション(ボード・ディスカッション)を行い、各グループの意見を報告した後、まとめを行った。

a 各校の研究内容の発表による情報交換

瀬戸内海を基に兵庫県に展開させた一つのフィールドにおいて、環境や防災など各地域での課題研究について発表し、情報交換を行った。理系、文系両方の生徒、多様な校種の生徒が参加することで、その環境や防災の自然科学的視点、さらにその背景となる社会科学的視点、テクノロジーの視点等の、多角度から考察していく学際的なもの見方が養えるように取り組んだ。

b ボード・ディスカッションによるグループディスカッション

共通のテーマに対してグループディスカッションを行った。特に他校生徒同士のディスカッションは、コミュニケーション力が大きく問われ、互いの刺激となり、大きな効果が得られる。このディスカッションに向けて、生徒実行委員会を中心に生徒主体で企画、役割分担、進行を行えるように取り組んだ。普段は交流のない生徒同士が一つのものを作り上げるには、マネジメント力とコミュニケーション力が大きく必要である。これまでの重点枠で開発、実践してきた「ボード・ディスカッション」を用いて実施した。さらに今年度は、外部への発信である「提言」を行った。それにより、プレゼンテーション力が必要であると生徒は実感することができた。

・ディスカッションのテーマ

大テーマ「人間と自然の共存を考える」

テーマ「環境のつながりを考える～海・山のつながりを考える～」

海と山のつながり(海・川・森)のつながり→里山と里海について考える。

環境のつながりを通して、環境と人間社会のつながり、さらに環境とテクノロジーのかかわりなどを考える。

⑤ 高大連携フォーラム in 京都大学の実施

高校生サミットの取組を、大学生・大学院生にも意見をもらうべく京都大学で高大連携フォーラムとして実施した。高校生サミットでは主に高校生同士の交流が中心であったが、この高大連携フォーラムでは、大学生・大学院生等へ向けての発表、意見交換、交流と、高校生サミットのときよりもさらに内容が発展し、考察を深化させるものとなった。

エ オンラインを活用した幅広い連携校との連携

令和2年度の交流会支援で新たな広域連携の取組で開発したオンラインでの取組を継続的に活用し、これまでの検証を基に工夫を行い、実施した。本年度はオンラインでの生徒実行委員会を、ワークショップ実施前と、高校生サミット実施前に行い、スムーズに実施することができた。また、生徒実行委員会用のホームページを作成し、情報共有をおこなった。

オ 生徒の協働活動による変容に関する評価方法の確立

多種多様な校種の連携を通じた生徒の協働活動からの変容を、ポートフォリオやルーブリックを活用して評価し、その効果を検証した。

ワークシートの中で、内容知と方法知とわけて記載し、内容を整理し深め、さらに自らの探究への転用することも工夫をした。また、取組が次年度へつながるように、各ワークショップのディスカッションで、学んだ

こと、もっと知りたいことを毎回整理することで、ポートフォリオを蓄積し、高大連携フォーラム in 京都大学では、来年度に引き継ぐことをテーマに一年間の振り返りを行った。

生徒実行委員会校の参加生徒に対して、ポートフォリオにより学びを記録し、その変容を評価した。また、これまでの重点枠で開発した、連携校生徒により構成する生徒実行委員会の生徒の「コミュニケーション力」や「マネジメント力」の伸びを評価するルーブリックを継続的に用いた。生徒自身の自己評価においても、生徒実行委員会の活動をする中で「コミュニケーション力」や「マネジメント力」が身についたことを実感している結果から効果を確認することができた。

また、ワークショップやサミットに参加した生徒のアンケート調査を、生徒実行委員と研究参加生徒、対面参加とオンライン参加、事前のワークショップに参加した生徒と参加していない生徒に分けて集計し、比較分析して、取組における効果について検証した。

これらの生徒の変容についての京都大学大学院教育学研究科の西岡教授の助言を受けながら、研究室の大学院生の協力の下、高校生サミットに関する一連の取組における生徒の身についた力の伸びを確認した。

●検証評価

- a 生徒・教員による内部評価〔連携校の生徒やサミット参加校の生徒による評価〕
 - ・生徒実行委員会校参加生徒へのアンケート → 当該年度内での生徒の1年間の変容
 - ・生徒実行委員会校参加生徒へのポートフォリオ → 生徒自身による自己評価（自身の変容）
 - ・サミット参加者へのアンケート → 生徒実行委員、研究参加者、事前研修の有無等との比較
- b 教員による評価
 - ・京都大学大学院と連携した連携校教員によるルーブリックを活用した評価の検討
→ これまでの複数校の教員が同じルーブリックで自校生徒の評価を行う実践を積み重ねることで、信頼性のある評価方法の確立に継続的につなげることを検討の準備をした。
 - ・連携校教員による振り返り → 事業の展開方法の改善につなげるよう活用した。
- c 京都大学大学院による評価
生徒実行委員のワークショップやサミット等の様子を観察評価等を行うことにより、重点枠の取組による生徒の変容を専門的・科学的に分析した。
- d 運営指導委員会及び関係機関等による外部評価
 - ・運営指導委員会（年2回）での評価 → 重点枠の取組の評価と今後の方向性につなげるようにした。
 - ・各取組における関係機関へのアンケート → 各取組の改善につなげるようにした。

○京都大学及び連携校と連携した評価の研究ポイント

- a ルーブリックを用いた評価
「コミュニケーション力」「マネジメント力」をみるルーブリックと各ワークショップを通して、課題研究に対する「認識の深まり」をみるルーブリックと併せて、連携校の実行委員会生徒を評価する。
普段の校内での課題研究を縦軸、重点枠の取組を横軸といった捉え方で、様々な視野から探究スキルを学ぶことにより、普段の探究活動の深まりや広がりはどうつながっていくか、主体的なインプット（重点枠での学び）が主体的なアウトプット（各地域での実践活動）にどうつながるかをみってみる。
- b ポートフォリオを用いた評価
ルーブリックを用いた評価と合わせて、各回のワークショップでの学びを記録し、蓄積していくポートフォリオを作成する。全5回の学びの前と後で、課題研究に対する認識がどのように深まったのか、その深まりに5回のワークショップがどのように寄与しているのかを質的に分析する。各回のワークショップでの学習記録、ディスカッションから得られた考察もポートフォリオに蓄積することで認識の深まりを評価する材料とした。

3. 配慮した事項と問題点

これまでの高校生サミットの取組から、共同研究等の共有できるテーマを設けることで、実践の軸ができ、生徒の取組の方向が定まり効果があることが分かっている。共同テーマをこれまでの「海」から、「海と山のつながり」へ発展させたものを継続テーマとした。テーマについて、取組の核となる生徒実行委員会校に事前研修でテーマを基に共有し、そのことで他校を含んだサミット当日もテーマを共有しやすく工夫をした。

4. 各プログラムの実施内容

各プログラムは、11月の高校生サミットでの参加校生徒がディスカッションを行う上で必要な、地域実践活動についての生徒実行委員会、地域課題ワークショップ、発表会、振り返りを組み立てた。各プログラムとも、生徒アンケートの分析、ポートフォリオ、ルーブリックによる評価を行い検証した。

◆第1回地域課題ワークショップ①

- 目的 ・「令和7年度地域課題解決に取り組む高校生サミット」に向けた研修と生徒情報交換を行う。
・海と山の環境問題がつながっていることを学び、高校生サミットで環境等の地域課題について考える視点の基礎を築く。
・海の環境に関する実習を通して、栄養塩や生物の関係等の海の環境の土台となる事柄について考える。学びを通して、各学校が地域課題の探究活動を行う上での幅広い視点を養う。
・生徒実行委員会による企画・運営を通して、生徒の自主的探究活動による科学人材育成を図る。

実施日時 令和7年7月21日（月・祝）10:00～16:30（9:50受付）

実施場所 神戸市漁業協同組合須磨浦漁友会（神戸市須磨区須磨浦通6丁目）、須磨海岸

参加者・人数 参加校：8校 参加者：63名（生徒37名、教員16名、来賓8名 大学院生等2名）

実施内容 ①趣旨説明と学びのポイント説明 ②講義（海と山のつながり、神戸の山の活動を通して、漁師から神戸の海の問題について）③アイスブレイク ④海岸実習（採水法とネット法プランクトン採集、砕波帯ネットによる生物採集、セディメントトラップ）⑤収集物の観察とまとめ ⑥ディスカッション
⑦生徒実行委員会

事業の効果とその評価

高校生サミットの取組のスタートとして、まず、テーマの共有を目的に研修を行った。海からの視点だけでなく、海と山のつながり、環境のつながりの視点で環境を考えていく基礎作りを行った。

当日の様子



砕波帯ネット



プランクトンネット



観察



ディスカッション・発表

◆第2回地域課題ワークショップ②

- 目的 前回の海の栄養塩に関する学習を発展させて、プランクトンを捕食する生物について学び、海の環境について考える。

実施日時 令和7年9月14日（日）10:00～16:30（9:50受付）

実施場所 神戸市漁業協同組合須磨浦漁友会（神戸市須磨区須磨浦通6丁目）、須磨海岸

参加者・人数 参加校：8校 参加者：52名（生徒33名、教員14名、来賓4名 大学院生等1名）

実施内容 ①学びのポイント説明とアイスブレイク ②海岸実習（小形地曳網の曳網、小形地曳網の採集物の選別、漂着物調査）③採集物の選別・集計 ④まとめの講義 ⑤ディスカッション ⑥生徒実行委員会

事業の効果とその評価

午前中の海岸実習の小形地曳網の曳網の結果から、狭い須磨海岸においても、生息する生物の多様性が実感できた。午後の実習では、採集した生物を整理するとともに、近年の海水温上昇による海底の環境の変化が生態系に与える影響を学んだ。第1回で学んだ栄養塩と今回の実習をつなげることから、海の環境の生態系のつながりを体験的に学ぶことができた。

当日の様子



小型船地曳網の曳網



採集物の選別



消化器官内容物調査



ディスカッション・発表

◆地域課題ワークショップ③

- 目的 里山の環境について学ぶことから、山の視点から海と山の環境のつながりを考え、高校生サミットで環境等の地域課題について考える視点の基礎を築く。

実施日時 令和7年10月26日（日）9:55～16:40（9:40受付）

実施場所 兵庫県立人と自然の博物館（兵庫県三田市弥生が丘6丁目 TEL：079-559-2001）

三田市南公園 ブイブイの森（兵庫県三田市狭間が丘1丁目2番）

参加者・人数 参加校：6校 参加者：46名（生徒28名、教員12名、来賓4名、大学院生等2名）

実施内容 ①学びのポイント説明 ②河川実習(武庫川河川敷) ③里山実習(ブイブイの森・兵庫の里山とその保全)
④ディスカッション ⑤生徒実行委員会

事業の効果とその評価

今年度のテーマである「海と山のつながり」を考えるために、前回の海からの視点とつなげて、河川と里山の実習を通して山と川からの視点を学んだ。実際に里山に入ることによって、これまでの人と里山のかかわり、里山の環境や植物や土壌について、また、竹林の拡大や常緑広葉樹が増加する現状など知ることができた。そして、令和7年度新たに川の実習を追加し、山から川、海への物質循環や、都市化の影響などを考えることができた。3回のワークショップを通じて、里海・里山の学びから「海と山のつながり」を体験的に学習し、11月の高校生サミットでのディスカッションへの基礎知識や背景的な考えを共有することができた。

当日の様子



河川実習



里山実習



ボード・ディスカッション



発表

◆地域課題解決に取り組む高校生サミット～兵庫から日本を考える～
(第15回瀬戸内海をを考える高校生フォーラム)

目的 地域課題解決に向けて取り組む高校生の共有・発信の場として、生徒実行委員会校が企画運営する「高校生サミット」を開催する。対面とオンラインを併せたハイブリッド型の新たな広域連携の工夫を継続的にを行い、参加者同士が新たに刺激し合い、今後の研究の発展へつながる科学技術人材の育成に寄与する。

実施日時 令和7年11月15日(土) 10:00～16:30(9:30受付)

実施場所 兵庫県立尼崎小田高等学校(兵庫県尼崎市長洲中通2丁目17-46 TEL.06-6488-5335)

参加者・人数 協力校: 35校(来校・オンライン21校、紙面協力14校)
来校・オンライン参加者: 200名(生徒124名、教員46名、来賓29名、大学院生等1名)
(内、オンライン参加者 13名)

実施内容

時間	内容	実施内容詳細
9:30	受付	
10:00	開会式・挨拶・来賓紹介	挨拶 尼崎小田高校校長: 山根 尚
10:30	ポスターセッション	各校による研究ポスター、口頭・オンライン発表(20校50件) A・B・Cの順に発表各15分入替3分、その後50分フリー 台湾との課題研究発表会も並行実施
12:15	集合写真	集合写真撮影
12:20	昼食休憩40分	
13:00	ディスカッション事前説明	全体へ事前説明・事前知識の共有(各校生徒実行委員より) ディスカッションの説明
13:30	ボード・ディスカッション (オンラインディスカッション)	3つの共通の論題によるホワイトボードを用いたディスカッションを行い、「提言」を考える。(各班6名程度19班にわかれる) アイスブレイク5分、論題1 20分、論題2 20分、論題3 20分、 まとめ発表準備10分(計75分)
14:55	ブロック別報告会	ボード・ディスカッションの各グループで出した意見、考えた「提言」を発表し、共有する。発表後、代表班を決定する。
15:35	全体報告会	ボード・ディスカッションの代表班の「提言」を発表し、共有を行う。
16:00	講評・閉会挨拶	講評: 神戸大学内海城環境教育研究センター: 川井 浩史 特命教授
16:20	アンケート記入	アンケートを実施
16:40	閉会	

① 発表

ポスター発表、口頭・オンライン発表

各校の課題研究のポスター発表、口頭・オンライン発表を行った。発表内容は各地域の海や環境調査・改善の研究から防災分野の地域での取組など地域課題に関するものである。また、台湾からのオンライン発表も行った。紙面協力の学校の課題研究のポスターの掲示も行った。

② ディスカッション

ボード・ディスカッション

「海と山のつながり」を共通テーマとし、以下の3つの論題についてディスカッションを行った。
論題1・2 生徒実行委員の共有事項(「里海」、「河川」、「都市」、「里山」)から興味のある地域課題(2つ)

論題3「里海や里山への今後の人間のかかわり方をどのように考え、まちづくりを進めるのが良いと考えますか。理由とともに説明して下さい。」[提言]

③ 報告会（教室別報告会→全体報告会）

教室別報告会を実施し、その後、各教室の代表が全体報告会で地域課題についての「提言」を報告する形式をとった。3つの論題から、これまで人が里山や里海という形で、人の手が適切に入る形で海や山と共存してきたこと、人の手が不足することで生態系が乱れ多様性が失われることもあること、自然を守っていくためには正しい知識を得ることが必要であることを生徒が実感し、他者へそれをどう普及するか、他者の意識の変化をもたらすにはどのようにすべきかなど、自分たちだからこそその「提言」が挙げられており、当事者意識が窺えた。

事業の効果とその評価

このサミットを通して、地域課題解決というテーマについて、「環境のつながり」の視点で考えた。このことを基に自分達の地域の課題を、新たな視点へつなげ、考える機会を生む契機となったと考える。また、様々な異なる地域、視点、研究方法で課題研究を進めている高校生が集まり、ディスカッションを行うことにより、視野を広げて、問題を考察する良い機会となった。

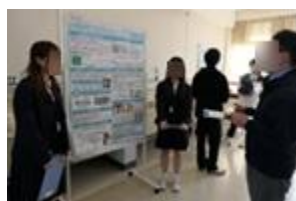
当日の様子



開会式



ポスターセッション



事前共有



ボードディスカッション



ブロック別発表会



全体発表会

◆高大連携フォーラムin京都大学

目的 ・高校生サミットへ向けての取組の成果を、高大連携フォーラムとして大学生へ向けて発表や意見交換を行い、今年度の活動の成果をまとめる。

・令和7年度地域課題解決に取り組む高校生サミットのまとめと振り返りを行う。

・生徒実行委員会による企画・運営を通じた高校生サミットの科学技術人材育成の効果を検証する。

実施日時 令和7年12月20日（土）10：30～15：00（10：00受付）

実施場所 ・京都大学吉田キャンパス 人間・環境学研究科 大講義室（B23）

（京都市左京区吉田二本松町 吉田キャンパス 吉田南構内）

参加者・人数 参加校：7校 参加者：103名（生徒49名、教員17名、大学教員1名、大学生大学院生等36名）

高大連携フォーラムの実施内容

①高校生サミット取組紹介 ②ポスターセッション ③大学生・大学院生との意見交換会

④生徒実行委員会（高校生サミットの振り返りと今後について） ⑤報告会

事業の効果とその評価

今回は大学生・大学院生に向けての発表であり、大学生等から深い指摘や質問があり、新たな疑問点や矛盾点が浮き彫りとなった。さらなる探究の深化に繋げることができた。また、研究についての大学生との意見交換も、文系や理系の枠を超えて取り組む必要性を感じることもでき、研究の視野が広がった。

当日の様子



高校生サミットの紹介



ポスターセッション



大学生との意見交換会



一年間の振り返り

5. ボード・ディスカッションについて

(1) 開発の目的と経緯

各校が研究について発表するだけでなく、地域課題解決という共通のテーマについて議論することで、自分達の研究についての考察を深め、また、瀬戸内海地域で起きている問題について多面的に理解することを目的として、第3回フォーラム（平成25年度）から改良を重ね、ディスカッションの時間を設定した。

(2) 実施方法

準備物：ホワイトボード（小）1枚は議論のメモに使用した。

ホワイトボード（大）1枚は、発表内容を整理して発表に使用した。

進め方：「海と山のつながりを考える」を大テーマとし、以下の流れで3つの論題について議論し、提言を考えた。

0. アイスブレイク（5分） 自己紹介

1-1. 論題1・2：「事前共有に挙げられた地域課題」から、班で協議したい課題を2つ選んで議論。出し合った課題を「里海」、「河川」、「都市」、「里山」の4つのカテゴリーに分類し、異なるカテゴリーを2つ選んで、論題1・2とした。（20分・20分）

1-2. 論題3：[提言]（20分）

「班員の誰かの住む街づくりの会議に、あなたが参加する立場だとして、里海や里山への今後の人間の関わり方をどのように考え、街づくりを進めるのが良いと考えますか。理由とともに説明して下さい。可能なら班で注目する科学技術を例示しながら、できるだけ具体的に説明してください。

2. まとめと発表準備（15分）

教室別報告会を行って各班の提言を発表、共有し、その後、各教室による代表班による全体報告会を行った。

(3) 評価と振り返り

本サミットの中で特に良かった取組(複数回答可)として、「ボード・ディスカッション」と回答した生徒は46.0%。「ポスターセッション」と回答した生徒は43.1%であった。生徒の感想として、「他校の生徒と話をすることで視野が広がった」「自分の知らない知識や考え方を学ぶことができた」などの意見がみられた。このディスカッションの取り組みが他者との関りを通して刺激を受けるものとなり、「意見交換をする力」を始め様々な力がついたと実感する取り組みとなった。また、各班には事前研修のワークショップに参加した生徒実行委員が入るようにしており、これまでの研修で得た知識等を各班共有している場面がみられた。また、生徒実行委員がディスカッションを引っ張る姿も見られ、班員から意見を引き出し、まとめている場面がしばしばみられた。そして、本サミットにおいて特に難しいと感じた点(複数回答可)として、生徒実行委員の回答で「問題を解決すること」が45.5%、「プレゼンテーションをすること」が45.5%と高く、初めて参加した生徒も巻き込んで議論すること、まとめることの難しさを感じるとともに、大切さを学んでいた。また、高校生サミットでは外部への発信「提言」を意識して行っており、各ワークショップでも、発信「提言」を意識してプレゼンテーションを行ってきた。他者へ伝わるのか意識してプレゼンテーションを行った。そのため、プレゼンテーションをすることが難しいと感じる生徒が多かったものと考えられ、この事業の効果が窺える。

6. ポートフォリオによる生徒の認識の変容を検証

サミット及びワークショップを通して、生徒が共同テーマや各自の探究活動の認識がどのように深まるのかを調べるためにポートフォリオによる評価を実施した。具体的には、右図のように、高校生サミットの取組の共同テーマである「海と山のつながり」について考えていく中で、「地域の環境を守るためにはどうすればいいのか？あなたは何かができるのか？」について、取組の前後に記入した考えを比較して、どのような変容があったかを自ら振り返り、検証することを行った。

7. 取組をつなげていくための展開の工夫

高校生サミットの一連の取組から得られた学びや成果を次年

令和 年度 地域課題解決に取り組む高校生サミット ～兵庫から日本を考える～		
1年間の記録		
学校名	学年	名前
開始前 (7月)		
① 地域の環境を守るためにはどうすればいいのか？あなたは何かができるのか？		
終了後 (12月)		
① 地域の環境を守るためにはどうすればいいのか？あなたは何かができるのか？		
② ①と②の前後を比べて、変わったこと、変わったことを書いてください。		

度へ引き継ぎ発展させていくために、今年度は各ワークショップの機会、学びから伝えたいことをまとめていくことを促し工夫した。この総まとめを、12月の一年間の振り返りのディスカッションで行うことで、これまでの学びを次年度へつなげていけるように改善し工夫した。

8. 発表で使用したホワイトボード・提言

1～16班 全体発表代表班◎：3班、9班、13班、15班、19班

1班	2班	3班◎	4班	5班
6班	7班	8班	9班◎	10班
11班	12班	13班◎	14班	15班◎
16班	17班	18班	19班(オンライン)◎	

④ 実施の効果とその評価 (生徒の主体的・協働的な取組の評価方法の開発)

高校生サミットに向けての各プログラムを通して、生徒にどのような力が身についたのか生徒アンケート、ルーブリックによる評価、各取組を記録したポートフォリオを基に、来賓・教員アンケートと併せて検証する。

- (1) 生徒アンケートによるプログラムの効果の検証
- (2) 生徒実行委員会の自己評価による効果の検証
- (3) 事前研修参加回数による効果の検証
- (4) 対面形式とオンライン形式による実施の効果の検証
- (5) 一年間の取組の振り返りによる効果の検証

1. 生徒アンケートによるプログラムの効果の検証

今年度の高校生サミットの取組について、過去13年間(平成25～令和7年度)の高校生サミット(平成25～29年度)は高校生フォーラムとして実施の生徒アンケート結果と比較し、高校生サミット全体で生徒にどのような力が身についたのかを分析した。平成25年度～令和元年度はこれまでの通常の対面による高校生サミットの取組、令和2年度、令和3年度は、新型コロナウイルス感染症拡大下での取組であり、それぞれ比較しながらその影響の違いがあるのかも検証をした。また、生徒、教員・来賓のアンケートから高校生サミットの教育プログラムとしての効果について考えた。表1については以下の①、表2については以下の②で分析する。

① 高校生サミットの今年度とこれまでの取組とのアンケート結果比較

高校生サミット(高校生フォーラム)のそれぞれの取組の時期に従って、平成25～29年度までの5年間の平均(a)および、平成30～令和元年度の2年間の平均の結果(b)、令和2年度～令和6年度の参加生徒のアンケート結果をそれぞれ(c)、(d)、(e)、(f)、(g)、今年度の参加生徒のアンケート結果(h)を表1に示した。表中の数値はアンケートでの肯定的な回答(「5:とても思う」または「4:どちらかといえば思う」)の割合である。

高校生サミットの取り組みは今年度で第15回となる。平成25～29年度において、多くの項目で肯定的な回答の割合が80%を超えていた。令和2年度、令和3年度はそれらをさらに上回り、全ての項目で9割を超える評価の高い結果となり、3項目では100%になる過去最も評価の高い結果となった。この2年間は新型コロナウイルス感染症のため参加人数を絞っていたが、令和4年度は、制限を緩和のため参加人数が大幅に増え、大人数での工夫に苦労したが、同様に高い結果が得られた。令和5年度から今年度まで、同様に高い結果が得られた。全て8割以上、多くの項目で9割以上の高い結果が得られ、生徒が様々な効果を感じたと評価しており、プログラムが成熟しその教育効果が十分に生徒に波及したことが見て取れる結果となった。

「内容がためになる」「新しい発見があった」「知識が増えた」と感じる生徒が9割後半と高い結果を示し、この取組を通して、生徒が学習成果を感じるものとなっていたことが分かった。また、「地域の課題について興味関心が高まった」「地域の課題についてさらに取り組みたいと思うようになった」と感じた生徒が昨年度よりは減少したが、高い水準となった。自分事として地域の課題解決をとらえ、それを高校生なりの「提言」という形で発信する活動を継続して行ってきたが、その継続的な成果があらわれた結果となった。「高校生同士の交流は、刺激となった」と感じる生徒が高い結果となっており、各自が地域課題解決に向けて探究したことを高校生サミットの場で、文系理系、さらに校種の枠を超えて多くの生徒たちが共有することで新しい発見が生まれ、お互い刺激を受けながら新たな知識、興味や意欲につながったと考えられる。

表1 高校生サミット当日アンケート結果比較 [%]

	ために なる	新しい 発見	知識が 増えた	理解 できた	また参加 したい	地域課題 に興味 ^{※1}	地域課題に 取組 ^{※2}	自然科 学興味	高校生 刺激
(a) H25～29 平均	95.2	93.0	93.7	85.4	80.6	89.3	80.7	85.3	90.4
(b) H30～R1 平均	97.8	96.5	96.4	92.5	86.6	91.1	88.9	86.8	95.6
(c) R2 サミット	98.3	93.2	96.6	96.6	91.4	96.6	98.3	96.6	92.9
(d) R3 サミット	100.0	95.7	100.0	95.7	97.1	97.1	94.2	97.2	100.0
(e) R4 サミット	97.5	96.7	97.5	91.6	82.5	86.6	80.9	90.9	93.2
(f) R5 サミット	98.7	97.4	96.1	89.8	89.8	91.0	88.5	89.7	94.8
(g) R6 サミット	100.0	98.8	98.8	94.0	85.8	95.2	95.2	92.9	96.5
(h) R7 サミット	99.0	99.0	99.0	93.3	86.4	90.4	86.4	87.5	96.2

※1: H25～H29は「海¹の環境²について興味関心が高まりましたか。」 ※2: H25～H29は「海¹の環境²についてさらに取り組みたいと思うようになりましたか。」

② 今年度の高校生サミットで生徒にどのような力が身についたのか

今年度の高校生サミット全体を通して生徒にどのような力が身についたのか、生徒のアンケート結果から考察する。p. 43「令和6年度高校生サミット生徒アンケート結果（生徒全体）」のアンケート項目⑩「今回の企画において、どのような力が身についたと思いますか」を見ると、高校生サミットの年間の一連の取組を通して、「コミュニケーション力」、「探究心」、「問題解決力」、「プレゼンテーション力」、「考察力」が身についたと高く実感していることが示された。「探究心」、「コミュニケーション力」は、どの取組も一様に高いことが分かる。これは、一連の取組において、今回のテーマ「海と山のつながり」を、第1回でその背景的知識をしっかりと学習し、各回テーマを意識してワークショップに取り組みさせた効果であると考えられる。また、各回で参加者を小グループに分け、講義や実習で学んだことを生徒同士のディスカッションでしっかりと振り返えらせたことが、「探究心」、「コミュニケーション力」を常に高く実感する結果につながったと考える。これまでの研究成果の発表やディスカッションで積み上げてきた成果を発揮する場とし、参加したことにより実感したからであると思われる。また、それらの会では、「考察力」も高くなっており、自分たちは何ができるかを考え、「提言」した結果であると考えられる。

p. 43 のアンケート項目⑪「今回の企画において、特にどのような点が難しかったですか」を見ると、高校生サミットでは、「プレゼンテーションをすること」、「コミュニケーションをとること」、「問題を解決すること」、「応用すること」、高大連携フォーラムでは「分野を俯瞰すること」が挙げられている。「プレゼンテーションをすること」「コミュニケーションをとること」は、身についた力としても高く、課題研究の結果やディスカッションについて、積極的にしっかりと取り組んだことから、難しさも感じたものと考えられる。さらに、「応用すること」は学んだことをどう応用するか、次の展開へと進む上で難しく感じていると思われ、次のステップへの気づきと考える。他者への発信「提言」することを一つのテーマとして行ってきた。ディスカッションを多く行い、「プレゼンテーションをすること」、「コミュニケーション力」が身についたと感じた生徒が多かったが、それらを難しく感じている生徒が多く、そのディスカッションの結果をどう他者へ発信、「提言」すれば伝わるのか、考え模索した結果であり、次のステップへの気づきとなっていると考える。

表2には、アンケート項目⑩「今回の企画において、どのような力が身についたと思いますか」に対して、高校生サミットへ向けての一連の全行事とサミット当日での、生徒の回答割合をそれぞれ示している。今年度、全体の取組を通して高かったのは、「探究心」、「考察力」、「問題解決力」、「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」であり、サミット当日でも同様であった。これらの値はこれまでも、継続して高く、高校生サミットの取組で大きく育成する重要な力として位置づけている。自分達の課題研究の取組を通して、目の前の地域の課題を解決するためには、どのように考えたらよいか、生徒たち自身がそれらを解決することが必要であると感じていることが、「探究心」、「考察力」の結果にも表れていると思われる。また、「問題解決力」が伸びており、課題研究やサミットの取組を通して、難しい状況の中で課題を解決することの必要性を強く感じたからではないかと考える。「環境のつながり」という全体テーマが、多様な視点での考えさせる必要性を高め、さらに効果を高める後押しになったと考えている。

表2 高校生サミットで、生徒が身についたと回答した割合【%】（複数回答）

	探究心	分析力	応用力	考察力	問題解決力	独創性	コミュニケーション力	文章力 レポート作成能力	企画力	プレゼンテーション力	分野俯瞰力
R1 全行事(n=228) サミット(n=108)	52.2 44.6	26.3 21.5	17.1 24.6	50.0 40.0	18.9 33.8	7.5 13.8	59.6 67.7	9.6 16.9	9.2 15.4	30.7 52.3	19.3 23.1
R2 全行事(n=108) サミット(n=59)	60.2 59.3	26.9 28.8	35.2 35.6	52.3 59.3	32.4 40.7	11.1 15.3	54.6 57.6	13.0 6.8	17.6 25.4	38.9 47.5	26.9 25.4
R3 全行事(n=224) サミット(n=70)	62.5 52.8	20.6 29.1	28.4 35.7	58.3 54.3	24.5 30.0	10.3 18.6	74.5 67.1	18.1 20.0	13.7 17.1	41.7 48.6	27.9 20.0
R4 全行事(n=274) サミット(n=120)	60.6 55.8	24.5 24.2	31.0 30.8	48.2 43.3	31.8 37.5	10.9 13.3	60.6 60.8	20.4 25.8	11.7 15.0	34.7 42.5	26.6 26.7
R5 全行事(n=234) サミット(n=78)	60.7 55.1	28.2 26.9	31.6 29.5	49.1 38.5	37.2 37.2	23.1 19.2	61.5 53.8	17.9 11.5	12.8 14.1	29.1 26.9	23.9 20.5
R6 全行事(n=232) サミット(n=84)	59.9 53.6	22.4 16.7	35.3 36.9	41.4 35.7	34.9 44.0	22.8 28.6	66.8 71.4	21.6 22.6	17.7 22.6	37.9 42.9	22.4 21.4
R7 全行事(n=241) サミット(n=104)	59.3 56.7	28.2 24.0	24.5 25.0	46.9 39.4	39.8 46.2	17.0 20.2	61.4 64.4	20.3 16.3	14.9 19.2	38.6 40.4	21.2 18.3

2. 生徒実行委員会の自己評価による効果の検証

高校生サミットに向けて、本校を含む8校が生徒実行委員会校として連携して企画・運営の中心となって取り組んだ。8校の代表生徒による生徒実行委員会は、各ワークショップでの学習の振り返りや報告会の運営、高校生サミットでの全体の司会やディスカッション、報告会の運営、高校生サミットの全体の取組のテーマにおける基礎学習を行った。生徒実行委員会の運営に向けての協議は、これまでワークショップの際に対面で行ってきたが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けてオンラインで行った。その経験を活かし、今年度も生徒実行委員会をオンラインで行い、ワークショップ当日、協議内容の確認をする形にした。

第1回ワークショップに向けて、6月上旬に校内生徒実行委員を立ち上げ、7月上旬に各校の生徒実行委員と協議する第1回連携校生徒実行委員会を開催した。各校の課題研究の取組状況の共有、各ワークショップの事前準備、テーマに向けての基礎知識の学習を、各ワークショップ等で行った。各ワークショップでの学びを他校に伝え、高校生サミット当日とともに協議するべく、各校で事前ワークショップの学びについてスライドを作成した。生徒実行委員の情報共有のためホームページも作成し、ディスカッションの論題についても状況共有を行った。高校生サミット当日の司会進行やサミットでのディスカッションの運営、生徒実行委員会で行った。

研究の仮説に基づき、高校生サミットを生徒主体で企画運営することで、生徒実行委員の生徒たちのマネジメント力やコミュニケーション力が向上したのかを検証する。検証には、コミュニケーション力とマネジメント力を観点としたルーブリック(図1)を用いる。まず、各観点について、7月時点と12月時点での到達度を生徒に自己評価させ、その結果を比較した。次に、その評価の根拠となるエピソードについての自由記述から、生徒の成長の様子を質的に分析した。

ルーブリック、アンケートの結果および考察

各校の生徒実行委員を主に、一連の取組の最後である高大連携フォーラム in 京都大学の際に、ルーブリックで「コミュニケーション力」とディスカッションの「マネジメント力」の伸び、そして「探究の深まり」を7月と12月に自己評価してもらった。その結果は表3のとおりである。この表3からは7月から12月にかけて、3つの力が伸びたと実感している生徒が多いことがよくわかる。

自己評価の根拠を自由記述で書いてもらった。それを見ると、コミュニケーション力については、7月では、自分の意見を積極的に言えない、人見知りでありコミュニケーションが取れなかった、などの記述がみられたが、12月では、知識が増え、回数も増え、コミュニケーションがスムーズになった、自分の意見だけでなく、他者の意見を取り入れられるようになった、などの意見がみられ、自分の意見だけでなく相手の意見を尊重しながら、自分たちなりの結論を導くコミュニケーション力が高まった様子が見受けられる。ディスカッションの「マネジメント力」についての自由記述からは、個々で意見をまとめてしまっていたところから、そのときどきのグループでも、グループ内での役割を理解し、周りを見て行動し、どうなったら議論をまとめることができるかなどを考えることができるようになっていることが読み取れる。目標の達成に向けて内容を考え、主体的に運営に携わる姿が見て取れた。最終的に約90%以上の生徒がレベル3以上の力に到達したと感じており、生徒実行委員会の一つの成果であるといえる(表3、表4)。

高校生サミットの取組を評価するルーブリック

高校生サミットでの活動(ワークショップ、サミット、生徒実行委員会)を通しての能力向上を測るルーブリック(自己評価用)

実施学校: _____ 学年: _____ 名前: _____ (実行委員・研究参加)

1. 高校生サミットでの取り組みを通して、自分のコミュニケーション力及び、マネジメント力がどのように変化したかについて、7月時点(第1回ワークショップ)に○、12月時点(京大発表)に◎を入れて下さい。

グループワーク		7月 12月	7月 12月
コミュニケーション	ディスカッションのマネジメント		
グループ活動に積極的に協力できる。 4	全体を見据えてディスカッションの仕上がりを見守ることができる。 全体をコントロールして、グループの意見をまとめて取りまとめることができる。他者の意見を把握し、提案ができる。全体を見据えて、不明になっている点や物言いを整理し、行動できる。自分が参加することの重要性を理解して、自ら行動できる。		
グループ活動に多様な参加ができる。 3	議題の中で自分の役割を見出している。 ディスカッションを論理的に進行させることができる。主体的に進行し、内容をまとめることができる。リーダー、記録、調整、分析、発表準備等の役割を自ら見出し、グループワークが円滑になる方向で働いている。		
話し合いに参加できる。 2	ディスカッションの役割を理解している。 ディスカッションの役割を理解し、発言ができる。議題が分かる。課題をこなすことができる。共通テーマの性質や目的を見え、自主的に参加している。		
話し合いに参加できない。 1	ディスカッションの役割を理解していない。 自分の役割が分からない。話し合いの場に自分の意見が入れない。日本を問わずに、決めたことをするのみ。		

自己評価記述(到達していると感じる理由・エピソード等)

コミュニケーション(7月) 自己評価(1/2/3/4) 理由・エピソード	ディスカッションのマネジメント(7月) 自己評価(1/2/3/4) 理由・エピソード
コミュニケーション(12月) 自己評価(1/2/3/4) 理由・エピソード	ディスカッションのマネジメント(12月) 自己評価(1/2/3/4) 理由・エピソード

2. 高校生サミットでの取り組みを通して、自分自身の探究(課題研究)への認識がどのように変化したかについて、7月時点には○、12月時点には◎を入れて下さい。

自身の探究の深まり		7月 12月
4 課題が練られており、充実した活動が行われている。インパクトのある成果が生み出されている。		
3 課題に即して活動が行われており、ある程度の成果が生み出されている。		
2 一定の具体的な課題が設定され、活動が行われている。		
1 偶然としたテーマがあるのみで、具体的な課題と活動内容が設定されていない。		

3. 高校生サミットでの取り組みを通して、次の3つの力がついたらと思いますか?

(1) 地域の課題を見える力

4. とてもついたら 3. ある程度ついたら 2. あまりつかなかった 1. ほとんどつかなかった

(2) 地域の課題解決に向けて考える力

4. とてもついたら 3. ある程度ついたら 2. あまりつかなかった 1. ほとんどつかなかった

(3) 地域の課題解決に向けて語る力

4. とてもついたら 3. ある程度ついたら 2. あまりつかなかった 1. ほとんどつかなかった

図1 高校生サミットでの共通課題研究を通じた能力向上を測るルーブリック

表3 生徒の自己評価結果（各レベル人数と平均得点 高大連携フォーラム参加 生徒実行委員 n=28）

レベル	コミュニケーション力		マネジメント力		探究の深まり	
	7月	12月	7月	12月	7月	12月
4	9	16	4	14	1	12
3	7	9	13	12	10	14
2	10	2	8	2	8	0
1	0	1	1	0	4	1
平均得点	2.96	3.43	2.77	3.43	2.35	3.37

次の3つの力が身についたと思いますか？（平均得点 4件法）

- (1) 地域の課題を発見する力……………3.44 (2) 地域の課題解決に向けて考える力…3.48
 (3) 地域の課題解決に向けて提言する力…3.44

表4 自己評価の根拠（自由記述）抜粋

コミュニケーション力・ディスカッションのマネジメント力	
[7月]	[12月]
<ul style="list-style-type: none"> ・元々、人と話をするのが得意だったので、話し合いには積極的に参加できました。 ・人に話を振ることがなかなかできなかった。 ・ディスカッションに慣れていなかった。 ・あまりリーダーシップをとれなかった。 ・初めてのことでわからなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・7月に対して12月は内容も理解できるようになったので、成長できた1年だと思いました。 ・何度もディスカッションをしていく度に、人に話を振ったり、「どうですか？」と聞けるようになった。 ・ボードディスカッションでわかったこと、知識共有だけでなく、批判的な視点で意見することもできた。 ・人の話を聞くことができた。 ・周りの意見について深く考えることができるようになった。 ・必要な情報を話すように動くことができるようになった。

3. 事前研修参加回数による比較の検証

11月の高校生サミットに向けて、生徒実行委員会校によりテーマ共有のため、今年度高校生サミットのテーマについての事前研修の地域課題ワークショップを3回行った。事前研修がどのように高校生サミットにつながるか、事前研修を受けた場合と受けていない場合で比較し、事前研修の効果を検証した（表5）。

表5 高校生サミット 事前研修参加回数による比較 [%]（参加2回以上 n=23、参加0回 n=73）

	ために なる	新しい 発見	知識が 増えた	理解 できた	また参加 したい	地域課題 に興味	地域課題に 関心が高い	自然科学 学興味	高校生 刺激
参加2回以上	100.0	100.0	100.0	95.7	95.7	100.0	95.7	95.7	95.7
参加0回	98.6	98.6	98.6	91.8	81.9	87.7	81.9	84.9	95.9

※表中の数値はアンケートでの肯定的な回答（「5：とてもそう思う」または「4：どちらかといえばそう思う」）の割合

11月高校生サミットに向けて、事前研修として地域課題ワークショップに参加した者と事前研修なしで高校生サミットに参加したものについて比較した。どちらも、多くの項目で9割程度以上の高い効果を示しており、11月高校生サミットのみでの参加でも、他校交流による刺激から、高い教育効果があることを示した。

また、「新しい発見があった」、「理解できた」、「自然科学への興味関心が高まった」という項目に関しては、事前研修に参加した生徒がより高い結果となった。事前研修に参加したことから、より課題についての背景や知識がつき、テーマについて理解が進み、そこから自然科学への興味関心が高まることにつながったのではないかと考えられる。「また参加したい」という項目に関しては、これまでのワークショップなどの経験から、このような高校生同士が交流する機会やディスカッションする機会の重要性を感じ、回を重ねるごとに主体的に取り組もうという姿勢が窺える。また、「地域の課題について興味関心が高まった」、「地域の課題についてさらに取り組みたい」などの項目からもこれまでの学びをいかそうとしている主体的な姿勢が見て取れる。

以上のことから、事前研修を行うことによって、深く考察する土台ができ、その知識を活かそうと主体的に取り組む姿勢が醸成され、取組に対して効果が上がることが確認された。

4. 対面形式とオンライン形式による実施の効果の検証

今年度の高校生サミットでは、令和2年度に始めた対面形式とオンライン形式の併用で開催した。対面形式でポスター発表を行っているのと並行して、本校会場からの口頭発表を行い、その様子のオンライン配信（兵庫県立尼崎小田高校、兵庫県立加古川東高校）を行い、オンライン参加校（福井県立若狭高校、台湾 国立台南家齊高級中学校）のオンライン発表を本校会場へ中継、本校会場からも質疑応答や講評を行った。

午後からのボードディスカッションでは、対面形式では6人程度のグループでのディスカッションを18班、オンライン形式では、対面での6名とオンライン形式4名が合わさって、ディスカッションを行った。

対面とオンライン形式による教育効果を比較して、令和2年度から新しい取組として行ったオンライン形式の効果を検証する。

表6 高校生サミット 対面形式とオンライン形式の比較 [%] (対面参加 n=100、オンライン n=23)

	ために なる	新しい 発見	知識が 増えた	理解 できた	また参加 したい	地域課題 に興味	地域課題に 取り組む	自然科 学興味	高校生 刺激
(h) R7 サミット全体	99.0	99.0	99.0	93.3	86.4	90.4	86.4	87.5	96.2
対面参加	99.0	99.0	99.0	93.0	85.9	90.0	85.9	87.0	96.0
オンライン	100.0	100.0	100.0	100.0	95.7	87.0	91.3	95.7	100.0

※表中の数値はアンケートでの肯定的な回答（「5：とてもそう思う」または「4：どちらかといえばそう思う」）の割合

※オンラインは今回の高校生サミットでオンライン形式を経験した来校参加者を含む。

表7 オンラインでの参加者のみのアンケート [%] (オンライン n=23)

・オンラインでの発表は、刺激になりましたか	91.3
・オンラインでの発表は、難しかったですか	78.3
・オンラインでのディスカッションは、刺激になりましたか	73.9
・オンラインでのディスカッションは、難しかったですか	66.7

表8 オンラインディスカッション参加者の感想 (抜粋)

[オンラインより]	
・オンラインでの発表だったがとても楽しく意味のあるものに思えました。少し声が聞き取りづらかったり、ボードが見にくかったりして、戸惑いもありましたが、先生や実行委員の方が気を遣ってくださり、私たちも一緒に参加することができました。ディスカッションでは知らない人と話さないといけないので、この高校生サミットはすごいことをしているのだと思いました。また、このような企画に参加したいです。	
・オンラインで参加したのでコミュニケーションはとりやすかったです。環境や防災などについて様々な発表があり、私たちもスライド発表の仕方について学べるよい機会でした。今回の行事で自分たちが何をすべきかわかったのがよかったです。	

対面とオンライン、どちらの形式であっても、多くの項目で9割以上の参加者が学びや刺激があり意識が高まったと回答しており、昨年度に引き続きオンライン形式でも一定の効果が得られることがわかった。

これまでのオンラインと併用しての取組を振り返っても、「知識向上」や「自然科学への興味関心」、「課題研究の認識の深まり」、これまでテーマとして取り組んできた「地域課題への取組」に対して、オンラインでも一定の効果があることが確認されている。

また、オンラインでの手法については慣れてきており、オンライン発表やディスカッションは難しく感じる生徒も減ってきていることも分かった。オンライン形式でのさらなる発展が考えられる。オンラインを導入することで、これまで遠方や時間的制約のある場合でできなかった交流が可能となり、さらに多様な視点からの課題発見解決につながる、その効果を見ることができた。今後、オンラインの利点を活かしながら、ディスカッション等をより効果的に行うための工夫、事前学習や当日の展開の工夫、さらに事後の振り返りを丁寧に行うなど、より検討を重ねて効果的な方法を開発していきたいと考える(表6、7、8)。

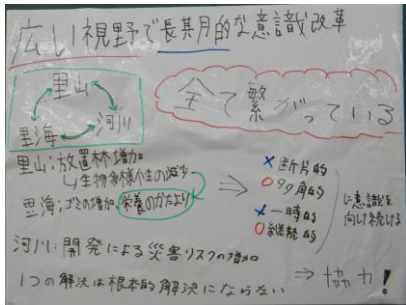
5. 一年間の取組の振り返りによる効果の検証

① 高校生サミットに関して、一年間取り組んできたことの振り返りのまとめ（一年間の振り返り）

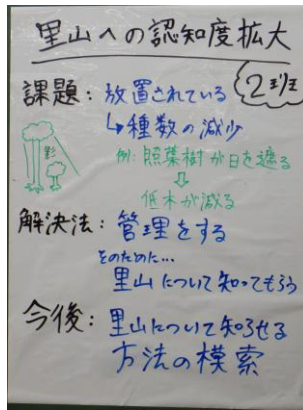
「高大連携フォーラム in 京都大学」では、今年度の一連の高校生サミット・ワークショップの取組のまとめを成果物とするべく、来年度に引き継ぐことをテーマに一年間の振り返りを行った。まず、海と山それぞれについて3回のワークショップで得た知識や気づきの整理、高校生サミット当日に得た知識や気づきの整理を行った。今までの活動を、仮説や問い→知ったこと→サミットの日にまとめたこと→今後の課題、の項目で整理をした。そのうえで、後輩に最も伝えたいことや、引き続き考えてほしい「今後の課題」を考えた。班内で共有、ディスカッションを行い、ホワイトボードにまとめ、発表を行った。その際、伝えたいことに関する前提知識や、課題発見に至るプロセス、解決に向けた取り組みのアイデア、現時点でわからないことを書くように指示した。

伝えたいことについて生徒の記述を見てみると、人々に問題を伝えるか、自分事として考えることの重要性、そのための行動を起こしたいという趣旨の意見が多く見られた。山や海は様々な視点から見て適切な管理をしていくことの重要性も指摘しており、人が自然とどうかかわるべきか、どのような行動をするべきかということを考えている。このように、フィールドワークを通じて学んだ知識と、そこから発展して、疑問や意見、違う視点からの解釈を行っており、高校生サミットを通じてより深い学びとなった。さらに後輩へと引き継ぎ、自分たちだけではできなかったことを引継ぎ、成し遂げたいという姿勢も見受けられた。

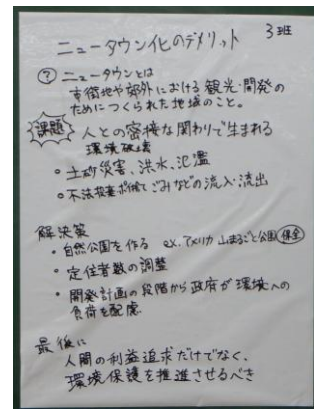
1班



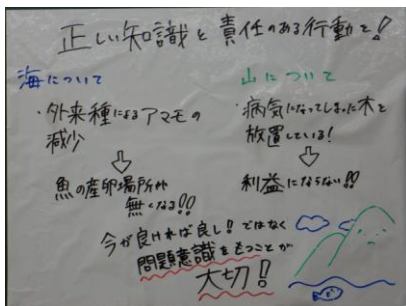
2班



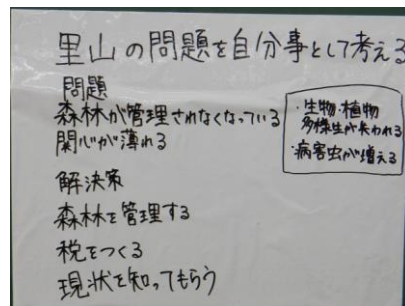
3班



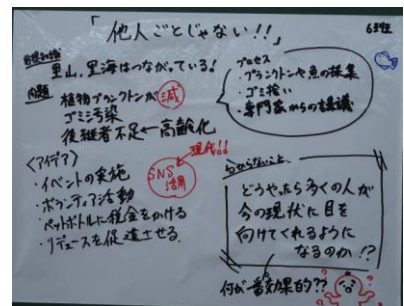
4班



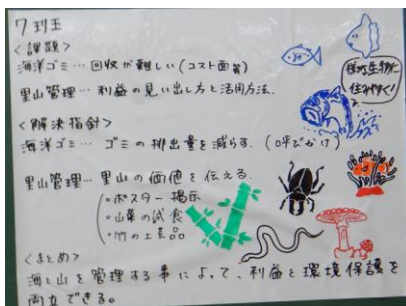
5班



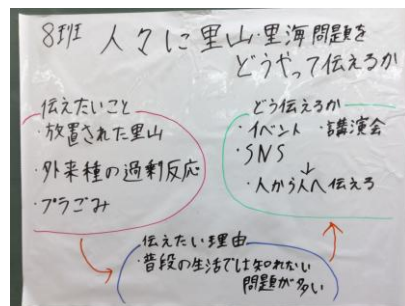
6班



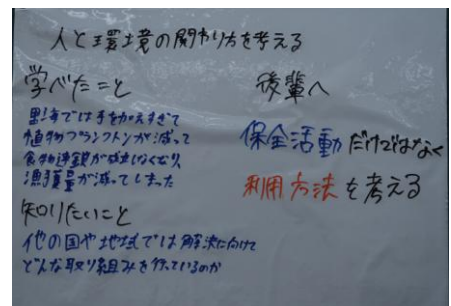
7班



8班



9班



○ディスカッションシート 一年間の取り組みの振り返り からの抜粋

事前ワークショップやサミットで「知ったこと」

・里山や里海で様々な問題が生じていることを知った。・海洋ごみの問題。・貧栄養化の問題と、工場排水の影響による富栄養化の問題。・照葉樹が多くて、低木に日光が当たらなくなる。・放置されたことによる生物多様性の減少。・人が手を加えないと好転していかない。・川は幅が狭くコンクリートで川底が覆われてしまっている。・放置竹林の問題。・人の手が入らないための問題と人の手が入りすぎたための問題。

引き続き考えてほしい「今後の課題」

・人々が海や川の環境を保全のためにどうするべきか。・どうやってごみを減らすのか。・どうやって課題を発信するか。・高校生の関わり方はどうするべきか。

② 地域の環境を守るためには、どうすればよいのか。自分には何ができるのか。(生徒の1年間の記録)

①に加えて、高校生サミットの一年間の記録として、上記の問いに対して、開始前(7月)と終了後(12月)の二回に分けて生徒たちは回答した。また、高校生サミットの一年間の取組に参加して、自分の開始前とし終了後の記述がどのように変化したかも記述した。

開始前は、環境を守るためにはといわれても、具体的な対策が思いつかなかったりしていたが、ワークショップや高校生サミットを経て、実際の活動を経験し問題に触れることで、より具体的な対策をイメージし、自分たちの知った現状を伝えたいというだけでなく、どのようにすれば伝わるのか考え、行動に移そうとしている。ただ、ごみを捨てなければよい、資源を取りすぎなければよいではなく、環境のバランスの大切さや、人と環境の共存を考えている。環境保全の仕事に携わりたいと考えてくれている生徒もいる。

前後の記述から気づいたことを見ると、新たな視点・気づきに関する記述が見られた。一年間を通して活動に参加する過程において、他の生徒との意見交流や体験活動を通して、地域課題について詳しく知ることの大切さ、さらに新たな気づきや多角的な視野の必要性を認識し、当事者意識を強く持って、具体的に何ができるだろうと考えているようになっていくことが窺える。

○開始前

・ゴミの分別やポイ捨てをしない。・地域の清掃活動への参加。・資源、森や海の生き物、植物を取りすぎないようにすればいいと感じた。

○終了後

・環境保全をしていくためには、人々の意識改革と当事者意識を持つことが必要不可欠である。多少知識を持ったので伝えていきたい。・地産地消を心がける。森林は伐ることと植えることをバランスで行わなければならない。・利害関係もあるのではないか。一人一人が環境問題をよく知り、自分事として考え行動することが重要と感じた。・課題をしっかりと見定め、自分なりにできることを考え、責任を持って行動していくこと。

○開始前と終了後の記述を比べて、気づいたこと、考えたこと

・他校の生徒が集まると学校の特色あるディスカッションができる。新たな視点が得られる。・多角的のものを見ることの難しさを感じた。・自分たちでも行動できるのではないか。・他者をどのように巻き込むか。

⑤ 成果の発信・普及

「令和7年度 地域課題解決に取り組む高校生サミット 報告書」を作成し、参加校や関係機関に広く配布し、高校生サミットの取組の普及に努める

1 取組の内容や手法、教育効果の普及

これまで開発して実践してきた高校生サミットの取組について、その手法や生徒の変容からの教育的効果をインターネットサイトで紹介し、開発したプログラムの普及に努めた。また、重点枠の取組での、他校との連携によるポートフォリオやルーブリックによる共同の評価方法の開発の成果の普及に努めた。兵庫県だけでなく他府県（今年度は熊本県、鹿児島県、沖縄県）からも視察や問い合わせがあり、本取組を紹介し、普及を行った。また、高校生サミットでの取組・実施方法をもとに、外部団体の行事中での高校生による発表やディスカッションの実施の協力も行ってきた。

- ・尼崎 臨海 来んかい！体験会（環境学習フェア 2025）（2025年7月開催）

- （兵庫県阪神南県民センター）

- ・ひょうご里山・里海国際フォーラム 高校生ポスターセッション（2025年9月28日）

本取組を「TEAM EXPO 2025 共創チャレンジ」に登録し、本校での高校生サミットによる地域課題解決の取り組みの普及に努めた。

2 連携校の成果の共有と普及

高校生サミットでの取組を通して、連携校の生徒の課題研究や探究活動への取組の意識が向上し、各校の課題研究の発展につながった。特に、連携校から、この取り組みを通して、他校生徒と協働で取り組んでいくことから刺激を受け、各校の生徒の成長につながっていることが実感されている。さらに、参加している生徒を通して、各校の校内へその成果が普及していく効果も出てきている。

⑥ 研究開発実施上の課題及び今後の研究開発の方向性

1 共通テーマの取組のさらなる工夫（共同研究への発展の検討）

これまでの高校生サミットの取組から、共同研究等の共有できるテーマを設けることで、実践の軸ができ、生徒の取組の方向が定まり効果があることが分かってきた。今年度の取組においても、共同テーマをこれまでの「海」から、「海と山のつながり」へ発展させ、「環境のつながり」を考える、より多様な視点が必要な学際的な地域課題へ向けて取り組んだ。テーマについて、取組の核となる生徒実行委員会校に事前研修でテーマを基に共有し、そのことで他校を含んだサミット当日も共有しやすく工夫し、一定の効果が得られた。今年度は、生徒の学びを外部へ「提言」という形で発信を行った。これにより、生徒はテーマに対して具体的に考え、また伝え方も工夫して発信を行うことができた。今後は、その共通のテーマの「提言」を具体化していくため、次のステップへ発展させていく必要があると考える。

2 オンラインの取組のさらなる工夫

今年度は、生徒実行委員会をオンライン形式行うこと、オンラインでの事項の共有により、ワークショップ・高校生サミットをスムーズに行うことができた。

また、これまでオンライン形式であっても、対面形式と同様に多くの項目で学びや刺激があり意識が高まったと回答を得られており、オンライン形式でも一定の効果が得られることが示されてきた。さらなる工夫を行い、オンラインでの利点を活かしながら、より深く考えることを促すための効果的な工夫を検討し、さらに来年度、高校生サミットでのオンライン発表やオンラインディスカッションをより効果的に実施するため工夫を行いたい。また海外との連携も行うことができ、これからも発展させていく。

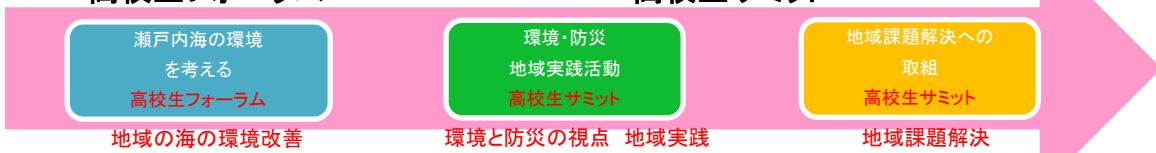
3 地域課題から視点を広げる

地元地域の課題として取り組んでいることが、他地域でも共通すべき課題であることを認識し、地域の課題解決が日本や地球規模の課題解決につながるという視点の広がりにつなげていく。普段関わらない他県の生徒との交流で刺激を受け、同じような地域課題をもっている生徒が他地域にもいるということを知った生徒は多かった。課題を共有して「提言」を行うことができた。さらに問題解決のためこの活動を日本全国の視点も取り入れ、さらに行動へとつなげていきたい。

令和7年度高校生サミットの流れ

高校生フォーラム →

高校生サミット



<p>第1回 大阪湾の環境を考える 兵庫県高校生フォーラム</p>	<p>第2回 瀬戸内海の環境を考える高校生全国フォーラム コアSSH「全国的な規模での共同研究」 (環境調査並びに遺伝子解析などの活用による海洋環境解析) ①環境調査 ②DNA解析</p>
<p>第3回 瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム (SSH交流会支援指定) ディスカッションの試み</p>	<p>第4回 瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③共同調査</p>
<p>第5回 瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③共同調査 ④評価の工夫</p>	<p>第6回 瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③共同調査 ④評価の工夫</p>
<p>第7回 瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③共同調査 ④評価の工夫</p>	<p>第8回 環境・防災地域実践活動高校生サミット (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③地域実践活動 ④評価の工夫</p>
<p>第9回 環境・防災地域実践活動高校生サミット (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③地域実践活動 ④評価の工夫</p>	<p>第10回 瀬戸内海の地域課題解決に取り組む高校生サミット (SSH交流会支援指定) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③地域実践活動 ④評価の工夫</p>
<p>第11回 地域課題解決に取り組む高校生サミット (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③地域実践活動 ④評価の工夫</p>	<p>第12回 地域課題解決に取り組む高校生サミット (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③地域実践活動 ④評価の工夫</p>
<p>第13回 地域課題解決に取り組む高校生サミット (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③地域実践活動 ④評価の工夫</p>	<p>第14回 地域課題解決に取り組む高校生サミット (SSH科学技術人材育成重点枠) ①生徒実行委員会 ②ディスカッションの工夫 ③地域実践活動 ④評価の工夫</p>

令和7年度 地域課題解決に取り組む高校生サミット～兵庫から日本を考える～ (第15回瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム)

地域課題ワークショップ①(須磨海岸実習)[7月21日(月・祝)]

午前: 趣旨説明 講義①: 森と海のつながり 講義②: 神戸の山の活動を通して 講義③: 漁師から神戸の海の問題について
午後: 海岸実習(プランクトン採集、砕波帯ネット、セディメントトラップ) 収集物の観察 まとめの講義 ディスカッション

地域課題ワークショップ②(須磨海岸実習)[9月14日(日)]

午前: 実習(小形地曳網の曳網・採集物の選別、漂着物調査)
午後: 採集物の観察 まとめの講義 ディスカッション

地域課題ワークショップ③(人と自然の博物館・里山実習)[10月26日(日)]

午前: 里山実習(兵庫の里山とその保全)
午後: 講義(森林土壌学) 館内見学 ディスカッション

地域課題解決に取り組む高校生サミット [11月15日(土)]

<p>午前 ①10:00 開会式 ②10:30 ポスターセッション</p>	<p>午後 ③13:00 ディスカッションの事前説明・事前知識の共有 ④13:30 ボードディスカッション(19班) ⑤15:35 ディスカッション全体報告会 ⑥16:10 閉会式</p>
---	--

高大連携フォーラムin京都大学[12月20日(土)]

午前: 開会式 高校生サミット取組紹介 ポスターセッション(17件) 意見交換会
午後: 生徒実行委員会 一年間の振り返り 閉会式

令和7年度 地域課題解決に取り組む高校生サミット R7.11.15(土)
 (第15回瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム) 参加校

来校・オンライン参加校

①	兵庫県	兵庫県立尼崎小田高等学校★
②	兵庫県	兵庫県立伊丹高等学校
③	兵庫県	兵庫県立伊丹北高等学校
④	兵庫県	西宮市立西宮東高等学校
⑤	兵庫県	兵庫県立三田祥雲館高等学校
⑥	兵庫県	神戸市立六甲アイランド高等学校★
⑦	兵庫県	兵庫県立御影高等学校★
⑧	兵庫県	神戸市立科学技術高等学校
⑨	兵庫県	兵庫県立兵庫高等学校
⑩	兵庫県	兵庫県立星陵高等学校★
⑪	兵庫県	兵庫県立洲本高等学校
⑫	兵庫県	兵庫県立農業高等学校★
⑬	兵庫県	兵庫県立加古川東高等学校★
⑭	兵庫県	兵庫県立飾磨工業高等学校
⑮	奈良県	奈良県立青翔高等学校
⑯	和歌山県	和歌山県立海南高等学校
⑰	福井県	福井県若狭高等学校
⑱	岡山県	山陽学園高等学校★
⑲	岡山県	岡山県立岡山工業高等学校
⑳	広島県	広島県立広島高等学校
㉑	台湾	國立臺南家齊高級中等學校 (National Tainan Chia-Chi Senior High School)

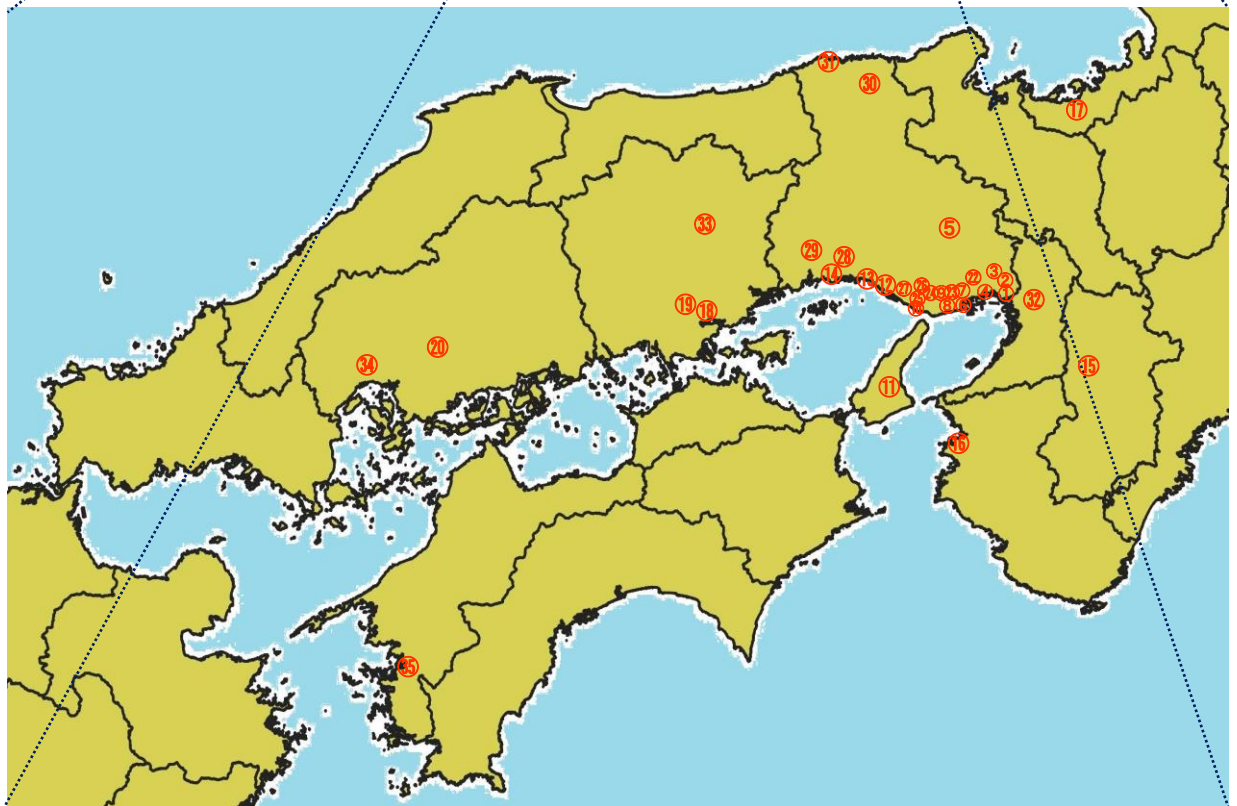
紙面発表校

㉒	兵庫県	西宮市立西宮高等学校
㉓	兵庫県	兵庫県立神戸高等学校
㉔	兵庫県	兵庫県立長田高等学校
㉕	兵庫県	兵庫県立神戸商業高等学校
㉖	兵庫県	神戸市立須磨翔風高等学校
㉗	兵庫県	兵庫県立明石北高等学校
㉘	兵庫県	兵庫県立姫路西高等学校
㉙	兵庫県	兵庫県立龍野高等学校
㉚	兵庫県	兵庫県立豊岡高等学校
㉛	兵庫県	兵庫県立香住高等学校
㉜	大阪府	大阪府立大坂東高等学校
㉝	岡山県	岡山県立津山高等学校
㉞	広島県	広島県立広島国泰寺高等学校★
㉟	愛媛県	愛媛県立宇和島高等学校



協力校 計35校

(来校・オンライン参加21校、紙面参加校14校、★生徒実行委員会校8校)



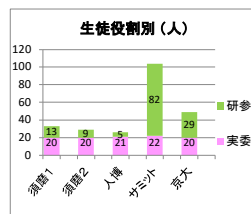
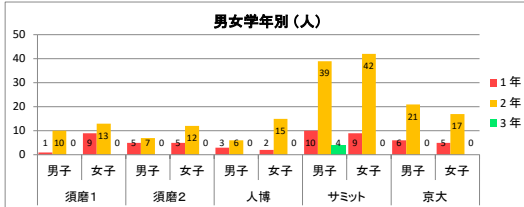
出典：「国土数値情報（行政区域データ）」

(国土交通省) (<https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-N03-2025.html>) を加工して作成

令和7年度 高校生サミット 生徒アンケート結果 (生徒全体)

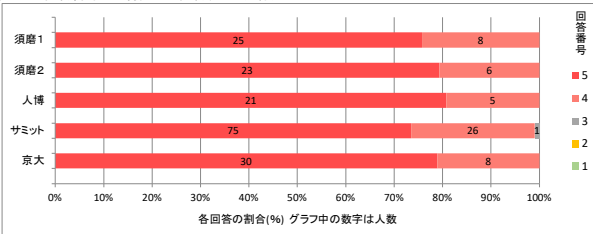
① 参加生徒について(アンケート提出者)

学年	性別	1年			2年			3年			男女別合計
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	
須磨1	男子	1	10	0	11	0	0	11	0	0	33
	女子	9	13	0	22	0	0	22	0	0	29
須磨2	男子	5	7	0	12	0	0	12	0	0	26
	女子	5	12	0	17	0	0	17	0	0	29
人博	男子	3	6	0	9	0	0	9	0	0	26
	女子	2	15	0	17	0	0	17	0	0	26
サミット	男子	10	39	4	53	0	0	53	0	0	104
	女子	9	42	0	51	0	0	51	0	0	104
京大	男子	6	21	0	27	0	0	27	0	0	49
	女子	5	17	0	22	0	0	22	0	0	49



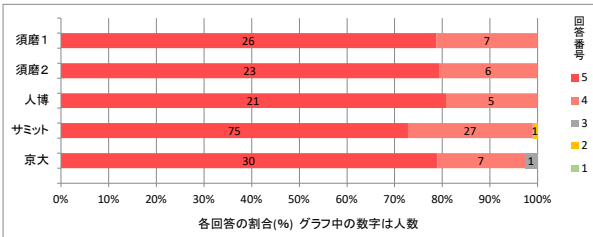
② 今回の内容はためになりましたか(各回とも実行委員・研参生徒・全体の割合(%))は、それぞれ別々に算出。また、大きい回答番号ほど肯定的な回答、以下同様)

学年	項目	5			4			3			2			1		
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	15	10	25	5	3	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	75.0	76.9	75.8	25.0	23.1	24.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	16	7	23	4	2	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	80.0	77.8	79.3	20.0	22.2	20.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	17	4	21	4	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	81.0	80.0	80.8	19.0	20.0	19.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	18	57	75	4	22	26	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	%	81.8	71.3	73.5	18.2	27.5	25.5	0.0	1.3	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
京大	人数	12	18	30	2	6	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	85.7	75.0	78.9	14.3	25.0	21.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	項目	ためになった			どちらかといえば ためになった			どちらとも言えない			どちらかといえば ためにならなかった			ためにならなかった		



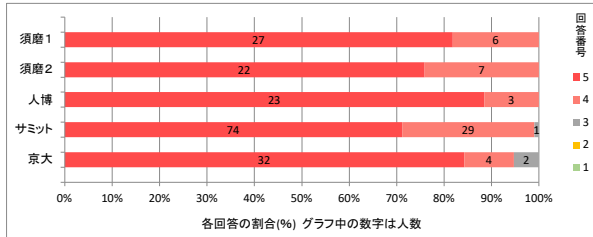
③ 今回の内容は、自分の新しい発見がありましたか

学年	項目	5			4			3			2			1		
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	16	10	26	4	3	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	80.0	76.9	78.8	20.0	23.1	21.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	17	6	23	3	3	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	85.0	66.7	79.3	15.0	33.3	20.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	18	3	21	3	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	85.7	60.0	80.8	14.3	40.0	19.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	18	57	75	4	23	27	0	0	0	1	1	0	0	0	0
	%	81.8	70.4	72.8	18.2	28.4	26.2	0.0	0.0	0.0	1.2	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0
京大	人数	12	18	30	2	5	7	0	0	1	1	0	0	0	0	0
	%	85.7	75.0	78.9	14.3	20.8	18.4	0.0	4.2	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	項目	あった			どちらかといえば あった			どちらとも言えない			どちらかといえば なかった			なかった		



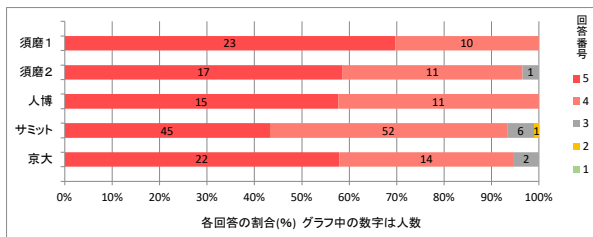
④ 今回の内容は、自分の知識を高めるのに役立ちましたか。

学年	項目	5			4			3			2			1		
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	15	12	27	5	1	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	75.0	92.3	81.8	25.0	7.7	18.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	15	7	22	5	2	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	75.0	77.8	75.9	25.0	22.2	24.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	20	3	23	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	95.2	60.0	88.5	4.8	40.0	11.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	15	59	74	7	22	29	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	%	68.2	72.0	71.2	31.8	26.8	27.9	0.0	1.2	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
京大	人数	11	21	32	2	4	6	1	1	2	0	0	0	0	0	0
	%	78.6	87.5	84.2	14.3	8.3	10.5	7.1	4.2	5.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	項目	役立った			どちらかといえば 役立った			どちらとも言えない			どちらかといえば 役立っていない			役立っていない		



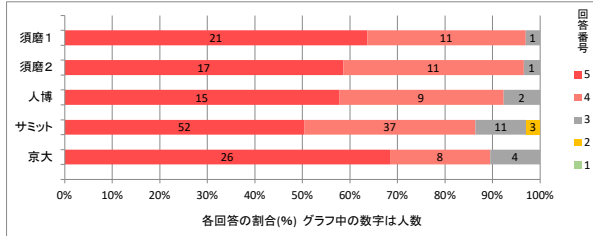
⑤ 内容は、自分なりに理解できましたか。

学年	項目	5			4			3			2			1		
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	14	9	23	6	4	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	70.0	69.2	69.7	30.0	30.8	30.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	16	1	17	4	7	11	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	%	80.0	11.1	58.6	20.0	77.8	37.9	0.0	11.1	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	13	2	15	8	3	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	61.9	40.0	57.7	38.1	60.0	42.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	13	32	45	8	44	52	1	5	6	0	1	1	0	0	0
	%	59.1	39.0	43.3	36.4	53.7	50.0	4.5	6.1	5.8	0.0	1.2	1.0	0.0	0.0	0.0
京大	人数	10	12	22	4	10	14	0	2	2	0	0	0	0	0	0
	%	71.4	50.0	57.9	28.6	41.7	36.8	0.0	8.3	5.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	項目	理解できた			どちらかといえば 理解できた			どちらとも言えない			どちらかといえば 理解できなかった			理解できなかった		



⑥ またこのような企画に参加したいと思いませんか。

学年	項目	5			4			3			2			1		
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	16	5	21	4	7	11	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	%	80.0	38.5	63.6	20.0	53.8	33.3	0.0	7.7	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	13	4	17	7	4	11	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	%	65.0	44.4	58.6	35.0	44.4	37.9	0.0	11.1	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	15	0	15	5	4	9	1	1	2	0	0	0	0	0	0
	%	71.4	0.0	57.7	23.8	80.0	34.6	4.8	20.0	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	14	38	52	7	30	37	1	10	11	0	3	3	0	0	0
	%	63.6	46.9	50.5	31.8	37.0	35.9	4.5	12.3	10.7	0.0	3.7	2.9	0.0	0.0	0.0
京大	人数	10	16	26	3	5	8	1	3	4	0	0	0	0	0	0
	%	71.4	66.7	68.4	21.4	20.8	21.1	7.1	12.5	10.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	項目	参加したい			どちらかといえば 参加したい			どちらとも言えない			どちらかといえば 参加したくない			参加したくない		

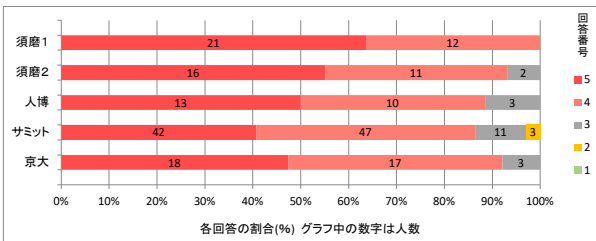


⑦ 参加したことで、地域の課題(環境や防災など)について興味関心が高まりましたか。

学年	項目	5			4			3			2			1		
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	12	8	20	8	5	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	60.0	61.5	60.6	40.0	38.5	39.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	15	5	20	5	3	8	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	%	75.0	55.6	69.0	25.0	33.3	27.6	0.0	11.1	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	15	3	18	6	2	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	71.4	60.0	69.2	28.6	40.0	30.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0				

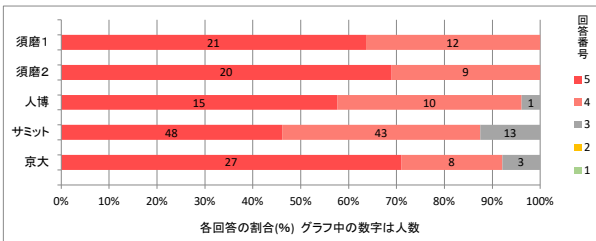
⑧ 参加したことで、地域の課題(環境や防災など)についてさらに取り組みたい(調べたい)と思うようになりましたか。

	回答	5			4			3			2			1			
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	
須磨1	人数	14	7	21	6	6	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	70.0	53.8	63.6	30.0	46.2	36.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	12	4	16	6	5	11	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	%	60.0	44.4	55.2	30.0	55.6	37.9	10.0	0.0	6.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	12	1	13	6	4	10	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0
	%	57.1	20.0	50.0	28.6	80.0	38.5	14.3	0.0	11.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	13	29	42	8	39	47	1	10	11	0	3	3	0	0	0	0
	%	59.1	35.8	40.8	36.4	48.1	45.6	4.5	12.3	10.7	0.0	3.7	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0
京大	人数	7	11	18	7	10	17	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0
	%	50.0	45.8	47.4	50.0	41.7	44.7	0.0	12.5	7.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
項目		なかった			どちらかといえばなかった			どちらとも言えない			どちらかといえばならなかった			ならなかった			



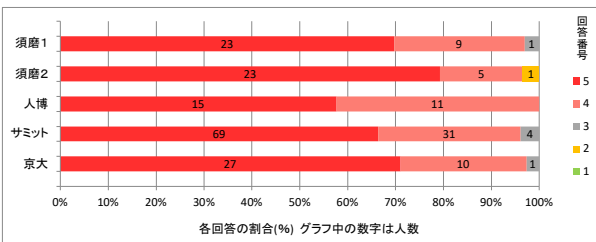
⑨ 参加したことで、自然科学への興味関心が高まりましたか。

	回答	5			4			3			2			1			
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	
須磨1	人数	10	11	21	10	2	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	50.0	84.6	63.6	50.0	15.4	36.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	15	5	20	5	4	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	75.0	55.6	69.0	25.0	44.4	31.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	14	1	15	6	4	10	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	%	66.7	20.0	57.7	28.6	80.0	38.5	4.8	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	13	35	48	8	35	43	1	12	13	0	0	0	0	0	0	0
	%	59.1	42.7	46.2	36.4	42.7	41.3	4.5	14.6	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
京大	人数	11	16	27	2	6	8	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0
	%	78.6	66.7	71.1	14.3	25.0	21.1	7.1	8.3	7.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
項目		高まった			どちらかといえば高まった			どちらとも言えない			どちらかといえば低くなった			低くなった			



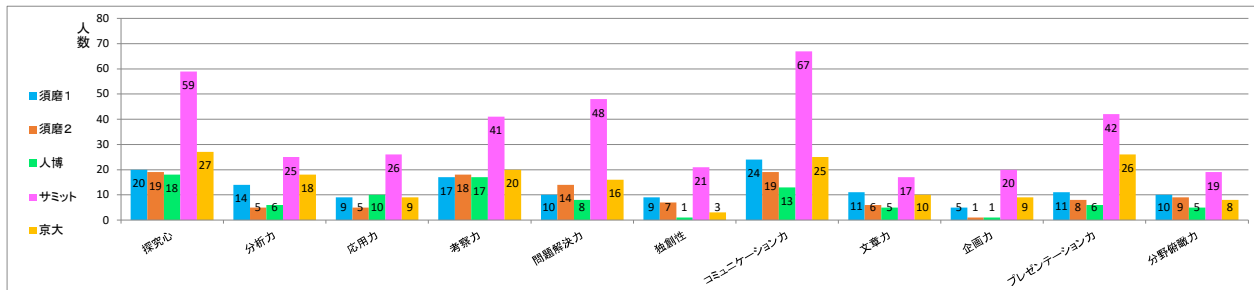
⑩ 高校生同士の交流は、刺激となったと思いますか。

	回答	5			4			3			2			1			
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	
須磨1	人数	15	8	23	4	5	9	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	%	75.0	61.5	69.7	20.0	38.5	27.3	5.0	0.0	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	17	6	23	3	2	5	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
	%	85.0	66.7	79.3	15.0	22.2	17.2	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	12	3	15	9	2	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	57.1	60.0	57.7	42.9	40.0	42.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	18	51	69	4	27	31	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0
	%	81.8	62.2	66.3	18.2	32.9	29.8	0.0	4.9	3.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
京大	人数	10	17	27	4	6	10	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
	%	71.4	70.8	71.1	28.6	25.0	26.3	0.0	4.2	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
項目		非常にそう思う			そう思う			どちらとも言えない			やや思わない			全く思わない			



⑪ 今回の企画において、どのような力が身に付いたと思いますか。(複数可)

	回答	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11		
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体			
須磨1	人数	13	7	20	10	4	14	6	3	9	12	5	17	8	2	10	8	1	9	15	9	24	9	2	11	4	1	5	8	3	11	6	4	10
	%	65.0	53.8	60.6	50.0	30.8	42.4	30.0	23.1	27.3	60.0	38.5	51.5	40.0	15.4	30.3	40.0	7.7	27.3	75.0	69.2	72.7	45.0	15.4	33.3	20.0	7.7	15.2	40.0	23.1	33.3	30.0	30.8	30.3
須磨2	人数	12	7	19	3	2	5	4	1	5	12	6	18	11	3	14	7	0	7	16	3	19	4	2	6	1	0	1	7	1	8	7	2	9
	%	60.0	77.8	65.5	15.0	22.2	17.2	20.0	11.1	17.2	60.0	66.7	62.1	55.0	33.3	48.3	35.0	0.0	24.1	80.0	33.3	65.5	20.0	22.2	20.7	5.0	0.0	3.4	35.0	11.1	27.6	35.0	22.2	31.0
人博	人数	13	5	18	4	2	6	9	1	10	15	2	17	7	1	8	1	0	1	13	0	13	5	0	5	1	0	1	5	1	6	5	0	5
	%	61.9	100.0	69.2	19.0	40.0	23.1	42.9	20.0	38.5	71.4	40.0	65.4	33.3	20.0	30.8	4.8	0.0	3.8	61.9	0.0	50.0	23.8	0.0	19.2	4.8	0.0	3.8	23.8	20.0	23.1	23.8	20.0	19.2
サミット	人数	14	45	59	9	16	25	7	19	26	10	31	41	13	35	48	5	16	21	18	49	67	7	10	17	6	14	20	8	34	42	4	15	19
	%	63.6	54.9	56.7	40.9	19.5	24.0	31.8	23.2	25.0	45.5	37.8	39.4	59.1	42.7	46.2	22.7	19.5	20.2	81.8	59.8	64.4	31.8	12.2	16.3	27.3	17.1	19.2	36.4	41.5	40.4	18.2	18.3	18.3
京大	人数	8	19	27	6	12	18	7	2	9	8	12	20	9	7	16	1	2	3	10	15	25	3	7	10	4	5	9	9	17	26	4	4	8
	%	40.0	65.5	55.1	30.0	41.4	36.7	35.0	6.9	18.4	40.0	41.4	40.8	45.0	24.1	32.7	5.0	6.9	6.1	50.0	51.7	51.0	15.0	24.1	20.4	20.0	17.2	18.4	45.0	58.6	53.1	20.0	13.8	16.3
項目		探究心			分析力			応用力			考察力			問題解決力			独創性			コミュニケーション力			文章力			企画力			プレゼンテーション力			分野精進力		

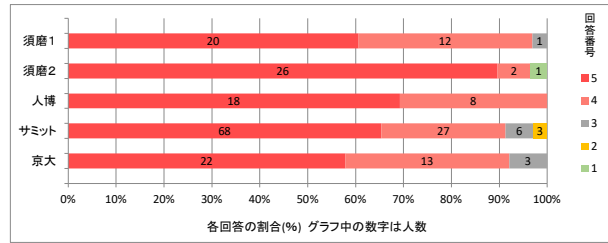


⑫ 今回の企画において、特にどのような点が難しかったですか。(複数可)

	回答	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11		
		実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体			
須磨1	人数	6	1	7	5	4	9	12	7	19	6	2	8	5	3	8	4	4	8	9	3	12	10	2	12	4	0	4	9	4	13	8	2	10
	%	30.0	7.7	21.2	25.0	30.8	27.3	60.0	53.8	57.6	30.0	15.4	24.2	25.0	23.1	24.2	20.0	30.8	24.2	45.0	23.1	36.4	50.0	15.4	36.4	20.0	0.0	12.1	45.0	30.8	39.4	40.0	15.4	30.3
須磨2	人数	7	1	8	5	0	5	7	1	8	5	1	6	3	2	5	5	2	7	7	1	8	6	5	11	1	1	2	6	2	8	1	0	1
	%	35.0	11.1	27.6	25.0	0.0	17.2	35.0	11.1	27.6	25.0	11.1	20.7	15.0	22.2	17.2	25.0	22.2	24.1	35.0	11.1	27.6	30.0	55.6	37.9	5.0	11.1	6.9	30.0	22.2	27.6	5.0	0.0	3.4
人博	人数	8	0	8	6	2	8	6	3	9	6	1	7	3	0	7	1	1	2	7	0	7	3	0	3	5	0	5	7	0	7	4	0	4
	%	38.1	0.0	30.8	28.6	40.0	30.8	28.6	60.0	34.6	28.6	20.0	26.9	33.3	0.0	26.9	4.8	20.0	7.7	33.3	0.0	26.9	14.3	0.0	11.5	23.8	0.0	19.2	33.3	0.0	26.9	19.0	0.0	15.4
サミット	人数	5	11	16	8	20	28	7	22	29	5	18	23	10	24	34	3	15	18	6	34	40	5	24	29	5	16	21	9	33				

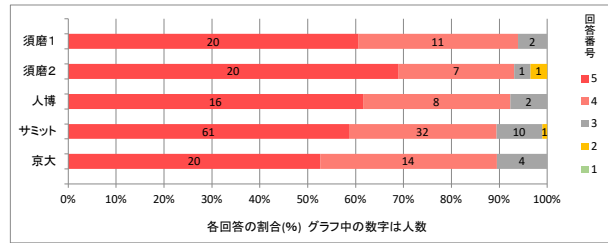
⑬ 今日のプログラムで、グループ内で協力したり、意見交換をすることができた。

	5			4			3			2			1		
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	11	9	20	8	4	12	1	0	1	0	0	0	0	0
	%	55.0	69.2	60.6	40.0	30.8	36.4	5.0	0.0	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	19	7	26	1	1	2	0	0	0	0	0	0	1	1
	%	95.0	77.8	89.7	5.0	11.1	6.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1	3.4
人博	人数	15	3	18	6	2	8	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	71.4	60.0	69.2	28.6	40.0	30.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	18	50	68	3	24	27	1	5	6	0	3	3	0	0
	%	81.8	61.0	65.4	13.6	29.3	26.0	4.5	6.1	5.8	0.0	3.7	2.9	0.0	0.0
京大	人数	8	14	22	5	8	13	1	2	3	0	0	0	0	0
	%	57.1	58.3	57.9	35.7	33.3	34.2	7.1	8.3	7.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
項目	そう思う			どちらかといえば思う			どちらとも言えない			あまりそう思わない			そう思わない		



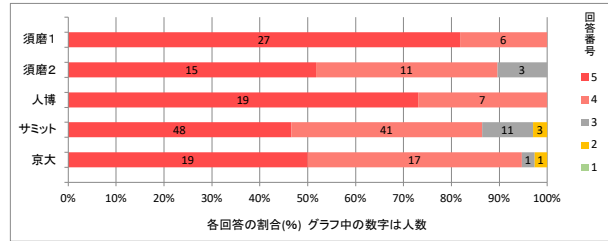
⑭ 今日のプログラムで、グループ内で協力したり、意見交換をする力が身についた。

	5			4			3			2			1		
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	13	7	20	6	5	11	1	1	2	0	0	0	0	0
	%	65.0	53.8	60.6	30.0	38.5	33.3	5.0	7.7	6.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	15	5	20	4	3	7	1	0	1	0	1	1	0	0
	%	75.0	55.6	69.0	20.0	33.3	24.1	5.0	0.0	3.4	0.0	11.1	3.4	0.0	0.0
人博	人数	14	2	16	5	3	8	2	0	2	0	0	0	0	0
	%	66.7	40.0	61.5	23.8	60.0	30.8	9.5	0.0	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	14	47	61	8	24	32	0	10	10	0	1	1	0	0
	%	63.6	57.3	58.7	36.4	29.3	30.8	0.0	12.2	9.6	0.0	1.2	1.0	0.0	0.0
京大	人数	8	12	20	5	9	14	1	3	4	0	0	0	0	0
	%	57.1	50.0	52.6	35.7	37.5	36.8	7.1	12.5	10.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
項目	そう思う			どちらかといえば思う			どちらとも言えない			あまりそう思わない			そう思わない		



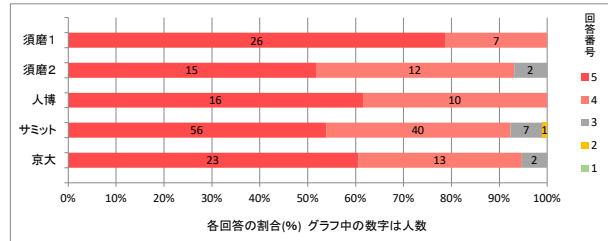
⑮ 今日のプログラムで、海と山のつながりについて、新たな気づきがあった。

	5			4			3			2			1		
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	17	10	27	3	3	6	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	85.0	76.9	81.8	15.0	23.1	18.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	10	5	15	7	4	11	3	0	3	0	0	0	0	0
	%	50.0	55.6	61.5	35.0	44.4	37.9	15.0	0.0	10.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	17	2	19	4	3	7	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	81.0	40.0	73.1	19.0	60.0	26.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	14	34	48	8	33	41	0	11	11	0	3	3	0	0
	%	63.6	42.0	46.6	36.4	40.7	39.8	0.0	13.6	10.7	0.0	3.7	2.9	0.0	0.0
京大	人数	9	10	19	5	12	17	0	1	1	0	1	1	0	0
	%	64.3	41.7	50.0	35.7	50.0	44.7	0.0	4.2	2.6	0.0	4.2	2.6	0.0	0.0
項目	そう思う			どちらかといえば思う			どちらとも言えない			あまりそう思わない			そう思わない		



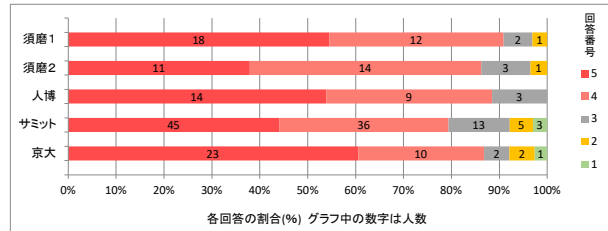
⑯ 今日のプログラムで、海と山のつながりについて、認識が深まった。

	5			4			3			2			1		
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	15	11	26	5	2	7	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	75.0	84.6	78.8	25.0	15.4	21.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	11	4	15	7	5	12	2	0	2	0	0	0	0	0
	%	55.0	44.4	51.7	35.0	55.6	41.4	10.0	0.0	6.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	14	2	16	7	3	10	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	66.7	40.0	61.5	33.3	60.0	38.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	17	39	56	4	36	40	1	6	7	0	1	1	0	0
	%	77.3	47.6	53.8	18.2	43.9	38.5	4.5	7.3	6.7	0.0	1.2	1.0	0.0	0.0
京大	人数	9	14	23	5	8	13	0	2	2	0	0	0	0	0
	%	64.3	58.3	60.5	35.7	33.3	34.2	0.0	8.3	5.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
項目	そう思う			どちらかといえば思う			どちらとも言えない			あまりそう思わない			そう思わない		



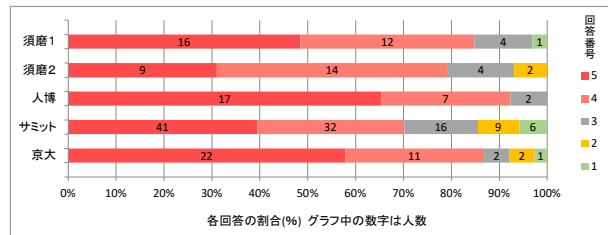
⑰ 今日のプログラムで、自分の課題研究についての認識が深まった。

	5			4			3			2			1		
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	10	8	18	1	4	12	1	1	2	1	0	1	0	0
	%	50.0	61.5	54.5	40.0	30.8	36.4	5.0	7.7	6.1	5.0	0.0	3.0	0.0	0.0
須磨2	人数	7	4	11	10	4	14	2	1	3	1	0	1	0	0
	%	35.0	44.4	37.9	50.0	44.4	48.3	10.0	11.1	10.3	5.0	0.0	3.4	0.0	0.0
人博	人数	12	2	14	6	3	9	3	0	3	0	0	0	0	0
	%	57.1	40.0	53.8	28.6	60.0	34.6	14.3	0.0	11.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	13	32	45	5	31	36	2	11	13	2	3	5	0	3
	%	59.1	40.0	44.1	22.7	38.8	35.3	9.1	13.8	12.7	8.1	3.8	4.9	0.0	3.8
京大	人数	9	14	23	4	6	10	0	2	2	1	1	2	0	1
	%	64.3	58.3	60.5	28.6	25.0	26.3	0.0	8.3	5.3	7.1	4.2	5.3	0.0	4.2
項目	そう思う			どちらかといえば思う			どちらとも言えない			あまりそう思わない			そう思わない		



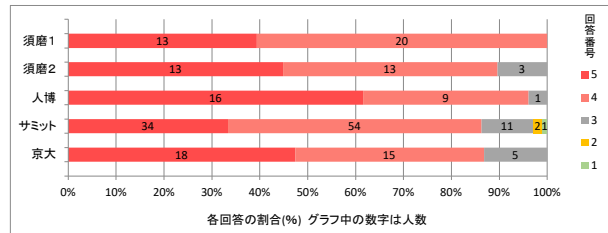
⑱ 今日のプログラムは、自分の課題研究にも応用できる学びがあった。

	5			4			3			2			1		
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	8	8	16	9	3	12	2	2	4	0	0	0	1	0
	%	40.0	61.5	48.5	45.0	23.1	36.4	10.0	15.4	12.1	0.0	0.0	0.0	5.0	0.0
須磨2	人数	7	2	9	10	4	14	2	2	4	1	1	2	0	0
	%	35.0	22.2	31.0	50.0	44.4	48.3	10.0	22.2	13.8	5.0	11.1	6.9	0.0	0.0
人博	人数	13	4	17	6	1	7	2	0	2	0	0	0	0	0
	%	61.9	80.0	65.4	28.6	20.0	26.9	9.5	0.0	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	12	29	41	5	27	32	2	14	16	1	8	9	2	4
	%	54.5	35.4	39.4	22.7	32.9	30.8	9.1	17.1	15.4	4.5	9.8	8.7	9.1	4.9
京大	人数	10	12	22	3	8	11	0	2	2	1	1	2	0	1
	%	50.0	47.4	52.6	15.0	26.7	28.9	0.0	8.3	5.3	7.1	4.2	5.3	0.0	4.2
項目	そう思う			どちらかといえば思う			どちらとも言えない			あまりそう思わない			そう思わない		



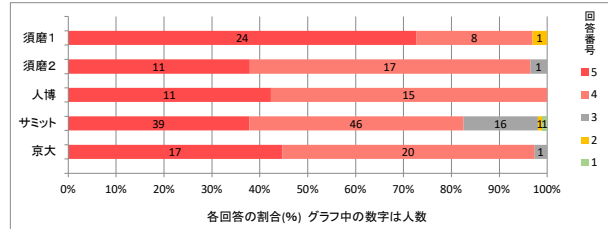
⑲ 今日のプログラムで、地域課題解決へ向けたヒントが得られた。

	5			4			3			2			1		
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
須磨1	人数	6	7	13	14	6	20	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	30.0	53.8	39.4	70.0	46.2	60.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	11	2	13	7	6	13	2	1	3	0	0	0	0	0
	%	55.0	22.2	44.8	35.0	66.7	44.8	10.0	11.1	10.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	14	2	16	6	3	9	1	0	1	0	0	0	0	0
	%	66.7	40.0	61.5	28.6	60.0	34.6	4.8	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	11	23	34	10	44	54	0	11	11	0	2	2	0	1
	%	52.4	28.4	33.3	47.6	54.3	52.9	0.0	13.6	10.8	0.0	2.5	2.0	0.0	1.2
京大	人数	8	10	18	5	10	15	1	4	5	0	0	0	0	0
	%	57.1	41.7	47.4	35.7	41.7	39.5	7.1	16.7	13.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
項目	そう思う			どちらかといえば思う			どちらとも言えない			あまりそう思わない			そう思わない		



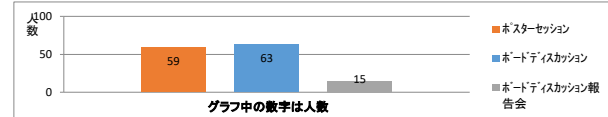
㉔ 今日のプログラムで、地域課題解決の進め方が学べた。

	5			4			3			2			1			
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	
須磨1	人数	17	7	24	3	5	8	0	0	0	0	1	1	0	0	0
	%	85.0	53.8	72.7	15.0	38.5	24.2	0.0	0.0	0.0	0.0	7.7	3.0	0.0	0.0	0.0
須磨2	人数	9	2	11	10	7	17	1	0	1	0	0	0	0	0	0
	%	45.0	22.2	37.9	50.0	77.8	58.6	5.0	0.0	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人博	人数	9	2	11	12	3	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%	42.9	40.0	42.3	57.1	60.0	57.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サミット	人数	12	27	39	7	39	46	3	13	16	0	1	1	0	1	1
	%	54.5	33.3	37.9	31.8	48.1	44.7	13.6	16.0	15.5	0.0	1.2	1.0	0.0	1.2	1.0
京大	人数	6	11	17	8	12	20	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	%	42.9	45.8	44.7	57.1	50.0	52.6	0.0	4.2	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
項目	そう思う			どちらかといえば思う			どちらとも言えない			あまりそう思わない			そう思わない			



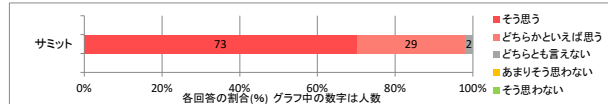
㉕ 内容について、特に良かったと感じるものを選んでください。(複数可)

	ア			イ			ウ			
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	
サミット	人数	16	43	59	12	51	63	3	12	15
	%	51.6	40.6	43.1	38.7	48.1	46.0	9.7	11.3	10.9
項目	ホスターセッション			ホードディスカッション			ホードディスカッション報告会			



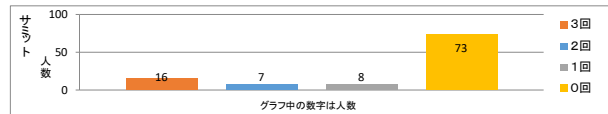
㉖ 本大会は、生徒、教師、専門家、NPO、大学等からご参加いただいています。その方との交流は刺激になりましたか。

	5			4			3			2			1		
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体
サミット	人数	15	58	73	6	23	29	1	1	2	0	0	0	0	0
	%	68.2	70.7	70.2	27.3	28.0	27.9	4.5	1.2	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
項目	そう思う			どちらかといえば思う			どちらとも言えない			あまりそう思わない			そう思わない		



㉗ あなたの高校生サミットワークショップ(本校主催:7/20, 9/16, 10/27)への参加回数を教えてください。

	3			2			1			0			
	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	実委	研参	全体	
サミット	人数	15	1	16	5	2	7	2	6	8	0	73	73
	%	68.2	1.2	15.4	3.0	2.4	6.7	9.1	7.3	7.7	0.0	89.0	70.2
項目	3回			2回			1回			0回			



兵庫県立尼崎小田高等学校

〒660-0802 尼崎市長洲中通2丁目17番46号

TEL(06)6488-5335 FAX(06)6488-5337

<https://amagasakioda.ed.jp/>